
桜の魔術師

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の魔術師

【Nコード】

N4544V

【作者名】

clown

【あらすじ】

この世界は魔法が当たり前の世界。開門と呼ばれる現象により神界と魔界がつながり後に開門戦争と呼ばれる戦争が起こった。その結果、人族、神族、魔族の共存がなされた。これは、そんな世界で始まる自称出来損ないの魔法使いの話。

プロローグ(改)(前書き)

この小説の作者はド素人です。誤字、脱字、文法が酷いと思います。また、キャラも原作と異なるかも知れませんが、後、ストーリー諸々作者の好き勝手になると思います。なにとぞご容赦ください。どこが悪いとか、具体的に言っていたら可能な限り直しますので。

プロローグ（改）

そこは、一年中桜が舞う島。

何故枯れないのかは今だ解明されていない。いや、魔法によるものだということは解る。しかし、それを構成する術式、なぜ、誰がこのようなものを作り出したのかそれは解っていない。

外から来るものは不思議がるが、住み慣れた者たちはそれを当たり前と捉えている。

桜が一年中舞い散る風景、それはこの島に住む者達にとって当たり前の風景だった……。

そう……これまでは……。

今は深夜、欠けた月が闇夜を照らしている。ほとんどのものは寝静まり活動してるのは二ト位なものだろう。偏見だ！それだけじゃないだろ！

そんな闇夜の中、この島のほぼ中心に位置する「桜公園」その最奥に咲き誇る大きな桜の大樹。

願いを叶える桜の樹とまことしゃかに囁かれている大樹。

その下で二人の男が対峙している。

一人は長い金髪、赤い瞳の男性。白い騎士服のようなものを着ており、手には身の丈もある大剣を持ち、目の前の少年に向けている。

そう、もう一人は少年。歳は14〜15位だろうか？金色の短い髪に、紅と蒼の眼。服装は黒一色。男性とは違うがこちらも騎士服のようなものを着ている。その手には、刀。その刀身には桜の花びらの様な刃紋が見受けられる。

周囲には深夜のためか公園の奥のためか、二人以外の気配は感じられない。そう、虫一匹たりとも存在しないのだ。

赤い瞳の男性が口を開く。

「フフツ・・・まさか、私がここまで追い詰められるとはね。流石というべきか・・・。」

「・・・・・・・・・・」

「しかし、私の・・・いや、我ら「夢幻の天蓋」の悲願まで目前だ。もうすぐ我らの願いは成就される。君を退け、その桜の力を使えば！」

「・・・・・・・・・・させるかよ。」

「フゝ、何故邪魔をする？君にだって解っているはずだ。私達の方が正しいということが。」

「・・・・・・・・・・」

「夢は人を狂わす・・・。ありもしない幻想を追い求め破滅への道突き進む。」

「だから忘れさせるのか？夢を。だから閉じ込めるのか？幻想を。」

「ああそうだ！君も知っているだろ？」

この桜が叶えてきた夢が、幻が！どれだけのものを苦しめてきたか？垂れ流された夢が、暴走した幻想がどれだけ危険なのかを！」

「それは、お前らの勝手な解釈だろ？確かに悩み苦しんだかもしれない……。」

夢や幻想を追い求め暴走した奴もいた……。

だが、それだけじゃないはずだろ？夢や幻想に支えられた者達もいたはずだ！

だからこそ今を生きている者達もいるだろ！」

「それは、君が知る範囲の話だろ？」

「確かにな……。だが、支えとなったのは事実だ。

それに、貴様らの悲願自体、夢や幻の類いだろ？

夢に幻に蓋をし、お前たちが管理するなど……。

神にでもなるつもりか？」

「嫌、神になどなるつもりはないよ。だが、誰かが管理しなければならぬ。」

この世界は魔法と言う、夢や幻を現実にする力が当たり前となっている。

このままでは危険だ。10年前の開門が良い証拠だろう？

そのために、その桜の力が必要だ。

夢を、思いを集め、願いを叶えるその桜の力が！」

「させるかよ！この桜は純粋な思いを、切実な願いを叶えるために、夢を見ることをあきらめた子供に夢を見せるために祖母さんが植え

「あゝ、酔った。普通に酔った。」

ここは船の甲板。俺は今、船酔いの真っ最中だ。

「吐く・・・絶対に吐く・・・。」

何故俺がこんなことになっているかというところ、ゲイザーとの戦いの後、さくらと話あった結果、「枯れない桜」を枯らすことになった。

桜が暴走気味だったってのもあるが、今回のような奴がまた現れないとも限らない。いや、十中八九現れるだろう。それを嫌った結果だ。さくらってのは俺の従姉な。

それで、必ずしも初音島にいけないということではなくなった。そんな時、親バカどもから連絡があった。なんでも自分の娘達を人間界の学校に通わせたいから護衛をして欲しいとのことだ。

初音島から出るのは嫌ではあったが、さくらの勧めもあり良い機会と思い直し、その依頼を受けることにした。

それに、入学することになる天守学園は人族・神族・魔族が通っているらしい。またランキング戦など独自のシステムがあるらしい。なによりあの町には世界樹がある。見聞を深めるのにはちょうどいいと思ったからだ。これからが楽しみだ。だが今はそれよりも・・・。

「俺が今日食べた食物に謝罪します。ごめんなさい。ウオエ・・・」

プロローグ(改)(後書き)

ごめんなさい。書き直しました。最初と全然違う。

ちなみにD・C・キヤラは純一と杉並、もしかしたら さくら 位
しか出す予定はありません。

あと純一は普段、黒髪、黒眼です。

第一話 光葉町（前書き）

この話は変わらない。

第一話 光葉町

「ふー、やっと着いたか。結構時間かかったな。」

駅から出ると純一は全身のこりを解すよう伸びをした。

ここは光葉町、10年前開門が起こり三世界平和条約がなされた場所でもある。

なぜここで開門が起こったのか、それはこの街の名前にも由来する。

「しかし、でかいな。結構離れているはずなのに。」

それは、この町のどこからでも見ることが出来る大樹である。

といっても、ビルの影とかから見ることはできない。あくまで大きいという比喩表現なのであしからず。

その木は世界樹と呼ばれこの世界に六本のみ存在する。

まあ、本来一つの世界に一本しか存在しないのに六本も存在すること自体異常なんだがそれについては割愛する。また、正確には世界樹の枝である訳だが皆「世界樹」と呼んでいる。

話がそれだが、まあ、この木のおかげ（せい？）で開門が起きた訳だ。世界樹はいくつもの世界と繋がっているとされているから、不思議ではないか。

後、この木は数年に一度、実りの年に葉を光らせるから光葉町と

なった訳だ。光るのは魔力が活性化しているからで、その光は魔力の光というわけだ。かつたるいから説明はここまでだ。

あー後、現在活動している世界樹はこの町のただだ。まあ、火山活動みたいなものだな。かといって枯れている訳ではない。単に実がならないというだけだ。

よって、他の世界樹で開門のような現象は今のところは行われな
いと言われている。細かいところは後々作者に説明させるから。

「さて、さっさと行きますか。」

地図を片手にこれから住む場所へと歩みを進めた。

第一話 光葉町（後書き）

世界樹の設定が難しい。
どうするかな。

第二話 日向寮(改)(前書き)

1 学生が家を買うのは無理がありました。よって寮暮らしとなりました。

第二話 日向寮（改）

「到着つと。」

え？途中で何もなかったかって？あるわけないじゃないか。俺、方向音痴じゃないし地図もあるし。まず、迷う訳がない。

あと、いくら春休み中とはいえ、真昼間からナンパ野郎に会う訳もなし。はっはっはっ！

「ここがこれから住むことになる寮か。」

今、俺の目の前にあるのが日向寮。ひなたりょう今年から通うことになる天守てんしゅ学園がくえんの男子寮だ。

ちなみに女子寮の名前は月館寮だ。つきだてりょう学園まで徒歩15分の所にある。

俺が入学する天守学園は中・高一貫の高校だがこの学園は高等部からも外部からの生徒を募集している。だからこそ入れた訳だ。

この学園は魔法科と普通科に分かれており、魔法科は魔法に特化したことを学ぶことができる。

普通科は通常科目に加え、魔法学なども含まれており、幅広く学ぶことができる。

入学するのに、普通科は入学テストだけだが、魔法科はそれに加え、一定以上の魔力がないと入れないことになる。ちなみに俺は普通科な。

そうそう、後、ランキング戦なんてものがある。2ヶ月に1度行われ、参加は、普通科は自由らしいが、魔法科は強制参加らしい。

ちなみにトップ3には特典があり、その一つは次のランキング戦までどれか一つ、科目の単位が免除される。つまり、2ヶ月はその

授業に出なくても良いって事だな。いいよな。堂々と寝れるよ……
。さて、そろそろ行かないとな。

まずは管理人さんに挨拶しないと……。ピンポーン！

どこにでもあるようなインターホンの音が響いて少し待つと、意外なことに女性の声が聞こえてきた。

「はい、どちら様ですか？」

「すみません、今日からこちらの寮でお世話になる朝倉 純一です
が……。」

「ん？ちよつと待っていてくれ……。あー、ハイハイ。朝倉 純一
だな。

確認がとれた。中に入れてくれ。」

そう言うとインターホンが切れたようなので中へ入ることにした。

「こんにちは。」

「ああ、こんにちは。キミが朝倉だな？初めまして。

私は天守学園で社会科を担当している紅薔薇 撫子だ。

この寮の管理人は別にいるのだが、少し前に骨折してな。

私が代理を務めている。よろしく頼む。

後、生徒達からは紅女史と呼ばれているからそう呼んでくれて構わ
ん。」

「ハイ、よろしく願います。紅女史。」

「ああ、まずはこの寮について説明しないとな。その前に荷物を置いてきたらどうだ？これが朝倉の部屋の鍵だ。番号は115号室だ。ここで待っているから。」

「わかりました。」

そう言つて一度荷物を部屋に置いて戻つてきた。

「おまたせしました。」

「それほど待つてはいないさ。それでは説明するぞ。」

紅女史の説明を要約すると、まず、部屋は2人一部屋、各部屋に自炊できるよう簡単だが設備は整っている。シャワーも完備。

大浴場もあるが、夜の10時まで。食堂は、朝は6時～8時、夜は17時～20時までとなっている。門限は夜21時。女子寮への立ち入りは原則禁止。許可を得れば20時までには可能だが、それを過ぎればペナルティーがある。

「以上だが何か質問は？」

「・・・1つだけ。私のルームメイトは？部屋に荷物が無かったようですが、まだ来ていないだけですか？」

「いや、朝倉は1人部屋だ。自宅から通うものもいてな。部屋の調整はしたのだが、一人だけ余ってしまったな。」

結果、最後に来た朝倉が1人部屋となった訳だ。ラッキーだったな。」

「そうですね。わかりました。」

「それでは、私はこれで。何かあったら管理人室にいるので声をかけてくれ。」

「はい。ありがとうございます。」

さて、部屋の整理をしてから買い出しついでに町を散策しますか。

第二話 日向寮(改)(後書き)

紅女史にしました。キャラが多すぎると混乱する。

第三話 大きな の木の下で（前書き）

新キャラ登場。

やること他にもあるんですけどね。

第三話 大きな 木の下の

「しかし、間近で見ると本当にでかいな。」

俺は今世界樹の根元に来ている。買い物をする前に一度来てみようと思ったのだ。

「うん、安定しているみたいだな。」

世界樹は世界を繋ぐ樹である。これの魔力が安定していないと、大分かつたるいことになる。

具体的には10年前の実りの時期、世界樹の魔力が増大し安定が失われた結果、開門となった訳だ。

本来は安定させるための儀式があるわけだが、10年前はその儀式が失敗してしまった。その時は世界樹の力を狙った組織により儀式を邪魔されたために失敗してしまっただけらしい。

ちなみに、なぜ俺に魔力のことが分かるのかというと、俺の左眼によるところが大きい。この眼は魔力の流れを見ることが出来る。

「さて、安定しているのは確認したし、そろそろ行くかな。」

その場を立ち去ろうとすると、声をかけられた。

「人にちは？」

「……え？」

「お散歩ですか？」

「……ええ……はい。」

声をかけられ振り返ると少女がいた。

腰まである黒い髪、黒い眼。綺麗な顔立ち。いや、どちらかと言えば、かわいいに分類されるか？背は150cm位。

他には人がおらず、この娘が俺に声をかけてきたらしい。

「そうですね。今日は良い天気ですから散歩したくなりますよね。」

「はあ、そうですね。確かに良い天気です。」

「ですよね。私も良い天気だったので散歩に来たんです。それでですね……」

「あの一！」

世間話が続きそうなので遮らせてもらった。

「俺、用事があるので行きたいのだが……。」

「あつ！失礼しました。お邪魔してしまいましたか。すみません」

「いや、気にしなくていい。それじゃ……」

「あつ、待ってください。私は『天城^{あまぎ} 咲夜^{さくや}』と言います。あなたは？」

「・・・朝倉 純一だ。」

名を名乗りそのまま立ち去ろうとすると、声が聞こえてきた。

「それではまた、朝倉君。世界樹はあなたのことを歓迎しています。」

「つつつ！」

振り返るとそこには世界樹が変わらずあるだけだった。

「ふう、この町については把握したな。さて、明日はあのバカ共の所に行かないとな。」

買い物を終え、今は寮の自分の部屋だ。

「しかし、天城・・・ねえ。」

今日のことを振り返る。世界樹の下であったあの少女のことを思い出す。

天城と言えば最初に思い浮かべるのは祖の五家の天城だが・・・。

「はあ、かつたりいな。もう寝よ。」

こうして今日を終えた。

第三話 大きな の木の下で（後書き）

うん。そろそろ詳細設定作ろう。

第四話 神王と魔王と俺の事情(改)(前書き)

今回神王と魔王それとシアに裏シアをだしました。

文書の前後のつながり、設定、合っていないように思うかもしれませ
ん。

気になる方は感想へ。

最初と変わってます。

「お父さ〜ん。お客さんだよ〜。」

「んあ、だれでい。俺に用事なんて。」

「朝倉 純一って人だったけど？」

「なに！純殿か！すぐ行く！」

「少し待っていると玄関が開き、そのには神王がいた。」

「おう！純殿！良く来たな。まあ、入ってくれ。今、マー坊も呼ぶから。」

「ああ、わかった。」

「シア、純殿を客間まで案内してくれ。」

「うん！わかった。朝倉君・・・でいいよね？こっちだよ。」

「どうやら神王の隣にいた美少女が娘のリシアンサスらしい。ん？この娘・・・」

「どうしたの？」

「ん？ああ・・・何でもない・・・です。お邪魔します。」

「うん！こっちだよ。それと、同い年・・・だよね？」

「ん？・・・ああ。」

「じゃあ、敬語はいいよ。」

「いや、でも……」

ためらっていると立ち止まって、ジッと見つめられてしまった。
このままじゃ話進まないな。

「は、わかったよ。」

「うん！」

諦めたようにいうと、いい笑顔で返された。

シアさん。もといシアの後を付いて行くと客間に通された。神王の趣味らしく和室のようだ。

「お父さんすぐに戻ってくると思うからここで待っててね？」

「ああ、わかった。」

さて、待っている間。ユーストマとフォーベシーと会った時のことを思い出すか。

あの時は大変だった。師匠にいきなり魔界に飛ばされて、その飛ばされた場所が丁度、強硬派と穏健派の一触即発の場所だったんだよな。

どっちがどっちかわからず最初は向かってくる奴片っ端からのしてたらユーストマとフォーベシーと戦うことになったんだよな。

そこで強硬派のやつらが神王の奥さんと魔王の妹のサイネリアさんを人質にとつて絡んできたから幻術視せて、精神崩壊ギリギリまで追い込んだよ、うん。

まあ、そしたら皆震えていたがなんでだろう？それからだな、あ

いつらと友人になったのは。

「っとそろそろか……。」

「待たせたな。純殿」

「やあ、久しぶりだね。純ちゃん。」

「それほど待っていないさ。それと久しぶりだな、フォーベシー。」

「わざわざすまないね。」

「いや、貰うもんは貰うからいいさ。」

「そうかい？報酬は弾ませてもらうよ。」

「そうしてくれ。で、お前らの娘達の護衛ということだが、なんでまた人間界の学園に？」

「うん、それなんだけどね。以前話したと思うけど、ネリネちゃんとシアちゃんが小さいころ人間界で会った男の子に恋をしている話はしたよね？」

「その思い人が天守学園の高等部に今年から進学することになったね。」

「それでだ、二人ともこっちの言葉を一生懸命勉強してやっと覚えてな。」

「受験勉強も頑張つて今年から晴れてこっちの学園に通えるようになったというわけだ。」

「それで純ちゃんに頼みたいのが二人の護衛と・・・」

「その思い人の護衛ってことだな？」

「ああ、そういうことだ。」

「・・・わかった。で？その幸せ者の名前は？」

「うん。「土見 稟」っていつて僕と神ちゃんの家のお隣に住んでる少年だよ。」

「ああ、あの家の・・・。」

「どうする？会っていかい？それなら僕たちも一緒に挨拶しにくよ？」

「まだ挨拶を済ませてないからね。」

「いや、自分達が護衛されていると知ると負担がかかるだろ？」

「それにその様子じゃまだお前らの娘達も再開を果たしてないんだろ？」

「写真だけ見せてくれるか？」

「ああ、わかった。」

ゴソゴソ・・・

「これが稟殿だ。」

「ふん。ん？一緒に写っている娘は？」

「ああ、それは「芙蓉 楓」ちゃんといって、稟ちゃんと一緒に暮らしている娘だよ。」

「は？一緒って稟の家でか？それは同棲なんじゃ・・・」

「いや、それが色々事情があつてな。あの家はその嬢ちゃんの家だ。」

「稟ちゃんの両親と楓ちゃんの両親は親友だつたらしくてね、昔から家族ぐるみの付き合いがあつたらしいんだ。」

「そんな中、稟殿の両親と嬢ちゃんの母親が事故にあつてな。」

「稟ちゃんは楓ちゃんの家に取り取られたというわけだよ。」

「そうか・・・では、芙蓉 楓も護衛対象にはいるのか？」

「うん。そうだね。お願いするよ。」

みんなとは護衛対象というよりクラスメートとして付き合い合ってくればいいから。」

「了解した・・・ん？なぜ同じクラスだとわかる？」

「ハッハッハッ！決まっているじゃあねーか！」

「あー、わかった。何もいわなくていい。」

相変わらずの親バカぶりにあきれてしまった。

「それじゃ、よろしく頼むよ。」

「ああ、わかった。」

「よし！そんなじゃあマー坊！」

「うん！神ちゃん！」

「「宴会だ〜！！！！！」」

「断る！」

「「え〜！」」

二人は不満顔だ。

「明日入学式だろうが。早々遅刻なんかしてられないっての！」

「純ちゃんのケチー。」

「そうだ、純殿付き合い悪いぞ。」

「ニコリ」

気を纏った拳を見せつけるようにし、いい笑顔で応えてやった。

「「ごめんなさい。」」

「はー、それじゃ俺は帰るよ。」

「ああ、わかった。」

「それじゃあ、お願いするね？」

「かつたるいが、それが依頼だからな。確かに承った。我が心に掲げる剣に誓って。」

「そうして、俺は客間を後にした。」

玄関で靴を履いていると声を掛けられた。

「あら、もう帰るの?」

「シア(?)に声を掛けられた。」

「ん?ああ、用事は済んだからな。ところで、キミは誰だ?」

「へ、よくわかったわね。私がシアじゃないって。」

「まあ、魔力が神族のものじゃあ無いしな。」

「それに初めてシアを見たとき魂が二つあるように視えたからな。」

「へ、魔力はわからなくはないけど、魂なんてものが見えるの?」

「まあ、俺の眼は色々特殊だからな。で?なんで俺の前に出てきたんだ?」

「フツッ最初にあつた時、何かに感じたようだったから、口止め。それと興味本位かしら。」

「そうか、で?名前は?」

「・・・名前なんて無いわ。私は存在しないことになっているから。」

「そうかい。とりあえず、キミのことを黙っていればいいのか？特に土見 稟に。」

「感がいいわね。その通りよ。いずれ話すけど今はまだね。シアが再会を果たしてもいいし。」

「わかった。約束しよう。我が心に掲げる剣に誓って。」

「信じていいのかしら？それになに？その、我が心なんちゃらって気障っばいわよ。」

「うっ、こっちも気にしているんだが。まあ、魔法使いにとっての契約文みたいなものだよ。」

「これを言って交わした約束は少なくとも俺にとっては守らなければならぬものってことだ。」

「出来損ないだけだな。」

「……そう、なら信じさせてもらっわ。怪しさは拭いきれないけど。」

「まあ、よく考えたらばらしてもあなたに得はないしね。」

「フツそうしてくれ。それじゃあ、またな。」

こうして、神王の家を後にした。

明日は入学式か。かったるい。

第四話 神王と魔王と俺の事情（改）（後書き）

うん。やっと入学だ。枯れた高校生活を送っていた私に書けるのか？
後、「我が心に掲げる剣に誓って」という文は純一が幼少期に考え、
誓約の祝詞としている。変えられるけど手順が面倒だから変えてい
ない。しかし、気障だという自覚があるためあまり使いたくない模
様。最近本気で変えようか迷っている。

第五話 入学式（前書き）

やっと入学式。これから登場人物が増えていく。大丈夫か俺のうでで。

第五話 入学式

ここは天守学園^{てんしゅがくえん}。俺が今日から通うことになる学園だ。

最初にパンフレットで見た構造は中央に職員室等や生徒会室、委員会室や理科室などの特別教室があり、玄関もここにある。

そして、向かって右が普通科の校舎、左が魔法科の校舎。中央をまっすぐ行くと講堂（というか、構造的にコロセウムみたいだ。）がある。

更に、体育館の右隣りに部活塔があり、左隣りに魔法科の実習室がある。離れたところにはカフェテリア、庭も広い。

しかし、どういう訳か魔法科の校舎が半壊している。

魔法に失敗したのか？この規模だと死人でていないか？等考えながらポケーと校舎を見ていると声を掛けられた。

「そのあなた。」

「ん？」

「そのネクタイの色は・・・今年の新入生ですね？なら、こんなところでポーっとしてないで早く講堂に向かってください。」

声のした方を見てみると、銀色の髪を腰まで伸ばし、青いリボンをした少女がこちらを見ていた。

ちなみに、学年でネクタイやリボンの色が違う。また、制服で魔法科と普通科が見分けられる。

青ということはどうやら高等部2年の様だ。それも魔法科の。

「聞いているのですか？」

「ああ、すみません。少しボーっとしていました。すぐに向かいます。それでは……。」

「ええ、気をつけてください。」

「まだ時間があるとはいええ、ある程度の余裕は必要でしょうから。」

「はい……。失礼します……。」

ズキツ……。すれ違いざま少女と眼が合うと左眼が少し痛みでしたが気にせずその場を立ち去った。

Side ????

まったく、なんで生徒会でもないのに人手が足りないからって私が駆り出されなければならないのですか。

今日は新入生の入学式。在校生ですが生徒会や風紀委員でもない私はまだ春休みの最中のはずでした。しかし、私の友人で生徒会長の皐月きつきの頼みでわざわざ登校することになってしまいました。どうやら、確保していた人員の何名かが急病で人手が足りなくなったとか。

数少ない友人の頼みとあって協力はしていますが、これはなにがおごってもらわないといけませんね。

そんなことを考えながら新入生の案内をしていると、一人の少年に目が留まりました。黒い髪に黒い瞳、顔は整っていますが、やる気のないその表情が台無しにしています。

どうやら壊れた魔法科の校舎を気にしているようです。ほっといてもいいのですが、案内の役割がある以上それはできませんでした。

しかたなく声をかけると、案の定ボーっとしていたようです。

講堂に行くよう促すと一礼し講堂へ向かっていきました。その際一瞬だけ眼があったとき、私の両眼が疼きました。

「ツツ！今の彼は・・・まさか・・・。」

私の眼は少し特殊な眼なのだそうです。この眼が反応したということは今の彼も・・・
そんなことを考えている時でした。

「リ・イ・ア！」

「きゃー！！」

「なにボーっとしているの？もう入学式が始まる時間だから案内はいいわよ？」

「・・・臯月でしたか。すみません。少し考え事をしていました。」

「ふーん。何か悩みでもあるの？」

「いえ、たいしたことではありません。それよりいいのですか？生徒会長のあなたが、こんなところにいて？」

「ふふつ、大丈夫。私の出番までまだ時間はあるから。」

「リーアはどうする？案内ももう必要ないし、入学式見ていく？」

「そうですね・・・遠慮しておきます。それにせつかくの休日ですから・・・。」

「そう、わかったわ。ありがとうね。わざわざ手伝ってくれて。この埋め合わせは必ずするから。」

「ええ、楽しみにしています。それでは……。」

「うん！またね！」

彼とは同じ学校に通っている以上また会うことになるでしょう。それに今年は魔法科の校舎が壊れているから、直るまでは普通科と同じ校舎ですからね。フッフツ。

Side 朝倉 純一

ブルルツ！なんだ今の、気のせいかな？まあいいや。

しかし、かつたるいなー入学式。なんでこんなのあるんだろう。時間の無駄じゃないのか？寝てようかなー。

そんなことを思っているとどうやら、新入生代表の挨拶のようだ。どうでもいいがな……。

「新入生代表 神城 誠！」

「はい！」

キヤ〜！！！！！！

「おう！？なんだ！？」

女生徒の黄色い声に意識を戻され壇上へ目を向けると……イケメンがいた。

色素が薄いせいかな金色にも見える茶髪、瞳の色は深い藍色か？中

世的な顔立ちだ。女と勘違いされてもおかしくないと思う。まあ、男の制服を着ているから男なんだろう。魔力の質も男のものだしな。

「誰だ？あいつ……」

「全校男子の敵だよ。」

そんな声に振り返ってみると、メガネをかけ理知的な雰囲気の子がこつちを見ていた。

「んあ？えーつと？」

「ああ、悪いね。俺様は緑葉 樹。よろしく。」

「俺は朝倉 純一だ。よろしく。で、全男子生徒の敵ってのはどういうことだ？」

「ふむ、それを知らないとは……君は外部生だね？」

「ああ、そうだが……そんなに有名なのか？」

「ああ、内部生で知らない人はいないんじゃないかな。」

「それと、理由だけど……キミも聞いたろ？あの黄色い声を。」

「つまりは……そういうことだよ。」

「あゝ、つまり女生徒の人気を独り占めしているから？」

「そういうことだよ。まったく嘆かわしいね、ここにもこんなイケメンがいるというのに。」

訂正、ナルシストだったらしい。

「緑葉君は女性に出会えば息をするように声をかけるただの変態でしょ？」

更に訂正、歩く変態らしい。

変態と話しているとオットアイの少女が混ざってきた。

「何を言っんだい麻弓、美しい女性に声をかけるのは男として当然だろ？」

まあ、麻弓はその胸じゃ女性にはいらぬか。」

「……縛りたいの？」

ギャーギャー!!

おいおい、いいのか？みんな（主に女性）は神城に夢中といえ騒いだら……。

「おい！樹、麻弓、紅女史がこっち睨んでいるぞ？」

それに、朝倉だったか？困っているぞ。」

黒髪、黒目の男子が騒いでいる二人に注意を促してきた。あれ？

こいつは……

「え……。」

紅女史という言葉で二人は急におとなしくなった。どうやら、紅女史を怒らせると危険らしいな。

「すまないな。朝倉・・・で、よかつたよな。俺は「土見 稟」だ
よろしく頼む。」

「ああ！自己紹介が遅れたのですよ。私は麻弓「タイム」なのですよ。
」

「ああ、よろしく。もう少し話をしたい所だが、紅女史から殺気が
するから続きは後で、な。」

「「「ああ、そうしよう（そうするのですよ）。「「「

なかなか、面白いやつらだ。それにこんなに早く対象に接触でき
るとはな。

面白くなりそうだ・・・。

どうやら世間話？をしていたら神城の挨拶は既に終わっていたよ
うだ。

誰だか知らない奴が壇上で話をしていた。

「続いて在校生からの激励の言葉。生徒会長 天城 皐月さん よ
ろしく願います。」

どうやら次は生徒会長の挨拶らしい。ん？天城？もしかして・・・

「なあ、生徒会長の天城って・・・あの天城か？」

気になったので後ろの樹に聞いてみることにした。

「ああ・・・、たぶん君の想像どおり、あの天城だよ。」

やっぱり・・・、祖の五家の天城か。

祖の五家というのは天空の天城、火の火鏡、水の水無月、風の神風、土の土御門の五つの家のことだ。その名の通り五つの属性を司っていて、その属性についてトップクラスの適正を持つ。

また、それぞれの家には代々の当主に受け継がれる精霊がいる。壇上の女性を見てみると、後ろに空色の髪と眼をした女性の姿が見える。

他の奴らには見えていないということは、あれが天城家の精霊か・・・。

目があつて微笑まれたけど気にしない方がいいな。かつたるいことになる。

それはさておき・・・

精霊が付いているということは、彼女が次期頭首か・・・。

「なあ、もうひとつ聞いていいか？、彼女に姉妹きょうだいはいるか？」

「よく知っているね？まあ、無理もないか、姉妹そろって美少女なうえ姉の皐月先輩はこの学園の生徒会長なうえ、天城家の次期頭首妹の咲夜ちゃん是世界樹の巫女だからね。」

「そうか、彼女はやはり、世界樹の・・・。」

「どうかしたかい？」

「いや、なんでもない。サンキュー。」

世界樹の巫女か・・・

世界樹の巫女とは世界樹の精霊に選ばれたものができる、昔から祖の五家の人間が務めてきたが頭首になるものは世界樹の巫女にはなれない。これは高位の精霊を御するのは一体でも大変難しいためである。

なお、歴史上、五家以外の血筋のものが選ばれたこともあったみたいだが、そのものは五家に入らされたらしい。無理矢理な時もあったとか。まあ、そう言うものかもしれない。歴史のある家というものは、どうやって選ばれるかは世界樹に聞いてくれ。

世界樹の巫女の役割は世界樹の管理だな。悪用しようとするものから守ったり、魔力の暴走を抑え安定化させたりと面倒だな。

しかし、代わりに世界樹から祝福を受け、外見の年齢が巫女の間変らなかつたり、世界樹の魔力を使用できたり・・・精霊の加護もあるからな。大判振る舞いとはこのことだ。

まあ、そのぶん役割や制約があつて面倒だけどな。考えを巡らせていると、どうやらもう終わりのようだ。

「それでは最後に、皆さんに天の祝福がありますように・・・」

うん、天城家の人間の言葉だな。

入学式が終わった後、各教室に移動することになる。クラス表は今配布されたところだ。

なになに、俺は・・・1-Aか。しかし、本当に一緒だよ、シアとネリネ、それに土見に芙蓉さんか・・・。さっきの緑葉や麻弓も一緒か。

ん？この名前・・・、ハハハ・・・おかしいな、疲れているのかな。奴がここにいるはずが・・・でもなー、名字しか書かれてないって、奴以外にはいないよなー。なんであいつがここにいるんだ？まあいい、教室に行ったら確かめられるだろう。

第五話 入学式（後書き）

次は奴を出します。

第六話 大変ですね土見君（前書き）

この話のタイトルと中身あまりあってません。

第六話 大変ですな土見君

今、俺は土見に緑葉、麻弓に芙蓉さんと教室に向かっている。
一人で向かおうとしたところで、土見に声を掛けられた。
芙蓉さんは土見に紹介されたよ。

「しかし、魔法科と教室が一緒になるんだな？」

「ああ、春休み中に魔法の実験が失敗して校舎が半壊したらしいからな。」

校舎自体、対魔法の効果が施してあったのにあれだからな。
修理にも時間がかかるらしい。」

そう、今年は魔法科と普通科が同じ教室で机を並べることになる。
理由は土見が話していた通りだ。
かつたるいことにならなきゃいいが……。

「朝倉君は外部からの入学ですよ？どこから来たのですか？」

「うん？ああ、俺の住んでいた島は初音島っていつて一年中桜が咲いていた島だよ。」

「あゝ、あの島かい？」

「知っているのか？」

「知らない人の方が少ないと思うのですよ。一年中桜が枯れない島
研究者が調べても、魔法によるものといったことしかわからなかつたんだからね。」

「それに、つい最近枯れてしまいましたしね。」

咲いているうちに一度は行って見たかったです……。」

「朝倉は何かしらないか？初音から来たんだろ？」

「いや、確かに一時期は騒ぎになったが、これまでが異常だったわけだからな。」

普通に戻っただけってことで、一般の人は特に気にしてなかったしな。」

「研究者は未だに調査しているみたいだが。」

「言えないよなー、人の夢や思いを集め、願いを叶える魔法の影響だったなんて。」

「それが危険だから枯らせたなんて……。」

「まあ、言ったところで信じてもらえらると思われないがな。」

「つと、ここだね。俺様達の教室は。美少女達よ待っていてくれよ！」

「

「誰も緑葉君のことなんか待っていないから。さっさと入るわよ。」

「ハハハハハハ……。」

扉を開けて入ると、予想はしていたが聞きたくない声が聞こえてきた。

「遅かったな、MY同志朝倉。」

「とりあえず殴ることにした。」

「ウラァ！」

ブン！チツ、空ぶったか！

「いきなり何をする朝倉。危ないではないか。」

「うるさい！杉並、なんでお前がここにいる！？」

「フツ、決まっている同志がいるところにミステリーは現れる。
なら俺がここにいることも必然ということだ。」

「また、訳のわからないことを・・・いつ俺の周りでミステリーが
起こった？」

「フム、寝ながら歩く少女、合法ロリ、ネコミミメイドなどと、
これでも心当たりはないというのか？」

「グツ・・・」

「え〜と、朝倉君お知り合いの方ですか？」

「どうやら芙蓉さんが一番早く我に返ったようだ。さすが、土見の
嫁。」

「ええ、まあ、知り合いたくはなかったけどな。」

「冷たいことを言う。ともに教授の野望を阻止した仲ではないか？」

「教授の野望ですか？凄いですね、御二人とも・・・。」

「いや、ゲームの話だから鵜呑みにしないでくれ。こいつの話は八割方聞き流していい。」

「酷いではないか、まるで俺が冗談しか言っていないようではないか。」

「違うのか？」

「少なくとも俺は本気だ！」

「余計性質が悪いわ！」

「あー、盛り上がっているところ悪いが、そろそろ座らないか？」

「ああ、そうだな・・・。」

土見に言われ、とりあえず固まって座ることにして改めて自己紹介をした。

教室に入った時に確認したが、まだシアやネリネは来ていないようだ。

ちなみにネリネは会ったことはないが写真を見せてもらった。

魔王の自慢話が始まりそうになったがな。

ガラガラガラガラ・・・。

きゃー！！うおー！！

しばらく話していると扉が開いた。・・・と思ったら教室にいた生徒がいきなり歓声をあげた。

目を向けると一昨日あつた天城 咲夜と新入生の代表として挨拶した神城 誠それに見覚えのない赤い髪の少年と水色の髪の少女がいた。

「なんで、こんなに騒いでいるんだ？」

この教室に入ってきたということはクラスメイトなのだろう、なぜそんなに騒ぐ必要があるんだ？

「朝倉君、不思議そうな顔をしてるわね？なんでこんなに騒ぐのかって。」

「ん？ああ、なんでだ？」

「それはね・・・なんと！」

「魔法科一年のトップクラスが4人も一緒だからな。」

「台詞をとられたのですよ。」

台詞を取られたのがよほどショックだったのか、落ち込んでいる。

「どづいつことだ杉並？」

無視ですか！そうですか！わたしなんて・・・、麻弓ちゃん落ち着いて、楓！

女の友情をはぐくんではいるのは放っておこう。

「ふむ。まず、天城 咲夜。祖の五家、天城家の次女で世界樹の巫女、容姿端麗、成績優秀。去年は中等部のランキング戦でNo.2

の実績を持つ。

続いて、神城 誠、十年に一人と言われる天才。魔法の腕は祖の五家に劣らない実力を持つ。ランキング戦ではNo.1だった。

新人生代表の挨拶をしたことから分かるように、筆記試験でトップだったようだ。女子からの人気も常に上位をキープしている。」

「ん？筆記試験を受けたってことは、神城は外部生なのか？」

「いや、内部生だ。中等部から高等部になる際にみな形だけが試験を受けるらしい。そのためだ。」

「そうか、続けてくれ。」

「わかった。次は赤い髪の男だな。名前は火鏡ひかがみ 焰祖ほむらの五家の一つ火鏡家の次男だ。3年に兄がいる。

魔法の才能は兄よりも上らしいが精神的に未熟らしい。それでもランキング戦ではNo.3の力がある。

つづいて、水無月みなづき 瑞希みずきこちらも祖の五家の一人水無月家の次女だ。ランキング戦では4位だな。戦闘系の魔法より回復や補助系の魔法が得意らしい。こちらも3年に姉がいる。

まあ、これらランキングの話は中等部最後のランキング戦の成績だがな。」

「しかし、だとしてもこのクラス、ちょっと戦力過剰じゃないか？」

「まあ、世界樹の巫女がいるからな。

それに、神王と魔王の娘がこのクラスだからな。そのためだろう。」

「……知っていたのか？」

「フツ、俺の情報網を甘くみるな。」

「ちょっと、ちょっと二人とも！置いてきぼりにしないでよね！
というか、杉並君、外部生よね？なんでそんなに詳しいの？」

痺れを切らしたのか麻弓が話にはいつてきた。

「フツ、我ら非公式新聞部に不可能はない！」

「なんだい？それは。」

「つまらない学園生活にスリルを与える非合法的な部活のことだよ。」

「へ〜それはなかなか、後で詳しく話を聞かせてくれないかい？」

「わたしも！わたしも！」

どうやら、緑葉と麻弓はこの部活に興味を持ってしまったようだ。
かったりい……

そんな会話をしていると、俺の前に人影が差していた。

見上げてみると、天城 咲夜が目の前にいた。

「こんにちは、朝倉君。一昨日ぶりですね？」

「ああ、天城か……そうだな。」

「一緒のクラスですね？良かったです。これからよろしく願ひし

ますね？

後、私のことは咲夜でいいです。」

「わかった。なら俺も純一でいい。よろしく頼む、咲夜。」

「ハイ！」

咲夜と再会の挨拶を交わしていると、周りがざわめき出した。なんだ？ いったい・・・

「純一！ 咲夜ちゃんと知り合いなのかい？ どこで知り合った？ 俺様も紹介してくれ！」

「落ち着け、樹。知り合ったのは一昨日だ。」

「こつちに来て世界樹の下にいたらたまたま会っただけだ。」

「会っただけ？ なんでそれだけで名前を呼び合う仲になっているんだよ？ おかしいだろ？」

「んなこといってもな、咲夜が呼べっていつてきたから・・・。」

「・・・嫌でしたか？」

「そんなことないよ。」

「そうですか、それならよかったです。」

ウーガー！！！！なんか樹が暴走している。稟が一所懸命に止めている。

「おい！！」

「ん？」

「天城に馴れ馴れしく話かけるな！」

「なんでお前にそんなことを言われなきゃならないんだ？
というか、話しかけてきたのはは咲夜のほうだぜ？」

「嫌でしたか？」

「いんや。」

「それは良かったです。」

「人を無視するな！」

「なんなんだよ、いったい？つーか、名前位名乗ったらどうだ？」

「ちっ！俺は、火鏡 焰だ。」

「そうか。」

「・・・」

「・・・」

「どうした？」

なんか急に黙り込んだぞ？

「俺が名乗ったのだからお前も名乗れよ！」

「え〜！」

かったりい。

「この〜！」

「まあ、まあ、二人とも。」

火鏡が更に何か言おうとした時、神城が割って入ってきた。

「神城！邪魔をするな！」

「落ち着いて火鏡君……。僕にも自己紹介をさせてくれ。僕は神城 誠よろしく。」

「なら私も自己紹介するわね。私は水無月 瑞希よ。よろしくね。」

「俺は朝倉 純一だ。よろしく、神城、水無月。」

「おい！なんで二人には名乗って俺には名乗らない！？」

火鏡がまた怒っている。

「だって、お前と話すのかったるいんだもん。」

正直に言ってやった。実際かったるいから仕方がない。五月蠅い品しな。

ちよっとショックを受けた顔をしていた。

「あゝ！とにかく！一般人が祖の五家、それも世界樹の巫女である天城に気安く話しかけるな！」

「いやいや、クラスメートと話すのに五家とか巫女とか関係ないだろ？」

「そうです。私が誰とお話しようが、あなたには関係ないはずです。火鏡君。」

「うっ……しかし……！」

「そこまでしておきなさい。焰。見苦しいわよ。」

「お前は黙っている！瑞希！」

「咲夜が嫌がっているのがわからないのかしら？だからいつまでたっても「火鏡君」のままなのよ？」

「う、うるさい！」

「なんだか収集がつかなくなってきたな、神様、魔王様、誰でもいいから助けてくれ！」

……

おつおつ、ここに稟殿がいるんだな？マー坊。

そつだよ神ちゃん。

まで、確かに頼みはしたが、本当にあの二人をよこすのはどうでしょうか。

もったかつたるいことになるだけだろ！少しは考えろ！

もう、神にも魔王にも頼まない。グスン。

ドカン！

扉を勢いよく開けて入ってきたのは親バカ二人。かつたるい。

「おう！ここに土見 稟って坊主はいるか？」

いきなり入ってきた神王はそんなことを言っただけだ。おっ、どうやら魔王が

稟を見つけたようだ。みんな驚いてその様子を見ているだけだ。おっ、どうやら魔王が

「あ、あそこにいたよ。神ちゃん。」

「え？俺？」

「稟君？」

「おーおー、土見も芙蓉さんも驚いているよ。当り前か、いきなり名指して呼ばれりゃな。」

「おめーが土見 稟か？うん、なかなか男気のある面構えじゃねーか。シアをよろしく頼むぞ稟殿！」

「抜け駆けは無だよ、神ちゃん。」

「……うん！誠実そうな子で良かったよ。ネリネちゃんのことをよ

ろしくお願いするよ。」

「いや、家のシアが……。いやいや、家のネリネちゃんが先だよ……。」

「なんか言い争いを始めたぞ？この二人、いい加減止めた方が良かったか？」

「いや、その必要は無いみたいだな。」

次の瞬間神王が地に沈んだ。

凄いい勢いでイスが、そうイスが神王に振り下ろされのだ。

「お父さん！恥ずかしいからやめてよね！」

「お父様もです！」

「痛て〜じゃねーか、シア。」

「そんな〜、ネリネちゃん……。」「

シアとネリネが二人を止めに入った。しかし、復活早いな神王。ギャグ補正か？

しかし、このネリネって娘も難儀な体しているな……。？、違
うぞ！胸の話はしていないぞ？

あれ？咲夜さん？何故睨んでいるのですか？

「お二人とも！いい加減にしてください！それと全員席につけ！」

王女二人が王様二人を止めていると、紅女史が入ってきた。どうやら紅女史がこのクラスの担任のようだ。

その一言で固まっていたもの、成り行きを見守っていたもの、全員席に着き始めた。絡んできた火鏡もおとなしくしている。

「紅女史スゲ〜！だが、あのバカどもは帰らないのな。」

全員が席に着いたのを確認すると紅女史が自己紹介を始めた。「

「わたしは、紅薔薇　撫子このクラスの担任になった。よろしく頼む。」

「俺はユーストマ、シアの父親で神王をやっている。」

「私はフォーベシー、ネリネちゃんの父親で魔王をしているよ。」

「なんか、自己紹介はじめたぞ？王様ふたり。なにやってんだか・・・」

しかも、シアやネリネの親であることが先？王であることより大事か？流石親バカだな。いや、バカ親か？

「お二人はいい加減に帰ってください！」

「いいぞ紅女史その調子だ！」

「あの、先生！今、信じられないセリフを聞いた気がしたんですが・・・」

「あー、芙蓉さん余計なこと言わないで、あの二人はとっとと帰し

て。

「あー、聞き間違いじゃない。このお二人は、神王様と魔王様だ。残念なことにな。」

それでだ、つつちー、シアとネリネのことはお前に任せる。」

土見は紅女史につつちーって呼ばれているのか。頑張れつつちー。

「なんで俺が!?!」

「それはだな……。」

「それは私から説明しよう。」

つまり、稟ちゃんはネリネちゃんとシアちゃんの婚約者候補に選ばれた訳なのだよ。」

「まっ、はっきり言っちゃえば、神界・魔界の次期王候補という訳だな。」

「ちっ、ちょっと、なんでそうなるんですか!そんなことになる心当たりはありませんよ!?!」

その反応は当然だな。しかしつつちーよ。全ての原因はお前にある。

「いや、あるはずだよ。思い出して御覧。君たちは子供の頃であっているはずだよ。」

考えこむつつちー。

しばらくして、心当たりがあったのか何かを思い出したようだ。

「確かに……、子供のころ神族の少女と魔族の少女にあったことはありますが……。」

「うん、多分その子達のこと間違いないよ。」

幼い頃の出会いと、その時生まれた恋心……。

二人は、その想いを弱めることなく今に至るといっわけだね。」

執念だね！違うか。

「説明は終わりましたか？ならさっさとお帰りください。」

紅女史、お疲れ様です。

「いや、まだシアの魅力を稟殿に伝え切れて……。」

「ずるいよ神ちゃん、私だってネリネちゃんの魅力を……。」

それをあんたらが伝えてどうするよ？

「神王様」「魔王様」

シアとネリネから危険な雰囲気……

「シ、シア？そのイスを下せ、な？」「ネリネちゃんもその魔力球をしまっってくれるかい？」

「「いい加減にしなさい！……」」

「ひえ〜」

親バカ二人は星になった。ざま〜！（笑）

「杉並」

「なんだ、朝倉？」

「退屈しないで済みそうだな。」

「フツ、そうだな。」

俺達はこれからが楽しくなることを確信した。
頑張れつつちー。主に俺達の娯楽のために。

「それじゃあ、HRをはじめる。」

まずは自己紹介から、そのあと、これからのことを説明する……。

それじゃ、窓際が一番前から……。」

こうしてやっとHRがはじまった。

うーん！終わった。その後、自己紹介と、この学園の説明、そして魔法科と普通科が同じ教室で授業を受ける経緯や、普通科と魔法科で違うカリキュラムをどう行っていくかの説明を受け、御開きとなった。

さて、それじゃあとつとと帰りますかね。

護衛はいいのかつて？この町の中に入れてくれるなら、問題ない。

護衛は俺一人じゃないようだし、4人の魔力は覚えたからな。式神でもつけておけば、問題ないだろ。プライベートにまで踏み込むつもりないし。

ちなみに式神つてのは、使い魔みたいなものだ。といつても専属契約を交わしている訳ではなく簡易的なものだけだな。俺、専属契約している式神いないし。まあ、異常を伝えるだけなら問題ない。心配だった世界樹の魔力は安定しているしな。

あの魔力で多少なりとも阻害されるからな。たとえ、霊力によるものでも。それだけ世界樹の魔力は周囲に与える影響が大きいということだ。かつたるい。

シアとネリネは稟と一緒に帰るようだ。ククツ二人がどこに住んでるか知ったら驚くだろうな。

神城はファンクラブ？に囲まれていた。大変そうだな。

杉並はミステリーを探しにいった。いつものことだ。

そんなことを考えながら席を立とうとしたら咲夜に声をかけられた。

「純一君、今から帰りますか？」

「ああ、そのつもりだが？」

「一緒にしてもいいですか？」

まあ、問題ないが、なんでわざわざ俺に声をかけてきたんだ？朝のことと謎だ。

「いいが、俺は寮住まいだから、それほど歩かないぞ？」

「ええ、構いません。一緒に帰りましょう。」

「ああ、いいぞ……。」

断る理由はないからな。

「待て！」

「またお前か……。」

火鏡がまた絡んできた。かつたるいなー。

「それはこつちの台詞だ！天城こんな奴と帰る必要ないだろ？どうしてこいつに構う。」

「それは……。」

「あつ、それは私も気になるな。咲夜がそこまでこだわるのは珍しいからね。」

水無月まで絡んできた。まあ、俺も気になるけどな。どうしてだ？

「な、なんだっていいじゃないですか！」

「うん、なんでもないことはないわね。」

咲夜が、そんなに取り乱すなんて珍しい。」

「うう……。」

「ふー、まあ、今日のところはここまでにしてあげましょう。
それじゃ帰りましょうか朝倉君？」

「へ？いいのか？」

「だって、咲夜が一緒がいいって言うから。こんな咲夜は珍しいからね。」

「ちょっと待て！俺は納得していない！」

「別に火鏡君の許可は必要ないでしょ。」

「くっ……それもこれもお前のせいだ！」

「なんでそうなる。」

本当、なんでそうなる。

つーか、咲夜のことになるとムキになりすぎじゃね？

「うるさい！俺と勝負だ！俺が勝ったら二度と天城に近づくな！」

「えー、かつたるい。つーか、なんでお前の許可が必要なんだよ？」

本当わけわからない。

「うるさい！で、受けるのか、受けないのか、どっちだ！」

「じゃあ、受けない。」

「」「」「受けないのかよ（！？）」「」「」

「だって、かつたるいし。」

「ちょっと、朝倉君！それでいいの？」

「いいもなにも、受けなければ、その話自体ないようなものだろ？」

まったく、こんな早く目立ちたくないんだよ。

「それはそうだけど・・・」

「純一君・・・」

「咲夜さん？なんですかその目は？受けませんよそんな目で見てても、それに勝手に決闘とかまずいんじゃないか？」

「それなら問題ないわ！」

いきなり生徒会長が現れた。まあ、普通に扉から入ってきたというか、面白がってタイミング見計らっていたみたいだけだな。

「姉さん・・・」

「こんにちは。みなさん。咲夜、入学おめでとう。さて、この場はわたしが預からせてもらおうわ。」

なんか、いきなり仕切りはじめたぞこの人。
かつたるいことになりそうだなー。

「つまり、こういうことでしょ？火鏡君は朝倉君が咲夜に近づくの

が許せない。で、咲夜は気兼ねなく朝倉君とお話したい。

ならこうしましょう、火鏡君と朝倉君が勝負することを許可します。火鏡君が勝てば朝倉君は今後一切咲夜に近づかない。朝倉君が勝てば、火鏡君は朝倉君と咲夜に関して今後一切口出し、手出しはしない。どう？火鏡君？」

「ええ、それで構いません！」

「構うわ！なんで俺が勝負しないとイケない！」

「あなたは、女の子の後ろで怯えるチキン野郎なの？」

「いや、そうじゃなくて……。」

咲夜と火鏡の問題だろ？それに火鏡を気にしなければいい話だと思っただが。

「ああ、言っておくけど火鏡君は色々面倒くさいわよ？それに、火鏡君と咲夜じゃ勝負にならないのよ。火鏡君、咲夜には弱いから……。」

「へっ……。」

火鏡が傷ついた顔をしている。面倒くさい奴と言われて傷ついてるのか？

実際面倒くさいんだから仕方がない。自覚ないのか？

「で？どうする？戦るの？戦らないの？」

戦らないを選んでもいいが……はっ、かつたるい。

目立ちたくないが、今後の学園生活を考えると受けといた方がいいか……

「あゝ！もう、わかりました。戦えばいいんでしょ、かつたるい。」

「決まったわね、日時は明日の放課後ね。互いに準備しておくように。」

そういつて、会長は去っていった。

某主人公の台詞を叫ばせてもらおう……

不幸だー！

第六話 大変ですね土見君（後書き）

次戦闘シーン書こうと思います。少し日にち空くかなー。
と書いていましたが、戦闘シーンはもう少し後になります。

第七話 彼女の心境（前書き）

咲夜視点です。

第七話 彼女の心境

Side 咲夜

「今日は良い天気ですね。」

私は今、世界樹に向かって歩いていきます。今日は良い天気なので散歩にはもってこいの日입니다。

今日は良いことがありそうです・・・

・・・

ふー、やっと着きました。流石にこの距離を歩くのは少々疲れますね。

世界樹は・・・うん元気そうですね。私の家と世界樹は距離が離れており、歩いて一時間近くかかっています。魔法で飛んでもいいのですが、私は歩くことにしています。

「こんにちはユラ、調子はどうですか？」

私は世界樹の精霊であるユグドラシル、愛称ユラに声をかけました。

・・・こんにちは咲夜、調子が良いですよ。魔力も安定しています。

「そうですね、それは良かったです。」

あなたには迷惑をかけます。私があなたを選んだせいでああなたの自由を縛っています。

「もう、気にしなくていいのに……。私が望んでなったのですよ?」

そう、私は望んで世界樹の巫女になったのです。このやさしい精霊を守りたくて。

ですが・・・

「もう！それ以上言つと怒りますよ?」

クスクス、そうですね、あなたを怒らせると怖いですからね。やめておきましょう。

「ユラッ!」

これが、私とユラのいつものやりとり。ユラとはよく色々な話をする。私からは最近あったことを、ユラからは、ユラが見てきた昔のことを。今日もいつも通りお話をしていました。

そんな時「うん、安定しているな・・・」そんな声が聞こえてきました。見てみると男の子が世界樹を見上げていました。その表情はとても優しそうで、まるで、子供を見守る親のような顔で・・・、私は気になり、思わず声をかけていました。

「こんにちは。」

.....

それが純一君との出会いでした。どうしてもかユラも喜んでいました。まるで、古い友人にあつたかのようでした。でもいくら聞いてもその理由は教えてくれませんでした。

あの時、「世界樹も喜んでいます。」と声をかけたら純一君も驚いていましたね。何かあるのでしょうか？

フツツその時がくれば教えます。彼に対して、妙な先入観を与えたくありませんからね。

そんな、ユラの言葉を聞きながら私はまた会えるかどうか考えていました。

そして、入学式の日、渡されたクラス表に純一君の名前を見たときはとてもうれしかったです。同姓同名ということも考えられましたが、どうしてもか確信があり、思わず笑っていました。

「ふふっ」

「どうしたの？ 咲夜。嬉しそうだけど？」

「瑞希ちゃん……。ううん、なんでもないですよ。」

「そう？ ならいいのだけど……。」

瑞希ちゃんはこちらを怪訝そうに見ていましたが、言える訳がありません。再会を願った人と同じクラスになれたからなんて……。

再会した時、純一君はなんだかやる気のない顔をしていました。かっこいいのにその表情が駄目にしていました。でも、その表情が自然で、これが純一君の普通なんだなと思いました。

純一君に話しかけると純一君も私の事を覚えていてくれました。まだ、先生が来るまで時間はありますよね？もう少し話をしようと思っていると、火鏡君が割り込んできました。

火鏡君は不機嫌な表情を隠すこともなく純一君に食いかかっていきましました。そしたら、今度は神王様と魔王様が現れて、結局純一君とはあまり話すことができませんでした。皆さん邪魔です。

今日の日程が終わったので一緒に帰ろうと純一君に声をかけることにしました。どうやら一人で帰るようです。ご一緒できないか聞いてみましょう。

すると、また火鏡君が邪魔をしてきました。何故そんなに不機嫌なのでしょう。本当に面倒くさい人です。純一君は流しているようですが、火鏡君は更にエスカレーターして純一君に決闘を申し込みました。

純一君はというと

「受けない。」

即答でした。もしかして、私とは話ができなくてもいいのでしょうか？それは悲しいことです。思わず純一君を見詰めていました。純一君は少し気まずい様に目をそらしそれでも受けないといいました。

そんなとき、姉さんがいきなり現れました。姉さんのことですからどこかに隠れて見ていたのでしょうか。

結局、姉さんが間に入ったことにより、決闘をすることに決まりました。純一君はというと・・・

「不幸だー！」

なにやら叫んでいました。少し申し訳なく思いましたが、純一君が私のために戦ってくれるのは嬉しく思っていました。ごめんなさい純一君。

家に帰り、自室にいと姉さんが訪ねてきました。

「咲夜、ちょっといい？」

「はい、大丈夫ですよ。」

「今日のごめんね、余計な事したかな？」

姉さんは今日のことを謝ってきましたが、あのままでは収集が付かなかったのは間違いないので……

「気にしないでください。あのままでは収集がつかなかったでしょうから。」

でも、珍しいですね、姉さんがあんな風に割って入ってくるなんて。それに、決闘を了承するなんて。」

姉さんがあのように入ってくるのは珍しいことです。普段はあそこまで強引には……訂正します。面白そうなことには強引に入ってきますね。

ですが、普通科の生徒と魔法科、それも祖の五家の人間との決闘を認めるなんて、これは珍しいことです。

次期天城家の頭首でもあり、普段なら火鏡君を諫めていたはずですが、むしろ焚きつけていました。

「ん〜それは、朝倉君だっけ？彼の事が気になったから……」

姉さんの言葉に私は動揺しました。まさか姉さんも？

・・・？

姉さんもって、これじゃあまるで私が純一君のことを・・・一昨日あったばかりなのに、そんなことあるはずなのに・・・私は自分の思考に夢中でした。

「咲夜？・・・咲夜！」

「はい！？」

「なにを考えこんでいるの？」

「いえ、なんでも・・・」

「・・・まあ、いいわ。でね、入学式の時、私が挨拶したの覚えてるでしょ？」

「はい。・・・それが？」

「うん、その時にねソラに新入生を見てもらっていたの。特に外部生。どれだけの腕を持った子が入ってきたのかなと思ってね。」

ソラというのは、姉さんが契約している天空の精霊で正式な名前は契約者である姉さんにしかわからないです。

正確にはお父様もわかりますがその話は置いておきましょう。

「それといたいなんの関係が？」

「うん、それがね、本来だれにも見えないようにしていたのだけど、もちろん咲夜にも神城君にもね。」

でも、朝倉君には見えていた見たいなのよ。それで気になってね。ソラも気になってるみたいだし。」

「そうなんですか・・・じゃあ・・・」

「うん、ごめんね。これは私の我儘。朝倉君のが何者なのか知りたくてね。」

「そうでしたか、・・・良かったです。」

「ん？なにが良かったの？」

「え、えくとその・・・なんでもないです。」

言えない。妙な誤解をしていたなんて。

「そう、ならいいわ。もう、遅いわね。それじゃお休み、咲夜。」

「うん、お休みなさい、姉さん。」

明日は純一君と火鏡君との決闘か・・・大丈夫ですよね？

純一君・・・。

こうして私は眠りについた。

余談だが、このころの稟達は・・・

「さあ、夜はまだまだこれからだ！」

「カンパイ！」

「りんく〜ん」「稟さま」「稟くん」

「稟の奴め〜！」「キャハハハハハハハ！」「まあまあまあまあ〜！」

「誰か止めてくれ〜！」

第七話 彼女の心境（後書き）

次こそは戦闘シーンを・・・。

第八話 決闘の始まり(改)(前書き)

戦闘シーン少しだけ書きました。難しいですね。

第八話 決闘の始まり(改)

Side 朝倉 純一

あの騒ぎの後、俺はそのまま寮に戻ってきた。正直気のりしないが決まったものは仕方がない。

負けてもいいが、下手に負けると後々面倒だしな。勝っても面倒だが・・・どっちがいいかな。

そんなことを考えながら寮の玄関をくぐると声を掛けられた。

「その新生。」

「へ？」

俺か？今日はよく声を掛けられるな。

「そう、君だ。俺は高等部3年の神崎 大和だ。この寮の寮長をしている。」

「はじめまして、高等部1年の朝倉 純一です。」

「朝倉だな。今日は君たち新生の歓迎会をするから、疲れているかもしれないが、19時には中央食堂に集まってくれ。」

中央食堂というのは、男子寮と女子寮の間にある食堂のことです。男子寮と女子寮を繋ぐ形になっている。

あと、大浴場も同様の形で二階にある。

「わかりました。それではまた。」

「ああ、邪魔したな。」

その後、俺は自室に戻り、19時まで魔法書を読んだり、軽く筋トレしながら時間をつぶした。

そうこうしているともう時間になってしまった。食堂へ行くと結構な人が集まっており、友人同士談笑するもの、テレビを眺めているもの、座って居眠りしているものなど様々だった。

俺は特に知り合いもいないので少し離れた場所に座り、待っていると神城に声をかけられた。

「やあ、朝倉君。」

「ああ、天才くんか・・・」

「なんだい？その天才くんって・・・」

「いや、なに。天才らしいからそう呼んでみただけ。」

普通に呼ぶのも芸がないしな。天才って呼び名も芸はないか・・・

「あまり天才って呼ばれるのは好きじゃないな。神城か誠と呼んでくれる？」

「わかったよ、神城。で？どうしたんだ。ハーレムほったらかしにして、俺に何かようか？」

お前のハーレムがこっち睨んでるから用があるならさっさと終わらせて欲しいんだが。」

「なんのこと？ ハーレムなんている訳ないだろ？」

「いや、あつちで俺を睨んでいる女生徒の一団がいるから。」

「彼女たちのこと？ ただの友達だよ？」

あ、今の友達発言で涙を流している人多数発見。

「まあ、いいさ。で？ 何の用だ？」

「いやなに、知り合いを見かけたから声を掛けたただけだよ。」

それに、火鏡君と決闘することになったからね。どうしているかなと思つてね。」

「別に、どうもしないさ。気のりはしないが、勝つか負けるか悩んではいたがな。」

「それは、勝とうと思えば勝てるってことかい？」

「そうだが、それが？」

「相手はあの火鏡だよ？ 一般生徒まして普通科の人間が勝てる相手じゃないよ？」

「さあ、それはやってみないと分からないぜ？」

「そうかい、なら頑張ってくれ。応援しているよ。」

「ああ、サンキュー。」

「そろそろ、歓迎会が始まるね。このまま、一緒にいてもいいかい？」

「・・・好きにしろ。」

そうして歓迎会が始まった。男子寮と女子寮の管理人の自己紹介と各寮長の紹介、この寮の説明を改めて受けて、歓迎会ははじまった。

なお、はじまってすぐ神城は女子に囲まれてしまった。助けを求められたが無視してその場を離れた。

そして、次の日どうやら俺と火鏡が決闘する噂は全校へと広まっていたようだ。

稟達の耳にも入っていたようで声をかけられた。ちなみに土見と呼んでいたが、稟でいいと言われたのでそう呼ぶようにした。

シアと知り合いだったので何故知り合いか麻弓に追求され、経緯を話していたら神王や魔王と何故知り合いかまで追求されたので適当にごまかした。護衛というのは知られない方がいいだろうしな。

咲夜もこつちを仕切りに気にしてはいたが、声をかけてくることはなかった。

まあ、決闘が終わるまでは遠慮しているんだろう。

そして、放課後。場所は入学式を行った講堂。周りにはたくさんの生徒と先生。どういう訳か放送席があり司会進行を務めるのは放送部の生徒。

解説役もいて名前は「境さかい 鏡花きょうか」魔法科の先生らしい。

そして俺の目の前には赤い槍を持った火鏡 焔がいる。ちなみに俺は素手だ。

「よく逃げなかったな。」

「かつたるい。逃げていいなら今からでもそうするが?」

「相変わらずふざけてやがる。泣いて謝らせてやるから覚悟しろ!」

「は、審判さつさとはじめてくれ。」

俺は審判の先生に声をかけた。審判も魔法科の先生がやるらし。

「それでは、両者準備はいいな?」

互いにうなづく。

「それでは、試合始め!」

「ファイアーボール
火の球!」

火鏡は最初ら魔法を使ってきた。ふむ、初級魔法とはいえ、詠唱なしでこの数この威力流石は火の火鏡といったところか……。だが、この程度なら余裕でよけられる。

「あらよつと！」

「ほう、今のを軽く避けるか、口だけではないようだな。だが今度はどうかな？ファイアボール！」

今度もまた同じ魔法だが、数が違う。最初の倍以上になっている。

「かつたるい。」

俺は、飛んでくるコースを見極め、直撃コースの者は投げ返すことにした。

流れを見極め、自分の気の流れにのせて円を描く様にして・・・

「よつと。」

投げ返したファイアボールを飛んでくるファイアボールに当て消滅させた。

なんか、みんな驚いているな？この程度基本だと思っただが？

さて、火鏡家の奴がこの程度な訳ないからな。これは小手調べだろう。まだまだこれからかな。

さて、次はどんな魔法を使ってくるのか楽しみだ。できれば、火鏡家の火の魔法をみたいんだけどな。

決着は次回へ。

第八話 決闘の始まり(改)(後書き)

最後の締め方がわからない。

そして書き出しも。

第九話 暴虐の炎熱、幻想の桜、そして決着（前書き）

純一VS焰 決着です。
戦闘の中身は薄かった。

第九話 暴虐の炎熱、幻想の桜、そして決着

Side 天城 咲夜

「それでは、試合始め！」

審判の先生の合図で、試合が始まりました。

先手を打ったのは火鏡君でした。

小手調べなのでしょう。下級魔法のファイアボールを朝倉君へ放ちましたが朝倉君は余裕で避けていました。

「へへ、朝倉君なかなか戦いなれしているね。」

近くにいた神城君が言った通り、素人の動きではないことはあきらかでした。

「でも、あの程度ではまだまだだね。」

瑞希ちゃんが言ったとおりです。所詮は下級魔法ですからね、数も少ないですし。

私は神城君と瑞希ちゃんと一緒に朝倉君の試合を観戦しています。少し離れたところでは土見さんを中心にシアさん、ネリネさん、芙蓉さん皆さんから土見ラバーズと呼ばれる方々をはじめ、緑葉さんに麻弓さん。それに2年の時雨 亜沙先輩にカレハ先輩、中等部のツボミちゃんが観戦しています。

ちなみに、時雨亜沙、カレハ、ツボミは色々な意味で結構有名だ

ったりする。

「朝倉君がんばれ〜！」「純一負けるな！」

「どうやら、シアさんや土見さん達は朝倉君を応援しているようです。」

試合に視線を戻すと火鏡君は続けて同じ魔法を放ちました。しかし、最初とか数が圧倒的に違います。あの数は避け切れません。

すると信じられないことに朝倉君は火球を投げ返していました。それに皆さん驚いていましたが、本当に驚く所は火球を投げ返したことはありません。確かに投げ返すにはそれなりに技術が必要ですが、できない訳ではありません。現に、私達と同じ祖の五家の一人の神風 美冬さんは炎の矢を掴んで投げ返していましたから。

ここで問題は、美冬さんは風の魔法でそれを行ったということ。しかし、朝倉君は風の魔法はおるか、魔力を使った形跡が見当たりませんでした。

「お〜と！朝倉選手、火鏡選手の魔法を次々と投げ返し火球を撃ち落としております。」

これは、どうやっているのでしょうか？解説の境先生？」

「そうですね・・・、投げ返す方法自体はいくつかあります。」

代表的なのは、風の魔法で空気の層を作り投げ返す方法ですね。

しかし、朝倉君は魔法を使っている様子はありませんし、なににより火球を掴んでいる訳ではないようですね。

あくまで、受け流しながらその方向を変えているといったところでしょうか・・・」

「つまり、魔法以外のなにかを使用しているといったことでしょう

か？」

「詳細は私にもわかりません。ただ、この勝負わからなくなってきましたね。」

Side 火鏡 焰

試合が始まってすぐ、俺は下級魔法の火の球ファイアボールを放つてみた。小手調べというやつだ。すると簡単に避けられたので戦いのど素人という訳ではないことは分かった。

だが、それほど動きが速い訳ではなかった。更に数を増やし放った。所詮は動きがいいだけ、あの程度の速さでは避け切れまい。そうたかをくくっていたが実際はそうはいかなかった。奴はあるうことが投げ返してきたのだ！

「貴様、いったい何をした!？」

俺は一旦距離をとり問いかけた。

「何って、俺の気の流れにお前の魔法を乗せて向きを変えてやっただけだが？」

「そんなことが・・・」

できる訳がないと言おうとしたが、確かにこいつは魔力を使った様には見えなかった。

それに、以前親父に聞いたことがある。魔力とは違う力、気というものを使うものがあることを。

確かそいつらを・・・。

「貴様、気功術師か!？」

「へ、気功術のことを知っているのか？流石、祖の五家といったところか。」

だが、俺は気功術師ではないよ。確かに気功術も使うがな。」

「なら、何だというんだ!」

「ふむ、なら改めて自己紹介をしようか、俺は朝倉 純一、「出来損ないの魔法使い」さ。」

Side 天城 咲夜

「出来損ないの魔法使いさ」

火鏡君の問いに純一君は不敵に笑いながらそんな答えを返していません。

観戦している人のほとんどが ぽかん とした顔をしていました。そして、その答えに火鏡君を始め怒りだす人、呆れる人、笑う人、様々です。

「フフッ」

私は思わず笑っていました。実に純一君らしいと思ったからです。正直不思議でした。出会ってほんの数日しかたっていないのに、そんなことを思ってしまったのですから。

「咲夜？」

瑞希ちゃんが驚いた様子で声をかけてきました。神城君や土見さん達もこちらを向いています。

「すみません、なんでもないです。ただ、純一君らしいなと思ってしまっ……」

皆さんはそう思いませんか？」

みなさんはあまり納得していないようでした。しかし……

「フツ、そのとおりだ！天城嬢！」

杉並さんが急に現れました。本当に、急にです。瑞希ちゃんや神城君も珍しく驚いていました。

「確か杉並君だったね？どういうことだい？」

「なに、そのままの意味だが？あれが朝倉 純一という男だということだ。」

神城君の問いに至極当たり前のように答えました。

「真剣な決闘の場でふざけるのがですか？」

瑞希ちゃんは少し怒っているようでした。朝倉君がふざけていると思ったのでしょうか。

「何をいう？朝倉は至極真面目だぞ？」

「自分を出来損ないなんて、堂々ということのどこが真面目だといふの？」

「いや、真面目だよ、水無月嬢。あいつは自分を本当に出来損ない
と
思っているのだよ。」

そういつ杉並さんはどこか遠くを見ているようでした。

「それより試合を見なくていいのか？動くようだぞ？」

杉並さんの言葉に皆、視線を戻しました。

Side 朝倉 純一

なんか、周りが騒がしいな。火鏡も怒っているし、なんか問題あ
ったか？

「なあ、なんでそんなに怒っているんだ？」

「当たり前だろう！出来損ないだと？ふざけているにも程がある！」

む、至極真面目なのだな。

「手加減してやろうと思ったが、止めだ、全力で潰す！フレイムランス炎の槍！」

火鏡がそう唱えると百を越える数の炎の槍が出現した。

「セツト……」

その声と共に全ての槍の矛先が俺を向く。

これは流石にまずいな。一つ一つに込められてる魔力がさっきの

火球の比じゃねーや。

「ファイアー！」

火の魔法だけに？つとふざけている場合じゃないな。
あれは流石に返しきれないし、火傷しそうだしな。
と、なれば、やることは一つ、全力で避ける！

Side 火鏡

「セツト・・・」

こいつは全力で潰す。そう決めた俺は、無詠唱で行える最大の魔法を使用することにした。

「ファイアー！」

数、速度、威力、今の俺が無詠唱で行える最大級の魔法だ、返すどころか、避け切れまい！

百を優に超える炎の槍が奴に向かって次々と飛んで行き・・・

そして着弾した。フッ俺の勝ちだな・・・。そう思った瞬間、後ろから声を掛けられた。

「いや、びっくりした。危ないな、当たってたら火傷していたところだぜ。」

いや、火傷じゃ済まないだろ！そう突っ込みたかったそれよりも・・・

「どつやっつて避けた!？」

そう今気になるのはそこだ。なにをした？

「ん？瞬動術知らない？それで瞬間的に加速したんだが・・・」

「なんだと!」

瞬動術、それ自体は知っているし俺も使える。しかし、まったく気配を感じなかった。

これが本当に瞬動術によるものだとするなら、親父並だぞ？そんなことあつてたまるか！

「クツ、ならこれならどうだ!」

今度は魔方阵を使用した魔法を発動させようとした。

さつきまでの俺自身だけで扱える無詠唱魔法。今度のは俺の槍くれないのそつが「紅の葬火」を媒体とした魔法だ。

本来、魔方阵による魔法は戦闘に向かない。確かに威力は高いが、それを描くのに時間がかかりすぎるのだ。また、適正にも左右される。

しかし、これを解消させたのが「杖」と呼ばれるもの。一重に杖といつても指輪だったり、槍だったり様々な形がある。

この「杖」は魔法を発動させるための処理を助け、詠唱の速度を上げたり魔力を高めたりしてくれる。それに加え、予め魔方阵を登録しておくことで即座に展開してくれる。

これは昔からあり、神話に語り継がれる武具の多くにもこのような機能がそなわっている。もちろん、今では「杖」は普通に作られ、

売られており（それなりに値は張る）、魔法使いの多くは自分の杖を持ち自分用に最適化している。

しかし、「杖」に登録できる魔方陣の数や質には限りがある。どのような魔方陣を登録させるかは人それぞれである。

「行くぞ！地獄ヘル・フレの獄え・・・」

しかし、魔法は発動しなかった。

「ウオラ！」

純一が魔方陣を殴るとグラスが割れるような音と共に魔方陣は破壊されたのだ。

「な・・・に・・・」

「どうした、ポケつとして？いいのか？もう終わらせても？」

Side 天城 咲夜

「いったい何をしたの・・・？」

皆、目ので起こった光景に啞然としています

「な、な、な、何が起こったのでしょうか！朝倉選手が魔方陣を殴った瞬間、魔法が発しました。

いったいこれは・・・？」

「これは・・・あくまで予想ですが、分解したのではないのでしょうか？」

「境先生、分解とは？」

「多分、朝倉君は火鏡君の展開した魔方陣を即座に読み解き、式に干渉し無効果したのだと思います。」

「そんなことが可能なのですか？」

「いえ・・・普通なら無理です。」

まず、展開された魔方陣がどんなものか理解、式に干渉し、それを分解する。

この工程を一瞬で行わなければならないうえに、魔方陣は既存のものだけではなく、独自のものもありますから、実戦で使用するの
は不可能と言われています。そのような人は見たことありません。
なにかしらの仕掛けがあるとしたか・・・。」

境先生のおっしゃる通り、理論はありますが、実戦でそれを行える人はまず、いません。

純一君はどうやったのでしょうか？

「杉並君、君は朝倉君と古い友人だったよね？彼はいったいなにをしたんだい？」

「何をしたか？境教諭の言っていた通りのことだが？」

神城君の問いに杉並君はさも当たり前のように答えました。

本当にそんなことが？改めて純一君に目を向けると、純一君の周りに桜の花びらが舞っていました。

かったり〜、火鏡家の火の魔法が見れると思って待っていたんだがな。

う〜ん、あれか、一対一だから詠唱時間がないと思っているのか？ないなら作ればいいだろうに……。

それともなめられてる？正直、もう面倒臭くなってきたしな。

今日の所はもういいか。またの機会もあるだろう。なら、さっさと終わらせますか。

「悪いが、かつたるくなってきたからな。もう終わらせてもらっせ？」

『舞い散れ幻想の桜』

俺のその言葉と共に桜の花が舞い始めた。

S i d e 火鏡 焰

『舞い散れ幻想の桜』

その言葉に意識を戻すと、辺りに桜の花が舞い散り始めていた。

「なんだ、その魔法は！」

見たことのない魔法に動揺したが、所詮は桜の花びら、燃やせば問題ないと思いなおし、改めて、魔法を行使した。

魔方阵だとまた発動を邪魔される恐れがある。

なら……

「フレイムランス
炎の槍」

数は少ないが足止めには十分。奴は数が少ないためか瞬動術を使わなくても避けられると思ったのだろう。

瞬動術を使わず避けていた。今の内に詠唱を・・・

「その火は、全てを焼き尽くす破壊の力、その象徴、その力により
我に仇名す者を焼き払え！祖は荒れ狂う炎」一暴虐の炎熱《tyr
anny extreme heat》『！』

奴に向けて解き放った。この魔法は一定の範囲を炎で飲み込み焼き尽くす。

更に、周囲の酸素を瞬間で燃やしつくし、息さえできなくなる殲滅型の魔法だ。

奴の瞬動術がいくら優れていても、炎の槍を避けている所にこの魔法だ、避け切れまい。

勝利を確信した瞬間、

「その程度かよ？つまらんな。」

そんな声は何故かまた後ろから聞こえてきたが、俺が覚えていたのはここまでだった。

Side 朝倉 純一

ふっ、やっと終わった。俺の目の前には気絶した火鏡がいる。

なかなかの強さだったが、正直期待外れだ。

俺の力を計ろうとしたのかは知らないが、無詠唱が下級や中級だけだし、魔方陣は厄介だから潰させてもらったが、それで動揺して

対処遅れてるし、最後の魔法は威力はなかなかだが、その前に俺の魔法が何なのか考えつかなくなつたのかね、名前のままの魔法なのに、正直魔法使う必要もこんなに長引かせる必要もなかったんだけどな。

あゝ、祖の五家の魔法みたかつたな。

「審判！判定は？」

「え、えゝと、火鏡 焰選手、戦闘続行不可能により朝倉 純一選手
の勝利です！」

シーン

会場は静まりかえっていたが、気にせず退場することにした。

あゝあ、かつたるかつた。

Side 天城 咲夜

「え、えゝと、火鏡 焰選手、戦闘続行不可能により朝倉 純一選手
の勝利です！」

それを聞いた純一君は退場していきました。

純一君が勝ちました！私はとてもうれしかったのですが、表には
出ませんでした。

皆、難しい顔をしているからです。

「ちょっと、杉並君・・・最後の朝倉君の魔法、あれは一体なに？」

麻弓ちゃんは問いかけました。確かに、わかりづらかったでしょう。

火鏡君が魔法を放った後、その背後に風景から溶け出すように現れたからです。

ですが……。

「妙な事を聞く、朝倉は言っていたろ？『幻想の桜』と、つまりはそういうことだ。」

そうです。あれは幻術系の魔法なら話は早いのです。

「でも、おかしくないか？たとえあれが幻術系の魔法だとしても、純一は炎の槍を避けていた、つまりあの場にいたことになる。」

なら、最後の範囲魔法からは逃れられないんじゃないか？」

「つまり、炎の槍を避けていた純一君も幻影だったってことだよ。」

そう、神城君が言ったとおりです。それなら納得がいきます。ですが……。

「だけど、いつ本物と幻が入れ替わったのが問題ですね。」

瑞希ちゃんの言うとおりです。幻想の桜を使用した後でしょうが、そのタイミングが全くわかりませんでした。

「なにを言うかと思えば、それさえも惑わしてこそその幻影魔法だろう？」

杉並君はそう言いますが、皆、奥歯になにか挟まったような顔をしています。でも、純一君が勝ったのですから、これから火鏡君の邪魔なくお話することが出来ます。その時にでも聞けばいいのですし、時間はたっぷりあります。それでは、純一君を迎えにいきましょう。

私はその場を後にしました。

Side 天城 臯月

私は、生徒会の皆と集まって試合を観賞していた。朝倉君が勝利し決着を終えた。

「うふふ、凄いわね、朝倉君。」

朝倉君の力は私が思っていたより相当上のようだ、それでもまだ底が見えない。楽しみになってきた。

「みんなは彼のことどう思う？」

私は気になって皆に聞いてみた。

「あの気功術の錬度はたいしたものね、それに瞬動術も。」

「あの、魔方陣を無効果した技術、なかなかのものだ。」

「最後の桜を媒体にした幻影魔法、見たことない魔法だね。」

「確かに腕は凄いが、気にいらねえな。」

うん、なかなかの評価かな。気に入らない子もいるけど、それで

も彼の力は認めている。これから面白くなりそうね。

楽しませてね朝倉君。

第九話 暴虐の炎熱、幻想の桜、そして決着（後書き）

純一「へっくしょん！」

咲夜「風邪ですか？」

純一「いや、どっかの誰かがまたかつたるいことを考えているんだろっ」

咲夜「そうですか、でも気おつけてくださいね」

純一「ありがとう」

咲夜「//////////」

バカは風邪引かないって言うし大丈夫だろうよ

純一「誰が馬鹿だ！」

うるさいのはほっとして次回予告

ひとまず決着を終えた純一に待っていたのは予想外の言葉

咲夜「私、実は・・・男の子なんです。」

絶望する純一、いや全男子生徒

そんな中暴走する火鏡

焰「それでも俺はお前を・・・」

登場ブラック咲夜

咲夜「あなたなんかに興味はないわ。消えなさいこのくず」

そして姉弟の対決

咲夜「あなたに純一君は渡さない！」

皐月「目を覚ましなさいあなたは男なのよ！」

間に挟まれた純一の決断は！

次回 純一の選択が明らかに！

純一・咲夜「嘘つくな〜！」

第十話 戦いの後（前書き）

やっとリーアを出せました。

第十話 戦いの後

Side 土見 稟

「それにしても、朝倉君すごかったね。」

「はい、ほとんど体術だけで圧倒してましたから。」

シアやネリネの言う通り、魔法を使ったのは最後の一度、それも幻影魔法だけだ。

むしろ何故魔法を使ったのかわからないほど一方的だったと思う。そう、羨むほどに・・・

「稟君？どうかしましたか。」

楓が心配そうにこちらを見ている。

「いや、なんでもない。」

こんなことで楓を心配させるのも心苦しいのでそう答えた。

そう、これは単なる嫉妬だ。俺は魔力が犬以下らしいから、魔法は使えない。

だから純一並の体術があればと思ってしまう。

「まあまあ楓ちゃん。稟にも男特有の悩みというものがあるからね。あまり詮索しないであげてよ。」

「はあ、男性特有の・・・／／／／／／／」

「／／／／／」

その言葉で楓をはじめ、ネリネやシアまで赤くなった。

「ちよつとまで、樹！誤解を招くような言い方をするな！」

「稟ちゃんも男の子だからね。」

「ままままあ！」

「きゃきゃきゃきゃあ！」

「亜沙先輩は助長するような事を言わないでください！カレハ先輩とツボミちゃんも自家発電しない！」

あゝもう、純一じゃないがかったるい！

Side 神城 誠

僕は今医務室に来ている。焔君が運ばれたからだ。咲夜さんは朝倉君の所へ向かったのだろう。瑞希さんは咲夜さんを追って行った。彼女は咲夜さんの護衛でもありますからね。しばらくすると焔君が目覚めました。

「んゝ、ここは・・・」

「目が覚めましたか？ここは医務室です。」

「・・・そうか、俺は負けたのか。」

腕で顔を隠しているためか表情は読めません。しかし、悔しそう

なのはまるわかりです。

「仕方がありません。彼はあなたが火の魔法を得意とするのを知っていたのですから、対策を練られて当然です。」

逆にあなたは、彼の情報がなかったのですから。」

「気休めはよせ……。」

そんなものが関係ないことは、それだけの力の差があったことは自分でもわかっている。」

確かに気休めですね。相手の情報を事前に手に入れるのも戦いの一つですし、なにより、彼の戦いは方は対策云々の話ではありませんでしたから。」

「……。」

言葉につまっていると医務室の扉が開け放たれました。

「失礼するぞ」

そう言って入ってきたのは焰君の兄の「火鏡ひかがみ 蒼也そうや」さんだ。

「兄貴……。」

「さっきの試合見ていたぞ。随分一方的にやられていたな。」

「それは……。」

「だいたい、お前は精神的に未熟すぎる。相手が予想外の手札ばかりで動揺し、思考が停止していたのではないか？無詠唱じゃ効かな

い、魔方陣は分解される。そして詠唱魔法を選択した。

この選択自体は間違っていないなかっただろう。時間稼ぎのための魔法も。だが、その前に相手の魔法に対し警戒が薄かった。

相手は幻想の桜と、魔法の効果を教えてくれていたのだぞ？それにだな……」

「まあまあ、蒼也さんその辺で……」

「しかしだな、誠君……」

「……俺だって、火鏡の魔法を、神炎を使えていれば！」

「だが、今のお前ではまだ使えないだろう？神炎は魔力の大きさや技術だけでは使えない。

己の精神、心に起因する。だからこそ神炎であり心炎なのだ。」

「それは……」

「フッお前の魔法の才能は俺より上なのだ。自信を持って。

今回のことで己の未熟さが分かったのなら更に精進すればいいさ。」

「……ああ、次こそは必ず朝倉を倒す。」

「その息だ……」

どうやら焔君はさらにやる気をだしたみたいだ。いままではどこか才能に胡坐をかいていた感があつたけど……。

朝倉君。きみは、焔君に火をつけてしまったよ？それに、僕にも……

「おや？咲夜、今日はいつにもまして機嫌が良さそうだね？」

「そんなことないですよ？お父さん。」

今、咲夜と話ているのが私たちの父親で天城家現頭首の天城あまぎし 四朗ろう。私が契約しているソラの前契約者。

ソラと契約している私でも未だ勝つことができないほどの人だ。

「あれ、咲夜そんなことないんじゃない？だって今日は朝倉君と・・・」

「わ～！わ～！わ～！姉さん！余計な事言わないで！」

「あらあら、お母さんにもその話詳しく聞かせて欲しいわ。」

この人は私達の母親で天城あまぎ 月夜つきよ、二児の母親とは思えない位かわい。

そう、綺麗ではなく、かわいいのだ。着る服を変えれば、学生に間違われるくらいに。

「実はね・・・」

私はこれまでのことをかいつまんで話した。

咲夜が邪魔しようとしてきたが、ソラに頼んで抑えてもらった。ごめんね。

「・・・ということがあったわけよ。」

全てを話終える。最初は咲夜に男の影が・・・と嘆いていたお父さん、うれしそうなお母さん。そして、今日の決闘の時、朝倉君が使った魔法の話をすると、予想以上に驚いた様子だった。最後には懐かしそうな表情をしていた。

「咲夜、機会があつたら、朝倉君を家に連れてきなさい。いや、機会がなくとも無理やり作って連れてきなさい。」

「フツツ大丈夫。とつて食べたりしないから。」

お父さんもお母さんも朝倉君に会って見たいのよ。

あの方のお孫さんにね・・・」

最後の方は良く聞き取れなかったがその言葉に私たちは驚いた。両親がそんなことを言うのは初めてだったから。特に男の子を家に上げるなんて前代未聞だ。

他の祖の五家の男子も私たち親子だけが住むこの別宅にはあげたことがなかったのに。

私達天城家には本宅と別宅がある。本宅は広く、おじいちゃん一族のものが住んでいる。そしてこの別宅は私達親子だけが住んでいる。

ちなみに別宅は一般の住宅と同じ大きさだ。本来は本宅に住むのだが、お父さんが、親子水入らずがいいと我儘をいい、この家を建てたらしい。

正確には咲夜のためもあるらしいがその事情は今は無関係ない。とにかく私も咲夜もこの家を気に入っている。本宅は無駄に広いし、人も多いから。おじいちゃんも良く遊びにくる。

今日は一族のものの修行を見ていて、本宅で食べるらしい。

「よかったわね。咲夜。」

「う、うん／＼／＼」

はずかしがっている。うん！我が妹ながら萌えるわね！

Side 朝倉 純一

「うん！いい湯だった。」

ゴキユゴキユゴキユッ ぷは〜！

「やっぱり風呂あがりにはコーヒー牛乳でしょう。」

風呂あがりに、共同の休憩所でコーヒー牛乳を飲みほし、そうつぶやいた。

「いえ、お風呂あがりはフルーツ牛乳だと思います。」

「へ？」

まさか独り言を返されるとは思わず間抜けな声をだしてしまった。声の方を見ると入学式の日にあった先輩がいた。

「そう言えば自己紹介がまだでしたね。私はリーア・アルタイン。魔法科の2年です。」

「どうも、朝倉 純一、普通科1年です。」

「話は戻りますが、朝倉君。やはりお風呂あがりはフルーツ牛乳だ

と私は思う訳です。」

ふむ、リア先輩はフルーツ牛乳派ですか。

しかし！俺はコーヒー牛乳派なのですよ。そこはゆずれない。

「いえ、先輩。風呂あがりにはコーヒー牛乳だと思います。」

ギヤーギヤー、ワーワー、俺と先輩は熱く議論をまあ、30分位
かわした。

結果……。

「純！」「リアさん！」

ガシ！

お互いに固い握手を交わした。なんか、呼び方も変わっていたが
気にしない。

「それで、どうしたんですか？リアさん。俺になにか用事でも？」

「用が無ければ声をかけてはいけませんか？」

「いえ、そういう訳ではないですが、入学式の日に会っただけじゃ
ないですか？どうしてかなあと？」

「確かにそうですね……、では本題です。」

理由は2つ、一つあなたは特殊な目を持っていますか？私の様に
……。」

先輩はそう言つと一度目を閉じ、もう一度開くと翠だった瞳がまるで空の様に蒼い瞳に変わっていた。

「それは、「世界を見渡す千里の天眼」ですね。」

そう、それは一歩も動かず世界で起こっているあらゆる事象を観測することができる瞳だった。

「良く知っていますね。そのとおりです。それで、純、あなたも何か持っていますよね？」

「確信している言い方です？まあ持っていますが。」

俺は、左眼を閉じ再び開けた。すると黒だった瞳が紅色に変わっているはずだ。

「紅色に変わっていますね？その瞳は？」

「ん〜、特に名前は無いんですよ。特殊な宝石を瞳に取り込んでいるんです。」

その結果、魔力の流れを視ることができるようになりました。」

「流れが視える、ですか？」

「ええ、視えるだけで、それ以外なにもできないんですけどね。」

「そんなんですか。でも何故、そのようなことを？」

「必要だったからですよ。強くなるために・・・ね。」

「そう……ですか。」

それから、互いに黙りこんでしまった。駄目だ、この雰囲気は苦手だ。話題を変えよう。

「それで、もう一つは？」

「え？」

「もう一つの質問です。二つあるって言うていたじゃないですか。」

「それは、その……／＼／＼／」

「どうかしましたか？」

「~~~~~決闘の理由です！」

「へ？」

「あなたが火鏡と決闘した理由、噂では皐月の妹を巡って争ったって事でしたが……」

「皐月？」

「天城 皐月、天城 咲夜の姉です。」

「あゝ、生徒会長ですか。って、妹ってことは咲夜を巡って争ったと？」

「ええ、その様に聞いています。（咲夜って呼び捨てなんですね。）

「誰だ？そんな噂を流したの、あながち間違っではないが、
で、なんでリアさんは不機嫌に？」

「間違いではないですが、正しくもないです。」

「間違いではないんですね？」

「ゴゴゴゴ！って擬音が聞こえてくるんですけど！」

「例えるなら地震の初期振動だな。」

「と、とりあえず落ち着いてください。え〜とですね、火鏡の奴が
ケンカを売ってきたんですよ。俺が咲夜と話しているのが気に食わ
ないって。（確かそんな理由だったよな？）」

「正直その時のことをあまり覚えていない純一であった。」

「で、そのケンカを買ったと？」

「いや、最初は断ったんですが、会長が割り込んできて……。」

「臯月が？……（全ての元凶はあなたでしたか！後で、しばきま
す！）」

「あの、リアさん？」

「は〜、大体の事情は分かりました。」

「わかっていただけましたか。」

いや、よかった。途中で不穏な空気が流れだした時はどうしようかと思っただよ。

「え、と、質問は以上ですか？」

「ええ、すみません。お風呂あがりには邪魔してしまいましたね。」

「いえ、楽しかったですから気にしないでください。」

「そ、そうですか／＼／＼、それなら良かったです。」

もうすぐ消灯の時間だ・・・

そんな紅女史の音がスピーカーから聞こえてきた。

どうやら話しこんでいたら消灯と時間になってしまったようだ。

「どうやら、消灯の時間みたいですね、それじゃ、お休みなさい。リアさん。」

「ええ、おやすみ。純。」

第十話 戦いの後（後書き）

次回、どうするかな。

ちなみに、千里の天眼は今現在起こっていることをリアルタイムで見れるのであり、過去や未来までは見れない。また、リアは普段使わないようにしています。

第十一話 魔法と属性（前書き）

設定文長い。呼び方やキャラが安定しないな。

第十一話 魔法と属性

ん？ここは・・・

・・・

おめでとつございます。双子ですよ？

おお、そうかそうか！

ふふっ元気に育ってね？

ザザッ・・・

大変です！片方は魔族の子です！

なに！

そんな・・・

ザザッ・・・

どうするかご決断を・・・

くっ・・・

あなた・・・

ザザッ・・・

今の夢は・・・

初音島を離れて初めて見せられたな・・・他人の夢・・・

俺にはたいして役にたたない魔法が二つある。

一つは手のひらから和菓子を出す魔法、もう一つは他人の夢を見せられる魔法。

まあ、魔法といっても魔力は使わないんだけどな。

他人の夢を見せられる魔法は初音島の桜影響だったはずなんだが・・・まあ、今はそれはいい。

あの夢は・・・まさか・・・

トントントン

そんなことを考え込んでいると扉がノックされた。

あゝ、今日もですか・・・

がちや！

扉をあける音と共に入ってきたのは予想通りの顔。

「おはようございます。純。今日は、起きていたようですね。」

鍵を開けて入って来たのはリアさん。

「ええ、なんとか。」

「そうですね、では早く着替えてください。食堂で朝食にしましう。」

「……はい。」

なぜ、こんなことになったのか……それは、まあ俺のせいでもあるのだが……

火鏡との決闘から一週間がたち、変わったことが結構ある。これがその一つ。

理由は簡単。俺がここ数日、というか毎日遅刻しているからだ！

そして担任は紅女史、最初は校庭十周など体育会系の罰だったのだが、俺がそれを余裕でこなしているのを見て方向性を変えたらしい。

たぶん杉並あたりの入知恵なのだろう。

でなければ、女の子が起こしに来るなんてことあるわけがない！
まして紅女史が俺の部屋の鍵をリアさんに預けるなんてことあるはずがない！

全てはあいつのせいだ！

なら、早起きすればいいだろう？

できたら苦労はしないのですよ。

しかも、結果的に効果が出ている以上継続されているというわけだ。

。 かつたるい。まあ、そこらへんは信頼されているんだろうが……

「おはよう純一君。朝から元気なさそうだね。」

食堂に行くとき誠に声を掛けられた。

「ああ、おはよう……。」

毎回これじゃ元気なんか出るわけないだろ。」

これが変化二つ目、どういう訳かあれから神城から名前で呼ぶようになった。

どういつ心境の変化だ？まあ、これはいい。問題は……

あいつ、またアルティンさんと……

神城君とあんなに親しく……。

ガヤガヤガヤガヤ……

そう、どうやらリアさんも男子にかなり人気があるらしい。

神城は……言わなくてもわかるだろ？

結果、男子と女子の殺気を毎朝浴びるはめになっているわけだ。

「ほら、純。ぼさっとしてないで朝食を取りましょう。」

「ハイハイ。」

「フツッ。じゃあ僕は席を取っておくよ。」

「ああ、頼む。」

これが、ここ最近の俺の朝だ。

ところ変って、ここは教室の前。

学園までリアさんと誠と登校し、玄関でリアさんと別れた。

ガラガラ！

「おはよう〜。」「おはようございます。」

「おはようございます純君、神城君。」「おはようふたりとも。」「
・・・よう。」

始めに俺と誠の名前を呼んだのが、咲夜。俺の呼び方が変わっているのは、リアさんが俺のことを「純」と呼んでいるのに対抗してのことらしい。何故かは知らん。

次に挨拶を返してくれたのが水無月さん。

最後に不貞腐れた返事が火鏡だ。

あれから火鏡は俺と咲夜に突っかかってくることは無くなった。それに、どこか落ち着いた様子だ。なにか心境の変化でもあったのだろう。

それに、決闘の後、教室の雰囲気微妙に悪かったが、咲夜をはじめ、誠や稟、意外なことに火鏡も話しかけてきたことで払しょくされた。

なんで、悪かったんだ？

そして・・・

ガラガラ！

「おはよう」「おはようっす!」「おはようございます」「

始めから順に稟、シア、ネリネ、芙蓉さん。この光景は既に当たり前になっている。

「ふむ、土見は相変わらずラバーズと登校か。」

「杉並か・・・どうした、いつものことだろ?」

「そうだが、そろそろ進展してもらいたいなと・・・な。」

こいつは・・・

「進展ってな、まだ入学して1週間そこらだぞ?そうそうならないだろ。」

「ふむ、だが同志はかなり進展しているだろう?」

「なにがだよ?」

「毎朝アルティン嬢に起こしてもらっているのだろう?合鍵を渡して、部屋に入ることを許可して。」

「おい!待て、それは・・・」

今それを言われるのは・・・

「純君、今の話は本当ですか?・・・」

まずいのだが、遅かったか。

いい笑顔なのに、目が笑っていませんよ、咲夜さん。

「お、お、お、落ち着け咲夜、そんなの杉並のベタラメに決まっているだろう？」

「そうなんですか？杉並くん。」

「これが証拠だ。」

そう言っつて杉並がとりだしたのは俺の部屋からリアさんと俺が出てくるところだった。

いつ撮ったー！

「純君」

その笑顔が怖い。返答に困っていると・・・

「全員席に着けー！出席を取るぞ！」

ナイス！紅女史！

「ほら、紅女史も来たことだし、座ろっぜ？な？」

「・・・わかりました。昼休みに再度聞きますので覚えておいてくださいね。」

「ハ、ハイ・・・」

寿命が少し伸びただけだった。

時は移って、今は入学して初めての魔法学。
担当は決闘の時解説もした境 鏡花先生だ。

「さて、今日は入学して最初の魔法学です。
いまさらと思う方もいると思いますが、復習といきましょう。」
そう言いながら黒板に図を描き始めた。

「まず魔法とは己の中にある魔力を燃料に世界に干渉し「世界の法則」を操ることをいいます。」

例えば火をだしたり、水をだしたり。
世界の法則の中であれば、魔力の量やそれを操る技術、式に左右
されませんが、できないことはないです。

それこそ、太陽並の炎を出したり、天候を操作したりですね。」
次に属性の相互関係を描き始めた。

「次に属性ですが、基本属性の下位属性として火・水・風・土の4
属性をいいます。」

その中位属性に炎・氷・雷・大地
上位属性に、光・闇・天空があります。
そして、極位属性として時・空間・有と無があります。」

ちなみに、火と風で炎、水と土で氷、風と水で雷、土と炎で大地
となる。

天空は中位属性までの統括属性であり、中位属性全てを兼ね備え
ている。

天城家はだからこそ、祖の五家の代表となっている。しかし、各属性についてはそれぞれの家の者に負ける。

天城家が天の天城と言われる所以は天空魔法という独自の魔法があるためである。

これは天城家の中でも宗家の直系の者しか扱えない。

そして、極位属性。これは世界の法則その制約に一番近いためそう呼ばれている。

時の属性は干渉できる時間に限界がある。特に、未来や過去に対する制約は大きい。

空間の属性は、座標の指定が必要であり、場の変化も計算にいれなければならない。

有と無は二つで一つの属性、創るのにも無に帰すのにも対象に対する知識が必要であり、法則を越える物を創ることはできない。

例えば、死者を蘇らせる薬や新たな属性など。無に帰すこともしかりである。

極位属性は他にも色々制限が多い。それは魔法でありながら、法則を越える可能性があるからである。

しかし、魔法である以上それは不可能である。

「次に神族と魔族が持つ属性です。

神族がもつ特有の属性を神属性、魔族がもつ特有の属性を魔属性といい、基本属性の光と闇に相当します。

また通常、相反する属性をもつ事はありません。

例えば、「火と水」や「光と闇」といったふうですね。これは互いに打ち消しあってしまうからです。このような属性を持ったとしても、どちらか本人に相性が良い属性がでてしまうケースがほとんどです。」

もちろんなにごとにも例外はあるが、それは置いておく。

「ここまでが一般に属性魔法と呼ばれるものです。「杖」を使用はしますが、魔法を使うのは基本使用者本人です。」

しかし、次に説明する精霊魔法は違います。

精霊魔法は精霊に魔法を使ってもらいます。

しかし、精霊もただでは動きません。例えば、魔力を提供したり、宝石を提供したり・・・なにかしらの対価を払って精霊を使役します。

下位の精霊は見えませんがみなさんの周りにもいます。

しかし、それらを統括する精霊中位や上位の精霊やさらには神霊と呼ばれる精霊は土地や者、人に憑いていたり契約したりしています。良い例が世界樹の精霊や祖の五家の精霊ですね。

ここまでで質問のある人はいますか？」

「はい！」

「はい、シアさん。」

「朝倉君が使った魔法は何の属性に含まれるんですか？」

「そうですね、私も聞いたことが無い魔法でした。多分ですみませんが特殊属性に入ると思われます。」

「特殊属性ですか？」

「はい。特殊属性は、簡単にいえば先ほどいった属性に当てはまらない属性ですね。

例えば、七徳の正義や希望といったものもこれに当てはまりません。まあ、この場合属性とは言えないかもしれませんが・・・。」

「では、朝倉様の属性は？」

「それは、朝倉君に聞いてみた方が早いでしょう。朝倉君どうですか？」

すうすう・・・

「純君！純君！」

ユサユサ・・・

ん？誰かが俺の睡眠の邪魔をしようとしている。が、誰が起きるか。

「あ・さ・く・ら・く・ん・・・」

ゾクツ！なんか魔力が活性化している！

慌てて起きると黒板の前にいる鏡花先生が今にも魔法を放とうと
していた。

「え、先生？室内で魔法は危ないですよ？」

指摘してみた。

「は、もういいです。それより朝倉君、あなたの属性について説明していただけますか？」

なんか溜息つかれた、なんだっていうんだ。まったく。隣の咲夜もなんか呆れているし。え、と、俺の属性だっけ？なんでもた・・・

「何で俺の属性の話に？」

質問してみると咲夜が答えてくれた。今朝のお怒りは今はなりをひそめているようだ。

このまま忘れてくれるとありがたいんだがな。

「純君が火鏡君に使った魔法のことですよ。基本属性に当てはまらないから質問されているんです。」

お、そういうことか。かったるい。

「え、とですね、属性は桜です。」

「桜ですか・・・聞いたことありませんね。どんな事ができるのですか？」

「う、ん、基本的に桜の花びらを生み出して、それを操る事ができますね。」

たとえば、幻術を見せたりとか・・・」

「そうですね・・・ありがとうございます。もう、いいですよ。」

うん。嘘は言っていない。ただ、応用性が多いだけだしな。

「さて、それでは最後にそれぞれの魔力と属性を計測したいと思います。」

自分の属性にあつた魔法の方が、威力もあがりますし効率もいいですからね。

魔法科の人を始め、既に計つたことがある人もいると思いますが、魔力は増えたりしますので再度計測します。順番に並んでください。」

俺は最後でいいや。

「純君は並ばないのですか？」

咲夜が聞いてきた。

「ん？最後でいい。並ぶのかったるい。咲夜も行ってきたらどうだい？」

「いえ、私も最後の方で構いません。最近計つたばかりですから。」

「あゝ、魔法科のカリキュラムでか。」

そう、魔法科と普通科は基本的に同じ教室で授業をつけるが、魔法科独自のカリキュラムがあり、その時は別々の教室になる。その時にでも計測したのだろう。

オー！きゃー！ドンマイだ稟！

なんか一喜一憂しているな。つうか、稟落ち込みすぎだろう。

まあ、あの魔力の量は落ち込みたくなるか。

そろそろ終わりそうだな。並びますかね・・・

第十一話 魔法と属性（後書き）

呼び方とかキャラとか安定してきたら修正します。

第十二話 お昼休みと尋問（前書き）

魔力のランクが決められない。

これ失敗するとパワーバランスが一気に崩れる。

第十二話 お昼休みと尋問

ここは屋上、そして今は昼休み。

そう、少なくとも何かに怯える場所ではない。

今、ここにいるのは俺、咲夜、誠、水無月さん、火鏡、土見を始め土見ラバーズ（樹、麻弓含む）、皐月さんにリアさんである。そして、俺が何に怯えているかという・・・

「さあ、純君。今朝のことを教えていただけますね？」

凄い殺気と魔力です。視線だけで人一人殺せそうだな。

「え〜とですね、私が火鏡との決闘以降毎日遅刻していたことは知っていますよね？」

「そうですね。でもここ数日は遅刻していませんね。それとなんの関係が？」

いつもの咲夜ならここまでで気づきそうなものだが、あえて気づかないふりをしているのか、怒り過ぎてそこまで頭が回らないのか・・・、多分後者だな。

「つまり、見かねた紅女史がその対策にとリアさんに俺の部屋の合鍵を預けまして・・・。」

「今に至ると・・・。ですが何故よりもよって女子生徒それもリア先輩なのですか？」

それは俺にもわかりません。はい。杉並が噛んでいるとしか・・・。

「それには俺がお答えしよう!」

「「わ!」「「きゃ!」「

「杉並、いい加減その登場の仕方はやめろ。パターン化してきているぞ。」

「ふむ、考慮しよう。その前にまずは、アルティン嬢が何故朝倉を起こす事になったかだが・・・。

早い話、俺が推薦した!」

「やっぱりおまえか!」

「何故そんなことをしたのですか!」

「なに、朝倉が喜ぶかと思ってな。

それに、同志の場合、男が来ても素気無く追い返すか二度寝に入るだろうが、女性それもそれなりに親しくしているものなら無碍にはできないだろう?」

「グッ」

「だったら紅薔薇先生でもよかったじゃないですか!」

「教師である以上朝は何かと忙しいであろう?」

それに、紅女史はあくまで管理人代理だ。継続しては無理である
うっ?」

「うっ……」

咲夜が押し黙ると皐月さんが慰めるよう何かを囁いていたが気にしない。

「まあ、まあ、咲夜ちゃん。尋問はそこまでにして、お昼にするのですよ。」

麻弓が話題を変えるように切り出してきたのでそれに便乗するこ
とにした。

皆もそれぞれ、お昼をとりだした。

「純。お昼。」

「はい。リアさん。」

俺は、お弁当をリアさんに渡した。

「「それでは、いただきます。」」

「って、待ってください。なんで純君がリアさんの分のお弁当を持
っているんですか!？」

「なんでって、俺がリアさんの弁当を作って来たからだか？」

「ですから、なんで純君が作ってくるんですか？」

「いや、朝起こしに来てもらってるし、迷惑かけてるからそのお礼
にと……」

「いつもありがとうございます。純。」

「いえ、俺もお世話になっていきますので。」

リアさんと挨拶をかわす。

「なら、純君の分は私が作ってきます！」

え？なんでそんな話に？

「やめときなさい。咲夜。」

「姉さん？なんで止めるんですか？」

「だってあなた、料理できないじゃない。」

「うぐ！」

「それに、朝はとても弱いでしょ？」

「うぐ！」

「総じて、無理だと思っわよ？」

なんか、咲夜が大分落ち込んでいるな？

うぐんしょうがない。咲夜にも世話になっているしな。

「なあ、咲夜、よかったら咲夜の分の弁当も作ってこようか？」

「いいのですか！」

すごい勢いだな、おい。

「あ、ああ。一人分増える位はな。」

「ぜひともお願いします！」

「わかった。」

咲夜の機嫌、直ったな。よかった。よかった。

「純一くん。私には。」

「何故皐月さんにまで作らないといけないんですか？」

「ぶ〜、ぶ〜、私だけのけものなんてひどいぞ〜！」

なんか、唸りでしたが放っておこう。かったるい。

「いいのかい？焔君？」

「……うるさいぞ誠。飯位黙って食べ。」

「はいはい。」

その間の土見ラバーズはというと

「ハイ、稟くんあ〜ん」

「稟様あーん」

「稟君、あ〜ん／＼／＼／」

「ちよ、三人とも？待とうか？」

・・・

そんなこんなでお昼を食べ終わり、話題は先ほどの魔法学の話に移る。

「それにしても、祖の五家の皆や神城くん。それにシアちゃんやネリネちゃんは流石にすごかったわね〜。

みんな、Aランク以上なんてね。」

「そんなことないですよ、それよりも・・・。」

「まあ、稟の魔力が犬並なのはいいとして、「よくない！」杉並の魔力がAAなのは驚いたよ。

「無視するな！」それに、属性も上位属性の闇とはね。」

稟が落ち込んでいるのは測定の後はいつものことらしい。

みんな気にしないで、杉並の魔力に興味が向いている。

芙蓉さんは土見を慰めている。こういう所でポイントを稼いでいるんだな。

「フツ、まあ珍しくはあるが、少ない訳ではあるまい。」

「そうだね。でも朝倉君の魔力は意外だったかな？」

稟と芙蓉さんを見て、どう見ても夫婦だよね〜と思っていたと誠に話をふられた。

「そんなに意外だったか？」

「どうやら、皆意外だったらしい。」

リアさんや皐月先輩も興味があるのか食いついてきた。

「なにに、純一君の魔力そんなに意外な量だったの？」

皐月先輩食いつきすぎです。

後、リアさん。私は興味ありませんよ〜的な顔していますが、しっかり聞き耳たてていますね。

「はい、桜の属性については聞いていたので、計測できなかったのは分かっていたのですが、魔力量がCランクなのは驚きました。」

そう、咲夜が言った通り俺の魔力の量は一般人よりは高いつて程度のCランクなのだ。

「え、そうなのですか？純。」

「ええ、本当ですよ。というよりなんで皆そろって意外な顔をするのかがわからないのですか？」

「いや、だって魔方陣を一瞬で分解していましたよね？」

「ならそれだけの技術と知識があるということですから、当然魔力も・・・と。」

水無月さんそれは早計というものですよ。

「残念ながら、俺の魔力はそこまで高くありませんよ。もし、魔法を正面からぶつけあっていたら火鏡に負けていました。」

俺は基本、気功術による身体強化と桜の魔法によるかく乱を基本とした戦い方をします。魔方阵の分解も対策の一つです。」

魔力が低いですからね。魔力だけに頼った戦い方じゃ直ぐに魔力が底をつきます。」

「それで、あのような戦い方を……。」

うん、みんな納得いったような顔をしているな。」

まあ、実際はもっと手札があるわけだが、基本的な戦法は言った通りだしな。」

魔術は少なくとも表舞台で使う気ないし。」

「あっ！」

そろそろ昼休みが終わろうという時になって、臯月さんが何かを思い出したように声をあげた。」

「咲夜、あの話、純一君にした？」

「？あの話、ですか？……あ！まだでした。」

あの話？なんだ？」

「純君、ゴールデンウィークでお時間取れる日ってありますか？」

「ゴールデンウィーク？……今の所予定は白紙だが？」

「なら、家にこない？お父さんとお母さんが純一君に会いたがっているのよ。」

「俺は構いませんが、なんでまた？」

「私たちにも分かりません。それで、どうですか？」

ん〜、特に予定はないしな。大丈夫か。

「ええ、大丈夫ですよ。」

「それでは、詳しい日付は後ほどお伝えします。」

「ああ……。」

天城家の現頭首が俺になんの用だろう？

俺の名前はそんなに知られていないと思うのだが、まあ、行って見ればわかるか。

周りが何故か騒いでいるが、気にせずその場を後にした。

あ、何か菓子折り持っていった方がいいのか？

第十二話 お昼休みと尋問（後書き）

最初からキャラ出しすぎたな。シャツフルのキャラがほとんど空気ですよ。

第十三話 人工生命体 「出会い」 (前書き)

今回はなんのひねりもない。
文字数も少ない。

第十三話 人工生命体 「出会い」

Side 土見 稟

今、俺は大いに悩んでいる。それは・・・

「うーん、どの子からナンパしようか、どの子もレベルが高いし、どう思う？稟？」

この男とこれからも親友であるべきかいなかについてだ。

「おい！樹、今日は買い物に付き合えて話じゃなかったのか？」

「予定変更。せつかくの休日。そしてこれだけの美女が揃っている。ナンパしないなんて男じゃないよ。」

「人を休日の朝から呼び出して・・・」

「稟、君どうせ暇なんだろう？なら、せつかくの休日だ。

もっと有意義に過ごすべきだよ。」

確かに、暇なのは認める。

家事全般は楓にやってもらっているし、手伝おうとするとやんわりと断られて、休日のお父さんよろしく寝るしかやる事が無いわけだが・・・

「だからといってナンパするのが有意義ってわけじゃないだろ！用が無いなら帰る。」

俺はそう言っただけでその場を立ち去ろうとしたが、ふと、ゲーセンに視線を向けると、一台のキャッチャーマシンの前に薄紫の髪をツインテールにした小柄な少女が立っていた。

耳の長さから察するに魔族の少女のようだ。猫のぬいぐるみがつまんだキャッチャーマシンをじっと見つめている少女はまるで人形のような。

「キャッチャーマシンじゃ幼子を取れないよ？稟。」

まあ、どうしてもというなら2、3人紹介してあげてもいいよ。」

「取れてたまるか、俺をその手の趣味と決めつけるな、樹。」

「いやいや、恥じることじゃないさ。世の中には他人には理解しがたい趣味の人は大勢いるからね。」

稟もその一人というだけの話じゃないか？なに、行き過ぎてさえしまわなければいいんだよ。

楓ちゃんを悲しませないようにね。」

「・・・お前に何をいったところで無駄だろうことはわかってる。好きに言ってくれ。」

「ミスターロリペドフィン！」

「男には戦わなければならない時ってのがあつるもんだよな・・・。」

「自分が言ったことには責任持ちなよ、稟。」

この野郎・・・

「おや？すまなかつたね、稟。前言撤回だ。しっかり取れたみたい

「じゃないか。」

「は？」

樹に聞き返そうとした時シャツの裾が引っ張られた。
振り返ると、さっきの少女だった。

「な、何？」

「りん？」

「確かに、俺は稟だけれど……」

「リ……ネリネ、知ってる……？」

「君、ネリネの知り合いか？」

そう問い返したとき、いきなり抱きつかれた。

「え？おい、ちょっと君！」

「りん……やっと……見つけた……」

そう言ったきり離れようとしなない。

どうすれば……

「稟、俺様達はいつまでも、友達だよ？」

「って、あからさまに距離をとるな！どこへ行く！樹！」

樹のやつ、どっか行きやがった。しかし、このままはまずいな。心なしか周囲の視線が……。

あー！もう！とりあえずネリネの知り合いらしいからな。

魔王様のとこ連れて行くか。

「ネリネ！」

魔王邸の近くまで行くとネリネが門の前を掃き掃除していた。

「あら、稟さま、どうなさったのですか？」

「それが、この子なんだけど……」

そういつて俺の後ろにいる子をネリネに見えるようにしてやった。

「リムちゃん！」

「よかった、やつっぱりネリネの知り合いだったか。」

「はい、そうですが……どうしてそれを？」

「いや、この子が聞いて来たんだ「ネリネ知ってる？」って。」

「そうだったのですか……とりあえずお父様を呼んできますので、稟さまのお宅でお話致しましょう。」

「いや、わざわざ呼ばなくても・・・俺が訪ねればいいだけだろ？」

「それが、少々込み入ったお話になると思いますが、リラックスできるご自宅の方がよろしいかと・・・。」

「うん、込み入ったか・・・。」

ネリネが言うのだからな、おとなしく聞いといた方がいいかな。

「ああ、わかったよ。とりあえずこの子と一緒に家でまっつているよ。リム・・・でよかったか？悪いが一緒に来てくれるか？」

「うん・・・りんがそういうなら・・・。」

「それじゃ、ネリネ、魔王様に伝えておいてくれ。」

「わかりました。すぐ窺うようにいたします。」

「うん。よろしく。」

俺とリムは楓の家に（あくまで芙蓉家だからな）、ネリネは魔王邸に入っていた。

場所は変わって、芙蓉家のリビング。目の前には魔王様。

あれからすぐにネリネの魔王様が訪ねてきた。

「人工生命体？」

「そう、魔界と神界が協力して作り上げた最強の魔力の持ち主、それがこのプリムラさ。」

「この子が・・・ですか？」

そうは見えないけれど・・・

「だから、気をつけておくれよ？最強の魔力は持っているのだけれどね、困ったことに制御がまったくできない。」

暴発したら日本位なら消滅するよ。」

「歩く最終兵器ですか・・・。」

かなり、物騒だよな。

「でも、なんでまた人工生命体なんて。」

「とある魔法を研究するためにね、どうしても強大な魔力の持ち主が必要なんだよ。」

それで、皆違った方法によるものではあったんだけど人工生命体は全部で3体作られた。

過去の2体はその強大な魔力を制御しきれずに終わってしまった・・・。」

つまり死んだ・・・

「でも、そのプリムラちゃんがなんで人間界に？」

確かに楓の言う通りだ。それだけ重要な存在ならなぜ一人であん

なとところに……。

「それは、本人に聞いてみた方が早いかな。プリムラ、なぜ人間界に来たんだい？」

「……りん^{さん}に会いに来た。どんな人なのか会ってみたかった。ずっと……話きいてたから……」

「リムちゃん……。」

お父様、結局リムちゃんをどうするのですか？」

「うん、そうだね……。」

「……ここにいる。」

「え？」

「りんがいるここにいます。ここにいたい。」

「……そうか。稟ちゃん！義妹を一人育ててみないかい？なに、種族の違いなんてきにしない！」

血のつながらない妹^{さん}ってつことで周知の事実。

世間様公認の義妹^{さん}ができあがりだ！」

「いや、義妹^{さん}って……。無理がありますよ。」

それに、俺自身芙蓉^{さん}家の居候^{さん}ですから。」

「私は稟君^{さん}が良ければ、良いですよ？」

楓^{さん}、あなたはそれで……。いいんですよ、はい。

「さあ、あとは稟ちゃんしただいだよ?」

うーん、どうするかな……。」「ジ」「ジ」「はあ、仕方ない。
ネリネやプリムラにそんな目で見られたらな。

「わかりました。お預かりいたしましょう。」

「そうか!稟ちゃんならそう言ってくれればいいよ。よろしく頼むね!」

「稟様、リムちゃんのことよろしくお願いいたします。」

「りん……。よろしく。」

「ああ、よろしく。プリムラ。」

「よろしくお願いしますね。リムちゃん。」

こうして、同居人が一人増えたのだった。

第十三話 人工生命体 「出会い」 (後書き)

今回から当分、稟のターン。

第十四話 実験の終わり（前書き）

ほとんど会話と説明になってしまった。

第十四話 実験の終わり

Side 土見 稟

「土見君！土見君！幼女をナンパして、お兄ちゃんって呼ばせてるって本当？」

休み明けの朝、教室に入って掛けられた第一声がこれだ。

「そんな訳あるか！誰から聞いた！？」

「緑葉君が言いふらしてたけど？」

「あの野郎・・・」

後で必ず殴る！

「は・・・」

「どうした？稟？溜息なんかついて、髪の毛が逃げるぞ？」

「それをいうなら幸せですよ？純くん。」

思わず溜息をついて席に座ると純一と咲夜さんが話かけてきた。

この二人は相変わらず仲がよさそうだ。そういえばアルティン先輩とも仲が良かったよな、純一。

もしかして、俺の仲間か？

「どうした？そんな仲間を見るような目をして。」

俺は、幼女にメイド服着せて喜ぶような趣味はないぞ?」

「あれ?私はネコミミをかぶせて「にゃ〜」って鳴かせてるって聞きましたよ?」

「なんだ!その噂は!事実無根だ!誰から聞いた!？」

「「樹(緑葉さん)。「」」

・・・よし、殺そう。今の俺なら平気で人一人殺せる。

「おはようみんな〜!おや?稟どうしたんだい?そんな暗い笑みを浮かべて。」

「・・・樹、何か言い残すことはないか?」

「ま、まっしてくれ稟。何だい?シアちゃんみたいにイスなんか振りかぶって?」

俺様は神王様みたいに丈夫じゃないからただじゃすまなくなるんだが?」

「大丈夫。ギャグ補正で死にはしないから・・・」

「ちょ、待ってくれ稟、話し合えばわかる!」

「フッフ、樹・・・問答無用!」

「ギャ〜!」

ふ〜、すっきりした。おや?皆さん何に怯えているのかな?はっ

はっはっ

「このネタで稟をからかうのはもうやめよう。」

「「「うん）はい、そうですね（・・・。「。「」

皆の心が一つになった所で教室の扉が開き紅女史が入って来た。

「全員席につけー！ん？緑葉はどうした？

なんか口から泡ふいてるが・・・。」

「問題無いです。紅女史。樹はいつもこんなです。」

「む、言われてみればそうだな・・・。

では出席をとるぞ・・・。」

一同！緑葉 樹に合唱！ ちゅん！

そして昼休み。

説明中・・・説明中・・・

「なぐんだそう言うことだったのね。」

いまここには、いつものメンツが揃っている。そこでまとめて説明した。

もちろん人工生命体であることは伏せて。なにかと問題があるだろうからな。

「……………」

「?どうしました純?黙りこくって?」

そういえば、純一の奴説明の途中から急に黙ったままだな。
どうしたんだ?

「……稟、そのお前が預かっているネリネの親戚って子に会わせてもらえるか?」

「え……?」

「純、まさか……?」

「純君!そういう子が好みなんですか!?!」

純一、まさかお前……

「ちょっと待て!リアさん、咲夜!後、他の皆もそんな目で俺を見るな!」

お前らが考えているようなことじゃない!」

「では、何故リムちゃんに?」

ネリネが心配そうに尋ねた。

「いや、たいした意味はないよ。」

ただ、稟を骨抜きにした子がどんな子か一目見たくてね?」

「待て！誰も骨抜きになんかされてない！」

「でも稟君、いつもはなかなか起きないのに、今日リムちゃんが起こしにいっいたらすんなり起きましたよね？」

「やっぱり、稟ちゃん・・・」

「ちょ、亜沙先輩？違いますからね？あれはプリムラが・・・」

「プリムラが？（リムちゃんが？）」

「・・・え」と。

言えない。馬乗りになって起こされたなんて言ったらどんな事になるか・・・。

楓も真似しそうで・・・。

「それで、どうしたのですか？土見君？」

「正直に白状した方が楽だぜ？」

神城や火鏡まで・・・

「そ、そんなことより！純一！プリムラに会いたいんだな？」

「ん？あ、ああ・・・」

「なら、今日の放課後でいいか？」

「ああ、頼む。」

「わかった。」

（ ）（話そらしたな）（ ）

「だったら、皆でいくのですよー！」

「あゝ、ごめんなさい。私、家の用事で今日は……。」

「俺も同じく。」

「私も……。」

祖の五家の面々はなにやら用事があるらしい。

みんな揃ってということは五家でなにかしらあるのだろう。
となると、残りは……

「リアさんはどうします？」

「私も残念ながら今日は用事が……。」

どうやらアルティン先輩も用事があるらしい。

「亜沙先輩とカレハ先輩、それにツボミちゃんは？」

「ぼくとカレハも参加するよ！ツボミちゃんは……。」

「すみません。残念ながら友達と約束がありました。」

となると、俺、楓は当たり前、純一、シア、ネリネ、亜沙先輩、

カレハ先輩、樹、麻弓ってところか。杉並は今日みていないな。純一に聞いたら何かしらミステリーでも見つけたか、企んでいるんだろうってことだ。

そして放課後・・・

「この子がプリムラだ。プリムラ皆に挨拶して。」

「・・・」

ペコ・・・

今は芙蓉家でプリムラを皆に紹介している。しかし、プリムラは俺の後ろからでようとしない。

人見しりだからな。

「この子がプリムラか・・・。」

よろしく。俺は朝倉 純一だ。」

「・・・純一？」

「そつだ。これはお近づきの印だ。」

そういつて純一がプリムラの前に手のひらの出し、一度握り、もう一度手のひら出すと・・・

ポン！

桜餅が手のひらの上にあった。

「ほら、やるよ。」

プリムラはそれを受け取り、匂いを嗅いだりした後、一口食べた。

「・・・おいしい。」

「そうか、よかった。」

そういつてプリムラの頭を撫でた。心なしかプリムラが嬉しそう
だ。

しかし、プリムラがこんなに早く懐くとは。

「凄いです。リムちゃんがこんなに早く懐くなんて・・・。稟君と
同じですね。」

楓も驚いている。楓は一日かかったからな。

プリムラと出会ったのは一昨日だったりする。

「甘いお菓子で女の子を釣る・・・、朝倉君、手慣れてるわね。」

「純一、ぜひその手品を俺様にも教えてくれ！いや、教えてくださ
い！」

「麻弓、誤解を招くことを言つな。樹、悪いがこれは門外不出だ。」

純一も二人の扱いに慣れてきたみたいだな。

「それで、純一。会いたがっていた見たいただが、会ってどうだ？」

理由は分からないが、純一が一番気にしていたので気になって聞いてみた。

「ん？ああ、そうだな……。俺が気にしていたのは、ネリネの親戚っていうから魔力も結構高いだろうと思ってな。

体がまだ出来上がっていない内はどうしても魔力が体に負担を掛けてしまうんだ。聞いた話だと幼いって言うていたから気になったのだが、見たところ大丈夫なようだ。

まあ、制御できるかどうかは別の話だけだな。」

どうやら純一はプリムラの体を心配していたらしい。

それにしても少し様子がおかしい気もするが……。

「さて、プリムラの様子も確認できたことだし、俺はこれでお暇するよ。」

用事もできたことだしな。」

「用事？」

「ああ。ネリネ、魔王様は今家か？」

「えーと、今日は多分シアちゃんのお家の方でおじさまとお話していると思いますが……。」

「そうか、ありがとう。それじゃ、またな。プリムラ。」

「……また、純一。」

そう言って純一は帰っていった。
どうやら魔王様に用事があるみたいだが、どうしたんだ？

「さて、朝倉君は帰っちゃったけど、リムちゃんの歓迎会と行くところじゃないの!」

「いいわね!じゃあ、料理は私とカレハに任せて!楓台所借りるわよ?」

「あ、亜沙先輩私も手伝います。」

「あ、じゃあ私も手伝うっす!」

いきなりプリムラの歓迎会が決まったようだ。

まあ、皆プリムラのことを歓迎してくれているようで良かったよ。

良かったな。プリムラ。

Side 朝倉 純一

「どういうことだ。ユーストマ、フォーベシー。」

俺は今、神王の家で二人と対面している。

「どういうこととは一体何のことだい?純ちゃん?」

「とぼけるな。稟の家にいるあのプリムラって子だ。」

なんだあの異常な魔力は。それにあの年であの魔力に耐える肉体

だと？

そこらの魔族じゃないだろ？

・・・いくら魔王の血縁だったとしてもだ。」

そう、あの魔力はありえない。あれが暴発しただけで、一国どころか、小さな星なら軽く吹き飛ばすぞ《・・・・・・・・・・・・・・・・》。

そんな魔力普通じゃありえない。

それこそ、真正の神や魔王、真祖の吸血鬼のような古代の化物並だろ。

「流石だね。純ちゃん。・・・どうする神ちゃん？」

「うゝむ、純殿だから問題はないと思うが、これは重要機密だからな・・・。」

「稟や芙蓉さんには話したんだろ？」

それに芙蓉家でプリムラが暮らすとなれば必然的にプリムラも護衛対象に入るだろ？

対象について何も知らないと護衛としてはやりづらいたが？」

そう。護衛としては対象について出来るだけ知っておかなければならない。でないと、どんな行動をとるか、どんな敵に狙われているか想定できない上に対策も立てにくい。

また、複数人を護衛する場合、優先順位を付ける必要がある。もちろん全員護衛対象であることは間違いないが、例えば、稟とシアが別々な場所で襲われた時、どちらがより優先か決めていないと助けるのに出遅れてしまう。

最悪どちらも・・・といったことだってあり得てしまうのだ。

「そうだね。護衛を頼んでいる以上それは重要だね。神ちゃん？」

「ああ、そうだな。マー坊。純殿、実はだな……。」

そうして聞いた話は随分ふざけた内容だった。

プリムラは人工生命体。ある魔法の研究のために生み出された3体目。

前の2体は死亡。

人間界に来た理由は稟に会うため。

ほんとふざけている。

「ある魔法っていうのは？」

「それは……。」

「……話せ。」

「死者を蘇らせる魔法だ。」

「なに？」

「死者を蘇らせる魔法だよ。死者蘇生といったほうがいいかい？」

「……なぜそんなものを？」

「……それは、俺達のエゴだな。」

神族や魔族についても、神や悪魔の血を引いているっただけで、伝説に語られるようなことは全てとは言わないが、ほとんどできない。い。」

「しかし、神族や魔族と名乗る以上これはできるべきじゃないか・
・と話あつた結果、死者蘇生の魔法の研究が進められた。」

「その研究の中で死者蘇生のために莫大な魔力が必要と分かつてな
それこそ真正の神や魔王と同等以上の。」

「そして、その魔力を得るためにまず、強化といった方法をとつた
けど、魔力が暴発。失敗に終わった。次にクローンといった方法
をとつたよ。魔力が暴発したのは普通の魔族には耐えきれない位、
魔力を強化したからといった結論になつてね。なら、元から高い魔
力を有する魔族のクローンなら大丈夫なのではつてことになつてね。
でも、クローンは寿命が短い。人族の科学技術でもそうだろうけ
ど、僕達の魔法技術でも同じだったんだ。無理に成長を促進させた
からね。そして失敗に終わった。」

そして三体目、あの子は偶然の産物なんだよ。研究していった結
果、無から生まれたんだ。そして莫大な魔力を持ち、始めから莫大
な魔力を持っていたせいかどうかはわからないが、肉体はその魔力
に耐えている。

プリムラと同じ存在は作ろうと思つて作れないね。」

「・・・そうですか。そして今にいたると。」

「おう、俺達のエゴのため死者蘇生の魔法を求め、たくさんの犠牲
を出しちまつた。」

だからこそ、後戻りはできない。」

「開門の後は祖の五家や魔法協会にも協力してもらっているよ。
と、いつても本当に上のぐく一部のものしか知らないけどね。」

「・・・そうか。だいたいお前らの事情はわかった。」

自己満足のために多くの犠牲をだして、あまつさえ未だに死者蘇生という夢にとらわれている。

なまじ、魔法があるからか……。」

「夢は人を狂わす」か……。

確かにその通りだな……。

「確かに、自己満足なのは認めるけど、夢じゃないよ。なぜなら、無から生まれたのがプリムラだからね。命の創造を可能にしたんだ。死者蘇生だって……。」

「いいや、無理だ。いくらプリムラの魔力が高かろうが、魔法じゃ無理なんだよ。」

「それはどういっつった？純殿？」

「おまえらも知ってのとおり、魔法はあくまで「世界の法則」の中でしか使用できない。」

「どんなに魔力が高くても魔法じゃ無理なんだよ。」

「では、魔法じゃなければいいんだね？例えば……そう、魔術とか。」

「「魔術」を知っていたのか？」

「魔法協会の長老や天城のじいさんに聞いたんだ。」

ちっ、確かにあのじいどもなら知っていてもおかしくはないか。

魔術とは簡単な話、法則を無視することができる技だ。

例えば、相反する属性、氷と炎を融合させたり、合わせてはいけない属性、雷と闇を融合させたりな。もちろん魔法でも似たようなことができるが、結果が違う。

例えば、魔法で氷と炎を融合させると、ただの魔力の塊、いわゆる無属性つてのになる。(この無つてのは極地属性の有と無とは違う。) また、闇と雷の様に合わせてはいけない属性つてのがある。これは、魔力そのものを侵食してしまうからだ。といっても魔法ならさして問題はない。

例えば、俺との戦闘で火鏡が使おうとした地獄ヘル・ブレイムの獄炎は闇と炎の合成で属性は二つで威力が増加しているだけで、その魔法を受けても魔力に影響はない。

この魔力の浸食は魔力を過剰に増加させたりすることだが、それは世界の制限内の事象になるためその魔法を受けたものの魔力に直接の影響はない。

だが魔術にはその制限がないため魔力へ影響を及ぼすことができる。

しかし、魔術には欠点がある。一つはこれが反則であること。つまり、法則内なら魔法の方がより威力は高く魔力の効率もいい。同じ属性魔法を同じ魔力でうちあつたら魔術は負ける。

二つ目に術者の技量に左右されること。魔術の式を構成する技術や知識、魔力に左右される。まあ、これは魔法にも言える訳だが、魔法は元々ある呪文や術式を覚えればいいが、魔術はそれらを元にしたリ、最初から式を組む必要があり、より多くの知識と技量が必要になる。

まあ、自分で魔法を開発する者もいるけどな。そいつらは魔術師に近いが遠い。知識は凄いがあくまで法則内の知識だからな。そこから逸脱することができないんだよな。大抵の場合。

話がそれだが、最強にはなれないが反則を得ることができる。
それが魔術だ。

「・・・いや、それでも、魔術でも死者の蘇生は無理だ。」

「その根拠は？」

「生き物にはそれを構成する三つの要素がある。

肉体・精神・魂、どれか一つでも欠けては命は成り立たない。

そしてそれぞれ、気力・魔力・霊力といった力が対応している。

このバランスは人それぞれで、もしそのバランスを崩せば病気になるったり、下手したら死ぬ。

プリムラが生まれたのが話の通りだとすると、本当に奇跡だよ。

だが、そのプリムラの魔力を使って死者蘇生はできない。

魔力は精神しか司っていないからな。」

「つまり、その気力と魂をどうにかすれば・・・」

「まだ話は終わっていない。いいか、魔術つてのは「世界の法則」

に反する行為だ。それを行使しようとすれば「世界からの制限」が付きまとう。

これを回避するために魔術を使用する際は様々な対策を行う。術そのものにだったり、その場所にだったり、術者本人にだったりな行使しようとする魔術が大きければそれだけ反動も大きい。

死者の蘇生なんてそれこそ使用者が死ぬだけだったらまだ良い方って位の反動だろう。

それを、あんな小さな子に背をわせる気か？そもそも、人工生命体、命を人工的に作る研究は禁じられていたはずだが？

なにか？神おまえらや魔王なら許されるとも？」

これは、世間一般の常識でもある。かつて人間界でも命を作る研究は行われていた。いわゆる人造生命体ホムンクルスだな。

始めの頃は骨格や内臓は機械でできていたが、化学も発展する様になり、後にはほとんど普通の人間と同じになっている。

しかし、人より強靱な肉体、優れた容姿などは世間の嫉妬と反感を買った。また、ホムンクルスは人ではないと主張し奴隷の様に扱い、酷い時には精のはけ口として扱われたり、ストレスの発散の道具として扱われ、殺されたものもいた。

結果、ホムンクルスが暴動を起こし人間と殺し合い、今ではホムンクルスの研究を含む命の研究は禁止されている。

まあ、クローン技術など化学的、医療的なアプローチは制限や監視は着くが今でも行われている。

「それは……………」

「それにだ、たとえ死者の蘇生に成功したとして、どうする？発表するのか？それこそ暴動が起きるぞ？ おまえらはそれをわかっていてやっているのか？犠牲者がだから止まらない？ふざけるな！これから更に犠牲者を増やす気か？そしてあの子に全ての責任を押し付ける気か？命を背負わせる気か！？」

「……………」

「止まらないっていうなら、俺が止めてやるよ。」

「どうやってだい？」

「とりあえず研究所、データごと吹き飛ばす。」

その後、この研究を推進する奴らと片っ端からお話するだけだ。」

もちろんお話ですまなかつた場合は実力行使だけだな。

「俺達がそれをさせるとでも？」

「フツお前達で俺を止められるとでも？」

こいつらは何もわかつちやいない。

「舐められたものだね。僕たちは魔王と神王だよ？できないと？」

「それはこつちの台詞だ。さっきの会話で気づかなかったのか？」

俺は、「魔術師」だ！

お前らごときに負ける理由はない！」

そう言つて俺は、周囲に気づかれないうちに結界を張ると同時に力を解放した。

二人の目には、金髪、紅い左眼と蒼い右眼をした俺が映っているだろう。

「純ちゃん、その姿は・・・」

二人とも驚いているようだ。そもそもこの姿をこいつらに見せるのは初めてだからな。

「それに、なんだその魔力は・・・」

純殿の魔力はCランクじゃ・・・」

「まあ、この姿は簡単にいえば魔術師モードってやつだよ。

後、俺の魔力は確かにCランクだ。封印解放してもBランクそこそこだな。」

「じゃあ、その魔力はなんだっていうんだい？」

「プリムラと同等かそれ以上じゃね〜か！」

「それは、単に俺が周囲から魔力を集めているだけだ。この状態の俺は世界の魔力を操作できるからな。ちなみにこの姿は魔力が活性化しているから婆さんの血が強く出ているんだよ。」

そう、これが俺の力。桜の魔法もあの剣も結局は婆さんから継いだ力だ。

だが、これは魔術と同様、俺自身の力だ。俺がもぎ取り、手にした。まあ、色々条件はあるけどな。

一つは魔力の流れを把握しなければならないうってことだ。特に生物の魔力は人によって異なる上に時々刻々と変るからな。この左眼のおかげで把握しやすくなっただけだな。

二つは集中力を結構使うってことだ。戦闘しながらだと把握するのに時間がかかる。まあ、そこらを漂っている魔力は簡単に操作できるけどな。

三つこの力は精霊達、世界に帰順する存在に嫌われている。おかげで精霊魔法は使えないんだよ。まあ、それでも反則な能力ではあるがな。

「つまり、俺やマー坊じゃ・・・」

「ああ、魔法に頼っている以上、この状態の俺には勝てない。絶対とは言わないがな。」

俺が二人の魔力を完全に把握する前だったら可能性はあったかもしれないがな。

「は〜、分かったよ。お手上げた。」

「・・・結構あっさり引き下がるな。」

「そりゃあね。そんな力を見せつけられちゃあね。」

それに、僕や神ちゃんもこれでいいとは思っていなかったしね。」

「そうだな。上の奴らの説得は俺達に任せてくれ。」

「・・・いいのか？」

「それが僕達にできる責任の取り方ってやつだよ。後の事は任せてくれたまえ。」

・・・といたいけど、多分全員の説得は無理かな。

表向きはうなずいても裏で何かしらちよっかい掛けてくると思う。

「

「わかった。そいつらは俺が相手しよう。ここまで関わった以上知らないふりはしない。」

プリムラも守ってやるさ。」

「すまん。純殿。頼む。」

「よろしくお願いするよ。純ちゃん。」

「いや、結局のところ、俺の我儘だからな。こちらこそよろしく頼む。」

これで、プリムラの件は大丈夫か？まあ、プリムラの魔力制御はのんびりでいいだろ。

後は俺や親バカ達が頑張れば済む話だからな。かったるい。

Side 土見 稟

あのはは大変だった。誰かがお酒を持ってきてそれを飲んだ楓が暴走して、周りもそれを煽って・・・、疲れた。

今は皆帰った後だ。楓は酔って寝ている。後片づけは亜沙先輩とカレハ先輩がやってくれた。

「プリムラ、疲れただろ？」

あれだけの騒ぎに巻き込まれたからな。

「・・・少し。」

「そうか・・・。」

「でも・・・楽しかった。」

「そうか。よかったな。」

「・・・うん。」

どうやらプリムラも楽しんでくれたようだ。

良かった。

第十四話 実験の終わり（後書き）

今回は純一サイドがメインになってしまいました。
次はまた稟サイドに戻ります。

第十五話 土見 稟 と裏シア（前書き）

裏シア出すの早すぎた。というか、早まった。

第十五話 土見 稟 と裏シア

Side 土見 稟

「・・・君、・・・り、・・・くん、稟君、朝ですよ？」

ん？楓か？後5分・・・。

「・・・起きないですね。やっぱりリムちゃんの言っていた方法で・・・。」

・・・プリムラがなんだって・・・。

「すみません稟君。えい！」

ポス！

「え？」

「おはようございます稟君。」

「おはようございます楓さん。ところで、なんでわたくしの上に乗っているのでしょうか。」

「あ、重くないですか？」

「あ、ああそれは全然・・・ってそっじゃなくて、何故このような起こし方を？」

そっだ、いつもならこんな起こし方はしないはず。

「それは、その、リムちゃんから起こし方をお聞きしまして……。」

「そうか、プリムラが……。」

原因はプリムラか……。予想はしていたが、本当にやるとは、最近アグレッシブですね楓さん。

「はい……。」

「……ところで、降りてくれると助かるのですが……。」

「あ、うーうーごめんなさーい！」

ドタドタドタ！

楓はリビングに駆けていったようだ。

「これから毎朝あの起こし方になるのか……。」

仰向けには寝ないようによしよう。男性諸君ならわかるよな！

「おはよ〜。」

「おはよび〜いね〜ます。」

俺はいつも通り楓とシア、ネリネと一緒に登校した。

「よう！稟。プリムラはどうしてる？」

「純一か。プリムラなら家で留守番しているよ。」

「おはようございます。お二人とも。プリムラさんはお一人でお留守番ですか？」

「おはようございます。咲夜ちゃん。いえ、実際は神王様や魔王様がお相手をしてくださっています。」

「そうですか。それならよかったです。」

「「??.??.」

どうやら、今日は天城さんがプリムラを気にしているみたいだ。どうしたのだろうか？

「咲夜さん。リムちゃんがどうかいたしましたか？」

ネリネも気になっているみたいだ。プリムラは妹みたいな存在だからだろう。

「いえ、ただ、お一人だと寂しいかなと思ったので……。」

「そうでしたか。リムちゃんを心配してくださってありがとうございます。」

「どうやら、プリムラが寂しい思いをしていないか心配してくれてい

たらしい。水無月さんや火鏡も安心した顔になっていた。純一はそれを見てなにか考えているようだ……。

「おはよう。土見君。昨日は付き合えなくて悪かったね。プリムラちゃんは元気にしてるかい？」

「神城か。いや、気にしなくていいよ。プリムラは元気にしてるから、機会があったら紹介する。」

「うん。お願いするよ。」

神城も昨日は用事があってこれなかった。わざわざ謝らなくてもいいのにな。そこが女子に人気の秘訣なのかもな。

「ところで、土見よ。」

「なんだ、杉並。」

相変わらずいきなりだな。まあ、最近は慣れてきたけど。

「こんな写真が撮れたのだが、どう思う？」

「な！」

そこには今朝の光景（楓が俺の上でマウントポジションを取っている図）が写されていた。

「お前、これをどおやって……。」

「企業秘密だ。」

クツどうやって撮ったんだ？盗撮か？

「で？なにが目的だ。」

「何、最近刺激が足りないと思わないか？なので、刺激を用意させてもらった。」

「は？」

ゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！！

なんだ！？この音は！？

バン！

勢いよく扉が開きそこに立っていたのは……。

「我らは非公認ファンクラブKKKキョウトキョウトカキエビちゃん。土見 稟！貴様に制裁を加えに来た！」

「なんでだ！」

「これを見て言い逃れができるとでも？」

ファンクラブのリーダーらしき人物が出してきたのはさっき杉並に見せられた写真と同じものだった。

「なぜこれを！？」

「掲示板に貼ってあった！」

「杉並！」

「フツ頑張れ土見。」

「タイムリミットは紅女史が来るまでだな。それまでに戻ってこいよ。」

純一の奴、人ごとだと思いやがって……。

「くっ！」

KKKが現れた。どうする？

説得する。

たたかう。

にげる。

「逃げるに決まっているだろう！」

「ちっ、窓から逃げたぞ！追え！」

ウオー！

ちくしよー！

……

「いったな。」

「ああ。」

「ところで純君？」

「なんだ？」

「杉並君からこんな写真をもらったんですが？」

そこにあつたのは純一とリーアが抱き合っている写真だった。

「は？いや、これは……。」

「説明していただけますか？」

「はい……。」

正座して説明することになった純一であった。

「杉並！」

そして放課後。

「今日は杉並のせいで散々な目にあつた。」

あの後、どうにかKKKを撒いて教室に戻れたが、休み時間のたびに追いかけられ、昼休みにはシアやネリネのファンクラブまで参加しているし。疲れた。そう言えば純一も何故か何時もの5割増しで

かったるそうにしていたな。なにかあったのか？

「……ん？シア？」

帰宅の途中ふと前を見るとシアの後ろ姿が見えた。

「今日は用事があるっていったよな……。」

今日は皆何かしら用事があるらしく珍しく一人で帰っているところだった。

「……あれは、シアだったよな？」

気になって追いかけてみると、見失ってしまった。呼びかけたのに返事がなかったけど、気付かなかったのか、他人の空似か……。

「はじめまして、かな？」

いきなり声を掛けられ、声のした方を向くと、シアが塀の上に座っていた。

「シア？」

「はじめましてって言うのも変か、こんにちはの方がいいかな。では改めて、こんにちは。」

いや、シアじゃない……。まだ知り合って日は浅いがシアはこんな笑い方はしない。
誰だ？

「おまえは一体誰だ？」

「うーん？誰だと聞かれてもね？名前なんてないし、裏シアとか偽シアとか好きに呼んで。」

裏？偽？なんなんだいったい。

「それにしても良く分かったわね。わたしがシアじゃないって。純一見たく魂が視える訳じゃないんでしょ？」

「生憎、そんな能力は持ち合わせていない……。まで、純一はおまえの事知っているのか？」

「ええ、純一が神王様を尋ねに家に来たことがあってね。その時一目で気づかれちゃった。」

純一は知っていたのか……。これは後で聞かないとな。

「そういうことで、わたしのことを知っているのはあなたで3人目よ。」

「3人目？俺と純一と後……。」

「もちろんシア本人。正確には家族は皆わたしの事を知っている。でもない事にしている。生まれるはずだったけど生まれなかった存在それがわたし。わたしがいると都合が悪いから……。」

どういうことだ？駄目だ、うまくまとまらない。

「そうそう、わたしのことをシアに聞くのはお勧めしないわ。これ

はシアが決めた事でもあるから。」

「・・・だったら何故で来たんだ？」

「・・・それは、確かに、予定より早くあなたと接触しちゃったけど、どちらにしろ、あなたは知る必要があると思ったから。それに、あの子は認められたのにわたしは・・・」

最後の方は声が小さく聞き取れなかった。

「?????」

「とにかく、今日はそれだけ。またね、稟。」

裏シアは立ち去っていった・・・。

俺は、立ち尽くすことしかできずにいた。

「なんだ？話って？」

あの後俺は純一に電話し、話を聞くために呼びだした。これは直接話をした方がいいと思ったからだ。

「ああ、わざわざ悪い。」

ここは近くにある小さな公園。昔よく遊んだ思い出深い場所だ。

「いって、ジュースでも奢ってくれれば。」

「すまない。シアのことなんだが……。」

「シアの?」

「ああ。純一は知っていたのか?もう一人のシアのこと?」

「……あつたのか?」

「ああ。」

「「……」」

純一は少し考えこんでいるようだった。

「ああ、この町に引越して来た時に神王様の家に挨拶にいったんだよ。その時始めてシアとあつたわけだが、俺の右眼は魂が視えるからな。それでだ。ちなみに神王様の家に挨拶にいったのは個人的に知り合いだったからだ。」

純一の眼のことは裏シアから聞いていたが、まさか神王様と知り合いだったとはな。何者だ?こいつ……。

「そうか、なら純一は裏シアについてそんなに知らないか……。」

「裏シア?」

「もう一人のシアのことだ。」

「言い得て妙だな。確かに、そんなに知らないがある程度の予想は

着くぞ。」

「本当か？なら……。」

「教える前に一つ聞く。お前に覚悟はあるか？」

「覚悟？」

「これはシア自身が秘密にしていることだし、神王様も秘密にしていることだ。下手したら神界を揺るがす問題になるかもしれない。おまえはそれを見届ける覚悟があるか？」

「……覚悟と言われてもよくわからないし、これがどれだけの問題なのかも良くわかっちゃいない。でも、シアが悩んでいるなら助けてやりたい。俺ができることならしてやりたいんだ。それじゃだめなのか？」

「おまえにできることは何もないかもしれないぞ？」

「それでもだ。俺じゃ根本的な解決はできないかもしれないが、話を聞く位ならできると思うし。シアが何を考えているかなんてわからないけど、少なくとも一人で悩んで、周囲を無視して勝手に出した結論じゃ納得できないから。」

「そうだ、それじゃ、昔の俺と同じだ。勝手に結論を出して、楓を助けるために嘘をつく決めて……。結局その嘘が楓を今でも苦しめる事になってしまって……。そんな思いをさせたくないから、だから……。」

「頼む。純一。教えて欲しい。」

「・・・はぐ。わかったよ。といつてもあくまで俺の予想でしかないがな。まず、裏シア、彼女はシアの双子として生まれるはずだった魂の片割れだ。」

「双子？でもなんで？シアは一人っ子じゃ？」

「言っただろ？生まれるはずだったって。つまり、生まれてこなかったってことだ。」

「いったいどういう・・・」

「生まれる前に性別を確認できるのと同じように、神族か魔族かも判別できる。お腹の中にいる時に、彼女は魔族と判別された。」

「魔族？」

「ああ、別に不思議なことじゃないさ。シアの母親、サイネリアさんは魔王様の妹、つまり魔族だ。魔族の子が生まれるのは不思議じゃない。」

「でも、それといたいたいなんの関係が？魔族であることがそんなに問題なのか？」

「ああ、人族や普通の神族、魔族との話だったら問題はなかっただろうさ。だが、神王の娘、神界の王族の血筋だつてことが問題だったんだ。神界と魔界、今では友好関係を築いているが、昔は互いに争っていたのは歴史でならつただろ？」

「ああ。」

「そのしがらみは中々拭いきれないのだよ。特に王家ってものはな。」

「そんなこと、そんなことのために彼女は否定されたっていうのか！」

「怒るのはわかる。だが、彼女を神王の娘と認めたら下手したら内乱が起こる可能性もあった。確かに父親としては最低のことだが、民を統べる王としては正しい判断だったとも思う。神王は神王で神界の人々の命を背負っているんだからな。」

「それは、でも……。」

「ま、無理に納得する必要はないさ。後これはあくまで、俺の想像だ。まあ、それほど間違っではないと思うがな。で、どうする？ 神界に殴りこみにでも行くか？」

「いや、少し考えたい。純一はどうするんだ？」

「俺？ どうもしないさ。結局は他人事だよ。まあ、一つアドバイス。彼女、裏シアは自分がなにも持っていないと思っている。まあ、実際そうなのだろう。いないものとされてきたんだ。誰かが何かを与えるようなことはなっかたろう。さて、そんな彼女にお前なら何を与えてやれる？」

「俺なら……。」

「フツ、悩め、若人。じゃあな。」

純一は去っていった。

俺が、彼女にしてやれること……、なんだろうな……。

Side 朝倉 純一

「よかつたのか？朝倉？」

「杉並か、何のことだ？」

「土見に彼女のことを話したことだ。早すぎたのではないか？」

そうかもしれないな。だが……

「裏シアが稟に接触するのも予想より早かつたんだ仕方ないだろ。それに、稟の言っていたことにも一理あるしな。」

「「一人で勝手に悩んで出した結果じゃ納得できない」か……。確かにその通りではあるな。」

ああ、確かに結論を出すのは自分自身だが、誰かに頼って駄目な訳ではない。

「さて、杉並、首尾の程はどうだ？」

「ああ、だいたいの準備は整った。後は本人次第だ。」

「ま、そつちは稟が何とかするだろう。俺達はその後のことを考えればいいさ。」

がんばれよ、稟……。

そして、ゴールデンウィークへ突入。

第十五話 土見 稟 と裏シア（後書き）

まだ、ゴールデンウィーク。なんか、好感度の上がりかたが半端ない気がする。

特に稟サイド。展開早いか？

第十六話 朝倉 純一 天城家へ訪問す（前書き）

天城家の設定が曖昧なのでいづれなおします。

第十六話 朝倉 純一 天城家へ訪問す

Side 朝倉 純一

「ここが、咲夜の家か・・・。」

そう、俺は今、天城家に来ている。ゴールデンウィークに約束していたからだが、しかし、でかいな。この門。神王家並かそれ以上だな。つーか、門番みたいない人いるし。流石、天城家。つとこんなことしている暇はないな。

「あの、すみません。」

「なんだ？君は？」

「私は天守学園、高等部一年の朝倉 純一といます。咲夜さんに呼ばれて来たのですが？」

「咲夜様に？ちよと待て。」

そう言っただけでなにか確認しているようだ。

「確認した。確かに朝倉 純一というものが訪ねてくる旨はきいている。だが、君は本当にその朝倉 純一なのか？」

「かったるい、どうすれば証明になる？身分証でも見せればいいのか？」

「むーなんだ、目上の者に対してその口のきき方は！」

あー、この人面倒くさい。咲夜を電話で呼ぼう。

「もしもし、咲夜、俺だ。そうそう、咲夜の家の方の前まで来ているんだが門番のおっさんが通してくれなくてさ。そうか？すまんないや、気にするな。じゃ、待ってる。」

「貴様、人の話を最後まで……。」

なんか怒っているな。この人

「純君お待たせしました。」

早！咲夜さん早すぎですよ。

「咲夜様！どうしたのですか？」

「どうしたもこうしたも、言っておきましたよね？朝倉 純一君が訪ねてきたらお通ししてくださいって。」

「ですが、この者がそうだという証拠が……。」

「渡していた写真はどうしたのですか？」

「写真ですか？はて？そのようなものをいただいた覚えは……。」

「……ぶつ、クククツ、ハハハハハハハハ！！！！！！！！！」

なんか急にもう一人の門番が笑いだした。ちなみに、一人はハゲ「ハゲではない！」「心の声に突っ込むな！」にグラサン。もう一人

は金髪に眼帯だ。金髪の方が笑いだしていた。

「その、写真つてのはこれのことか？」

そう言つて、金髪は俺の写真を取りだした。ん？この写真隠し撮りか？俺の目線がカメラに向いてないな。

「キヤー！」

咲夜が急に声を上げ、金髪から写真を奪いとつた。

「なに純君にも見せているんですか、乾！」

どうやら金髪は乾こゑつていうらしい。

「貴様、それを持っていて何故俺に教えなかった！」

「いやだつて牛頭の旦那の反応が面白かつたから。」

ハゲ「ハゲではない！」「・・・」は牛頭ウシカというらしい。

「貴様！」

「もう、二人ともその辺にしてください！」

「咲夜様。」

「嬢ちゃんの言つ通りだぜ？」

「貴様！咲夜様に向かつて！」

「まあ、まあ、牛頭私は気にしていませんから。それより、純君はい加減に行きましょう。お父様も、お母様もお待ちしております。」

「ん？わかった。」

このやりとり見ているのもおもしろかったけどな。

「それでは、二人とも後はよろしくお願いしますね。」

「御意に」

「うす」

「朝倉殿、先ほどの無礼大變失礼した。」

「いや、気にしないでいいですよ。俺もイラついて、ため口きいちゃいましたし。」

「かたじけない。」

「んじゃ、頑張ってください。」

.....

「しかし、ここが咲夜の家か。随分広いんだな。」

もしかして学校なみ？

「一族の者が一堂に会する時もありますし、祖の五家がそろって会

談するときもありますから、必然的に広くなってしまうたんです。」

「そうか。それで、咲夜はどこに向かっているんだ？本宅はあっちでは？」

そういつて大きい方の家を指差した。その家はかなり広く、100人位なら軽く泊まれそうだ。

「いえ、確かにあちらは本宅ですが、私達は別宅に住んでいます。本来なら本宅に住むのが普通なのですが、一族の方が修行でよく泊りにきますし、父が年頃の娘が一族の者とはいえ男と同じ屋根の下で暮らすのは駄目だ！と申しまして……。」

ふむ、咲夜の父親もユーストマヤフォーベシーに負けず劣らず親バカなのか。

「こつちです。純君。」

そういつて案内されたのは普通の一軒家だった。

「どうぞお入りください。」

「お邪魔します。」

「はい！」

そういつてでてきたのは、咲夜にた優しそうな女性だった。

「あなたが、朝倉純一くんね？どうぞあがって？」

「あ、はい。お邪魔します。」

そういつて通された場所は居間だった。そこには、皐月さんと父親と思われる人が既に待っていた。

「良く来たわね朝倉君。ほら、座って座って。」

「え、あ、はい。それでは失礼して……、っとその前にこれを……」

そういつて和菓子の入った箱をとりだした。

「あら、そんな、気を使わなくてもよかったのに。」

「いえ、やっぱり、招待された以上はこれくらいはと……」

そういつて、お姉さん?のような人に渡した。

「うん。純一くんありがとう。さ、座って。まずは自己紹介というか。私は皐月と咲夜の父親で天城 四朗だ。」

「私は母親の天城 月夜です。月夜さんって呼んでね?」

「え!?!お母さんですか?」

これには驚きを隠せない。

「そんなに驚くことかしら?」

「え〜と、てっきりお姉さんかと……」

「あらあら、ふふふ、嬉しいですね。あなた見たいな若い子にその様に言われるのは。」

いや、だってね？下手したら、娘二人よりも若・・・

「純君？」「純一君？」

「はい、なんでもございません。」

おー、こわっ！

「えーと、それで私えを今日ここに呼んだのは何故でしょうか？お二人が会いたがっているってききましたか・・・。」

そうなのだ。そもそも俺を呼んだのはこの二人なのだ。原因はいくつか思いつくがどれかはわからない。

「それはだね、娘から君が桜の属性を持っているって聞いてね。」

「その属性を持っているのは私達は一人しか思いあたらなくて・・・。」

あー、そっちな。まあ、確かに桜の属性は珍しいけど、それを使っていた魔法使いは有名だもんな。

「君は芳乃 カレンさんのお孫さんかい？」

「はい。そうです。」

「「え!?!」」

皐月先輩と咲夜は驚いているようだ。

「お父さん、芳乃 カレンってあの?」

「稀代の魔女とうたわれたあの?」

「ああ、その通りだ。」

そう、婆さんは結構その道じゃ有名だったりする。教科書などには出てこないが魔法使いでそれなりの腕を持っていれば一度は聞いたことがある名前だろう。婆さんの書いた魔法書も世にいくつかでていたしな。

「と、いつでも俺は出来損ないですけどね。」

「どづいうことだい?」

「そうそう、私も思ってた。火鏡君との決闘のときもそう名乗っていたよね?」

「俺は、魔力はそんなに高くありません。一般人より高い位です。婆さんの力のほとんどはもう一人の孫、「芳乃 さくら」が受け継ぎました。俺が受け継いだのは桜の属性と一本の剣だけだからです。」

「そうか……。」

「はい。だから、俺は芳乃 カレンの孫として、桜の魔法使いとし

ては出来損ないなんです。」

「でも、あんなに強かったじゃないですか!」

咲夜さんそんなむきにならなくても……。

「咲夜、朝倉くんが自らそう呼ぶのは何かしら意味があってそう言っているのだから、そんなにむきにならないの。」

「……そうなんですか?」

う、結構するどいな月夜さん。

「ええ、まあ。あくまで魔法使いとしてはってことですからね。確かに魔力が高いのは有利ですが、それが絶対的な力の差になる訳ではありませんから。」

そう、そこで挫けるようなら俺はとっくの昔に強くなることを諦めている。

「ふふっ、そうか。朝倉くんすまないが、君の話聞かせてきれないか?」

「ええ、いいですよ。俺なんかの話でよかったら。」

そして、俺は話はじめた。俺がこれまで見てきたこと。初音島のこと。まあ、話す訳にはいかないこともあったけど、みんな微笑んで聞いてくれた。

……

「おっと、もうこんな時間か。」

どうやら大分話こんでしまっていたらしい。もう夕方になっていた。

「純一くん晩御飯も食べて行ったらどうだ？」

いつのまにか俺の呼び方も「純一くん」に変わっていた。

「でも、ご迷惑では・・・」

「ふふっ、子供がそんなこと気にしない。私も息子ができたみたいでうれしいんだから。」

「すみませんね、娘ばかりで。」

臯月先輩がすねたように言った。

「そうね、臯月か咲夜が純一君と結婚してくれれば、純一君も晴れて私たちの息子になるのに・・・。」

いや、それは・・・。

「お母さん！」

二人が顔を赤くして怒っていた。

「はははははっ」

俺は笑うしかなかった。なんともいえない。いったら地雷を確実に

踏む。

そんなとき玄関から声が聞こえてきた。

「四朗、四朗はおるか。」

「この声は、お爺ちゃん？」

どうやら咲夜の爺さんのようだ。

「はいはい、なんででしょうか？」

四朗さんが出て行った。

しばらくして戻ってくると爺さんも一緒だった。

「ふむ、御主がカレンの孫か？」

「ええ、そうです、朝倉 純一です。」

「ふむ……。小僧、少し私と手合わせせんかね？」

「「ええっ？」」

皆が驚く中俺と、爺さん 天城 あまぎ げんぞう 玄三氏との手合わせが決まった。
ちなみに四朗さんと月夜さんはやれやれといった風だった。

.....

「さて、準備はいいかね。」

「ええ、いつでもいいですよ。」

ここは天城家の道場。流石天城家、広いし対物・対魔法用結界も強固にかかっている。また、魔力が外に漏れないようにもなっている。これならちよつとやさつとあばれたところで大丈夫だな。審判は四朗さん。観衆は咲夜、皐月、月夜さんの他に分家筋など天城家の方々だ。

「それでは、天城家 前頭首 天城 玄三 対 朝倉 純一の試合を開始する。

始め！」

開始の合図とともに俺と爺さんは互いに身体強化し近接格闘で攻防を繰り広げていた。

「ほう、御主も気で身体強化できるのか。」

「まあな。俺は魔力が低いんでな。それより爺さんこそ、気功術使えたんだな。」

そう、俺と爺さんは互いに気による身体強化と気功術をつかって格闘戦を繰り広げている。

俺の右ストリート避けながら、爺さんに右手を掴まれ投げられたのでそのまま飛ばされるままに体を捻りながら着地。着地した瞬間を狙って蹴りが飛んできたのでその足をとり逆に投げ返してやった。爺さんはそのまま、壁に激突はせず足を壁に向けその勢いを利用してようとしていたのでこちらから爺さんに向かって突撃。爺さんの右

の手刀を左手で防ぎ、逆に右手で爺さんの腹を殴ったが、それも爺さんの左手で防がれた。そして密接した状態となった。

「なかなかやるではないか、小僧。」

「爺さんこそ年の割に動けるじゃねーか。」

「うち、このままじゃらちがあかない。しかたない。この爺さんなら大丈夫だろう。」

互いに両手を防がれた状態で、俺は右肩を爺さんに押し当てた。

「む!？」

「遅え!」

密接した状態で、全身の筋肉と気を使いそれぞれの力を右肩へ集中。相手の体を貫くイメージで……

浸透剄!

その衝撃で爺さんは吹っ飛んだ。

ドゴオン!

まともに食らったはずだが……

「フハハハ! なかなかどうして、やるではないか!」

「おいおい、あれ食らって無傷かよ。」

「まったく、どんな体してんだ。爺さん。」

「いやいや、効いてはいるぞ。まあ、それほどではないがな。」

「さて、では今度はこちらからいくぞ?」

「うち、後ろか!瞬動術で一瞬で背後に回ったようだ。」

「ほう、今のが視えているか・・・。」

「これくらいなら余裕だ!」

背後からの爺さんの一撃を避けし蹴りて反撃したが、その足の裏に自分の足の裏を合わせ、俺の脚力を利用して飛び、一気に距離を取られた。

げ!爺さんの周りの気が・・・あれは!

「獅子咆哮波!」

気が獅子を型取り、獅子の鳴き声に似た空気の破砕音と共に衝撃波が飛んできた。

「クッ!」

ドゴオン!

その衝撃波が予想より大きく俺は避けることができないと判断し耐えることにした。

「どうじゃ！少しは効いたじゃろ！」

「いってーな！」

衝撃を防いだ服の袖が破れちまったじゃねーか！

「なんじゃ、たいして効いて無いのう。」

「言葉の割に嬉しそうじゃねーか。」

「なに、ここまでやる人物とは中々会えないのでな。特に、気だけでわしと互角以上にやりあえる者にはな。」

「そうかい。それじゃ、ウォーミングアップはここまででいいか？」

「うむ。そうじゃな。そろそろ本気でいくぞ？」

「舞い降り！桜吹雪！」

「むん！」

俺の言葉とともに桜が舞い降ってきた。

そして、爺さんからは、魔力が飛んでくる。魔力を放出したただでこれかよ……。

プリムラ程ではないにせよ、ランクで言えばSSSか？まあ、このランクも曖昧なもんだけどな。

ランクは魔力の量で決まるが、その幅が大きい。特に、SSSラン

クはある魔力以上あればSSSランクとなるから、特に幅が大きい。少なくともこの爺さんはSSに近いSSSとかじゃないことは確かだ。

「ほほ、カレン殿の魔法か。小僧、どこまで使いこなせるかな？」

「幻想の桜」

火鏡に使った幻想を見せる魔法を使った。

「ふむ。」

爺さんが手を一振りすると大量の炎が噴き出し、正面の桜を焼き払った。

すげーな！無詠唱であれかよ。俺は、爺さんの後ろからその光景に関心し爺さんに攻撃をしかけた。ただのかかと落としたが、威力は十分。しかし、それは空を切った。

「なっ！しまっ・・・」

衝撃は右からきた。なんとか障壁を張りはしたが、それを打ち破って、雷が突き刺さって来た。

「ぐああああ！」

「ふむ、なかなかの幻術だが、わしには効かないぞ？それこそ「幻想の王」なみの幻術でないとな。」

「はあ、はあ、爺さん。あいつと会ったことがあんのかよ？」

「ほう、小僧も会ったことがあったか。なら、わかるだろう?」

「そうだな、あいつに会って無事ってことはそれだけ強靱な精神を
してるってことが反則位だよな。あの程度の幻術じゃ効かないのは
当たり前か。」

「で、どうする?これで終わりか?」

「はっだが!」

これだけ、桜が散っていていればつかえるか?まあ、炎で全て焼き払わ
なかったのはそのためだろうしな。なら、御望み通り見せてやるよ。

「桜の魔法第一陣 千変桜花」

その言葉と共に、桜の花びらが変化を見せた。それぞれ、集まり、
魔方陣を形成したり、動物の形をかたどったりしている。

「ほう、「千変桜花」しかもこれほどの数を一度に操作、構成する
とは・・・やりおる。」

「いくぜ、爺さん。」

その言葉と共に桜でできた動物が飛びかかり、魔方陣からいくつも
の魔法が飛び出した。

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ドゴオン!

どうだ？これなら・・・

「いや、いや、すごいな！小僧！」

煙が晴れると、無傷の爺さんがそこにいた。

「おい、おい、無傷かよ！」

「障壁を張ったからな。久々に本気で張らせてもらったよ。詠唱する時間がなかったからな。思わず魔方陣を使っけしもうた。もし、あの中に、上級魔法以上の魔法があれば、危なかったかもしれんう。」

ちっ、そういうことか。しかし、俺の魔力じゃ上級魔法なんて打てても精々一発が限度だしな。一応、威力を上げる魔方陣を通したはずだが、これでもだめか。ハハハ、スゲーなこの爺さん。

「流石はカレン殿の孫・・・いや、朝倉 純一だな。貴殿の力を認めよう。褒美だ。天空魔法をみせてしんぜよう。」

「お父さんそれは！」「お爺ちゃん！」

周りが何か言っているようだが、今の俺達には関係なかった。

「いいのか？」

「うむ。しかし、そのまま受けては身がもつまい。剣を出したらどうじゃ？」

「・・・なんだ、そのことまで知っていたのか。」

「昔、カレン殿に聞いたことがあるのじゃよ。剣を継承させた、出来損ないの魔法使いで最強ほんそくの魔術師な孫の話をな。」

「そこまでかよ・・・。」

なら、問題ないな。あいつらに見られるがそんなことは今はどうでもいい。天空魔法が見れるのならな。

「いくぞ！小僧！」

「こい！爺さん！」

祖は蒼天に咲き誇る桜がごとく、天を埋め尽くし、その蒼さえも桜に染める。しかし、蒼天はそこにあり、だからこそ、桜はここに咲き栄える。

こい！我が剣！天と桜の名を持つ剣よ！

てんけん おつぎ
天剣・桜姫

そうして、でてきたのは、一本の日本刀。桜の波紋をもつ白銀の剣だ。その輝きは天の色を映すほどだ。

そして・・・

祖は天を司りし我らにのみ許された法則。その法則を持って彼の者を打ち抜く槍となれ。その槍は天から降り注ぎ、彼のものを打ち抜く必殺の一撃とならんことを切に願う。祖は天を冠する虚無の一撃！

虚空こくうの天槍てんそう

強大な蒼い閃光が放たれ、俺の桜姫と激突し……

そこで、俺の意識は途切れた。

……

「ん？ここは……？」

「気づきましたか！純君！」

「咲夜、俺は……いつつっ！」

体中が痛い。確か俺は、爺さんと手合わせして、それで……。

「無理しては駄目です。純君はあの後、お爺ちゃんの虚空の天槍を正面から受け切ったのはよかったです、体中ボロボロで、立っ
たまま気絶していたんですからね！グスッ。」

「あゝごめん。そんなに泣くなよ？な？」

どうやら大分心配かけてしまったようだ。

ナデナデ

頭を撫でてあげることにした。すると、少しずつだが機嫌が直っていった。

「もう、あんな無茶しちゃだめですよ？」

「善処する。」

そう、確約はできない。

「はー、もういいです。どうせ、なにを言っても無駄見たいですから。」

「すまないな。」

「あやまらないでください。許してしまいます。」

ガタガタ！

そんなやりとりをしていると、扉が、動いた気がした。

「そう言えば、ここは？」

「えーと、私の部屋です。」

「じゃあ、俺が使っているこの布団は……」

「私の布団です……／＼／＼／＼／」

「えーと、ごめん直ぐ出る。」

「そんな、無理しなくても！」

「いや、体の方はもう大丈夫だから。俺が帰ったらファ リーズで

もしておいてくれ。」

「そんな！もつたいない！」

「？・・・もつたいない？」

「あ、えくと、あの、その・・・／／／／／／」

黙ってしまった。なんか気まずいぞ。

ガタガタ！

また扉が揺れた。まさか・・・。

俺はジェスチャーで咲夜に静かにしているように伝えようと扉をいきなり開けた。

「「きゃ〜！」「「うおー！」「

天城家全員集合だ。

「お姉ちゃん？お母さん？お父さん？お爺ちゃん？お覚悟はよろしいですか？」

「「「「てへ」「」」」

「てへ じゃ、な〜い！」

そうして天城家でリアル鬼ごっこが開始された。

その後、天城家で夕食をごちそうになって帰ることとなった。因みに、一番傷を負ったのは爺さんだった。大丈夫か？

Side 天城 咲夜

「今日の純君凄かったですね。」

「そうね。お爺ちゃんとおそこまで戦えるなんて思って無かったわ。」

「うん。流石はカレンさんのお孫さんだよ。」

「あなた、それじゃカレンさんのお孫さんだからって聞こえますよ？」

「そうだな。すまない。純一くんだからこそなんだろうな。」

今は居間で家族の団欒中です。純君は寮の門限があるからと帰ってしまいました。

「そうじゃな。あの年であれだけの力、カレン殿の孫という理由だけでは説明がつくまいて。」

「ところで、お爺ちゃん。純一君が千変桜花を使った時、極地属性以外の属性魔法も使っていたと思ったんだけど、なんで？」

それは、私も気になりました。純君の属性は桜のはずです。

「ん？簡単な話じゃよ。全ての属性を扱えるだけじゃろって。」

「え？でも、計測の時はエラーでしたよ？」

基本属性を持っているなら全ての属性であろうが、でるはず・・・

「それは、小僧自身があえて、妨害したか、桜の属性によるものだろう。あれは、なかなか応用性に富んだものだからな。」

「ふくん。じゃあもう一つ、純一君が出した剣、あれ天剣よね？なんで純一君が持っているの？」

そう、天剣は天城家に伝わる剣で全部で六本ある。六本の内、一本は代々頭首が所有しており、いまはお父さんがもっている。残りの内四本は他の祖の五家の頭首に友好の証として渡している。そして、最後の一本。これはいままで行方不明だったのだけれど・・・

「それはじゃ、わしよりも以前の天城家の頭首がカレン殿に譲ったらしいんじゃない。そして、カレン殿は小僧に譲ったというわけじゃ。」

「それっていいの？って、というかカレンさん何歳なのよ？」

「構わんじゃない。小僧が持つ分にはな。それとカレン殿はまあ、600歳は越えていたじゃ。もう、亡くなっておるがな。」

「お父様、純一くんのこと大分気に入ったみたいですね？」

「なに、わしとガチで戦ってあそこまで戦えるものはそうおらんかな。ケンカ仲間が増えて嬉しいだけじゃ。それに、あれでもまだ、本気じゃなかったらうしの。」

「は？あれで本気じゃなかったってどういうの？」

「お互いに、だかの。本気というより、全力といった方が正しいじやろう。まあ、小僧の全力は普通の相手じゃ見れんじやろうて。」

「へっ……。」

どうやら、お姉ちゃん。本気で純君に興味を持ってしまったようだ。私はそれが、とても気がかりだった。

第十六話 朝倉 純一 天城家へ訪問す（後書き）

桜吹雪は数多くの桜の花びらを作り出し、操る魔法ですが、桜の花びらを作るのがメインになります。また、操るといつても桜の花びらという形からは抜け出せません。できて攪乱位です。

千変桜花は桜の花びらを使い、動物や魔方陣を作ることができます。変化に富んだ術式で、千の姿に変えられることからその名がつけました。

虚空の天槍は無属性の魔力の塊を槍の形にして、天空から突き刺すように放つ魔法。無属性の魔力の塊のため、下手に属性魔法を使うと、それを吸収してより巨大になる面倒な魔法。ちなみに、この魔法、相反する属性を合成して無属性にしたわけではない。また、合成して作りだした無属性は他の属性魔法を吸収したりできないように、維持も長くもたず直ぐに消滅する。（ただの魔力の塊だから、世界に帰順じてしまう。）

第十七話 暴食と色欲（改）（前書き）

無理やりが過ぎました。

改定後は少しましになったかと。主に、稟とキキョウの会話。

第十七話 暴食と色欲(改)

Side 土見 稟

俺は今、シアと買い物に来ている。

「ありがとうね！稟くん。買い物に付き合ってもらって。」

今日、シアから電話があつて買い物に付き合つて欲しいということだった。特に用事は無いので付き合つことにした。

「さて、それじゃ、どこから行こうか？」

丁度俺も、シアに話があつたから渡りに船だ。

「それじゃあ、最初は服を見にいくつす！」

こうして、俺とシアは服を見たり、クレープ食べたり、お昼は公園でシアの作ってきた弁当をたべたり、寝転んだり、して過ごした。え？デートじゃないかって？俺も途中でそう思ったところだ。

そして、夕方・・・

「なあ、シアまだ時間いいか？」

「うん。大丈夫だよ。どうしたの？」

「ここじゃ、話にくいから、そつだな、学園の方へ行こう。」

「学園？稟くんがいいならいいけど・・・？」

俺は他人に聞かれないであろう学園で話をすることにした。休日の学園なら人もいないだろうし、誰かが近くにいれば気づきやすいだろうと考えたからだ。

・・・

そして、天守学園、中庭。休日だが、カフェテリアがあることもあり、ある程度は出入りが自由であるので簡単に中に入ることができた。また、今日は部活なども休みなのか、今は人影はない。

「それで、稟くん。話って？」

「ああ、それは・・・」

正直、本当に話していいものか迷いはあるでも・・・

「ん？」

俺なんかでも少しでも力になれるなら、俺なんかに好意を寄せられる娘の力に少しでもなれるなら・・・

「なあ、シア。シアの中にいるもう一人のシアについてなんだが・・・」

「・・・え？」

そうして、裏シアに会ったことを話、純一の予想が正しいか確認してみた。

「・・・そっか、あの子が・・・。」

「ああ、それで・・・。」

「うん。朝倉くんの予想は間違いないよ。すごいね、朝倉くん。それで、稟くんはどうしてその話を？」

「ああ、シアがその事で悩んでいるんじゃないかって、思って。それで少しでも力になれたらって思って・・・。」

「・・・そっか、やさしいね。稟くんは。でもねもう決めてるんだ。どうするか。」

「もう一人のシアもそういつていた。シアはどうするか決めているって。なら教えてくれ！シアはどうするつもりなんだ？」

そういつと、シアは首を横に振って拒絶の意を示した。

「駄目だよ。これはもう決めたことだから。教えて稟くんに反論されたら、にぶっちゃっよ。」

「シア・・・やっぱり駄目だ。教えてくれ。俺に反論された位で鈍るような決意のものならそれはきつと間違っている。一人で全部背負う必要はないんだ。」

「でも・・・。」

「俺も、昔そうやって一人で勝手に決めて、納得して、でもその結果大切な人を今でも苦しめてしまっている。そんな思いをシアにさ

せたくないんだ。頼む！」

「稟くん・・・わかったよ。頭をあげて。」

そうして、シアが話してくれた内容は、やっぱり納得のいくものじゃなかった。シアが人間界でやりたいこと全てやり終えたら、自分の体を裏シアに譲って、今度は自分が眠ろうとしていたらしい。それで、俺も、ネリネも楓も他の皆も納得する訳が無い！

「だって、私はたくさんのもをもらったのに、あの子にはなにもないから・・・」

「でも、それで、シアがいなくなったら駄目だ。それはもう一人のシアだって納得しない。」

「・・・でも、じゃあ、どうすれば・・・」

「3人で考えよう。俺とシアともう一人のシアとそれでも駄目なら・・・」

「駄目なら？」

「純一とか周りを巻き込もう。あいつらなにかとベタラメだからなんとかなる！」

「プッフッフツ、他力本願っすか？」

「だって、俺達だけでどうにもならないならそれしかないだろ？ シアや裏シアどちらかを諦めるなんて選択するよりはよっぽどマシだ！」

「……うん。うん！」

正直他力本願ではあるが、きつとあいつらなら協力してくれる。そして、いつかは俺があいつらになにか返せればいい。今は、そう考えよう。なにより、二人のためにも。

「それで、シア、もう一人のシアと話をさせてくれないか？」

「……うん。わかった。あの子も、私より稟くんから話した方が聞いてくれると思うから。」

そして、シアが目を瞑り、もう一度開くと、入れ替わっていた。

「よう、裏シア。」

「稟……、私からの警告を無視してシアに話したわね？」

警告を無視したことを怒っているらしい。睨まれた。

「ああ。一人で悩むより良いと思ってな。少なくともこれは一人で抱え込むような問題じゃないと思ったから。」

でも、そこで怯んではいられない。

「……純一に聞いたのよね？私のこと。」

「……良くわかったな。」

以前裏シアが俺と出会った時は中にいたシアは会った事知らなかつ

たようだが。

「あの時はシアが眠っていた時に体を借りたのよ。起きていれある程度は外のことはわかるから。まずはお礼を言うわ。ありがとう。シアを止めてくれて。」

そう言っつて、少し優しい表情を見せてくれた。やっぱり聞いてよかった。

「いや、お礼を言われるような事じゃ・・・それに俺自身のためでもあるしな。」

「そう。それじゃあ、私はこれで、さよなら・・・ね。」

「ちよ、ちよつと待て！どういうことだ！そんな話していないだろ！俺はシアも裏シアも両方あきらめたくないから、どちらも認められる方法を探そうっつて話だっつたる！」

そのために話をしたのに、なんでそんなことを言っつんだよ！

「うん。それは聞いていたわ。でもね、一つの肉体に二つの魂、それは本来、不自然なもの。このままじゃどちらにしろどちらかが消えるしかなくなる。」

「な、・・・でも、だからっつて、諦めるのが早いだろ！」

「・・・シアも言っつていたでしょ？私は何ももっていないっつて。今更認められてどうしろっつていうの？何も持たないまま、例えば肉体をどうにかできて、認められて、それで？何も持たない私はどうしたらいいの？」

「そ、それは……」

……クツ、軽率だった。そうだ。肉体を持つとか認められるとか、今の裏シアにとっては二次の問題だった。純一に言われていたのに、順番を間違えた。

「結局、稟は私が何ももっていないから、同情しているだけなんですよ？」

「いや、ちが……」

「わたしには何も無い。なにも持っていない。この体も力も命も、全てシアのもの。私のものなんて一つもない！全部私のもんじゃない！誰も私を必要となんかしてくれない！そんな私に同情したんでしょ！」

「つく！」

裏シアの周囲で電気がはじけたような音がし、時折火花が散っている。感情の高ぶりと共に魔力を放出しているようだ。

「落ち着け！裏シア！」

裏シアをなだめようと腕を掴んだ時だった。

「離して！」

衝撃が襲ってきた。

「があっ!!!」

魔力で吹き飛ばされてしまった。

「私は同情なんて欲しいんじゃない。一つだけでいいからあたしだけのものが欲しかっただけなのに!」

ああ、そうだよな。お前が今一番にして欲しいことは、肉体を得る事とか認められることとかじゃなかったんだよな。だから俺はお前にやるよ。

「ああ、だからやるよ。お前だけのものを……。」

そうお前だけのものを。

「稟……?」

「ずっと悩んだ。俺が、お前に何をしてやれるのか、なにをあげられるか。らしくない位悩んだよ……。それでさ、俺じゃ結局なにもしてやれないことがわかった。俺だけじゃお前らの問題までどうにもできないって。でさ、なら、なにをお前にあげられるかって、本当に悩んだんだぞ?」

「なに?自分の心とでも言つつもり?バカにして!」

違うよ。そんなんじゃない。

「キキヨウ」

「え?」

「キキヨウ」お前の名前だ。いつまでも裏シアじゃ呼びにくいしな。」

そう、裏シアとか偽シアとかじゃない。キキヨウそれがお前の名前だ。

「キキヨウ・・・、あたしの名前・・・」

「そうだ。他の誰のものでもない。お前だけのものだ。」

「自分の名前なんて考えたこともなかった。・・・キキヨウ・・・」

「ああ、そうだ、キキヨウは必要とされたから生まれてきたんだ。シアもそう思うだろ。」

「そうだよ、キキヨウちゃん。」

「シア・・・」

キキヨウから先ほどまでであった鬼気迫る感じは受けなくなった。

ふー、とりあえず、キキヨウは大丈夫みたいだな。良かった。純一にはお礼言つとかないとな。痛たたた。

「あ、シ、シア！稟が！」

「り、稟くん！今直すから！」

どうやらシアに変わって治癒魔法を掛けてくれているらしい。体の痛みが引いて行く。

「うん。もう大丈夫だ。シア。ありがとう。」

「うん。もう、キキヨウちゃんやりすぎだよ！」

「うー……ごめんなさい。」

うん。一人二役、百面相。傍から見たら危ない人だな。

「俺なら本当に大丈夫だから。それより、遅くなったしもう帰ろう。」

「

「うん」

「……うん」

そうして帰ろうとしたとき……

パチパチパチ！

場にそぐわない拍手が聞こえてきた。

「いやー、良いものを見せてもらったわあ。」

「……」

異様な二人組が校舎の影からこちらを見ていた。

「なんだ、お前は……」

「稟、気をつけて。こいつら普通じゃない……」

そう、この二人は素人の俺から見ても異常だっということがすぐにわか

った。なぜ気付かなかったのかってくらいはつきりとわかる。

一人は黒いドレスに黒い髪。浅黒い肌の美人だ。しかし、その目は本来白い部分まで黒で染まっている。

もう一人、さつきから一言もしゃべらない男。こちらはくすんだ青い髪に白い肌。格好はジーンズにYシャツと普通の格好だが、女よりこちらの男の方が異常だと、危険だと本能が告げている。

「そうね、自己紹介が必要かしら。まあ、どうせすぐ死ぬのだけれど、いいわ教えてあげる。私は七つの大罪が一人「色欲」のラスファナこっちは「暴食」のグランドロ初めまして。そしてさようなら」

そう、ラスファナと名乗る女が言った途端、グランドロが目の前で拳を振り上げていた。

ゴウ！

俺もキキョウも反応ができなかった。

しかし、その拳は止まっていた。いや、止められていた。

「よう、稟。それにもう一人のシア。無事か？」

そこに、グランドロの腕を掴みながらこちらに向かい、笑っている純一がいた。

それは急だった。稟とシアにつけていた式神から警報があがったのだ。そして、二人の場所を探し、向かっている途中で、いきなり異常な気配が現れた。

どういうことだ？いくら隠匿の魔法なり魔術なり使っていても、俺がこれほどの気配を見逃すはずが・・・まして、世界樹が何の反応も見せないなんて・・・いったいなにが起こっている。

俺はなりふり構ってられないため、空間転移の魔術を使い二人の近くまで跳んだ。すると、二人に拳を振りおろそうとしている男がいた。俺は、急いで男の拳を止めに入った。

「よう、稟。それにもう一人のシア。無事か？」

拳を止め二人を見ると・・・もう一人のシアと稟が抱き合っていた。

「ふむ、ラブシーンの邪魔したか？」

「この状況でそれかよ！？（それ！？）」

二人から抗議の声が上がったが今は無視だ。

「とりあえず、二人は下がってる。」

二人を下がらせ、異常者へ目を向けた。どうやら男の他にもう一人女もいたようだ。こいつら・・・そうか。だから気付かなかったのか！

「おまえら、「色欲」と「暴食」だな。どおりでお前らの気配に気づけなかった訳だ。」

「あら、私達を知っているの？なら自己紹介はいらわないわね。」

やはりそうか。「暴食」なら気配に気づかないのは当たり前か。こいつが、二人分の気配を食っていたから気付かなかったんだな。

「で、七つの大罪のお二人がこんなところになんの用だ？まさか、こんな学生を襲いにわざわざ危険を冒してまで来た訳じゃないだろ？この町には祖の五家がいるんだからな。」

「ええ、そうね。本当はこの学園にある宝具を盗りにきたのだけど、騒ぎを起こさないためにグランドロに一定の範囲より溢れる気配は食べてもらいながらね。」

だから、近づくまで分からなかったのか・・・

「で？なんでわざわざ人を襲っているんだ？宝具が狙いなんだろ？」

「しょうがないじゃない。グランドロの食指がその神族のお嬢さんに向けられたのだから。珍しいのよ？グランドロが目的より欲望を優先させるなんて。」

ちっ、どうやら、こいつ嗅覚で神王の娘であること、そして魂が一つの器に二つ入っていることに気付いたな。理解まではしていないようだが・・・

「・・・邪魔。」

びくともしなかったからか、暴食が俺ごと腕を振り回しやがった。

「つと」

無事着地すると目の前に拳が迫ってきていた。それも避け再び、稟達と暴食達の間立位置を変える。と同時に、結界を学園全体に張り巡らせた。

奴の拳は校舎に突き刺さり、破壊していた。

「おい！稟！裏シア！走れるか？」

ラスファナとグランドロから目を離さず聞いてみた。

「あ、ああ・・・だいじょ・・・」

ドサ！

「り、稟！？純一！稟が！」

ちっ、暴食の能力か！

「四方を司りし青龍、白虎、朱雀、玄武、それらを統べし黄竜よ、点を面とし彼の者達を外界より遮断、守護せよ！」

陰陽術による結界の術を稟と裏シアの周囲に展開した。これではらくは大丈夫だろう。まあ、暴食の能力がある限り時間の問題だろうが。

「これでしばらくは大丈夫だろう。裏シア！稟と一緒にそこにいる！何があってもでるなよ！」

「で、でも！」

「それは暴食の能力で生命力を食われたからだ。お前は魔力が高いから先に魔力を食われていて保っていたが、稟は魔力が低いからそのせいだ。お前も魔力大分減っているんじゃないか？そこにいれば大丈夫だから。」

「生命力って・・・不味いじゃない!？」

「食われ過ぎれば不味いが、それ位ならまだ大丈夫だ。そこで大人しくしてろ。シアもだ。いいな。」

コクコク

頷く気配を感じ、意識を全て目の前の敵二人に向けた。

「おまえらが宝具を盗むの邪魔しないから大人しく帰ってくれないか？」

「ふふつ。私はそれでもいいのだけどグランドロがね？」

「・・・そいつを寄せ・・・食べさせる・・・。」

かったるい。暴食の能力は厄介なんだよな。こいつ、あたりの魔力や生命力を食らい続けるんだよ。

長期戦は難しいな。稟やシア達のこともある。性欲は今傍観を決め込んでいるようだ・・・そっちの対策もおかないとな。とりあえずは暴食を短期戦で屠る！

「シッ！」

気による身体強化で接近、ガラ空きの胴体に連続で拳を叩きこみ、最後に回し蹴りを側頭部に決めた。

鈍い音と共に暴食は吹き飛んだ。手応えはあつたが、どうだ？

砂煙が晴れると、倒れてはいるが……。

「……痛いな。」

普通に起き上がりやがった。ダメージはあるにはあるが、さほど効いていないようだ。

おい、おい、どういうことだ？確かに手応えはあつたぞ？

「ふふつ、不思議そうね？なぜ効いていないか？」

「……なんだ？教えてくれるのか？」

「ええ、例え知ってもどうにもできないでしょうから。簡単よ。あなた、気で身体強化していたようだけど、その気を食べられたのよ。彼の体に触れたところからね。」

「……そうか！身体強化して攻撃を叩きこんでいたが、あいつに当たる前にその強化分だけ食われていたのか。だから対してダメージはないのか……」

「でも、凄いわね。強化を無効果されていたのに彼にダメージを与えるなんて。」

「そりゃどうも。これでも鍛えているんでね。」

しかし、これじゃあ、攻撃する度に気力を削られるか・・・いや、
どうやら攻撃しなくても削られているようだな。より近い方が効果
が大きいって事か。

霊力は・・・ちっ、こっちも、か。本当、雑食だな。なら、削られ
る前に倒すしかないか・・・

「舞い降り！桜吹雪！でもって、桜の魔法 第一陣 千変桜花！」

今回は全て武器の形にした。日本刀、西洋剣、槍、矛、斧、ナイフ
e t c . . .

「逝け！」

全ての凶器が暴食へ吸い込まれていく。どうだ！

「・・・いただきます。」

「は？」

全ての凶器が本当に奴の腹に吸い込まれていった。

「・・・それが、「暴食」か・・・。」

暴食のシャツが破れており、腹に大きな口が付いていた。それが、
俺が放った全ての武器を食いやがった。ご丁寧に咀嚼していやがる。

「そう、あれが「暴食」の能力の根源であり、「暴食」そのもの。」

さぐて、打つ手はあるのかしら？」

本当、どうしよう。千変は効かないし、桜姫を使ってもいいが桜姫の魔力まで食らっちゃまう。接近したら奴を倒しきる前に俺自身の力が尽きるか・・・かつたるいが仕方ないか。稟やシア達には黙っていてもらうか。

まずは詠唱の時間稼がないとな。色欲が油断している今がチャンスか。

「もう一度、千変桜花！」

今度は、動物や魔方陣等、時間稼ぎに使えるものを構成し色欲と暴食にはなった。

「・・・んあ〜ん。」

「あら、こっちにも？」

グランドロは暴食の能力で食べているようだ。ラスファナは・・・曲がっている？魔法や桜の動物がいくつも向かっていくが、全てそれている。そうか、あれが、「色欲」の能力か。向かってくるものを惑わせ、方向をそらせる。「暴食」の能力もこれでそらしていたのか。こっちもまた面倒だな。まあいい。今は・・・

「我こそは、世界の法則を理解し、越えしもの。世界の祝福を拒絶したもの。我が力は世界にとって有害であり、されど我はこの力を振るう。今こそ世界の鎖を解き放たん。封印解放！」

神王や魔王の時の封印解放は簡易的なもの。しかし、今回は世界に俺という存在を認めさせる必要があった。

今回唱えた呪文は要約すると「お前らの祝福は要らないから俺の力を好きに使わせる！」ってことだ。これを唱えるのと唱えないのでは世界からの制限が全く違う。変りに、後で不幸になるけどな！幸運値がマイナス突っ切るようなものだ。

「さて、それじゃ、こっからが本番だ。」

言葉と同時に魔力を「暴食」に食われるより早く、多く集め、解き放った。

「穿て豪雷！」

カ！・・・ズガガガガ！

暴食へは突き刺さり、性欲へは・・・やっぱり逸れたか・・・。

「つつ、なにそれ？あなた一体何者？暴食の能力を越えて魔法で有効打をグランドロに当てるなんて・・・。」

「・・・グググ」

お！どうやら、今回は効いたみたいだな。あいつ、一度に食える量に限界があるみたいだ。

「いや、悪いね。俺って小心者だからさ、一々手の内教えたりしないのよ。ほれ、まだまだいくぜ！」

俺は詠唱破棄で次々上級魔法を打ち出した。地獄の獄炎、裁きの雷、氷河の鉄槌、割れる大地、e t c・・・

おいおい、まだ戦えるのか？

「よく、あの攻撃に耐えたな。暴食の吸収速度以上の魔力で攻撃したんだがな。」

「フフツ、そうね。暴食だけでは無理だったでしょう。」

そういうことか。かつたるい。

「だから、お前らは二人で行動している訳か・・・」

「・・・本当、察しがいいわね。あなた。」

暴食に全段命中する前に色欲の能力で逸らしたわけか。そして、今なお、暴食の能力は有効か・・・。

「でも、ここまでよ。」

その言葉と同時に、暴食の様子が変わった。

「ぐごががががががが」

暴食の口は腹だけだったが、それが、腕や手のひら、足、頭、体中のいたるところにできた。まるでどこぞの妖怪だな。

「これが、暴食の本当の力。あなたが封印をしていたように暴食もその力を封印していたのよ。どう？食われる魔力量が増えたでしょ？あと何分持つかしら？」

かつたるい。つまり、一撃で終わらせなけりやならないか。しかし、いくらなんでもこの大食らいのスピード相手じゃ普通の詠唱はできないか。周囲の魔力も無くなってきたしな。まあ、この空間にないなら、別の場所から持つてくればいいか。でも魔法じゃ無理か。

・・・しゃあない。魔術、使うか。魔力を常に纏って接近戦をした場合、色欲の邪魔が確実に入るからな。俺はよくても稟達の結界が保たない。

「火は消え、水は腐り、風は死に、土地は枯れる。光は輝きを忘れ、闇は混沌となり、天空は堕ちる。・・・」

「いいの？そんな長い詠唱をしていて？ガラ空きじゃない。」

色欲と暴食が接近してきた。色欲はいつの間にか黒い爪を両手に付けていた。

・・・にやっ。

「残念！」

「・・・な！」

「・・・！」

二人が攻撃した「俺」は桜の花びらで作った幻術だった。

「この状況で幻術を使えたっていうの？しかも、暴食の嗅覚さえ騙したっていうの！？」

「・・・」

「時は止まり、空間は閉じ、有と無の境さえ意味を無くす。」

そりゃそうだ。かなりの魔力で創った幻想だからな。

「世界の全ては終わりを迎え、そこに慈悲は存在しない。喰らえ！これが終わりの一つの形だ！」

『無慈悲なる終焉』

「……………」

「ふふ、ふふふふふ。何も起きないじゃない。それはそうよね。なにをどうやったか知らないけれど、暴食の前で詠唱魔法なんて・・・魔力が集まる訳ないし、よしんば集まって発動できても、当たる前に食われてしまう。残念ね。」

「さて、それはどうだろう？気付かないか？暴食の能力が止まっていること。」

「なにを！？」

色欲が暴食を見るのと当時だろう。暴食の体が闇に飲まれ消えて行くところだった。

身動きもできず、声も出せず、ただただ、終わりを迎え、そして、跡形も無くなった。

「い、いったい何をした！」

「フツなに、この場に魔力を留めて置けないなら、違う空間に留めて置けばいい。それだけだ。そして、詠唱による式が完成したら、

その式に魔力を流せばいい。」

「そんなこと、魔法使いにできる訳が、よしんばできたとして、暴食に当たる前に食べられて終わりじゃ……。」

「ああ、そうだ。食べられたよ。確かにな。そして、その式を食べてしまったからこそ、その魔術は発動したんだ。」

「……食べたから？……魔術？……まさか！？」

「そう、そのまさかだよ。俺が式に通したのは発動させるための魔力じゃない。その式を維持し、食わせるための魔術だ。そして、暴食の腹の中でその場にある魔力を使って魔術は発動。そこが例えば亜空間だとしても、奴は常に食べ続けていた。つまり亜空間と奴は常に繋がっていたってことだ。なら、その空間ごと終焉を迎えさせれば必然的に繋がっている暴食本体も……てことだ。」

「そんな……あなた、本当に何者なの？こんな反則、例え魔術師でも度が過ぎてるわよ！？」

「なぐに、しがない魔術師ですよ。」

「だから、そこらの魔術師じゃ説明が……、待ちなさい、あなたの魔法を使っていたわよね？そして、あれは、魔力操作？なら……あなたは！桜の魔術師！」「神桜！」「」

「さて、どうでしょう？？」

「しらばっくれるな！桜の魔法を使える魔術師、そしてなにより魔力操作、他に該当する魔術師はいない！何故あなたがこんなところ

に！」

気付かれたか。稟や裏シアも聞いているのに面倒な。

「神桜つてのは否定させてもらうが、ここにいるのは簡単だ。暴食が狙った神族の娘、彼女は神界のお姫様なんだよ。そして、そこでお姫様に膝枕されているのが次期、神王、魔王候補の少年で、俺は二人の護衛を任されていたってことだ。」

「な！それじゃあ……。」

「そ、おとなしく二人に手をださず、宝具だけさっさと持つていけばよかつたんだよ。さて、どうする？このまま大人しく帰るのであれば見逃すが？」

「……いいの？」

「別に、お前らが何をしようとか俺には関係ないからな。まあ、俺の周囲に被害が及ぶなら相手するが、今のところは無いみたいだしな。消えるなら追わないよ。」

「そう……なら、逃げさせてもらうわ……。」

色欲は本当に逃げるようだ。

「ああ、勝手に……、待て、避ける！」

それを見届けようとした時、神速で飛んでくる槍を捉えた。クソッ間に合わない！

グサ！

「……え？」

ドサ！

色欲は胸の中央を射抜かれ、あっけなく絶命した。色欲の能力を貫通する槍……これは……。

「まったく、七つの大罪を見逃すなんて、甘すぎるよ？純一？」

そう言っただけ現れたのは、真っ白な騎士服を着た金髪のロン毛、整った顔に碧の瞳、こいつは……

「貴様は……「希望」のカイン・ジブリール。ならその槍は神槍グングニルか。」

「カイン、純一のそれは甘さでなく優しさだと思えますよ。」

そして、また一人、こちらにも金髪だが、足元にまで届きそうな髪を後ろで結わえている。金色の瞳の美人だ。

「「慈愛」のラピス・シーレンスか、七徳の内二人もかよ。なんだってこんな極東においでなすったんだ？」

七徳が一つの地に二人も揃うのは珍しい。いくら七つの大罪が二人もいるからって……。

わざわざ、七徳のN01とN02が揃ってでてくるとはそんなに重要な事だったのか？

「そうだね。純一がこの場所に当分留まるようなら教えておいた方がよさそうだね。でもその前に、そちらのお嬢さんと少年を送って行ってあげたらどうだい？話は後日ということ。ここの後始末は僕達の方でやっておくから。それにいくら結界を張って置いたからって、暴食のあれは周囲にバレているだろうからね。人が集まってくる前に急いだ方がいいよ？」

確かに、二人（三人？）とも疲弊しているみたいだからな。

「わかった。でもその前に。ラピスさん。三人の治癒お願できますか？」

「ええ、わかりました。」

.....

「純一.....」

「よう、二人とも。無事で何よりだ。この人はラピス・シーレンスさん。三人の治癒をしてくれるから。」

「はじめまして。少しじつとしていてくださいね。」

ラピスさんが手を翳すとそこから光が生まれ、二人の顔色は直ぐによくなっていた。

「これで大丈夫です。」

「ありがとうございます。ラピスさん。」

「えっと、ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。純一さんもいかがですか？」

「いや、俺はいいよ。気持ちだけで十分だ。」

「そうですね。それでは私はカインを手伝ってきますので、お気をつけてお帰りください。」

「ああ、わかった。」

ラピスさんはカインの方へ歩いていった。さて、問題はこっちか。

「さて、お前らも聞きたいことはあるだろうが、とりあえず、これ以上面倒事に巻き込まれないためにも帰るぞ。説明は帰り道にしてやる。行くぞ。稟、シア、裏シア。」

「わかった。それと純一。裏シアじゃない。キキヨウだ。」

「・・・そうか、なら、キキヨウ行くぞ。」

「ああ。」「」「うん。」「」

こうして学園を後にした。

第十七話 暴食と色欲（改）（後書き）

補足1、色欲と暴食がこの町に侵入した時、気配だけを暴食に食わせていたため誰も気づくことができませんでした。魔力等を食い始めたのは純一が到着した直後です。

補足2、暴食が力を解放した時点で、純一が張った学園の結界は食われていました。祖の五家などが直ぐに来なかつたのは七徳の根回しによるものです。また、七徳の二人が遅かつたのは根回しに時間がかかったからです。それが、純一にとって都合よく働いたというわけです。

3、純一が稟達を指して三人としているのは、キキヨウとシアを別の人物として扱っているからです。

第十八話 戦い終わってその後（前書き）

まだ、稟がシアとキキヨウを選んだわけではない。この状況でどうやってキキヨウを認めさせようか。

第十八話 戦い終わってその後

Side 朝倉 純一

「……さて、そろそろいいかな。」

「学園から、それなりに離れられたし、質問を受け付けよう。」

俺から話を切り出した。稟達は最初何かから質問したらいいか考えていたようだが、しばらくして、稟から質問してきた。

「純一、お前は何者だ？」

「何者……ね。出来損ないの魔法使いじゃ納得「できない（わ）。」

「だよな。そうだな、……魔術師、そう呼ばれる存在だ。」

「あの女の人、ラスファナも言っていたが、桜の魔術師とか神桜とか……。なんなんだ？魔法使いとは違うのか？」

「そうだな……。まずは魔法と魔術の違いからか。魔法は世界の法則を操るが、その法則に制限される。魔術はその法則を越えることができる。分かりやすく言えば、そうだな……。例えば、『フアイアボール』。これは火属性の魔法だ。」

そう言っつて、俺は火の球を魔法で出した。

「次に、これは何の属性だと思う？」

次に出したのも姿はフアイアボールと同じものだが……。

「火属性じゃないのか？」

「待って、稟。それ、火属性じゃない。氷の属性よ。」

「」名答。」

そうやって今出している魔法を地面に落した。すると、その部分が凍った

「今のはアイスファイア。炎の姿をした氷の魔術だ。色が青かったら？まあ、普通に蒼い炎もあるけどな。これが、魔術。相反する属性の合成をしたりと法則を無視できる。と、言ってもこのアイスファイアと同じ位の魔力を使った氷属性の魔法と打ち合ったら、負けるけどな。」

「そうなのか？」

「ああ、まあ、これは炎の姿をした氷属性の魔術ってだけだがな。合成っていつてもやり方は色々あるのさ。同じ条件で出したもので世界の法則内の力なら魔法の方が上なのさ。」

魔術についての細かい設定は十五話を参照。

「じゃあ、今度は私から質問。あの魔力は何？純一の魔力はCランクでしょ？あれはCランクよりはるかに上よ？」

制限を解放した時だな。

「あれは、俺自身の能力で、魔力操作だ。魔力を操ることができる。」

これは、魔術とは別だがな。」

「それって、反則じゃない!」

「まあ、そうだが、色々面倒なんだよ。魔力の流れを把握したりしなけりゃならないし。普通に使うと結構制限が多いんだよ。」

「はい!はい!次わたしね。純一君のあの姿は?」

「まあ、魔術師モードでも言えばいいかね。魔術ってのは世界の法則を越える事ができる変りに、世界から制限を受けるんだよ。それが、法則内なら魔法より劣る理由でもあるんだが。通常、魔術を使う場合その制限を様々な方法で緩和する訳だが、それには限界があり、その限界を越えるとペナルティーがある。内臓が破裂したりな。それを回避するための方法があの時唱えた祝詞であり、あの姿なんだ。世界からの祝福、幸運とか運命とかそういった類のものを拒絶する代わりに自分への世界からの制限を受け付けなくする。この状態だと魔力操作の制限も緩くなる。まあ、代わりに後で死ぬほど不幸になるけどな。今は大丈夫だけど明日には不幸になつてると思う。当分不幸が続くから学校休むな。よろしく言つといてくれ。」

「あ、ああ……。」

稟は理解が追いついてないのか、死ぬほど不幸って言葉に若干引いたのか、動揺している。

「他に質問は?」

「「桜の魔術師」とか「神桜」とか呼ばれてたけどあれは?」

あゝ、やっぱりそれも聞かれてたか。

「桜の魔術師っていうのは、多分、桜の魔法を使えるからじゃないかと思う。桜の魔法を使える魔術師ってことだな。「神桜」は、正確には俺の呼び名じゃなくて俺の婆さんの呼び名なんだよ。少なくとも俺は「桜の魔術師」とか「神桜」とか名のつた覚えは無いしな。何で呼ばれるようになったかっていうと、まあ、色々あったんだよ。といっても俺の姿とか名前を知っている奴は一握りだけだな。」

「質問は以上か？」

「……ああ」

ふむ。理解まで至っていないが納得はしてくれたようだな。じゃあ、まあ、本題にいけますか。

「そうか。なら、一つお願いがある。魔術のこと黙っていてくれな
いか？」

「なんでだ？」

まあ、不思議に思うのも無理ないか。

「都合が悪いからだよ。色々とな。力があると知られば面倒事に
巻き込まれやすいからな。かつたるいことに。」

面倒事が向こうからやってくるからな。それに、魔術はリスクを伴
うしな。あまり頻発して使いたくはない。それに、表舞台で使うに

は危険すぎるからな。

「私達の護衛とか？」

「……知っていたのか？」

「シアは気づいてなかったみたいだけどね。だって、あのタイミングで現れるなんて都合が良すぎるじゃない？」

キキヨウは中々鋭いな。

「そうなのか？純一？」

「……まあな。といってもプライベートは尊重してたぞ。なにがあったら俺に分かるようにしていただけだしな。」

「……そうか。ありがとう。」

「まあ、いいさ。それで、秘密にしてくれるのか？」

「ああ、わかった。」

「ええ。」

「そうか……じゃあ、お礼にキキヨウの件を何とかしてやるぞ。」

「はは、いいよ。お礼なんて。」

「そつだよ。純一君。」

「」「」「」「」

「え!？」

「ちょっと待て純一! キキヨウの件って!？」

「だから、キキヨウを神王の娘と認めさせる件だよ。」

「そんなことできるのか!? お前、神界で内乱になるって……。」

まあ、確かに以前そういつたが、別にキキヨウの存在だけで内乱にまでは発展しないんだよ。キキヨウはきっかけにすぎない。

「ああ、そうだな。だが、良く考えてみる。なんで、普通の神族は良くて神王の血筋は駄目なんだ?」

「それは、しがらみがどうのっていつていただろ?」

「ああ、そうだな。正確にはお偉いどものしがらみだがな。はつきりいって神界と魔界の争いってのは大分昔の話だ。そこの神族はそれほど重要視していない。実際、神族と魔族が結婚って珍しいことではないのだろう?」

それに、開門戦争の方が新しく傷だつて残っているのに3種族はまあ、全てではないにしても良好な関係を築いている。異種族で結婚している者もいる。

「う、うんお父さんとお母さんが結婚できたからね。」

「つまり、魔族の子が生まれてもそこまで問題視されはしなかったってことだ。ならなぜキキヨウは駄目なのか。それはさっきも言った通りお偉いどもがうるさいからだ。キキヨウは魔族で、神王の娘

神界で魔族が権力を持つことになる。」

「だったらお母さんはどうなるの？結婚できなかったんじゃない？」

「すまん。言い方が悪かったな。キキヨウは魔族だが、神王の血筋だ。なら、魔族でありながら王位を継ぐ権利を持つことになる。神界は血筋で王を決めているからな。それを問題視している奴らが権力者に多くてな。そいつらを黙らせれば問題なくなる。」

「できるの！？そんなこと！」

「できないなら言わないよ。そのために杉並に色々動いてもらっていたんだしな。」

「杉並に？」

「ああ、最近杉並の奴いなかったろ？そっちで手一杯だったんだよ。」

「だったらなんでもっと早く教えてくれなかったんだよ。」

「言っただろ？結局他人事だって。冷たいようだがな。どうするかは結局本人が決めなければならない。一人で抱え込もうと、周囲の意見を聞こうと、結論をだすのは本人だ。今回お前らが出した結論は・・・、シアもキキヨウも普通に出てきて会話しているってことは、どちらも生かす選択をしたってことだろ？その選択をしたから協力できるわけで、もしどちらかを犠牲にするような方法を選んでいたら俺達は手を貸せなかった。稟に話した段階ではそれが不確定だったからな。教えなかったんだ。お前ら次第ってことだったんだよ。それに、稟の言葉のならシアとキキヨウに届くと思ったから

な。そつちは稟に任せて俺は準備に勤しんでたつてわけだ。」

それに、この問題は俺じゃなく稟がどうにかするべき問題だったろうしな。俺はお呼びじゃないってわけだ。

「・・・そつか。・・・ありがとうね。純一くん。」

「お礼は稟に言うべきだと思うぞ？こいつが何もしなければ俺だつて何もできなかつたらうしな。」

「そつだね。ありがとう！稟くん！」

「さて、そろそろシアの家に着くな。んじゃ、疲れているとこ悪いが、付き合え。さつさとこの件終わらせるぞ。」

「ふう、やっと終わった。後は神王や魔王がなんとかしてくれるだろう。」

あの後、神王を説得して（これが結構疲れた。流石神王、情だけじゃ動かなかつたな。）俺と杉並の計画を話した。簡単な話、情報操作し市民を扇動しただけだがな。今の3世界は交流を計り、異種族で結婚、子を持つ親だつて結構な数がある。そこで、そういう、混血にたいする反感を持った政治家、今回は神界の一部お偉い方（これは予め調べて置いた）の情報世間に公表し、世論を操作したつてわけだ。歴史だなんだほざいていたが、あちらの思惑が権力やプライドにある以上、できることはたいして無かつただろう。そして、逆に、キキヨウという存在をそういつた混血に対する象徴として取り上げること、世界に認めさせたつてわけだ。ちなみに、キキヨ

ウの魂はシアの体から分離させ、新たに創った肉体に定着。今は普通に暮らせている。魂への干渉は俺の陰陽術の技術でできたし、肉体の創造は有と無の魔法でなんとかあったしな。これは死者蘇生じゃないからそれほど負担は無かった。シアとキキヨウは魂に干渉されてきつかったろうけどな。これらが終わった頃にはゴールデンウイークは明けていた。俺はというと、ある程度まで協力したあと、制限を越えた反作用がきて、絶賛不幸の真っ最中。当分部屋に結界張って閉じこもってよう。かつたるい。カイン達はまだこの町にいるようで、俺の不幸が終わったら会う予定だ。さ、寝よう。おやすみ。

第十八話 戦い終わってその後（後書き）

ちよつと強引だったかな。

ちなみに扇動したが、死人などは出さないように細心の注意は払っていた。そのため神王の協力が必要で説得したわけです。

設定1（前書き）

人が結構出てきたのでまとめたいと思います。
最初は天守学園関係者。

設定 1

魔力ランク 目安

SSS 測定不能

S 6000以上

A 3000～5999

B 1000～2999

C 500～999

D 100～499

E 50～99

F 0～49

魔法：世界の法則に干渉し操る。法則を逸脱することはできない。

法則内であれば相性や技量、魔力量に左右されるが最強と呼ばれることも夢ではない。

ない。

魔術：世界の法則を無視することができる。しかし、法則に沿ったものは魔法に劣る。

例えば、同じ火属性の技を使ったとすると魔術は魔法に劣る。

これは、注ぎ込む魔力や術の複雑さで覆すことはできるが効率は悪い。

また、術なので術者の技量そのまま表れるため使い手は極端に少ない。

しかし、技量があれば法則すら無視することができる。いわゆる反則^{チート}

属性：下位：火・水・風・土 中位：炎・氷・雷・大地 上位：光・闇・天空 極位：時・空間・有と無

なお、属性ランクが上がるにつれ魔力消費量が莫大になる。自分の適性属性意外を使用しようとするより更に魔力量が必要となるため、通常自分の適性を鍛えるし使用しない。
つまり適性意外も使えないことはないのだ。しかし、前述で述べたように圧倒的な魔力量が必要になる。

天守学園高等部一年A組

朝倉 純一 魔術師

気功術、陰陽術、魔法、魔術を使用

武器：天剣・桜姫

オールラウンダーだが、魔術不使用時は近接戦闘が多いため、近接戦闘を好む。

桜の魔術師や神桜とよばれるが、自分で名乗った訳ではない。

姿を隠すような黒いマントを羽織って桜の魔法を使用していたことから祖母のカレンと同一視されていたが、魔術を使用することから別人と判断され桜の魔術師と呼ばれるようになった。

神桜は勘違いされていた頃の名残。

通常時 魔力：C、気力：S、霊力：S

解放時 魔力がBランクまで上昇、霊力、気力も上昇。魔力操作ができるようになる。

属性：通常時は桜、基本下位から中位まで使用可能だが、魔力が低いため、上級魔法は一回打てていい方。（といっても、桜の魔法と併用するという意味でだが。）

封印解放時は極位まで使用可能。これは世界からの制限を無視できるため。その後、不幸になる。

使用魔法

幻想の桜：桜の花びらを用いて幻術を見せる

桜吹雪：大量の桜を創りだし操る

千変桜花：桜の花びらで武器や動物、魔方陣を構成し攻撃する。

魔術

無慈悲なる終焉：刻まれた対象にただ終わりという結果だけを与える。

動くことも、声をだすこともできずに終わる。

これは式を対象に刻むことで発動する。暴食は刻まれた空間と繋がっていたので、一緒に終わりを迎えた。

アイスファイア：凍る炎。見た目は炎だが、触れれば凍る。炎と違って防ぐと痛い目を見る。

気功術

瞬動術：気力を足に集中し高速で移動する。（魔力や霊力でも可）その完成形は足音も気配もしない。

浸透剄：零距离から全身の筋肉、気を使い衝撃を相手の内側へ伝える。

.....

土見 稟 次期神王、魔王候補

神にも悪魔にも凡人にもなれる男として、一躍時の人となった。今後強くなるかは作者次第。今のところ一般人。魔力は犬以下。

魔力：E、気力：B、霊力：D

属性：不明（魔力が低すぎるためかわからない）

.....

杉並 アンノウン

純一の悪友。情報操作が得意。

魔力：S、気力：A、霊力：A

属性：時・闇

.....

火鏡 焰 祖の五家が一つ、火鏡家の次男。

武器：紅の葬火くれないのそうが

炎の魔法を得意とする。咲夜に惚れているが、咲夜は一向に気づかない。

純一に敗れ、己の未熟さを認め、精進中。

使用魔法

ファイアボール：下級魔法。火の球で相手を攻撃する。

炎の槍：中級魔法。炎の槍で相手を攻撃する。

地獄の獄炎：闇と炎の合成魔法。位は上級。黒い炎で相手を焼き尽くす。

暴虐の炎熱：古代下級魔法。範囲内の対象を空気も含め完全に焼き

尽くす。

魔力：S、気力：A、霊力：C

属性：炎・闇

.....

神城 誠 天才

10年に一人の天才と呼ばれている。その実力は祖の五家と同等。中学時代最後のランキング戦では祖の五家を倒し、1位だった。

魔力：S、気力A、霊力：C

属性：地・水・雷・光

.....

天城 咲夜 世界樹の巫女

天城家次女。世界樹の巫女で精霊・ユグドラシルと契約を交わしている。

直系でありながら天空の属性を持たないことで家族意外の天城家や他の祖の五家の者達からあまり歓迎されていない。焰や瑞希は例外。天城家での立位置は微妙らしい。

門番の乾と牛頭とは仲が良く、二人も、咲夜を妹のように扱っている。

属性の樹は純一の桜と同様特殊属性であり、植物を自由に操れ、言葉を聞くことができる。

魔力：S、気力：A、霊力：A

属性：樹・地・水

.....

水無月 瑞希 祖の五家が一つ水無月家の次女。上に姉が一人、下に妹が一人いる。

咲夜の護衛。咲夜を大事にしている。

魔力：S、気力：A、霊力：C

属性：水・氷・光

.....

シアとキキヨウ

神王の娘で神族と魔族。紆余曲折の末、現在は二人で学園に登校している。

シアは稟にぞっこんであるが、キキヨウは不明。稟と純一に恩は感じている様子。

シアが神属性。キキヨウは魔属性

.....

ネリネ

魔王の娘。魔界の王女。稟のラバーズ。純一曰く難儀な体をしている。

ちなみに、クラスの女子で一番大きい。（なにがとは言わない）

属性：魔。

.....

芙蓉 楓

稟の嫁。なんでもこなすスーパーウーマン。非公認ファンクラブ
KKKが存在する。

属性は水

.....

緑葉 樹

稟の親友。趣味はナンパ。歩く変態。頭はキレル。非公式新聞部
に所属

属性は土

.....

麻弓IIタイム

魔族と人族のハーフ。胸はまな板。パパラッチ。非公式新聞部所属

属性：魔・火

.....

高等部二年

天城 皇月 祖の五家が一つ天城家の長女で次期頭首。

天空の精霊：ソラソリユート、通称：ソラと契約を交わしている。

天守学園生徒会長にして、前回のランキング戦では二年ながら、1位の実力をもつ。

魔力：S、気力：S、霊力：B

属性：天空・闇

.....

リア・アルタイン 天眼所持者

世界を見渡す千里の天眼の所持者。

純一の眼（正確には眼に封じられている魔石）に天眼が反応したので興味をもった。

お風呂上がりのにのむならフルーツ牛乳とコーヒー牛乳か、で激論を交わした末純一と仲良くなった。

許婚がいるみたいだが本人は嫌がっている。純一を毎朝起こすのを密かな楽しみにしている。

魔力：S、気力：B、霊力：A

属性：空間

.....

時雨 亜沙

驚愕の時雨の二つ名を持つ料理部部长。楓の料理の師匠。

属性：？

.....

カレハ

癒しのカレハの二つ名を持つ料理部副部长。妄想の世界へいつでもトリップできる。

属性：神

.....

高等部三年

火鏡 蒼也 火鏡家次期頭首

火鏡家長男。学園の3年。神炎をつかえる。弟思いの良き兄。

魔力：S、気力：S、霊力：C

属性：炎・雷

.....

神崎 大和

高等部三年。日向寮の寮長。魔力等不明。モブキャラで終わるか

も。

.....

中等部三年

ツボミ

カレハの妹。こちらも妄想の世界へトリップする。

属性：神

.....

教員

境 鏡花

魔法科教師。23歳独身。教員生活2年目。魔法学の先生らしく、魔法に有る程度詳しい。

少なくとも、純一の魔方陣分解を理解するほどには。

魔力：A、気力：C、霊力：C

属性：氷・水

.....

紅薔薇 撫子

社会科教師。25歳独身。祖の五家の生徒も分け隔てなく説教するため、生徒から人気があり一目置かれている。

.....

天城 玄三

天守学園理事の一人。詳細は次の設定をご覧ください。

設定1（後書き）

続いて外部の人間？です。

設定2 (前書き)

続きです

設定 2

天城家

天城 玄三 天城家前頭首。

元気な爺さん。天剣も精霊もないが、それでも最強の一人に数えられている。魔術師状態の純一と一度戦ってみたいと思っている。若干戦闘狂の気質がある。

通常時 魔力：S、気力：S、霊力：S

封印解放時魔力は測定不能のSSS、他は今のところ不明

属性：天空

魔法

天空魔法 虚空の天槍：無属性の魔力の塊を槍の形にして、天空から突き刺すように放つ魔法。無属性の魔力の塊のため、下手に属性魔法を使うと、それを吸収してより巨大になる面倒な魔法。ちなみに、この魔法、相反する属性を合成して無属性にしたわけではない。また、合成して作りだした無属性は他の属性魔法を吸収したりできないうえに、維持も長くもたず直ぐに消滅する。（ただの魔力の塊だから、世界に帰順してしまう。）

気功術

獅子咆哮波：気で獅子を型どり放つ技。

.....

天城 四朗 天城家現頭首。

天劍所持者。精霊は臯月に譲っているが、それでも臯月より遙かに上の実力をもつ。天城の直系

魔力：S、気力：S、霊力：A

属性：天空・時

.....

天城 月夜

咲夜と臯月の母親。冗談かわからないが、純一を息子にしたがっている。その実力は天空魔法は使えないものの、四朗と劣らない。二児の母親と思えないほどに若い。下手したら娘よりも若く見える。杉並曰くミステリー。特殊属性：夜所持。

魔力：S、気力：A、霊力：A

属性：夜

.....

七徳の騎士

カイン・ジブリール 七徳の？1。「希望」

神槍グングニルを所持。グングニルの効果は「対象を必ず貫き、貫

いた後は手元に戻る。この槍を向けた軍勢には必ず勝利する」のため、色欲の逸らす力とは逆の力となる。この場合、どちらの力がより上か、が重要になり、色欲の能力を越える力を使うには暴食の能力が邪魔であり、暴食を斃すには色欲が邪魔だった。

魔力：S、気力：S 霊力：A

能力：「希望」詳細は不明

属性：有と無

.....

ラピス・シーレンス 七徳の一人？2。「慈愛」

回復、解呪を得意とする。

魔力：S、気力：B、霊力：S

能力：「慈愛」詳細は不明

属性：水・光・時

.....

ゲイザー・アルガイル 七徳の？3。「正義」夢幻と天蓋のリーダー

夢や幻想に人生を狂わされた男。夢や幻想と魔法の関係を危険視し、それを管理するため、願いを叶える魔法の桜に目を付けた。自分の行いが正義だと信じ「正義」に狂っていった。

冒頭の戦いで純一に斃され、組織も完全に潰された。

武器はブリューナク。形状は西洋剣。実際は5つの短い槍が剣の形状となっているので槍。効果は「一度投擲すると稲妻となり敵全てを死に至らしめる灼熱の槍となる。」効果範囲があり、その範囲の敵が全て死ぬまで、5本の槍は飛び続けることになる。

初音島の戦闘で純一の前に敗れた。

魔力：SSS、気力：S、霊力：A（七徳の秘宝「正義」による強化後の値。）

能力：「正義」 己が正義を貫くほど、その力を増し、場合によっては世界の法則さえ正義に従う。

例えば、自分が絶対に正しい、そう思い込めば思いこむほど、世界の法則が正義に味方する（精霊が見方についたり、魔法を使用するのに魔力の消費が少なくなったりなど）。

純一とは反対の力。純一との決戦の際も働いていたが、純一が法則外の力を使ったことなどから敗れることとなった。魔法使いではまず勝てない相手。勝てるとしたら、天城 玄三 レベルか魔術師、後は、「自分の法則を持ってこれるもの」だろう。

属性：光・空間（「正義」の力を使うと属性はなくなるが、「正義」の能力があるため全ての属性を使えるよ うなもの。）

七徳？3ではあるが、個人の戦闘能力は七徳の騎士でトップ。

.....

七つの大罪

グランドロ 七つの大罪の一人。「暴食」

なんでも無尽蔵に食らいつくす。純一の無慈悲なる終焉で終わりを迎えた。

暴食の能力の弱点は一度に食える量に限りがあることだが、封印解放時それは有効。しかし、一度に食える量が大幅に増えるため、厄介な相手。色欲と組まれると更に面倒。この場合、グングニルでも貫けるか分からない。

なお、暴食の能力は魔法でもなく魔術でもない。純一の魔力操作と同じで、そういう現象であり、法則の外のちから。グランドロはその力の対価に、己の体を差し出したためあの姿になる。

魔力：S、気力：A、霊力：B

能力：「暴食」なんでも食らう

属性：暴食の能力を得る代わりに失われた。

.....

ラスファナ 七つの大罪の一人。「色欲」

能力は向かってくるものをなんで有ろうと逸らすことができる。因果律系の能力。しかし、それには限界があり、その限界を越えた力で投擲されたグングニルに貫かれ死亡した。能力の対価は不明。何かしらの代償は払っていた。

魔力：S、気力：A、霊力、A

能力：「色欲」逸らす力。正確には惑わす。その気になれば人の意識を色気で操ることも可能だが、純　　一や七徳の騎士などには効かない。暴食と組むとより効果を発揮する。

属性：色欲の能力を得る代わりに失っている。

設定2（後書き）

以上でここまでの登場人物設定を終了。

第十九話 「正義」の真実と不幸の前ふり（前書き）

色欲と暴食の狙いそして、あの男の狂気の原因が明らか

第十九話 「正義」の真実と不幸の前振り

Side リーア・アルタイン

いきなりですが、私は今とても不機嫌です何故なら……。

ドン！ドン！

「純！ここを開けなさい！」

純が部屋に閉じこもって一向に出てこようとしないからです。

「ご丁寧に結界まで張っており、合鍵を使っても扉は開きません。

何度もノックしているのですが一向に起きてくる気配はありません。せつかくゴールデンウィークが終わって純の寝顔を見れる理由ができたというのに、なんなんですかまったく。しかたありません。こうなったら……。

「空間座標……把握……固定……。

我が示すは我が掌握せし場。なれば、我が権限を持ちその空間を圧縮せん……。」

『スペース・コンプレックス……』
「空間圧……」「アルタイン先輩！」『』

ビクッ！

「何をやっているんですか！？」

いきなり声をかけられ、発動に失敗してしまいました。

振り返ると神城君が驚いた顔で立っていました。驚いたのはこっ

ちです。

「あなたでしたか、神城君。何って、純が起きないから起こそうと
していたのです。」

「いや、だからって、空間魔法・・・しかも上級魔法を使わなくっ
ても・・・。」

む、確かにそうですね。上級魔法はやりすぎました。

では改めて・・・。

「その空間はそこにあり、なれば我は干しよ」だからって、ランク
を落としても駄目です!」・・・む・・・。」

じゃあ、どうしろというのですかまったく。

「は、純一君は今日休むそうです。メールが来ていました。行き
ましょう?。」

なんと!純は私にはメールも電話もせず神城君には連絡したとい
うことですか?

そうですか!ふふふ、後で覚えておきなさい純!

・・・仕方がないので神城君を引き連れ食堂へと行きました。

Side 土見 稟

今、俺はまた頭をかかえる出来事に襲われている。

「初めまして。シアの双子の妹でキキヨウっていうわ。よろしく。」

ウォー！きゃ〜！

キキヨウがこのクラスに転入して来たからだ。

「聞いての通り、キキヨウはシアの妹、つまり神王の娘だ。

テレビで見て知っているやつもいると思うがな。というわけでつ
つちー、お前に任せる。」

やっぱりか・・・

キキヨウが転入することは聞いていたが・・・こんなに早くとは
・・・。

キキヨウを認めさせるため、残りのゴールデンウィークを純一や
杉並、神王のおじさんと魔王のおじさんが奔走してキキヨウを認め
させた。

そのやり方がまた、スケールが大きく、世論を味方につけるとか、
まあ、それが成功して今に至るわけだが・・・。

「「「またお前か！」「」」

この男子一同の殺気をどうにかして欲しい。本当・・・。

純一は予告通り休んでいるし、その話を天城さんにしたら見舞に
行っくていいだして水無月さん達が止めるのに苦労していたし・・・。

「よろしく。稟。」

まあ、この笑顔が見れたのだから、十分か。

「ああ、よろしくな。キキヨウ。」

「ところで……純一はやっぱり休みなの？」

「ああ、そうみたいだ。」

「キキヨウさん。何故純君の事を知っているのですか？」

しまった！天城さんに聞かれていたらしい。

キキヨウは……なにか面白い事を見つけた顔をしていた。

「ええ、知っているわよ？なにせ、ゴールデンウィークに私に色々してくれたんだから。ねえ稟？」

いや、確かにその通りだがその言い方はなんか誤解を招くのでは？

「色々……色々ですか……。因みにどんな事ですか？」

天城さん。怖いです。

「ふふ、ごめんなさい。それは口止めされてるの。私からは言えな
いわ。」

「へー、そうですか……。」「

ヒィ！目が、目が笑っていない。

キキヨウの言っていることは間違いじゃないうえで説明できない
ことが多すぎる・・・。

スマン純一、フォローできない。ご愁傷さまだ。

ほら、周りの男子も純一に恨みごとを唱えている。頑張れ純一！

Side 朝倉 純一

数日後・・・

俺は今、とあるカフェに来ている。目の前にはカインとラピスさん。理由は、二人に話を聞くためだ。

「まずは、この前は助かった。祖の五家達が動かなかったのはお前
らのおかげなんだろ？」

後、後始末任せてわるかったな。」

結界が破られた時、祖の五家や神王、魔王達にはれていたはずだが、あいつらが動かなかったのはこの二人のおかげだろう。

「いや、たまたまタイミングがあっただけださ。本来なら俺達二人
で相手をするはずだったからな。

むしろ遅れて悪かった。「正義」の件に引き続き「暴食」と「色
欲」まで・・・。

正直助かった。あの二人が揃っていると厄介だからな。」

「ふっ、良く言う。あんたなら何とかできたらうつ？」

この男の力は神槍だけじゃない。「希望」があるからな。

「いや、俺とあのコンビは相性が悪いからな。まあ、だからこそラピスも連れてきた訳だけだ。」

カインがそう言うところラピスさんは微笑みで答えた。

「で、なんで二人はここに？」

俺が一番聞きたかったのはこれだ。七徳の騎士のトップ？が何だつてそろつてきたか……。

別にこの二人でなくても良かったはずだ。

「そうだな。それを話さないとな。理由の一つは、単に人手不足だったってことだ。」

皆出払っていたんだよ。」

七徳の騎士全員？

「おいおい、全員か？そりゃ何でまた……。」

あの実力者達ができるような規模の事件が一度に発生するはずがない。……故意にか？

「まあ、狙ってなんだろうな。あんなに規模の大きい事件が一度に起こるのは不自然だし、裏で七つの大罪が動いていたって報告もあったからな。」

空間魔法で転移するにも、飛行魔法で飛んで来るにも手続きに時間がかかるからな。」

魔法が当たり前の社会になって随分経つがその過程で、飛行魔法

や数は少ないが空間魔法で密入国を図るものが増えた。

それを防ぐため、各国の国境に特殊な結界を張り、許可なく侵入すると永遠と捕捉され、国の魔法特殊部隊に追われたり、賞金がかかり、賞金稼ぎに追われるようになったりする。下手すると国家間の戦争にさえ発展する。

それを防ぐために、魔法を使って侵入する際は許可証が必要になる。この手続きは大分時間がかかるため、普通に飛行機を使った方が速かったりする。まあ、科学が発展したのはこういう面倒ことが増えたためでもある。

ちなみに、魔法使いによるハイジャックも増えたが、その対策として対ハイジャックの魔法使いも雇われるようになった。

「そうか、で？ 奴らの狙いは何だったんだ？ 奴らのはあの学園に有る宝具を盗りに来たと言っていたが？」

宝具とは、まあ、様々な力が宿った道具のことで魔具や神具、神器等々呼び方は色々だ。

それらの総称とっていいだろう。

「そうだな。それについては少し長くなるが良いか？」

「構わない。続けてくれ。」

「始まりは俺達が拠点にしている協会が襲われたことからだ。七徳の秘宝は知っているな？」

「ああ……。」

七徳の秘宝。「希望」「慈愛」「正義」「勇氣」「友情」「忍耐」「誠実」これらを象徴する七つの秘宝のことだ。

それぞれの徳に応じた力を所有者に与えると同時に、それらの力を周囲から吸収する能力をもつ。この力により、吸収されすぎるとその徳を無くしてしまう。

「襲撃者達の目的はその七徳の秘宝だったのだ。」

襲撃者達を斃し、秘宝を守ることはできたのだが、拠点も半壊。

これは、「勇気」と「友情」が暴れ過ぎたためだが……。

また場所がばれたこともあり、そこに留まっておく訳にもいれない。よって拠点を移す事にしたのだが、それまでの間、七徳の秘宝をその場に置いておく訳にもいかず……話し合った結果、純一が通っている天守学園で保管・封印してもらおう事にしたのだ。

ここは祖の五家が守護する地。そう簡単に手は出せないからな。

しかし、そこへ襲撃を掛けたものがいた。」

「……おい、そいつって、まさか……。」

「そのまさかだ。「正義」のゲイザー・アルガイル。あいつとあいつが秘密裏に組織していた夢幻の天蓋だ。」

奴らが俺達の拠点を襲撃し、天守学園も襲撃した。襲撃した時は休日の夜だったため、死傷者はでなかったが、魔法科の校舎は半壊。秘宝の一つ「正義」を奪われた。

その後のゲイザーの足取りは純一の方が詳しいだろ？」

「……ああ。それで？それと七つの大罪との関係は？」

奴が七つの大罪に情報を流すとは思えないが？」

「ああ、そうだ。ゲイルではない。どうやら夢幻の天蓋の一人らしいが……詳しいことは分からない。しかし、情報が七つの大罪に渡ったのは確かだ。」

俺達は「色欲」と「暴食」が日本行きの飛行機の乗ったという目

撃情報を得てこちらにきたのだ。」

そうか、「正義」が今回の一連の面倒事の発端か。

「大体のことは分かった。しかし、解せないのは「正義」の行動だ。奴はなんでこんな事をしたんだ？」

初音島の願いの桜を狙ってきた時、奴はこう言っていた。「夢は人を狂わす、幻想は人を破滅させる。魔法という夢や幻を現実にする力が当たり前となっている。このままでは危険だから、誰かが管理しなければならぬと。」そんなの、今さらだろ？魔法が世界に広まったのは開門より遙か昔の話だ。

なぜ奴はそんなことを今さら言いだしたのだ？」

そう、奴にとては少なくとも正しい事、「正義」だったはずだ。でなければ、「正義」の宝玉が奴に力を貸すはずがないし、「正義」の能力もあそこまで強力になるはずがない。

一歩間違えれば死んでいたのは俺だからな。

奴をそこまでさせたのはなんだ？

「それは・・・、そうだな。純一には知る権利がある。

ゲイル、奴には妻がいたのは知っているな？」

「ああ、確か、セシル・アルガイル・・・だったか？それが？」

確か、水色の髪の優しそうな人だったはず。

「彼女が殺された・・・。」

「な!？」

聞いた話だが、あの人も相当な実力だったはず……。

「殺した奴の名はアイザック・ヒューストン。そして奴が所属する組織の名は偉大なる魔法^{グラント・マジック}。」

魔法至上主義であり、失われた魔法を蘇らせるためなら平気で町一つ犠牲にする奴らだ。」

「ちよつとまで！？ 奴らの頭は俺が以前……。」

そう、俺が以前、怒りと復讐心に身を任せて殺したはず。

「そうだな。確かに、彼の組織のトップ、メフィスト・フェレスは純一が殺した。主要な幹部もな。」

だが、生き残りがいた。それがアイザックだ。そして奴はメフィスト達が残した技術を使い、ある石を作成しようとした。

純一の両親が犠牲になった時と同じだ。セシルもまた……、あの石は……賢者の石は魔法使いにとっての夢だからな。」

その結果、ゲイルは彼の組織の者達を皆殺しにし、そして……。

魔法を管理しようとした訳か。」

「そう……か……あいつも、俺と同じだったんだな。」

賢者の石なんていう幻想に囚われた奴らのせいで大切なものを失った……。

「待ちなさい。純一。確かに、怒りや憎しみに囚われ、復讐者となったところまでは同じですが、あなたは他人から夢や願いを制限し

ようとはしなかった。

「狂気に身を任せたゲイザーとは違う。」

「ラピスさん……。いえ、一緒ですよ。」

ただ、俺が踏みとどまったのはあの桜のおかげです。

あの桜が両親の思いを届けてくれなければ、俺も狂ってしまいましたよ。」

そうか、だからあいつは俺にあんなに同意を求めたのか……。

あの時、あいつの言葉に賛同していたら……。変っていたのかもな。

だが、それは、もしの話か……。

「だが、純一、君はここにいます。それが全てだ。狂っていたかどうかは問題じゃない。今、君がここにいて、誰かを何かを守るために力を振るっている。」

以前のように憎しみに囚われず……。それが、俺はとても嬉しい。」

以前の君は触れれば切れる、そんな雰囲気醸し出していたからな。」

「そうですね。私もいまの純一の雰囲気の方が好きですよ？」

「……。／／／」

面と向かって言われると恥ずかしいな、おい。

「ふっ、さて、それじゃ話はこれで終わりだな。」

「……なんだ、もう帰るのか？」

「ええ。新たな拠点も決まりましたし、今回来たのには秘宝の回収も含まれているんですよ。」

そうか、時間があつたら日本を案内してやろうと思つたんだがな。

「そうか、縁があつたらまた会おう。」

「ああ。」

「はい。」

そういつて、二人は席を立ち、去ろうとして二つの爆弾を落とすていった。

「そうそう、天城の御老功からの伝言だ。「いつか、全力の小僧と戦わせろ。」だそうだ。」

「あ！私も有りました。「誠実」から伝言です。」

「必ず会いに行くから。待つてなさい！」だそうです。」

「……は!?!」

「それじゃ、またな!」

「また会いましょう、純一!」

二人は、転移石を使ってどこかへ転移した。

「ちょっと待て!二人とも!」

おいおいおいおい!爺さんの相手もかつたるいのに、「誠実」が

来る？ふざけんな！不幸は昨日で終わっていたはずだろ！外にでれば鳥のフンは落ちてくるし、犬におしっこかけられるし、財布落とすし、車に轆かれるし、幽霊に憑かれるし、魔導書に呪われるし、隕石落ちてくるし、etcもう終わっていたと思っていたはずなのに……、

「不幸だ〜！！」

しかし、純一は知らない。本当の不幸はこの後にやってくることを……。

第十九話 「正義」の真実と不幸の前ふり（後書き）

次回、純一にとって最大の不幸が・・・。

第二十話 リアさんの許婚（前書き）

純一がやる気を出します。

第二十話 リアさんの許婚

Side 朝倉 純一

ゾク！

バツ！

ブン！ブン！

「……………なんだ、気のせいか？」

悪寒がして目を覚ました。部屋を見渡してみたが、なにもない。・

・気のせいようだ。

時間は……………まだあるな。もう少し寝よう。

もうひと眠りしようと布団に入ったその時……………。

カチャ……………キィ……………。

扉が開く音が聞こえた。誰だろう？そう思って、起き上がり、入ってきた人物を見ると……………。

「……………純……………なんで、入れてくれなかったのですか……………？」

右手に包丁を持ったりリアさんがいた。

「り、リアさん？な、な、何で包丁を持っていらっしやるんですか……………？」

リアさんは持っている包丁を一瞥すると、こちらを再び見た。その瞳はどこか違う箇所をみているようにうつろだった。

「・・・質問に質問で返さないでください。ねえ何でここ数日、部屋に入れてくれなかったのですか？ねえ！何で!？」

だんだん語気が荒くなってきている。どうしたんだリアさん。

「そ、それはですね、ど、どうしても外せない用事が、ご、ご、ございまして・・・。」

「へえ、それはあのキキヨウって子のことですか？純君？」

「ひい！」

いつの間にか咲夜まで・・・なんでここに？咲夜は朝弱いはずでは？

「そんなことより、純君。キキヨウって子のことを正直に話してください。」

キキヨウ？なんでここでキキヨウがでてくるんだ？

「キ、キ、キキヨウのこと？シアの双子の妹だろ？そ、それがどうしたって、い、言うんだ？」

「しらばっくれなくてください！ゴールデンウィークにあの子に何をしたんですか？いえ、あの子とナニをしたんですか!？」

なんか、ニュアンスが変わったか？とにかく誤解を解かないと・・・

だからって、二人してあれは無いだろ。ああ、・・・思いだしたくもない。

・・・着替えよ。

着替えるため上を脱いだ時だった。

カチャ・・・キィ・・・。

「純？起きていますか？」

リアさんだった。とりあえず、結界張っていたことは土下座をして許してもらった。

「純？・・・起きて・・・きゃ！」

「おはようございます。リアさん。」

「何を冷静に挨拶しているのですか！？早く服を着てください！」

そうはいうが・・・

「そう思うなら、出て行くなり見ないよう後ろ向くなりしてください。人の体ガン見して言う台詞じゃないでしょ。」

リアさんは上の台詞をいいながらこちらをじっと見ていた。台詞と行動あつてねー！

「・・・残念です。外で待っていますから早く出てきてください。」

「はい、はい。」

何が残念なのか分からないが、待たせるのも悪いしな。さっさと着替えますか。

.....

「さて、今日は皆に知らせる事がある。いよいよ来週に迫ったランキング戦についてだ。」

紅女史のその言葉に周りがざわつきはじめた。

ランキング戦だってよ！自信はどうだ？

ガヤガヤ、ワヤワヤ、

「静かにしろ！」

紅女史の一喝で皆黙った。さっすが惚れるぜ！
ギロ！

すみません咲夜さん。冗談です。

「おっほん。お前らにとっては高等部に上がって初のランキング戦だ。また、外部生は初めてになるだろう。そこで、簡単なルール説明を行う。まず、このランキング戦は2カ月に一回、3日間を通して行われる。このランキング戦の参加は自由だ。出たいものが出ることになる。が、魔法科の生徒は強制参加だ。実戦の魔法の実力を見て成績を決めるからな。普通科の生徒も参加すれば魔法学の単位に加算される。また、第3位までには好きな学科の単位2ヶ月分と優勝者には何かしら賞品が与えられる。この前は100万円だった

か？なお、殺しは厳禁だ。死なないようにフィールドに特殊な魔法が掛けられているがな。また、倫理、道徳に反することもだ。魔法を扱うならそこらへんは分かっているな？以上だ。何か質問はあるか？」

「俺から質問よろしいか？」

「杉並か珍しいな、なんだ？」

「その話を聞くと、真剣や銃などもいいのか？」

「真剣はいいだろうが、銃は実弾でなければ良い。魔法弾や模擬弾だな。」

まあ、そうなるか。魔法っていつでも万能じゃない。魔法を使用する前に鉛玉ぶち込まれたら即死だ。狙撃なんかされたらいちころだな。常時、障壁を展開できるような腕と魔力または、魔具なんかが無い限りは。真剣は、本当にその道を極めたもの位しか相手にならないだろうからな。

魔法は昔からあり、生活の一部となっではいるが、全ての人が自由に魔法を使えるわけではない。祖の五家のように高い魔力を持つものから稟のように圧倒的に魔力が低い者まで様々だ。多くの人は大体Dランクの魔力しか保有しておらず、機械に頼った方が早い。また、魔法に関する法律ができるにつれ、魔法を普通の社会生活の中で使用するのには制限がつくようになってきた。そのため、科学技術も発展したのだ。

「もう一つ、魔法しか使ってはダメなのか？」

「いや、そのような決まりはない。だが、ほとんどが魔法科の生徒だ。魔法以外で対抗できる奴は・・・朝倉位なものだろう。」

おう！俺の名前がでた。別に出さなくてもいいのに。

「了解した。以上だ。」

「他に質問は？・・・無いようだな。それでは朝のHRを終了する。日直！」

「起立！礼！」

・・・

HRが終わり、一時間目の授業まで少し時間があるなか、寝ようかどうか悩んでいると咲夜が話かけてきた。

「純君はでるのですか？ランキング戦？」

「いや、出る気はないぞ？かつたるいし。」

賞品や単位は惜しいが、かつたるい。

「おい、朝倉！何故でない！？」

「なんだよ、火鏡。別にいいだろ？俺がでなくても。」

何の関係がある。

「俺に負けっぱなしでいると？勝ち逃げはゆるさん。ランキング戦

で勝負しろ！」

「嫌だよ。かつたるい。それに、俺魔力が低いからな。連戦はきついんだよ。」

「お前程の気功術の使い手ならそこらの相手に魔法なぞ使う必要ないだろ？」

まあ、そのとおりだけどな。

「かつたるい。とにかく俺はでない。」

「まったく、俺に執着しすぎだ。火鏡はまだ何か言っているが無視だ無視。」

ガラガラ！

「ここに朝倉 純一はいるか！」

・・・今度はなんだよ一体・・・。

声の方を見ると、緑色の髪が肩まであり、同じ色の瞳をした、長身の男が立っていた。

目は少しつりあがっており、メガネをかけている。まあ、女にもてそうな顔立ちだが、神経質そうな気もする。

「朝倉君ならあそこですけど。」

「そうか・・・あいつか。」

「おーい、山田さん（仮）教えなくていいから。」

「貴様が朝倉 純一か？」

「いいえ、違います。」

「朝倉 純一だろ？」

「いえ、ジヨニーです。」

「嘘をつけ！どっからどう見ても日本人だろうが！」

「失礼な。日本人だからって、ジユニーって名前はないなんて誰が決めた！？」

「そ、そうか、それは失礼した。」

「・・・わかればいい。まあ、そんな日本人いるとは思わないがな。」

「貴様、馬鹿にしているのか？」

「おー、プルプルしてる。」

「いや、別に。で？あんた誰？」

「俺を知らないだ！？ふっ、いいだろう。教えてやる。俺はな「春明！」そう春明って誰だ！俺の自己紹介の邪魔をするのは！」

彼、春明（仮）の名前を呼んだのは、リアさんだった。

「春明、なにをしているのですか？」

おや、リアさん珍しく本気で怒ってる？

「なにつて、俺のリーアをたぶらかそうとする愚か者に警告をと思つてね？」

「誰が、いつ、あなたのものになりました！いい加減にしてください！」

このふたりどうい関係だ？

「おやおや、何をいうかと思えば、許婚じゃないか？」

「い、「許婚!?!」・・・。」

俺の台詞盗られた。

「それは、親が勝手に決めたことです！私は認めてません。」

リアさん許婚がいたのか？でも嫌がつているみたいだな。

「何度もいいますが、私はあなたが好きじゃありません。むしろ大っ嫌いです。近づかないでください。」

「おや、おや、恥ずかしがらなくてもいいだろ？」

「だから・・・!」

なんだ？この男？人の話聞いていないのか？もしくは本当にリアさ

んが恥ずかしがっているだけだと思っているのか？

・・・イラ・・・ん？

「春明さん、そこまでにしてください。皆迷惑しています。」

咲夜が止めに入った。知り合いなのか？

「おや、誰かと思えば、天城家の出来損ないじゃないか。君ごときが俺に意見なんて、ただで済むと思っているのか？」

咲夜が出来損ない？それに、見下している？天城家の者を？どうなっているんだ？いつたい。

・・・イラ・・・

「おい！春明！テメエ！咲夜が出来損ないだと！」

「なんだ、焰か。貴様、口のきき方に気をつける。それに、その小娘が出来損ないなのは周知の事実だろ？なんたって、天城家の直系なのに「天空の属性」を持っていないのだからな。」

「ツつ！」

天空を持っていない？それで、出来損ない・・・ね・・・。

・・・イラ、イラ・・・ん？なんでさつきから俺、いらついているんだ？

「貴様！」

「なんだ？戦るのか？」

一触即発のこの状況を破ったのは、水無月だった。

・・・イライライラ。

「どきなさい、焰。そいつを、殺します。」

水無月は魔方陣を展開していた。おいおい、その規模をこんなところであつぱなすのかよ。周りに被害がでるだろ。

「おい、おい。おまえまで出来損ないの味方をするのか？ふ抜けたな。瑞希。」

・・・イライライライラ

「あなたなんか私の名を呼ばれたくないですね。汚れます。」

「いつてくれるなおい！身の程を知らぬ小娘が！その身に分からせてやる！」

そういうと、春明（変態）の周りに風が集まり始めた。・・・これは・・・

「いい加減にしてください！」

リアさんの怒声が響き、静かになった。

「春明、あなたの勘違いっぷりにはいい加減に呆れました。しかも、

私の親友の妹であり私の友人を侮辱まで、はつきりいます。私はあなたが嫌いです。婚約も解消させていただきます。」

「な、ちよつと待ってくれ。親が決めたことだぞ？覆せるはずが・・」

「私の両親がなんと言おうと私は認めません。」

「俺は祖の五家の、神風の次期頭首だぞ？それを突っぱねるというのか？俺はあの皐月と互角以上の力を持っているのだぞ？それを・・」

イラ・・・。

へえ、皐月先輩とね・・・。確かに結構な魔力は持っているみたいだが・・・。

「だからどうしました。それに、皐月にも去年負けているではありませんか。」

「それは・・・！」

なんだ、負けてんじゃん。でも、結構な実力者なのは確か見たいだな。リアさんの制止があつた後も水無月や火鏡は隙あらば攻撃しようとしていたが手を出せずにいるからな。

「それに、あなたなんかより、私は他に好きな人もいますし・・・。」

「な・・・、だれだ！そいつは！」

イライライライライラ……

「それは……／＼／＼／＼／」

チラ

え、なんでこっちを見るのですかリアさん？

「やはり、貴様か！なぜだ！なぜ、この男がいい。」

え〜と？

「優しいからです。それに、あなたより強いからです。」

……恐縮です／＼／＼／

「こいつが……、魔力はたいしたことないだろ。」

悪かったな。大したことなくて。結構気にはいるんだよ。

イライライライライライラ……

「ええ、でも皐月のおじい様が認める力をもっています。」

「な、御老功がだと……!？」

「ええ、そうです。ですので、諦めてください。」

「……つまり、俺がそいつより強いってことを証明すればいいん

だな。」

イライライライライライライラ………

「は？誰もそんなこと……。」

「朝倉 純一、次のランキング戦で勝負だ。より上の順位のも
ンがリアと付き合うそれでいいな。」

イライライライライライライライライライライラ………
ブチ！

「ちょ、なにを言ってる……。」

「いいですよ。」

いい加減に頭に来た俺はそれを了承していた。

「……ええ………!?」

なんか皆驚いているようだが、そんな事はどうでもいい。こいつは
なんかむかつく。リアさんが嫌がっているのにも気付かず、咲夜を
出来損ないと呼ぶ……。今すぐぶちのめしたい。

「その代わり！俺が勝ったら、リアさんとの婚約破棄そしてリアさ
んや俺の周りに手をださない。そして……咲夜に言ったこと、
咲夜に土下座して謝れ！」

「いいだろう。その条件を飲んでやる。」

「約束守れよ？」

「神風の名に誓おう。」

絶対に勝つ……。

……

Sideria・アルティン

ボー……

……ア

純が戦ってくれる……

……ア……ル……

ふふ……

……タ……

私のために……

……ルティン……

次会った時どんな顔でしたら……

「アルティン！」

「はい！」

私はいきなり呼ばれたので勢いよく立ちあがっていました。

クスクス

みんな密かに笑っています。

「考え事もいいが、今は授業中だ。気を付ける。分かったら席に着け。」

「・・・はい、すみませんでした。」

失敗してしまいました。恥ずかしいです。臯月もこちらを心配そうに見ています。

キーンコーンカーンコーン

「む、終了だな。では、日直、号令。」

「起立、注目、礼。」

授業が終わると、臯月が話かけてきました。

「どうしたの？リア？授業中にボーっとするなんて珍しいじゃない。」

「それは・・・」

どうしましょぅ？話してもいいのですが、そうしたら、春明の所に

殴りこみに行きそうですし……。

「もう、朝からその調子じゃない。私が朝の生徒会の会議を終えて戻ってきたらもうその状態だったし……悩みがあるならいってよ。それとも……そんなに信用できない？」

皐月が寂しそうな顔で尋ねてきました。

「そ、そんなことはありません！皐月のことは世界一信用しています！」

思わず声を荒げてしまいました。

「ふふ、ありがとう。なら、教えて？どうしたの？」

……ここまで言われては答えない訳にはいきませんね。

私は今朝あったこと、春明が咲夜さんのことを出来損ない呼ばわりしたところまで話しました。

「……そう、春明が……。よし！殺してこよう……。」

皐月が良い笑顔でそんなことをいい、杖を持ってどこかへ（春明の所でしょうが）行こうとしたので、止めました。

「待ってください。まだ、続きがありまして……。」

そうして続きを、そして純がランキング戦にできることを話しました。

「そう、純一君が……。わかったわ。春明をボコボコにするのは

純一君に譲るわ。」

どうやら、落ち着いてくれた様です。

「でも、・・・ふふ、純一君のことだから、かったるいとか言っ
て、断ると思ったのに、どうしてかしらね？」

皐月は何か面白いものを見つけたような顔をしています。むく、こ
うなった皐月は少々面倒ですね。

「いえ、この場合どちらのためかしらね？」

「・・・え？」

どちらのため？なんのことでしょうか？

「純一君が参加を決めた理由よ。だって、純一君が出した条件はリ
アの婚約破棄と咲夜に謝ることでしょう？どっちのためなのかな
・・・ってね？」

「あっ・・・」

そうでした。私のためって思いこんでいましたが、純の出した条件
は咲夜さんことも含まれていました。

・・・純はいったいどっちのために動いたのでしょうか？

・・・

今は昼休み、いつもなら稟達もいるのだが、今ここには俺とリーアさん。後は祖の五家の火鏡、水無月、咲夜、皐月さんに、火鏡の兄であり、生徒会副会長の一人である3年の蒼也さんに同じく生徒会会計で3年、水無月の姉でもある瑞穂さん。自己紹介は先に済ませている。

「えーと、それで？俺が呼ばれた理由はなんですか？」

まあ、今朝の事で呼ばれたんだろうが・・・

「うん。まあ、今朝の事でね。話はリーアから聞いたわ。ごめんね。春明が迷惑をかけたみたいで。同じ祖の五家として謝るわ。」

そう言っつて皐月さんが頭を下げた。

春明とは神風 春明のことだろう。咲夜に聞いた話では魔法科3年で神風家の次期頭首らしい。

「頭をあげてください。別に皐月さんのせいじゃないですから。それよりいくつか聞きたいことがあるんですが、いいですか？」

「ええ、聞きたいことは大体分かっているけどね。リーアと咲夜のことね？」

「はい。そうです。春頭はリーアさんと許婚って聞いていましたが？」

「春頭？」

「春明って人のことです。自分の都合のいい様に言葉を解釈する幸

せな頭の持ち主だから、春頭です。」

「プツ、春頭・・・確かにね・・・。」

うん、皆想像できたようだなによりだ。

「そうね、そのことについてはリアから説明してもらった方がいいでしょう。」

リアさんに視線を向けると、リアさんは話始めた。

「私の家、アルティン家はそれなりに有名な「杖」のメーカーなのですが、知っていますか？」

「あゝ・・・あの・・・。」

アルティン家は複数ある「杖」のメーカーでも結構な有名どころだ。「杖」には魔方陣の登録や魔法の術式の保存などいろいろあるが、登録できる術式や魔方陣の数や保存できる式の複雑さも限界がある。アルティン家のメーカーが作成する「杖」は再現できる術式の精密さが他よりも高く、上級者には特に人気がある。

「・・・今、気付いたみたいですね。は、それは今はいいです。それで、祖の五家の方々と交流があった訳です。その際、咲夜とは年も近いこともあり、すぐ仲良くなれたのですが、春明・・・純風に言えば、春頭ですね。パーティーで同席する事があってその時に彼がどうやら私に好意をいだいたようで、それで・・・。」

「春頭が親に話して、許婚にしてもらったと・・・。」

「はい。私の父も祖の五家とのつながりがより強固なものになると喜んで、了承してしまっただんです。私と母は反対したのですが、聞く耳持たずで……。」

うくん、なんとというか、やっぱり……潰そう……。」

「リアさんの事情はわかりました。それで、咲夜は？」

「それは、私から話すわ。」

皐月さんが話をはじめた。咲夜は俯いている。

「純一君も聞いた通り、咲夜は天城の直系なのに天空の属性を持っていないわ。これは、これまで一度もなかったことなの。」

「一度もですか？そちらの方が珍しいですよね？」

いくら属性や魔力量が遺伝するからと言って絶対ではない。親が魔力が多くても子は少ないこともあれば、親に魔力が無くて、子に莫大な魔力が宿ることもある。

「ええ、一度もなのよ。でも咲夜は違った。咲夜は変りに「樹」という特殊属性を持っているのだけど、周りはそれじゃ認めてくれないからね。祖の五家じゃ咲夜のことを出来損ないと揶揄するものも多くてね、私達が別宅で暮らしているのは純一君も知っているでしょ？それにはそんな理由も含まれているのよ。どんなに魔力が多くて、才能や実力があっても天空の属性を持っていないってだけでね。」

「……そうですか。」

あの爺さんや四朗さん達がそれを許すとも思えないんだがな。あの親バカ達が咲夜を馬鹿にする発言を許容するはずがない。

「もちろん。そんなことを言った人達はお父さん達に半殺しにされていただけね。」

あー、やっぱり。

「でも、流石に、皆を半殺しにはできない……というかしょうとしたのを咲夜が止めたのだけど……。」

「禍根は残った……と。」

「そ。それにそのことが一般の人にも広がると祖の五家としての威厳がとか言い出す人も現れてね。咲夜は、幼少期、家からでられなかったの。」

「じゃあ、今はなんで？」

「それは、世界樹に認められて精霊と契約したからよ。樹の属性の相性が良かったのかどうか、それは世界樹が咲夜しか分からないけど契約できた。そして、世界樹の巫女となった。そうなれば、存在を秘密にすることはできない。その結果、周りの者もしぶしぶながら了承したのよ。」

かったるいな、祖の五家つてのも。

「それで、純一君？今の話を聞いてどう思う？」

「どっ、とは？」

「あなたも、咲夜のこと出来損ないって思う？」

そういうと、皇月さんからかなりの殺気が放たれた。

すげーな、おい。まあ、それだけ大事ってことなんだろうな。

「かつたるい。何をいうかと思えば……。少なくとも、俺にとっては咲夜は出来損ないじゃないですよ。そう呼ぶ理由がないですから。頭もいいですし、運動神経だってトップクラス。魔法の腕や術式の構築なんて繊細だし、ちよつとドジだったりしますけどね。どこに出来損ないの部分があるんですか？」

そう言うと、咲夜は今度は顔を真っ赤にさせた。俯いているから実際はわからないが耳が真っ赤だ。

「ははは、朝倉君は咲夜ちゃんのことを良く見ているんだね。」

「まあ、同じクラスですし、席も隣ですから。」

「……そういう意味でいたんじゃないんだけどね。」

蒼也さんが何か言っていたが小さくて聞き取れなかった。

「だ、だったら純君だって出来損ないじゃないです。魔方陣を一瞬で分解する腕に、お爺ちゃん相手に見せたあの魔法、どう考えても、出来損ないって呼ぶレベルじゃないですよ。」

「咲夜……。俺は出来損ないだよ。」

「なんでですか！」

「ふー、あまり進んで話したくないんだがな。俺には目標にしている魔法使いがいたんだよ。だけど、俺はその人のような魔法使いにはなれなかった。あの人の様な・・・子供を笑顔にさせる、ささやかな夢を叶えることができる、そんな魔法使いにな。怒りに、憎しみに復讐に囚われて・・・。だから俺は出来損ないなんだよ。桜の魔法使いとしてな。」

・・・皆黙っちまったな。だからあまり話したくなかったんだが。

「あーもう！今は俺の話じゃないだろ。とにかく、俺は、咲夜は出来損ないじゃないと思っっているってことです。」

「・・・そう、ありがとう純一君。妹を今後ともよろしくね。」

「はい。」

「今度はこっちから質問。なんでランキング戦にしようと思ったの？最初はでないつもりだったのよね？」

「それは、春頭がランキング戦で勝負って言いだすから・・・。」

「そうね。じゃあ質問を変えるわ。咲夜とリーアどっちのために出ようと思ったの？」

「・・・は？」

どっちのため？いや、俺はあいつがむかっていたからで・・・でもな

んでむかついたんだ？

リアさんの許婚って聞いて？咲夜を馬鹿にされて？

咲夜とリアさんも興味津津な様子でこちらをみている。

「どつちのためかって聞かれると困るんですが、ただ、あの野郎をぶっ飛ばしたいって思ったんです。リアさんが嫌がっているのに気付かず勝手に許婚とか言ったり、咲夜のことを出来損ないっていつたり……。俺にとって大切な二人を馬鹿にされて。だから、どつちのためかって聞かれると、どつちでもなく俺のためですね。」

そう。結局は俺のためだ。俺がリアさんや咲夜を馬鹿にされるのに腹がたつたからだ。

そういうと……。どういうわけか二人が真っ赤になった。

「お前、よく臆面もなくそんなことがいえるな。」

火鏡が呆れたようにいつてきた。

「ん？なにが？」

「……。自覚無かよ。」

なんだいったい。他のみんなも苦笑いしてるし。

「つまり、純一君は二人を馬鹿にした春頭をぶっ飛ばしたいと、そういうわけね。」

「ええ、まあ。」

「ふふ、お姉ちゃんとして、親友として嬉しく思うわ。じゃあ、春頭をぶっ飛ばすのは純一君に任せたからよろしくね？」

「ええ、任せておいてください。」

そういつて皐月さんと俺は固い握手を交わした。

Side天城 咲夜

純君は用があると行って先に教室へ戻り、今は純君を抜いた面々でまだ屋上にいる。

「彼が朝倉 純一ね。皐月が興味を抱くのがわかるわ。実際話をしてみたけど、おもしろそうな子ね。」

瑞穂さんが純君をそう評した。

「確かに、だが、彼は春明に勝てるだろうか？それに、ランキング戦は連戦だし、春明に当たる前に負けるかもしれない。それに、彼は魔力が低いようだからね。連戦はきついだろう。」

確かに蒼也さんの言う通りだ。三日に分けて行われるとは言え、勝ち進めば進むほど、大変になってくる。相手も同じ条件ではあるけど、純君の魔力不足は心配である。

「それは、大丈夫だと思うわ。なんていったて、家のお爺ちゃんに天空魔法を使わせる位だからね。それに、それでもまだ全力じゃないみたいなのよ。・・・お爺ちゃんが言うにはね。不謹慎かもしれないけど私は純一君の全力が見てみたいのよ。普通の相手じゃまず

出さないってお爺ちゃんはいってたけど、今度のランキング戦は純一君にとって負けられないはずだからね。もしかしたらって……ね。」

「「「な!?!?!」」」

リアさんや蒼也さん、瑞穂さんに火鏡君、瑞希ちゃんは驚いた様子だった。私も最初聞いた時は驚きましたが……。それにしてもお姉ちゃん、純一君の全力を見るの諦めていなかったんだね……。

……次回、ランキング戦です。

第二十話 リアさんの許婚（後書き）

すみません。ダイヤミック・デイズをやるため、一週間ほど更新が止まります。

第二十一話 ランキング戦開始(前書き)

戦闘シーンはほとんどないようなものです。

第二十一話 ランキング戦開始

Side 朝倉 純一

「これより、ランキング戦の開催を宣言する。皆、持てる力、技術を發揮して戦うように。」

ウオー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

咲夜の爺さんの宣言でランキング戦が開催となった。爺さんが何故ここにいるかという点、天守学園の理事長だからだ。この学園の理事は祖の五家の頭首が兼任しており、四朗さんも理事の一人だ。といても祖の五家の頭首はほとんど学園におらず、理事業はもっぱら爺さんがやっているらしい。入学式にいかなかったがそれは神王と魔王の相手をしていたかららしい。これは咲夜から聞いた。

「さて、いよいよ始まりました！ランキング戦。司会・進行は放送部員に変わりました。非公式新聞部所属、1年A組 麻弓「タイムがお送りいたします。解説はこの方々、魔法科教師 境 鏡花先生と、理事長の天城 玄三さんです。」

「よろしく願います。」

「よろしく頼むぞ。」

何故お前がそこにいる？麻弓。正規の放送部はどうした。

「なお、放送部の方にはお話して譲ってもらいました。さて、今年

度始まって最初のランキング戦、誰が優賞するでしょうか？」

「そうですね、新入生の力はまだ分かりませんが、有力はやはり、祖の五家の天城 皇月さんかと思います。」

「そうですね。去年のランキング戦は天城選手がトップでしたから。理事長先生はどう思いますか？」

「そうじゃな……。今年の新入生には面白いのが結構いるからの。もしかしたらもしかするかもしれんの……。」

爺さん……。こつち見ながら言うな。

「そうですね。では理事長先生の中で最有力候補は……。っと、どうやら対戦表がでたようです。」

麻弓の言った通り対戦表が校庭のディスプレイに表示された。ちなみに、戦う場所は校庭に複数用意されている。ちゃんとそれぞれ境界が張ってある。随分金がかかっているな。

「純君！対戦表を見てください！」

「ん？」

咲夜が焦った様に言うので、見てみると……

「……かったるい。」

これは、かったるい。

ブロックは大きくA、B、C、Dの4つに分かれており、俺はCブロックなのだが・・・

「なんで、CとDブロックに集中しているんだ？」

それではこれまででできた人物のブロックを紹介しよう。

Aブロック：神風 春明

Bブロック：リーア・アルティン、水無月 瑞希

Cブロック：朝倉 純一、火鏡 焰、火鏡 蒼也、水無月 瑞穂、
天城 咲夜、杉並

Dブロック：天城 皐月、神城 誠

うん、なんで俺のブロックこんなに固まっているんだ？

「なんで純のブロックだけこんなに集中しているのですか!？」

「うん。どう考えても、仕組まれているね。フッフ・・・」

リーアさんが激昂し、皐月さんが暗い笑いを浮かべている。

まあ、仕組まれているんだろうな。いくらなんでもこれは固まりすぎだしな。しかも、順等に勝進めば、最初に火鏡、次に瑞穂さん、その次に咲夜、準々決勝で蒼也さんか杉並、準決勝で皐月さん。決勝で春頭となる。かつたるいことこの上ないな。

「純君！これはどう考えても仕組まれています。抗議をしに行きま

しょう!」

咲夜が率先して抗議をしに行こうとした。

「あゝ、いいよ、別に。抗議なんて。」

「何故ですか!?これじゃいくら純君でも……!」

まあ、言いたいことは分かるが、爺さんがいてこれを見逃している
つてことは……勝って見せると、そういうことだろう。

「俺が負けるとでも?」

「つつ!それは……。」

まあ、そう思うのも無理はないか……。

「負けないよ。負ける理由がない。悪いが、今回は本気で行かせて
もらう。お前らも、手加減なんかしない方がいいぞ?いくら祖の五
家だからといっても俺相手じゃすぐ終わっちまうぜ?」

さて、まずは一回戦からか。どんな奴かな……。

……

Side 天城 咲夜

今は一回戦は最後の試合、純君の試合だ。

純君の去り際の台詞、純君らしくない台詞に始めは驚いていました

が、その後、皆闘志を燃やしていました。純君なりに私達が手加減しないようにとということと言った台詞かもしれませんが、みんなのプライドを刺激していました。かく言う私も、相手にされていけないようで少々頭にきてしまいました。絶対にひと泡吹かせてやるうと思えます。

試合に意識を戻すと、相手の選手は同じ一年の魔法科の方で水属性の魔法が得意なようだ。水を鞭のようにしならせて攻撃しているが、全て簡単に避けられている。きりが無いと思ったのだろう。水の鞭を消し、詠唱に入っていた。純君相手に長い詠唱は致命的だ。終わるかと思っただが純君は詠唱中で隙だらけなのに攻撃しようとしないうとうとうしている内に詠唱が完了し、水属性の中級魔法「水圧の弾丸^{レット}」を展開した。中級魔法で、威力は中級魔法にしては低いが数が多く速い。しかし・・・、その放たれた弾丸全てを純君は避けて見せた。正確には直撃コースのものは掴みとっていたようだ・・・相手の選手はそれで戦意が喪失したのか、降参した。

「あれを瞬動術も使わずに・・・、俺の「炎の槍」の時も使う必要無かったんじゃないか？」

火鏡君が純君の試合を見てそう呟いていた。

確かに、火鏡君の時より数は少なくや威力は低い様ですが、速度はそれより早いですから、瞬動術で避けると思っていたのですが・・・。そんな純君の戦いを見て、皆はむしろ更に闘志を燃やしているようでした。リーア先輩や私の件もあるはずですが、この様子だと皆さん手加減する気はない様です。まあ、純君もこれが狙いなのでしょうけど・・・。

本当に大丈夫ですよね？純君？

第二十一話 ランキング戦開始(後書き)

次回VS火鏡
焰

第二十二話 VS火鏡 焰(前書き)

今回は戦闘メインです。

第二十二話 VS 火鏡 焰

Side 朝倉 純一

あれから勝ち進み、これから今日最後の試合が始まる。相手は、火鏡 焰だ。

「よう、無事勝ち進めたようだな。なによりだ。」

「俺が、あの程度の奴らに負けるはずがないだろ？あの時は負けだが、今度こそ勝たせてもらう。」

やる気まんまんだな。

「さて、この短い期間でどれだけ強くなったのか楽しみだ。」

拍子抜けさせてくれるなよ？

「それでは、本日最後の試合を開始します。・・・始め！」

その言葉と同時に俺は瞬動術で接近し、拳を振るったが・・・

ブン！

「おっ？」

どうやら反応できたようで避けられてしまった。そして・・・

「舐めるな！」

火鏡の槍「紅の葬火」が振るわれた。俺はそれを紙一重で避け、反撃しようとしたが……

至近距離で空気が爆発し、強烈な熱と爆風そして爆音が襲ってきた。

「くっ！」

熱自体は障壁で防ぎ、爆風は抵抗しないようにし吹き飛ばされる形で受け流したが、耳がやられたか……。戻るまで少し時間がかかるな……。そう考えながら気配で火鏡の場所を探してみると……後ろか！

後ろから突を放たれたため、今度は大きく距離を取ることにした。

すると再び紅の葬火から爆発が起こった。

更に、接近して連続して槍を振るってきたので爆発の威力を考え、距離を取って避けるようにしたが、やりづらいな。こうも距離を取らなければならぬと反撃しづらいつと！

槍が大きく横薙ぎに振るわれたの。大きな隙ができたが爆発のせいで接近しにくいため、大きく距離を取り体勢を立て直すことにした。先ほどから何度も槍が振るわれているが、爆発する時としない時があるな。特に法則性はない。どうやら槍自体が魔方陣を常時展開しており、本人の意思で爆発を起こせるようだな。

本人に影響が無いことも考慮すると指向性の爆発魔法「ディレクティブ・エクストラ意思を持つ爆炎」ってどこか。なら……

「よつと！」

再度接近し、槍に向かって掌底を放つとパキーン！という音と共に魔方阵が分解された。そのまま槍を軸に回転し、蹴りを放ったが障壁で防がれ、火の玉を放つて来たため、再び距離をとった。

「いやー、なかなかやるな。確かにあの時とは違うようだ。俺の動きについてこれているみたいだしな。」

「……………」

何か言っているみたいだがまだ耳が聞こえないな。唇の動きを読むと「ここまでは準備運動、まだまだこれからだ」……つてとこか？さて、ならこれはどうするのかな？

『舞い散れ幻想の桜』

桜の花が舞い始めた。さて、それじゃあ行きますか。俺は火鏡に幻を見せ、一度火鏡の横に回り込み、接近しようとしたが……まず！あれは！火鏡が発生させている魔方阵をみて思い切り距離を取り、障壁を展開した。分解するのは間に合わない。その直後……炎が視界を埋め尽くした。

Side 火鏡 焰

今、俺の周りは炎が埋め尽くしている。これは俺が使った上級魔法で「焦土なす炎海」バーニング・グラウンド自分の周囲を炎で埋め尽くす魔法だ。

奴の『幻想の桜』は桜を用いた幻影魔法だ。今の俺では本物か幻影

か見分けはつかないが、桜の花さえ焼き払えば幻影は意味を無くす。しかし桜の花は少量が広範囲に広がっているため、周囲を焼き払うしかない。

見失った奴への牽制と『幻想の桜』の対策とは言え結局、周囲一帯を焼き払えば幻術もなにも意味をなさないわけだから弱点を突くわけではなく常道手段な訳だが……

「やったか？」

俺は再度意思を持つ爆炎を紅の葬火に展開し、奴を探した。炎はまだ勢いよく燃えているが……発見した。炎の隙間から奴が見えた。障壁を展開しているようだが、薄い。これなら！

奴に向かって一直線で駆けていき紅の葬火を突き刺した。すると葬火は障壁ごと奴を貫いた。

「やった！」

そう思ったのもつかの間、刺したはずの奴が破裂し、桜の花が舞った。

「なっ！」

その瞬間、横から衝撃が襲い吹き飛ばされてしまった。動揺してしまい、反応が遅れてしまった。

「ぐはっ！」

なんとか急所は外し立ちあがると、全身から煙を上げて立っている

奴がいた。全身からは凄い量の汗が流れている。尋常じゃないほどの・・・いや、本当に汗か？まるで頭から水をかぶったような・・・まさか・・・

「水属性の魔法で障壁が何か張っていたのか？いや、それ以前に、水属性を使えたのか？貴様の少ない魔力で？」

「まあ、水属性も持っているからな。後、水だけじゃ無理だから。水属性の障壁張って、風の魔法で炎や熱を上には逃がしたから。同時に風の魔法で俺の周りの炎を誘導してやれば炎自体が俺を隠してくれるからな。ああ、もちろん風属性も持っているぞ。しかし、これは流石にきつかったぞ。危なく蒸し焼きになる所だった。」

こいつ軽く言っているが、そう簡単にできる芸当じゃない。いくら水属性と風属性を持っているからと言って、更にはあの程度の魔力で、一瞬で、しかも炎が荒れ狂うなか蒸発しないレベルの水を作り出す技術や風の魔法を操る技術。流石に無傷ではないようだが、むしろあの中に潜んでいてこの程度ですんでいるとは・・・面白い！

フレイム・ランス
「炎の槍！」

今度は無詠唱で炎の槍を放ち、詠唱を開始した。

「その火は、全てを焼き尽くす破壊の力、その象徴、その力により我に仇名す者を焼き払え！祖は荒れ狂う炎」一暴虐の炎熱《tyranny extreme heat》

空気さえ焼き尽くす炎を放ったが、まだまだ、まだ足りない。奴がこれにくたばるとい思えない。俺は紅の葬火に登録している魔方陣を使用した。

『サイクロン・ストーム
竜巻の嵐』

俺には風の属性は無いが、属性をもつものが魔法を「杖」に登録することで使うことができる。この魔法は風属性の魔法を使える家のものに事前に登録させた風属性の上級魔法だ。風は炎を増幅させる。その結果……

『一暴虐の炎嵐《tyranny frame storm》』

威力が強化された炎が嵐の様に襲いかかっていった。

これでまだ立っているようなら、あれを使うしかないが……

Side 天城 咲夜

「すごい……」

火鏡君の成長はその一言だ。以前に純君と戦ってまだ2ヶ月程しか経っていない。それなのに純君の動きについていけるようになっており更に、一暴虐の炎嵐《tyranny frame storm》という炎と風の合成魔法。風で炎の威力が上がっている。

「おーっと！これは、一暴虐の炎熱《tyranny extreme heat》と竜巻サイクロン・ストームの嵐の合成魔法か！？凄い威力です。まるで炎の嵐！朝倉選手これまでか！？」

「いくら朝倉君でもこの魔法の直撃を受けてはひとたまりもないでしょう。」

麻弓さんの言葉に境先生は同意の言葉を口にした。確かに、これはいくら純君でもそのまま受ければただじゃ済まないと思いますが・

「そうじゃな。直撃であればいくら小僧とて無事ではすまんだらうて。」

「それはどういう意味ですか？理事長？」

「そのままの意味じゃよ。ほら試合が動くぞ。」

お爺ちゃんという言葉に舞台へ視線を戻した。

S i d e 火鏡 焰

あれから数分、炎は未だ荒れ狂い収まる事を知らない。

「・・・もう、いいだろう。」

俺はもう頃会いだと思い、炎を収めることにした。

『フット・アウト我が火よ消えろ』

その言葉とともにだんだん炎が収まっていった。奴はどうなった？しばらくして炎が完全に消えるとそこに奴の姿はなかった。

「なに!？」

このフィールドは中にいるものが死なないように特殊な魔法が掛け

られている。燃えて消滅するようなことは無いはずだ。周囲を見渡すがどこにも奴の姿は見えない。桜の花さえ見えない。幻術は使えなかったはずだ。いつたいどこに……？

そんな時、足元から震動が伝わってきた。なんだ？地震か？だが、おかしい、震動があるのは俺の周りだけらしい。しかも、なにか違う音が聞こえる……いつたい？

そして足元に視線を向けると、

ズガン！

顎に衝撃が直撃した。

いつたい……なにが……吹き飛びながら揺れる頭を気合いでねじ伏せ視線を俺が立っていた場所へと向けると奴がそこに立っていた。右腕に桜の花を纏わせて。

Side 朝倉 純一

『一暴虐の炎熱《tyranny extreme heat》』

その言葉と共に今までで最大の炎が放たれた。前の時より威力上がっているか？

『サイクロン・ストーム
竜巻の嵐』

つて、不味い！炎を風で昇華させる気か！しかし、避けるにも周囲は炎に包まれ逃げ道は塞がれている……が、360°。全てって訳じゃないよな俺は大地の魔法で舞台に、あの魔法で決れるであろう

以上に深い穴をあけ、そこに入ると今度は土の魔法で土を操り、穴に蓋をした。空気の道があると炎が入り込んでくるので空気さえ漏らさないように、浅いと炎で挟れるので問題ない位に。

この状態じゃ持って数分。それ以上は息が持たない。

「桜よその花びらを鋼鉄さえ切り裂く刃と化し渦巻け」

『桜花・乱舞刃』

俺は桜花・乱舞刃を右腕に展開し渦を巻くように操作した。桜のドリルだな。あとは、時間の問題か。

息が切れる前に火鏡の炎の範囲から逃げる必要がある。

掘り進めること数分流石に息も限界だ。向きを上に変え地中からでることにした。

後、もう少しだ。行け！

思いつきり右腕を突き出し地中から抜け出した。同時に息が限界に達し集中力が切れてしまい、乱舞刃も解除された。地中から抜け出ると同時に誰かを殴り飛ばしたきがしたのだが・・・

見ると火鏡が中を舞っていた。あ、火鏡だったか・・・。

吹っ飛びそのまま倒れるかと思いきや足は震えているがまだ立っている。おー、よく立っているな。

「貴様、ゼエゼエ、どこから、ハア、現れやがる!」

なんか驚いている。

「どこからって地中から。逃げ場無かったから強引に作りだした。ヤバかったぜ？炎が来ないように完全密閉したからな。窒息するところだったぜ。」

いやほんと、少し遅れていれば地中で孤独死ですよ？あれ？このフィールド地中はどうなるんだろ？見た感じこの場自体にかけられているから地中も大丈夫そうだけど、まあいいか。試す気にはならん。

「ところで、息が上がってるぜ？二重の身体強化は流石に辛いか？」

「・・・気づいていたか。」

「まあな。この短期間でいくらなんでも身体能力が上がり過ぎていく。以前戦った時、お前はどう見ても遠・中距離型・・・純粋な魔法使い型だったしな。なら、なにかしら仕掛けがあると思っても不思議じゃないだろ？」

しかし、通常の魔力による身体強化に加え、あれは熱により身体能力の基礎を強化する魔法か・・・基礎を上げれば身体強化の効果が増すからな。

しかし、これは強引な方法でもある。体力そのものは増える訳じゃないからな。二重掛けは体力の消耗も激しくなる。

「本当、お前にはすぐに見破られるな。確かに、このまま続ければ俺の体力が限界に達するな。だから・・・次が最後だ。」

「へへ、俺がそれをさせるとでも？」

「そうだな。だからこの魔方陣を登録しておいたのだ。」

『鏡炎陣』
きやうえんじん

「これは・・・結界・・・か。」

「そうだ。この魔法は相手を閉じ込め、中からの攻撃は全て炎属性となり反射させる俺のオリジナルだ。いくらお前でも破るのに時間がかかるだろ？」

「そうか、これは破るのに骨が折れるな。だが、見たところこれは展開している限り魔力を消費するタイプだよな？いいのか？いくらお前の魔力でも保たないだろ？」

「そうだな。だからこれが最後の魔法だ。これは、フィールド魔法さえ効かない可のせいがある。・・・死ぬなよ？」

そう言つて火鏡は詠唱を開始したようだ。

「祖は火を統べる我が血族・・・」

これは・・・この、魔力が構成しようとしている方式は・・・、皆さんの天空魔法に似ているが・・・違う。・・・まさか、火鏡の魔法か！？どうする？見たところ炎属性の魔法ではあるが・・・。

魔力は桜花・乱舞刃で使い果たした。いくら技術でフォローしようとも、限界はある。気は・・・まだまだいけるが、この状況を打破できる技は・・・天剣しかないか・・・。奴も消耗している。今詠

唱している魔法を使えば、この結界は消えるだろうし……やるしかないな。まずは……

「北を守護する水の玄武よ……その加護をもって我を守護せよ」
陰陽術による水の結界を張った。後は、魔力は限界……霊力で剣の召喚を実行、気を最大まで高めて……

Side 火鏡 焰

これが、俺に使える最大の魔法だ。これを防がれたら後はないが……火鏡の魔法を防ぎ切れるとは思えない。あの時は使えなかったがこの2ヶ月これを完成させるために兄貴に頭を下げてまで教えを請い使えるようになった魔法。これで最後だ。

「我は火を統べる血族。火鏡が望み、神より承った火の魔法。その魔法は望むもの全てを焼き尽くす。喰らえ！己が望むままに、焼き尽くせ！」

『神炎』

この神炎は火鏡の直系しか使うことができない魔法。通常の魔法と違うのは威力もだが、それ以上に対象だけを焼く事ができるという点だ。この上には更に『心炎』があり、これは今の所、親父と兄貴しか使えない。親父のは紫炎、兄貴のは蒼炎といい、固有の色が着く。違いは、心炎は魔法さえ燃やすという点だ。例えば、障壁に神炎をぶつけた時、その火力で破るが、心炎は障壁そのものを燃やす。

「終わったか？」

奴はどうなった？目と気配で様子を探っていると・・・

炎の流れが変わった。

「なに！？」

風など吹いていない上に、奴の魔力じゃこの炎をどうこうできる訳がない。そもそも古代上級でもこの炎に対処するのは難しいはず・・・。できるとしたら、同じ祖の五家の固有魔法位なものだ。いったいなにが・・・。

「いやいや、これが火鏡の魔法か・・・神炎だっけ？凄い威力だな。しかも、対象を選別して焼き尽くすことができるか・・・。」

炎の向う側から声が聞こえてきた。

「こいつが無かったらあれで終わっていたかもしれない・・・。さて、今度はこっちの番だ！歯くいしばれよ！」

そんな言葉とともに風が炎に・・・いや、炎の向う側にいる奴に向かって吹き荒れた。

その時、奴の姿が見えた。なんだ？奴が持っている刀は・・・

「その刀身に映るは天の色、天に染まりしその刀。されど舞うは桜の花、その桜は天を取り込み変化する。奥義・風桜斬影刃！」

烈風が神炎を切り裂きその風に包まれ飛んできた桜が俺を切り裂いてきた。

「ぐわあああああ！」

「……ドサ！」

「ゼイゼイゼイ……」

くそ！魔力も底を尽きた。体力も限界か……。

「よう、意識はあるようだな。まだやるか？」

「いや……俺の負けだ……。」

また……負けちまったな。だが、何故だろうな……なんでこんなに気分がいいのだろうか……

「なあ？」

「ん？」

「一つ聞かせてくれ。俺の神炎を切り裂いたお前の刀、それはなんだ？」

「ああ、これが……。天剣・桜姫。俺の愛刀だ。」

「なっ！天剣だと……。？そうか……。だからか……。」

天剣か……。なら、こいつが使えば神炎も切り裂けるかもしれないな。なんでこいつが天剣を持っているかは気になるが、今はいいか……。

「・・・純君が勝った？」

最後、火鏡君の神炎が純君を呑み込み、いくら純君でも負けたと思っ
てしまいました。しかし、いつの間にか天剣を召喚しており、神
炎を切り裂き火鏡君が地に伏せる形で幕を閉じました。

それにしても火鏡君、いつの間に神炎なんて使えるようになったの
でしょうか・・・？それだけ、頑張っていたのでしょうか。すごいで
す。今回の試合、火鏡君の成長が著しかったですね。私も負けてい
られないです。ですが、その火鏡君さえ純君には勝てませんでした。
流石、純君です。でも純君を見返すために頑張ります！

そんな事を考えているとやっと審判が試合終了の合図を出しました。

「・・・はっ！勝者・・・朝倉 純一！」

ウオー！！キヤー！！

みなさんが歓声を上げる中、麻弓さんが試合の感想について聞いて
います。

「なんと！火鏡選手の炎に飲まれ、絶対絶命かと思われましたがそ
の炎を切り裂き、朝倉選手の逆転勝利です！どうでしたか？解説の
境先生？」

「そうですね・・・、火鏡選手の使った魔法は多分噂に聞く火鏡家
の火の魔法だと思われるのですが・・・。」

「そうじゃな。境先生の言う通り、あれが火鏡の魔法、神炎じゃ。」

「その炎を切り裂くなんて芸当・・・出来るとは思えないのですが・・・。」

確かにその通りだ。もし純君が持つてる刀が天剣で、純君の技量を知らなければ私もそう思っていたことでしょう。

「ふむ。切り裂けた理由の一つは小僧の持つ刀だな。あれは天剣・桜姫。六天剣の一振りじゃ。あの刀には一つ面白い特性があつての、その刀身に映した空の属性を付加することができるのじゃ。今回は風じゃな。しかも遮るものが何も無いから余計力を増したのじゃ。もう一つは小僧の技量じゃな。天剣を使いこなし、気功術と併用する。だからこそできた芸当じゃろうて。」

「そうですか、ありがとうございます。それでは本日の試合は以上で終了です。まだ、明日と明後日もありますので今日勝った人は明日も勝つために、負けた人は明日こそ勝つために、十分休んで明日も頑張ってください。司会・進行は私、麻弓「タイムと解説は境先生と天城理事長でした。」

今日はこれで終了です。純君はもう帰るのでしょうか？

「ねえ、咲夜？」

「なに？瑞希ちゃん？」

純君の所に行くかどうか迷っていると声を掛けられました。

「朝倉君の持っている刀、あれ天剣なのよね？」

「はい。そうですが……。」

「なんで、彼が行方知れずの天剣を持っているの？」

「それはですね……。」

以前お爺ちゃんから聞いた話を瑞希ちゃん達にも教えてあげました。

「そう……彼があゝの稀代の魔女の……通りで……。」

みなさんはその話を聞いて純君の強さの理由を勘違いしているようです。確かにそれもあるのでしょうか……

「違うわよ？純一君が強いのはカレンさんの孫だからって訳じゃないわ。」

「臯月？どついつこと？」

「瑞穂も知っているでしょ？彼の魔力が低いこと。カレンさんの孫ってだけじゃそのハンは覆せないと思うわ。」

「……そうだね。臯月の言う通り、血筋だけじゃどつにもならないものもある。朝倉君が強いのはそれだけ必死にあがいた結果なのだろうね。」

蒼也さんがそう言つと、お姉ちゃんも満足そうになつていた。

「まさか、朝倉が天剣を持っているとは……。」

確かにそれは誤算だった。奴の自信の理由もわかる。だが、魔力の差は圧倒的だ。俺の魔力は焰より上だ。焰相手にあれだけ消耗しているなら、例え俺と戦う事になったとしても余力は残っていないだろう。

「フハハハハ！！」

俺の勝利は揺るがない！

明日の戦いのために休養するもの、分析するもの、決意を新たにするもの、勘違いするもの、様々な思いと共に……次回、ランキング戦2日目突入です。

第二十二話 VS火鏡 焰（後書き）

純一はその圧倒できな式の構成技術と魔力制御の精密さ、身体能力で魔力の差をカバーしていたため、上級魔法と渡りあっていましたが、あくまで受け流したり、逸らせたりする形であり、正面からぶつかりあえば負けてしまいます。最後の天剣も炎を吹きとばすという力技でなく、切り裂くという技術で対応した訳です。

第二十三話 VS 水無月 瑞穂

Side 朝倉純一

「今日は最初からあなたですか・・・瑞穂さん・・・」

昨日、最後の試合は俺だったからな。昨日の内に対戦相手は分かっていたが、最初から祖の五家の人間の相手はかったるい。

ちなみに、何故か今日は俺と瑞穂さんの試合が一番最初らしい。どうやらCブロックは大混戦らしく、試合の進行速度が他のブロックと比べ遅いため昨日は最後だったらしい。そのことを考慮し一番最初に俺と瑞穂さんの試合が回ってきたとのことだ。

だからと言って俺の試合を最初に持つてこなくてもと思うのだが・・・なんでも、今日は俺の試合が一番時間がかかるからだそうだったらしい・・・。

「そんなかったるそうな顔しないでくれる？朝からやる気が薄れるわ。」

「そう言う割には魔力を活性化させてますよね？」

魔力の波がヒシヒシと伝わってくる。

「あら？分かる？あなたと戦えるの楽しみにしていたのよ？」

「そりゃどうも。ご期待の添そえるよう頑張りますよ。」

「ええ、よろしくね。」

「さあ！本日も快晴、戦闘日和！昨日に引き続きまして司会・進行は私、麻弓「タイムと、解説は昨日に変わって、この方達！神王様と魔王様におこしいただきました！」

その言葉に会場の生徒は口笛を吹いたり歓声を上げたりして応えた。中には・・・

「なんであんな等がここに！」

それを否定するものもいたみたいだが。頑張れ稟。

「みなさんこんにちは。ご紹介にあずかりました、ネリネちゃんの父親で魔王もやっておりますフオーベシーです。ネリネちゃんともどもよろしくね。」

お父様！

ネリネが暴れるのを稟達が必死に抑えている・・・。会場壊すなよ。

「俺は、シアとキキヨウの親父で神王をやってるユーストマだ！シアとキキヨウともどもよろしく頼む！ガハハハ！」

「お父さん！！」

今度はシアとキキヨウが神王を攻めようとしたが、また稟達に止められている。大変だな稟・・・

「本日はこの三人でお送りしていきますと思います。」

大丈夫か？今日の解説？

「さて、二人とも準備はいい？」

「あれ？鏡花先生？なんで審判を？」

なぜか鏡花先生が審判として舞台に立っていた。

「昨日、あなたと火鏡君が暴れたせいで、審判役の先生が負傷して、人出が足りなくなっただからよ。」

「ははは・・・えらいすみません。」

「まあ、いいわ。それより、はじめても構わないかしら？」

「俺は構いませんが？」

そう言いながらいつでも始められるように構えをとった。

「私もいつでもO・K・よ！」

瑞穂さんも水色の短剣二本を両手に構えている。この短剣が瑞穂さんの「杖」のようだ。水色の刀身を持ち柄には波を思わせる装飾とこれまた水色のリボンがついている。

また服装も制服ではなく水色と銀色を基調とした服で、下はショートパンツ、上は袖がなく裾が太もも付近まであるコートのようなもので、動きやすさを重視しているみたいだが、結構な防衛術式が刻まれている。

「そう・・・それでは始めさせてもらおうわ。」

その言葉を聞き、合図と共に動けるように意識を集中した。

「朝倉 純一 VS 水無月 瑞穂 試合始め！」

Side 土見 稟

開始の合図と共に純一が攻めていった。正直動きが早すぎて何をしているのかさっぱりだ。

「なあ、純一と水無月先輩の動き、分かるか？」

周りに聞いてみることにした。

天城さん達とは今日は離れており、周囲の生徒から土見ラバーズと（不本意ながら）言われているメンバー＋変態メガネ（樹）と観戦している。

「そうね・・・、純一がパンチやキックを放っているけど瑞穂だけ？彼女は短剣で受け止めたり、受け流したりしているわ。互いに様子見といったところかしら。」

俺の質問に答えたのはキキヨウだった。他のみんなは見えていないようだ。

「わあ！キキヨウちゃんよく見えるね！私はさっぱりだよ。」

シアよ、姉としてそれはどうよ・・・。

「はあ、シア・・・目に魔力を集中してみなさい。他の皆も出来る

ならだけどね。そうすれば多少はましになるはずよ。まあ、私も完全に見えているって訳じゃないけどね。」

・・・グス

「ちょ・・・稟！なんで泣ぐんでいるのよ!!」

「まあ、稟は魔力が犬以下だからね。無理だと思っよ?」

「あ・・・ごめん・・・」

「気まずそうに視線をそらさないで!余計みじめになる・・・」

「大丈夫です!稟君!」

「・・・楓?」

「例え魔力が犬以下でも、稟君は稟君ですから!例え魔力が犬以下でも!」

「楓さん、言っている意味が良く分からないです。それとそんなに何度も言わないでください。」

・・・ガク!

「稟君?稟くん!??」

「あちゃ〜、楓ったら、稟ちゃんにトドメ刺しちゃったわね。」

「どうせ俺なんか・・・」

試合そつちのけで落ち込むことにした。しばらくそつとしておい
てください。キキヨウさん後よろしく。

Side キキヨウ

なんか稟から電波受けとただけど・・・まあ、いいわ。

「朝倉選手、攻めあぐねたのか一旦距離をとった！」

それにしても麻弓、見えているのかしら？・・・まあ、魔族との
ハーフみたいだから他の人よりは見えているのかもね。

でも、相手は分からないけど純一は本気じゃないわね。昨日より
遅いみたいだし、それに昨日だってあの時と比べれば遅い。昨日は
まだ私にも見えたけど（ギリギリだけどね）あの時はまったく見え
なかった。

相手によって変えているのかしら・・・。

「ふむ、純ちゃんも瑞穂ちゃんもまずは様子見ってところかな？」

「そうだな。本番はまだまだこれからだろう。」

次に動いたのは瑞穂だ。両手の短剣に一瞬で水がまとわりつき、
鞭の様になっていた。昨日の純一の最初の対戦相手も使っていた魔
法ウォーター・ウィップで水の鞭だ。これは初級魔法に分類されるが使い手次第で化ける
魔法でもある。

瑞穂が両手にある鞭を振るい、純一が避けるが鞭が当たった部分
が深く抉れた。

この魔法は水をどれだけ圧縮させて使うかで威力が格段に違う。瑞穂の水の鞭は下手な上級魔法より厄介だろう。変幻自在に動く上にあの威力だからね。

今度は瑞穂が攻勢にでた。両手の水の鞭を自在に振るい更に水の矢を次々と放つため純一は避けるのに精一杯な感じだ。

このままではジリ貧だと思われたが、急に足を止めた。

「「え？」」

みんな何故？と思う中、純一に鞭が振るわれ、直撃！と思われたが、純一が水の鞭に拳を叩きつけると水の鞭が分解された。

Side 朝倉 純一

上から振り下ろされる鞭を右に飛んで避け、右から横に払われる鞭をしゃがみこんで避けよけ、次々に飛んでくる水の矢を時に掴み、時に投げ返し、避け、同時に襲ってくる二つの鞭から大きく飛んで避け、避けた分は更につめられ・・・

「かつたりい・・・」

いい加減、この攻防も飽きてきたし、消すか・・・

俺は足を止め、水の鞭を迎え打つことにした。準備運動はもう十分だ。

足を止めた俺に狙って鞭が放たれたが俺はその鞭に合わせ、拳を振り水の鞭を分解した。

「ッシ！」

この隙に体を捻りながら一息に距離を詰め

「竜旋剄！」

回転の動きを利用し螺旋を描くように衝撃を与える手刀を放った。

本来は刀をつかうが、今回は無手のため手刀で再現した。気で強化しているため、それでも鉄位は切れる。・・・が

「くっ！」

突如、強烈で分厚い水が噴き上がり、手刀がはじかれてしまった。

「これは水圧スプラッシュの重責か・・・」

水属性の中級魔法をノーモーションでこの威力ね。流石、次期頭首は違うか。

通常、無詠唱は最後に使おうとする魔法名を言う。例えば炎フレイム・ランスの槍などだ。

これは、これから使おうとする魔法名を言うことでイメージを強固にし、より完成度や威力を高めるためである。もちろん魔法名を言わなくても発動できるがその分威力も完成度も落ちる。

しかし、瑞穂は水圧スプラッシュの重責を魔法名を言わず発動し、その威力は純一の竜旋剄をはじめ返すほどのものだった。

「凄いですね？魔法名なしでこの威力は・・・。」

「ありがと。でもいいの？そんな所で止まっていて？」

その言葉と同時に俺の周りから水が吹き出し取り囲まれた。

「ちっ！雷を宿す白き虎よ！汝の白き雷の力を持って我を守る剣となれ！」

「水圧の壁に押し潰されなさい！ウォール・スプレッシュ水圧壁！」

俺が陰陽術による雷の結界を張るのと瑞穂先輩の魔法が炸裂するのはほぼ同時だった。

次の瞬間周囲が水で見えなくなった。

Side 水無月 瑞穂

「・・・やったかしら？」

まったく大したものね。あれだけの攻撃を避けるなんて・・・でも、この攻撃は避けられなかったようね。

この魔法は水圧スプレッシュの重責を相手の八方に展開し、取り囲み逃げ場を無くした状態でその幅を狭め圧殺する魔法だ。

水圧スプレッシュの重責の間は水の弾丸ウォーター・バレットが常に打ちだされており、上空から逃げ出そうとすると、上から水圧スプレッシュの重責が落ちてくると言ううえげつない魔法だ。

ちなみに瑞穂のオリジナルである。

焰君の時の様に地中に逃げるような隙は与えなかったし、『幻想の桜』を使った様子もない。終わったかしら？

私は周囲の気配に注意しながら、水煙の中に目を凝らした。

その時、何かはじけるような音がした。

「なに？」

まただ、まるで、光につられた虫が焼かれるような・・・

「これは・・・電気？」

だんだん出力が上がっていつているようだ。

「つつ！」

電気の放電の威力が上がっていくのを感じた私は距離をとり、

「清らかなる流水よ！我を守護する堅牢なる盾となれ！」

ウォーター・シールド
『清水の盾』

この盾は一見水の盾だが、不純物を極限まで排除し純水を生成し盾にする魔法だ。この魔法は水属性ながら並の魔法なら雷さえ遮断する。

盾を展開しそこから様子を見ると、稲光が走ったと思った。次の瞬間・・・

水煙は一瞬で消え、そこに立っていたのは複数の雷の剣を周囲に展開している朝倉君だった。その剣は主を守っているように見える。

「君、雷属性まで持っているの？」

それにしてはあの剣からは魔力を感じない……いったい？

「ええ、まあ確かに雷の属性も持ってはいますが、これは雷属性の
中級魔法雷の剣じゃありませんよ？似てはいますが、別ものです。」

「どういうこと？どう見ても雷の剣じゃない。」

「まあ、そうですが……でも魔力を感じないですよ？だから別
ものです。」

確かに……魔力とは別の力を感じるけど……気力でもないし・
・

「まあ、そう考え込まないください。俺からすれば別物でもあな
たからすれば同じ様なものでしょうから。ちなみに名前は白雷の守
護剣です。」

「納得いかないけど……まあ、いいわ。続きを始めましょうか。」

この盾にはあの雷剣も効かないと思うしね。

「そうですね。それじゃ……」

パチン！

朝倉君が指を鳴らした瞬間目の前で巨大な爆発が起こった。

「つつつつつつ……！！！！！！」

声を上げることままならず、盾へ注ぐ魔力の密度を上げた。

Side キキヨウ

純一が指を鳴らす動作をすると巨大な爆発が起こり、たまらず目を瞑った。爆発の震動がこちらにまで伝わってくる。

次に目を明けると舞台上に雨のように水が降り注いでいた。二人の姿は水煙で見えない。

「いつたいなにか・・・？」

純一が指を鳴らした後いきなり巨大な爆発が起こった。あれだけの爆発をあれだけの動作で起こすなんて・・・一体何をしたの？

「これは一体どういうことでしょうか？朝倉選手が指を鳴らした瞬間、大爆発が起こりました！」

麻弓の声が周囲の声を破って辺りに響いた。

「へえ・・・考えたね。」

「どういうことでしょうか？魔王様？」

魔王様は何故起こったか気付いた様だ。流石腐っても魔王様だ。

「簡単な化学の実験さ。水を電気分解し、水素を生みだす。それに火を近づければ爆発する。その、特大版ってところかな。」

「つまり、純殿は水無月の嬢ちゃんの水の攻撃を雷の技で分解して

最後に点火して爆発を起こしたってことだ。嬢ちゃんの水魔法は見事なものだったからな。

あれだけの質量を分解したんだ。これくらいの爆発は起こるだろ。

「

お父さんが真面目に解説をやっている！？私は違うことに驚愕してしまった。

「そうですね・・・しかし、それでは朝倉選手もただでは済まないのでは？」

「多分大丈夫だと思うよ？風の魔法で空気の流れを調整する位、純ちゃんなら当たり前にやっているだろうからね。」

「では、水無月選手はどうなったでしょうか？あの爆発ではただでは済まないのでは・・・」

「それもどうだろうな。水の魔法は使い手によって化けるからな。嬢ちゃん程の使い手なら、あれでもそれほど効いていないんじゃないか？」

「

つまり、この水煙が晴れるまではまだ分からないってことですね。

麻弓はそう締めくくった。

会場の皆が舞台に集中していると・・・変化が起こった。水煙が・・・いや、舞台上の水が全て集まり始めていた。

爆発を起こし、離れて様子を見ていたのだが、辺りの水が全て、瑞穂さんが立っていた所に集まり始めていた。

結果、水煙は晴れ、瑞穂さんの周りには大量の水が浮かんでいた。

「これは、また・・・無傷ですか・・・」

あれだけの爆発を受け、傷一つ無かった。

「正直、危なかったけどね。おかげで魔力を大分消費したわ。」

「の、わりには大して疲れてなさそうですね。」

「さて、どうかしらね。それじゃ行くわよ！」

水よ龍となりて彼の者を喰らい引き裂け！

『すいりゅうそうが
水龍爪牙』！』

瑞穂先輩の周囲に有った水が、複数の龍に姿を変え襲ってきた。

上級魔法を無詠唱で通常の詠唱と同等の威力・・・水を予め集めておくことで可能にしたか。俺の千変桜花と同じか・・・

「『舞い散れ！幻想の桜！』」

俺は幻想の桜を展開しながら周囲に待機させていた「白雷の守護剣」で迎え撃った。

再び電気分解を起こし消滅すると思われたが、今度は俺の「白雷の守護剣」が水の龍に呑み込まれ消滅した。

『海を司りし神、ポセイドンが使いし一振りの矛・・・』

「つち！」

水の龍は止まらず襲ってきたため、軌道を読み避けながら今度は

「『舞い降り！桜吹雪！』」

桜吹雪を展開した。

『その矛は大地を穿ち、嵐を起こす……』

桜の花びらを操作し、足場にしながら水の龍を避け、観察する。

『その力を水を司りし我に貸せ……』

水を純水にまで高める式と通常の水龍の式を相互作用させているのか……更に複数の水龍ごとに力を循環させて、一つ潰しただけでは無意味……雷も効かない……。

元を絶つしかないな。

向かうは上空其処にある核を基点として作られている。

桜の花びらを再び足場にし、高速で駆ける。

『それは海神が使いし三叉の矛……』

水龍の隙間を縫い、基点に拳を叩きつけ、分解する。

『それは、海神の怒り！』

水龍を分解したところで、詠唱は終わり魔法名を言うところだっ

た。

不味い、これは本当に不味い！・・・古代上級レベルが来る！

「来い！天剣・桜姫！舞い踊れ！桜達よ！」

『ボセイドン・トリアイナ
海神の三叉矛！』

俺が天剣を召喚し桜の花を周囲に集めた所で、嵐を纏った大地を穿つ三叉の矛が襲ってきた。

気力と霊力を全開にし、迎え打った。

「うおおおおおおお！」

桜を纏った刀と嵐を纏った矛がぶつかり合い、拮抗し、その間に式の解析を同時に行った。

「くっ！」

かなり複雑な式だ。妨害もかけている上にどうやらオリジナルの魔法らしい。

まあ、俺も知らない上に、海神の矛の力を再現しているからな。魔法使いの干渉レベル、ギリギリだぞ。流星は次期頭首といったところか・・・だが・・・

「これくらい解析できないようじゃ、俺はとっくに死んでいる！」

俺は右眼で魔力の流れを読み、知識と技術を総動員し分解していた。一歩間違えれば魔力爆発を起こし確実に負けるだろう・・・

爆弾を処理するような精密な操作を高速で行い皿が割れるような音と共に、魔法が掻き消えた。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

「どうですか、分解して見せましたよ……」

「はあ……信じられないわね……私の切り札なのに……天剣で打ち破るのではなく、分解されるとはね。正直ショックよ。」

「あの魔法が、火鏡の神炎のように端から広範囲を攻撃する魔法じやなく、まずは大規模な威力を一つに集約するタイプで助かりました。俺のはキャンセル能力ではなくあくまで解析して分解ですからね。」

範囲系の魔法は解析はできても分解はできない。このタイプは最初の切っ掛けこそ式によるものだが、後は世界の法則が勝手に働くからだ。

もちろん最初の式を広がる前に壊せば分解できるが、まず無理だ。

「それに、今のは水無月の魔法でもありませんでしたからね……」

「そう、でも残念。水無月家の魔法は戦闘用じゃないのよ。」

「そうなんですか？」

水属性は攻撃より治癒が多いからな。その水魔法でこれだけの力を使えるこの人が凄いだろな。

「ええ、正直もう一回あれを打てる魔力は残ってないし、近接戦闘で君に勝てるとは思わないし・・・うん！決めた！審判！」

「は、はい！なんでしょう？」

呆然としていた境先生がいきなり呼ばれ慌てて近づいてきた。

「私の負けを認めます！」

「・・・え？」

「ですから私の負けです。」

え？

「いいんですか？瑞穂さん？」

「ええ、だって君、まだ何か隠しているでしょ？私はもう魔力が限界なのよ。」

「しかし、精霊や天剣は？次期頭首なんでしょう？」

「あのね、なにか勘違いしているようだけど、通常は頭首の座を引き継ぐと同時に君の言った二つを引き継ぐの。」

「・・・そうだったんですか。」

臯月さんは例外と・・・

「ええ、でも気をつけなさい。決勝で当たるであろう春明は二つとも持っているわ。」

皇月さん以外にも例外がいたか・・・しかし・・・

「春頭が・・・何故？」

正直、実力はともかくそんな器は無いと思う。

「春明の奴は・・・」

そういうと何かを思い出したのか嫌悪感が顔に出ていた。

「瑞穂さん？」

「・・・なんでもないわ。とにかく、これ以上続けても勝てそうにないから負けを認めるの。わかった？」

「・・・納得はいきませんがわかりました。」

「うん。と、言うことで審判？」

「わかりました。ただいまの試合、朝倉選手の勝利です。」

その言葉と同時に周囲から歓声が上がった。

Side 水無月 瑞穂

「ただいま。みんな。負けちゃったわ。」

試合が終わった後、私は皐月達の所に戻ってきた。

「お疲れ様、瑞穂。残念だったわね。」

皐月が労いの言葉を掛けてくれた。年下のくせに生意気な……とは思わない。

この子の実力と努力は知っているから。性格もね。

「姉さん、何故降参したの？朝倉君も大分消耗していたようだったし、それに姉さんはまだ氷属性を使っていなかったじゃない。」

瑞希が不満顔でそう言ってきた。

「確かに氷属性は使わなかったけど、結果は変わらなかったと思うわ。朝倉君の戦闘スタイルに属性を変えろといった行為は意味ないものなら、もっとも得意とする水属性の魔法を使った方が得策だわ。」

「でも……」

「それに最後の魔法が分解された時点で私の魔力はほとんど残ってなかったのよ。でも朝倉君はまだ何かあった見たいだしね。彼、底が見えないわね。咲夜も皐月も彼と戦う時は気をつけなさい。手の内がまったく読めないから。」

朝倉君とはまた戦いたいな……今度は一周囲を気にせずに済む場所だと思う存分に……

Side キキヨウ

この勝負は純一が勝利を収め幕を閉じた。純一は納得があまりい

っていないようだったけど・・・

「今回は水無月選手が降参して終わってしまいました。それだけ最後の魔法に自信があったということでしょうか？」

「最後の魔法は、世界の法則ギリギリの魔法でしたからね。海神の矛を再現するなんて・・・学生レベルを越えているね。」

「そして、それを分解した純殿のレベルもな。」

学生っていうか人間レベルじゃなくなってきたる気がするんだけどね。

「つまり、二人とも人間をやめ掛けているということまで話がありました。」

失礼な（よ）！

会場のどこかから声が聞こえてきたが麻弓は無視を決め込んでいる。

「それではまだまだ、続きます。神王様と魔王様は次に注目する試合はどれでしょうか？」

「そうだね・・・僕は天城 咲夜ちゃんと土御門 夏樹君の試合が楽しみかな？」

「俺は、天才で噂の神城 誠と赤嶺 一哉って奴の試合だな。この赤嶺ってのは聞いたことがあるからな。」

ふーん。お父さんと魔王様が注目するのも目ずらしいわね。天城と土御門の戦いはわかるけど、赤嶺ね・・・お父さんは聞いたことがあるって話だけど、純一に聞いてみようかしら。

第二十三話 VS 水無月 瑞穂（後書き）

次は純一以外のバトルです。

短いかな。

第二十四話 天城 咲夜 VS 土御門 夏樹

Side 朝倉 純一

「かつたるい……。」

今俺は観戦席を複数陣取り横になっている。
瑞穂さんとの試合で気力と霊力の大半を使ったため、体がだるいからだ。

「大丈夫ですか？純。」

リアさんが俺の顔を覗き込んで聞いてきた。

「まあ、なんとか。まだ魔力はありますから戦えます。」

「……そう言う事を聞いたのではないのですが……。」

ちなみに頭の下にはリアさんの太腿が……

「ところでリアさん？」

「なんですか？純？」

「何故俺は膝枕をされているのでしょうか？」

「純が疲れている様でしたので……迷惑でした？」

そんな心配そうな顔をしなくても……

「いえ、そういう訳では……」

「なら、もう少しこのままです……」

「……わかりました。」

膝枕は続行となった。周りの視線なんか気にしない。気にしない。

開き直り、リアさんの膝枕を堪能することにした。リアさんの膝は柔らかく、高さも調度良く、とても寝やすい。

しかも、良い匂いがする。これは……香水？

「リアさん、香水付けています？」

「え？何故ですか？」

「いえ、いい匂いがしますのです……」

「そ、そうですね／＼／＼。ありがとうございます／＼／＼。」

「……」

「会話が、会話が……」

「あゝゴホン！良い雰囲気のところ悪いが……次、天城さんの試合だぞ？」

「ナイス！凜！」

「あ、ああ！わかった！」

稟の言葉に我に返り、名残惜しいが起き上がった。

リアさんも残念そうにしていたが流石にこのままじゃ見えないからな。

・・・もちろん俺も残念だ。

「確か咲夜の相手は土御門家の奴だっけ？」

確か土御門家、現頭首の弟だったな。

「ええ、そうです。私や皐月と同じ年ですね。ただ、実力はたいしたことは無いと思います。」

「そうなんですか？」

リアさんの言葉は以外だった。確かに祖の五家の人間だからって必ず強いとは言わないが、ここまで残っている以上それなりの実力では有るかと思うのだが・・・

俺が当たった奴ら結構強かったし・・・

「ええ、なんというか、今の頭首が才能に溢れておりまして・・・弟の彼はそれを目の当たりにしてきて、周りには常に比べられてきたんです。」

分かりやすい理由だな。

「結果、やる気を無くしてしまつたのですね。
ここまで残つたは、くじ運が良かったのでしょ。」

そうか。奴は諦めた側の人間か・・・

「続いている試合は「天城 咲夜」選手 対「土御門 夏樹」選手の
対決です！」

舞台には二人が上がっている。

咲夜は緑を基調としたドレス風の魔法衣を着ている。手には見た
目は木製の杖だが、あれは「世界樹の枝」らしい。

土御門は黄土色のチャイナ服のような魔法衣だ。両手にはガント
レットをはめている。

ちなみに俺がいる場所とは反対側に皐月さんが心配そうに見てい
るのが見える。

「ではこれから、天城 咲夜選手と土御門 夏樹選手の試合を開始
します・・・
始め！」

境先生の合図と共に試合が始まつた。

開始の合図と共に二人は同時に行動した。

土御門は地面を殴り、咲夜は杖で地面を叩いた。すると、拳と杖
から魔方阵が展開され、土御門が殴つた地面から咲夜に向かい『襲
い迫る大地の猛威』が放たれ、咲夜の足元からは巨大な樹が生え、
咲夜を上空へ逃がした。

『襲い迫る大地の猛威』は樹に激突するも倒すことができず、そ
の猛威の後だけを残し消滅した。

続いて咲夜は召喚した樹を操る事ができるようで、巨大な樹の枝が土御門に向かって薙ぎ払われた。

土御門はそれを大地の壁で防ごうとしたが、壁ごと薙ぎ払われ、舞台の壁に激突した。

姿は土煙りで見えない。

「もう終わりか？」

稟が拍子抜けしたような声で呟いていた。

「いや、まだ見たいだぞ・・・」

姿は土煙りで見えなかったが、魔力の高まりを感じた。

すると、咲夜が召喚した樹が揺れたかと思うと、倒れ始めた。

「どつやら、地震クエイク」のような魔法で局地的な地震を起こし液状化現象を誘発させたらしい。

咲夜は樹から飛び降りたが、そこに向かって『石の槍ストーン・スピア』が放たれた。しかし、咲夜は杖からしなやかな樹の根の様なものをだすと、杖を回転させた。

すると、杖と一緒に回転した根が『石の槍ストーン・スピア』をからめ捕り、着地したところには、放たれた全ての『石の槍ストーン・スピア』が絡まっていた。

その根はそのまま、いまだ土煙りの中にいる土御門に向かって行った。

その時、俺には妙な魔力の流れが見えた。本来の流れとは異なる、そう、まるで本来の川の流れを堰により強引に変えられたような・・・

次の瞬間、咲夜の根が炎に包まれた。

咲夜は慌てて杖から根を切離し、距離を取った。

未だ晴れない土煙りの向こうに視線を送っている。どうやら、結構動揺しているようだ。

「なんで、夏樹が炎を使えるのですか!？」

リアさんが思わず、といった風に叫んでいた。

「そんなに驚く事ですか？」

「当たり前です。彼は火や炎の属性なんて持っていないのですよ？」

「でも、別に属性を持っていなくても使えますよね？魔力はかなり消費しますけど。」

魔力の消費は激しいが適正がなくても使えることには使えるのだ。

「確かにそうです。しかし、咲夜のあの樹・・・この場合、根と言えはいいでしょうか。あの根はそこらの炎じゃ燃えないのです。それこそ威力だけで言えば古代クラスじゃないと。」

どうやら咲夜の樹は普通の炎じゃ燃えないようだ。

見たところ、そういった術式が掛けられていた訳じゃないので、元からそういう性質を兼ねていたものか、世界樹の加護なのだろう。

しかし、だとするとおかしい。

古代クラスの火力を得るのに炎の属性を持っていない奴があの程度の魔力消費で済む訳がない。

なにか仕掛けがあるはず・・・

多分先ほどの違和感に原因があるのだらうと推測し、更に魔力の流れを視てみた。

この流れはやはり変だ。強制的に捻じ曲げられている。道筋に沿ったものではなく強引に作りだしたもの。

魔術に近いが、汚すぎる。これじゃ使用者への反動が激しすぎる。

この不愉快な流れ、この違和感、そしてなにより汚すぎる道筋・・・どこかで・・・

ここまで、舞台から目を話さず思考すること数秒、その間に土煙りが晴れてきた。

そこに立っていたのは確かに土御門だ・・・が、体から黒い魔力は吹きあがり、正気を保っているとは思えない。

そんな中、一つ違和感があった。

「・・・あれは！」

土御門の右腕のガントレット、そこに、試合が開始された頃には無かった赤黒い石がはめ込まれていた。

「FWストーン！」

なんであれがこんなところに！

「純？あれを知っているのですか？」

「ええ、まあ、あの石の名前はFailure Wiseman Stone・・・『出来損ないの賢者の石』です。」

Side 天城 咲夜

土煙りが晴れ、土御門さんの姿が見えたと思ったら、彼から黒い魔力が吹き出した。

その目は虚ろで正気を保っているようには見られない。

次の瞬間

「ウゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝ！」

人から発せられる声とは思えない雄たけびを上げ、突進してきました。

凄いスピードですが、直線なので簡単に避けられました。いままでとはまるで別人です。

「#&\$! “ #? ‘ \$* @¥」

すると今度は良く分からない言葉を発したかと思うと、黒い炎の塊が発生し襲いかかってきました。

私は、樹で防御しようとして魔方阵を展開しようとしていましたが・・・

「駄目だ！咲夜！避ける！」

そんな純君の声が聞こえ私はとっさにその声に従っていました。

向かってきた黒炎をとつさに瞬動術で避けたため抜きがうまく決まらず、転びそうになりましたがなんとか踏みとどまり黒炎が着弾した方を振り返ると・・・

舞台の石が腐っていました・・・

「・・・え？」

「咲夜！前！」

呆然としていると再び純君の声がし、前をみると土御門さんが黒い炎を纏い突進してきました。

あの炎に触れるのは不味いと判断し、樹をいくつも召喚し、視界を遮り、瞬動術で距離をとりました。

召喚した樹は黒い炎に触れるとそこから腐り始め、崩れていきました。

「ごめんなさい。みんな・・・

それにしても、あの炎・・・どうすれば。

触れたものを腐らせる炎、水属性は使えますが、多分私じゃ無理でしょう。

瑞希か瑞穂さんじゃないと。

土は相手の方がエキスパートでしょう。理性が無い状態でどうかはわかりませんが・・・

すると、樹しかありませんか・・・

正直、気は進みませんが、やるしか有りませんね。
みんな、ごめんなさいね。

木々に謝り、思いついた手を実行しようとした時

(咲夜・・・聞こえるか?)

「純君!?!」

純君からの念話が来た。

(試合中にすまん。頼みがある。)

(・・・色々言いたいことありますが、今はいいですそれよりな
んですか?)

(ああ、土御門・・・奴の右腕のガントレットに赤黒い石が見える
だろ?)

そう言われて、未だ樹を腐らせるのに夢中な土御門さんを見た。

(はい・・・確認しました。あれが?)

(あいつがああなった元凶があの石だ。どうにかしてあれを壊して
くれ!)

(あの石が、でも壊すのは彼を倒してからでもいいのでは?)

(駄目だ!時間をかけるとあの石が奴の精神から侵食し、肉体も変
貌を遂げていく。)

時間をかけ過ぎると人間に戻れなくなる。(

「なっ！」

私は思わず息をのみました。

まさか学園の試合でこのようなことがあるとは思わなかったからです。

正直信じられないのですが・・・

(咲夜・・・信じてくれるか?)

そう、相手が純君でなければ。

こんな時にふざけたことを言うような人でない事は短い付き合いですが分かっていきます。

なにより、純君の不安そうな言葉に信じなきやあって思ってしまいました。

(もちろんです！私が純君を疑うはずないでしょう？
やってみせます！)

力強く返答しました。

(そうか・・・ありがとうな咲夜。)

(はい。それでは無事を祈っておいてください！)

その言葉と同時に私は再度、多くの樹を召喚しました。

土御門さんは理性を完全に失っているのか、樹がでてくるたびにそれに突進をかけていました。

わたしはその隙に詠唱を開始しました。

「樹よ・・・大地を支え、水を蓄え、人々に恵みを与える樹々達よ・・・
我は汝らの盟友なり。」

我が言葉に耳を傾け、力を貸したまえ。

汝らを焼き、腐らせようとする愚か者に裁きをともに与えよう。

グランドウッド・エクスキュージョン
『大地支える大樹の裁き』」

その言葉と共に、大きな・・・それこそこの舞台と同等の幹をもつた大樹が足元から生えてきた。

この魔法はユラから教わったものの一つで、元々は森林を守護する樹の精霊が人や魔物など森林を壊そうとするものに対して使用していた魔法とのことだ。

樹を冒涇するもを対象に発動することができ、魔力だけでなく、多くの養分が必要になるが、この舞台では大して養分は無かった。しかし、土御門さんが樹をたくさん腐らせたおかげで腐葉土になり、養分を確保できた。

そして、この樹の魔法の特性は・・・

「ウガ！ウガ！ウガ！」

その幹に対象を取り込み、養分とすることだ。

今、土御門さんは顔と右手だけしかでていない。

良かった、言う事を聞いてくれた。

この魔法の難しいことは、樹を破壊するものに容赦しないという

ことだ。
なんとかお願いしてはみたものの、不安はあったのだが・・・良かった。

「確か右腕の赤黒い石でしたね・・・」

私はその石を確認すると、杖を弓の様に構えた。すると、樹でできた矢が私の手の中に現れた。

「『鉄貫枝矢』」

これはその名のとおり、鉄をも貫通させる枝の矢だ。魔力で更にコーティングし、黒炎で焼かれてもすぐには腐らないようにした。

「貫け！」

放たれた矢は空気を切り裂く音と共に狙い違わず石を砕いた。

「ぐわああああ！」

土御門さんは叫び声をあげ終わると、気絶したのかぐったりしている。
意識の無い事を確認すると、魔法を解き、ゆっくり降ろしてもらいました。

土御門さんからはもう黒い魔力は出ていませんでした。

「勝者！天城 咲夜！」

しかし、あれはなんだったのでしょうか・・・

Side 朝倉 純一

ふー、無事勝てたみたいだな。それに土御門も手遅れにならなくてよかった。

安堵していると・・・

「純、安堵しているところ悪いのですが、あの石について説明していただけますか？」

リアさんに問い詰められた。見ると、稟達も気になるのかこちらを見ている。

「それは私達も気になるかな？」

その声に振り向くと、皐月さん達がいた。

「・・・わかりました。説明しますので場所を変えましょう。」

さて、なんて説明したらいいか・・・

・・・

「さて、それでは説明しましょうかね。」

場所は屋上。話を聞かれないように結界を張っている。

「ふむ、それで小僧、あの石は一体なんじゃ？」

屋上にくる際、爺さんも話を聞かせると混ざってきた。

まあ、祖の五家の人間が巻き込まれているからな。しかた無いか。

「純は『出来損ないの賢者の石』って言うていましたが、どういうことですか？」

「あの石は『賢者の石』を追い求める過程で生まれた産物です。

稟達は賢者の石がどういふものか知っているか？」

「いや、知らない。とんでもない代物って位の認識だ。」

代表して稟が答えた。

「ああ、その認識で間違っていないな。石を黄金に変えるとか、死者を蘇らせる事が出来るとかいろいろ逸話はあるがな。

だが、はっきり言おう。賢者の石は実在するが、そんな力はない。更に言わせてもらえば、実在してはいけない。」

「ほう、どういふことじゃ？」

「賢者の石ってのは、結局莫大な魔力を持つ石ってことです。それに、材料に問題があるんですよ。」

吐き気がするほど最低な材料だ。

「まあ、今は賢者の石の作り方の話ではないです。

その過程で生まれたあの石は「賢者の石」程ではありませんが結構な魔力が込められています。

しかし、それと同じ位の瘴気も・・・ね。

あれを使用すると魔力と一緒に瘴気も取り込んでしまいます。

取り込み過ぎると、最初に精神を汚染され、理性が奪われます。そして更に進むと肉体が変貌をとげ、最終的には人でなくなりま

す。そうなつてはもう、元の人には戻れず、ただ、本能のままに辺りを破壊する獣になってしまいます。

そうなつてはもう、殺すしか手はありません。」

瘴気つてのは毒のようなものだ。悪意の塊と言っていい。

たくさんの人が死んだような場所・・・戦争後とかによく漂っている。

賢者の石はそれを取り除くことで完成するわけだ。瘴気の有無で魔力の量が格段に変わるからな。

ちなみに生成過程で取り除かないとだめだ。

「・・・そんな。」

みんなショックを受けた表情をしている。まあ、無理もあるまい。自分達の身近でこのようなことが起きるとは思わないだろ。

祖の五家の面々は流石に慣れていいのか表情に出さなかったが・

「そうか、賢者の石の製造法についてはあえて聞かん。

製造過程でそれほどの瘴気が入り込むなどまともな方法じゃあるまいて。

しかし、そうになると、土御門のせがれはどこであれを手に入れたかじゃな。

そこらに転がっているようなものでもなければ、まともな方法で手に入る代物でもあるまい。」

「ああ、爺さんの言う通りだ。」

そもそも、あれの作成方法を知っているのは俺も含めごく少数だし、あいつらがそれを誰かに教えるとも思えん。」

「あら？純一君以外にも知っている人がいるの？」

「ああ、七徳の騎士どもだよ。」

あいつらに一度連絡とってみるか？

「「「は？」「」「」

「ちょっと！純一君！あなた七徳の騎士と知り合いなの？」

なんか爺さんと稟、シア、キキヨウ以外が驚いている。

「え？はい。それがなにか？」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんかみんな呆れた顔をしている。
どうしたんだ？

「小僧よ、そやつらが誰かに教えるといった可能性は？」

「それはない。あんたも、カインやラピスさんには会っているだろ？」

「それもそうじゃな。」

この件についてはこちらでも調べてみよう。

皆は試合に集中するようだ。」

そう言い残し、爺さんは去っていった。

・・・俺も行くかね。

固まっている皆を残し、会場へと戻ることにした。

第二十五話 赤嶺 亮 VS 神城 誠(前書き)

今回は短いです。

第二十五話 赤嶺 亮 VS 神城 誠

Side 神城 誠

屋上での話の後、なんとも言えない雰囲気だったが試合の時間となったため、会場に戻ってきた。

賢者の石のこともあるけど、まずは自分の試合に集中しないと。

舞台に向かいながら今回の対戦相手について考える。

僕の次の対戦相手は赤嶺^{あかみね} 亮^{りょう}、外部生のため情報は期待していなかったのだけど、一つだけ分かったことがあった。

赤嶺 亮は赤嶺^{あかみね} 猛^{たける}の息子だということだ。

赤嶺 猛は警備会社イージスの幹部でその道ではかなりの有名人である。総理大臣や神王様、魔王様の警護を務めたこともある。

神王様が赤嶺の姓に反応したのはそのためにようだ。

どのような魔法を使うのか、属性などについては情報を得られなかったがしかたがない。それは戦えば分かることか・・・

そして、舞台上上がる。

目の前にいるのが赤嶺 亮。赤銅色の髪に黒い瞳。服装は純一君と同じく普通科の制服だ。手には赤銅色の刀を持っている。

対する僕は白を基調とした魔法衣で金のラインが入った騎士の様な服に西洋の剣をもっている。

この剣のはレイ＝ブレイド。僕の「杖」だ。剣自体が光属性持つ。

「それでは、赤嶺 亮 VS 神城 誠・・・始め！」

『ライトニング・アロー
電光の矢』

僕は手始めに初級魔法放った。一撃の威力は少ないが量と早さに重点を置いている。

そう簡単には避けられない。

「さあ、どうする？」

純一君の様に避けるか、魔法で障壁を張るか・・・
反撃されてもいよいよに魔方陣を展開しながら見ていると・・・

「・・・・・・・・・・」

腕が一瞬ぶれ、次の瞬間・・・

「なっ！」

・・・全て切り落とされてしまった。

「っ！」

再び魔法を放とうとしたが、すぐ近くまで赤嶺君が来ていたため、剣で迎撃することにした。

上段からの切り落としを剣の腹で受け押し返し、今度はこちらから横薙ぎに振るうがしゃがんで交わされ、逆に下から切り上げが来

たので、剣の勢いに任せ回転しながら避け回し蹴りを放つが腕で防がれた。

続いて、伸びきった足を狙って刀が振るわれようとしたので相手の腕を壁にして距離をとり、光の斬撃を放った。

この剣自体に光の属性が備わっており、僕の意味で放つことができる。斬光と僕は呼んでいる。

その斬撃は赤銅色の刀が振るわれるとその軌跡通りに切られて消えた。

次に、『ストーン・スピア ウォーター・バレット 石の槍、サンダー・ブレイク・ストーム 水圧の弾丸、サンダー・ブレイク・ストーム 雷の剣、レイ・ストーム 光線の嵐』下級から上級魔法を無詠唱、魔方陣、詠唱を使い分け、放ち続けた。

しかし、ストーン・スピア ウォーター・バレット 石の槍、サンダー・ブレイク・ストーム 水圧の弾丸は円を描くように舞台を走りまわり避けられ、サンダー・ブレイク・ストーム 雷の剣は刀で切られ、レイ・ストーム 光線の嵐は全ての軌道を見切ったのか直撃コースのものだけ刀で切りはらった。

驚くべき動体視力と剣技だ。純一君とどっちが上だろうか？
しかし、今はそれは良い。問題は彼の切った後の魔法だ。

再び、数をメインに下級魔法を使った。すると、再び切られた。

間違いない・・・これは・・・

「その刀、マジック・キャンセル 魔力無効果の力があるね？」

「・・・たったあれだけでよくわかったな。流石天才。」

「それはどうも。最初は純一君と同じで分解しているとも思っただけ、魔法の消え方が違ったからね。」

純一君の場合は何度か見ている内に式が解けて行くって感じがわかった。どうやったかまでは未だに分からないけど。

でも今回は解けて行くじゃなく消えて行くって感じだった。

魔法を無効果する術はいくつかある。一つは純一の様には式を読み解き分解する。これは魔法の方式をばらしているので魔力は世界へと帰っていく。

しかし、赤嶺の魔力無効果は違う。魔力は無効果・・・つまり完全になくなるのだ。

「かなり厄介な力だけど、その刀、どれだけの魔力を一度に消せるのかな？」

魔力無効果は対魔法使いの力として、一般的ではないものの広く知られている。

特殊な鉱物がその性質を持っており、それを用いることで魔力を無効果にすることができる。

しかし、この鉱物にも許容量があり、一度にそれを越える魔力を加えると鉱物が砕け散る。

「さてね。一々教える訳ないだろ。」

「それもそうだね。それじゃ、続けようか。」

上級魔法程度では簡単に消される。かといって古代魔法クラスは詠唱に時間がかかる上にその隙は作らせてくれない・・・なら・・・

僕は接近戦に再び切り替え、切りかかった。

レイブレイドに魔力を流しても意味はなさないのでその分、身

体強化に魔力を回した。

赤嶺君はどうやら純一君と同様気功術で身体強化をしているようだ。魔力が感じられない。

「せい！」

加速と同時に上段から切りおろし、受け止められた事を感じたが、そのまま体重をかけ押し切ろうとしたが、赤嶺君に押し返され、距離をとったところに、赤嶺君が飛び込みながら突きを放ってきた。その突きを上体をずらして避け、横薙ぎに剣を振るったが、飛んで避けられた。

それから、時にフェイントを入れ時に避け、牽制で下級魔法を放ち、幾度も剣を打ち合った。

「・・・やるな天才。魔法が使えなければどうということは無いと思っていたが訂正してやる。」

「それはどうも。君のその剣技と体術、そしてその剣の力、魔法が使えないみただけどそれでも、そうとう厄介だよ。ここまで苦戦するとは思ってなかった。」

「ふっ、だが、次で終わりだ。」

「奇遇だね、僕も次で終わりにしようと思っていたところだよ。」

そう言つと、赤嶺君は初めて刀を鞘にしまい、居合抜きを構えを取った。

来るのは最速の一撃か・・・

僕はというと、剣に魔力を流した。すると、剣とそれを持つ腕まで光始めた。

「なんだ？今さら魔法か？意味が無い事は分かっているだろ？それにその魔力じゃこの刀は壊せんぞ？」

「さて、それはやってみなければわからないよ？」

「ほざけ……」

そして一瞬の静寂の後……

『赤嶺流居合術奥義・紅の刹那』

赤嶺は走りながら抜刀術を繰り出そうとし、

『光よ輝き世界を照らせ！』

神城は光る剣を赤嶺に向かって投げた

すると、会場を包むほどの光が剣から発生した。

その結果……

「くっ！目が……！」

赤嶺の居合は外れ、視界が奪われてしまった。至近距離で大量の光を目に浴びたため視界が焼かれ、一時的ではあるが目が見えなくなってしまう。

そして・・・

「僕の勝ちだね？」

神城は赤嶺の背に手のひら当てており、その手には魔方陣が浮かんでいた。

「撃ち抜け！豪雷！」

その言葉と同時に神城の手のひらから放たれた雷は赤嶺を打ち抜いた。

「ぐがあああ！」

赤嶺が倒れ、決着がついた。

「勝者！神城 誠！」

Side 麻弓IIタイム

赤嶺君と神城君の勝負は神城君の勝利で幕を閉じた。

「いや、いい勝負でしたね。しかし、最後に神城選手が使った手、もっと早く出していれば、早く終わっていたのではないのでしょうか？」

「いや、最後のあの瞬間だからこそ決まった手だと思っぞ。」

「どづいづいことでしょうか？神王様。」

「簡単な事だ。赤嶺の坊主に隙が全くなかったからだ。その状態で使ったとしても効果は薄いどころか、逆に帰り打ちにあっていただろう。」

しかし、最後の技は奥義と言うだけあって、大技だった。これは強力ではあるが、隙も多くなる。

さっきは次を最後の一撃にすると赤嶺の坊主から言っていたが、言わなければ神城の坊主から言っていたただろうさ。」

「つまり、神城君の頭脳プレイってことでしょうか？」

「そうだな。あの場面で、臆面なくあの手が使える程の強かさもあるな。」

天才と呼ばれているが、どうやらそれだけじゃないみたいだな。

次の天城 皐月殿との試合が楽しみになってきた。」

「ありがとうございます。まだまだ試合は続きます。みなさん頑張ってください。」

第二十六話 VS 天城 咲夜（前書き）

純一・・・チート過ぎか？

第二十六話 VS 天城 咲夜

Side カイン・ジブリール

「さて、新たな拠点の確保と、七徳の宝玉の封印も完了した。

次は拠点内部の整理とこの間起こった事件の後始末。

後、対外関係への対応だな。」

俺とラピスは日本からイギリスにある新たな拠点へと戻ってきた。回収してきた宝玉も封印が完了し、一息ついたが、被害も大きく後始末が面倒だ。

純一じゃないが、かつたるい。

今は七徳の騎士全員で今後について話し合っている。

ちなみに正義の席は空席となっている。

「え〜、面倒〜。俺に事務仕事は〜向いてない〜。だから任せたく、ファイア〜。」

「ふざけな？キア？面倒ごとを増やしたのはオメーだろ！」

「それは〜、ファイアも〜、同じ〜。」

「だからってなんでオメーの分まで俺がしなきゃなんねーんだよ！」

「うるさいぞ、二人とも。お前らが暴れた結果だ。ふたりでやれ。」

「ほら、オッサンもああ言ってる！」

「ケイスの、旦那も、人のこと言えない。」

「なんのことだ？」

「コロセイムを、壊したの、旦那でしょ？」

「オッサン？」

「・・・ハツハツハツ！さらばだ！」

「オッサン！？」 「旦那」

（（逃げたな））

最初ののんびりした喋り方の主がキアリンク・サイスン「友情」の称号を持つ。

普段はこんな喋りだが、戦闘になると人が変わる。また、仲間を大切にしており、傷つくの嫌がる。傷つけた相手には容赦しない。なお、戦闘において、「勇気」より性質が悪い。

次にキアに対し怒っていたのがフィアリス・キュア。男っぽい喋り方だがれっきとした女だ。「勇気」の称号をもつ。

その称号にふさわしい「勇気」を持ち合わせているが戦闘狂のきらいがある。周りが見えなくなることが玉に傷だ。

そして逃げたのがケイス・フェンサー。七徳の騎士では古株でゲイザーとは同期。称号は忍耐。

戦闘経験も豊富で頼りになるが、変なところで失敗する。

今回はコロセウムを破壊したか・・・時の魔法で戻させるか。

「は、逃げたケイスさんには後でお仕置きするとして、とりあえず、キアとフィアは自分達がやらかした事の後始末をつけなさい。対外関係はカインとケイスさんにお願ひしますね。事件の調査と拠点内部の整理は私とイリスでします。」

「はい。」「わかったよ。」「わかったわ。」「ああ。」

ラピスがまとめみんながうなずいた。

ラピスを本気で怒らせると怖いからな。

ちなみにイリスとはイリス・シルフスタイン。「誠実」の称号をもつ。

この子はこの子で色々気難しいところがある。

「さて、それじゃあ、これで・・・」

会議を終わらせようとした時、俺の携帯に電話がかかってきた。

「カイン。会議中は携帯の電源を切っておいたらどうですか？」

「すまない。」

ラピスに謝りながら着信相手を見てみると・・・以外な人物からだった。

あいつからかかってくるなんて初めてのことだ。

「もしもし？俺だ。どうした？・・・ああ、大丈夫だ。」

・・・そうか・・・で？勝ち進んでいるのか？」

会議そつちのけで話はじめた。ラピスは呆れると同時に珍しがっている。

まあ、普段は後にするからな。

「・・・そうか。まあ、お前なら当たり前か。で？用件は？・・・なに？それは本当か？

・・・わかった。こっちでも調べておく。ではな。勝てよ？」

「誰からだったのですか？」

話を終わるとラピスが聞いて来た。普段なら聞いてこないが俺の行動が珍しかったのだらう。

「ああ、純一からだ。」

「そつで「純一からだつたの！」・・・」

ラピスの声に被せ、イリスが声を荒げた。ラピスは苦笑している。

「なんで代わってくれなかったのよ！」

「仕方なからう。向こうは向こうで色々あるのだから。」

「だからって・・・少し位代わっても・・・」

拗ねてしまった。まあ、仕方ないか。イリスは純一、一筋だからな。

イリスは昔純一と本気で殺し合いをしたこともあるのだが・・・人は変わるものだな。

・・・それは純一にも言えることか。

「それで？純一はなんて？」

「・・・日本で『出来損ないの賢者』の石が発見された。」

「「「なっ！」「」」

「それは本当なのですか？」

ラピスは動揺せず、冷静に聞いてくる。

「ああ、それも使用していたのは祖の五家、土御門家の人間だったらしい。」

「・・・知っていて、使用したの、かな？」

「流石にそれは無いんじゃないか？あんな危険なもの、知っていて使用するなんざ正気じゃねーよ。」

「そうだな。これについても調査の必要があるな。今回の事件の後始末を終えたら本格的に調べよう。」

「・・・」

イリスはまだいじけている。

「は、イリス。後始末が終わったら『出来損ないの賢者の石』について調べる。」

これは純一に依頼されたことでもある。成果を上げれば純一も喜

ぶんじゃないか？」

ふむ、ソツポを向いてはいるが、反応はしているな。もうひと押しか……

「後始末が終わってからになるが、誰かに日本に行って調査をしてきてもらう事になるのだが……」

「ハイ！ハイ！私が行く！」

いきなり元気になったな。おい。

「じゃあ、頑張って早く終わらせてくれ。」

「うん！行こう！ラピスさん！」

「クスクス。はい。わかりました。」

やっと、機嫌直したか。やっぱり、イリスには純一だな。

「む、俺も日本に行きたい。純一とくく々に遊びたい。」

遊ぶ……ね……。戦いたいの間違いだろ。

「俺も俺も！あいつとまた戦いたい！」

こいつらは……

「今回はイリスに譲ってやれ。あいつが拗ねると面倒なのは知って

いるだろ？」

「……わかった（よ）」「」

イリスが本格的に拗ねた所を想像したのだろう。複雑な顔をして二人とも了承した。

さて、さつさと終わらせて、純一の依頼というか頼みを聞きますか。まずはケースを探さないとな。

しかし、出来損ないの賢者の石か……純一にとっては因縁だな。ゲイザーの件、色欲と暴食の件に続いて賢者の石か……いくらなんでも、続きすぎだ。

……第三者の思惑が絡んでいるのか？それもあの町……いや、純一か？

……今はまだ情報が足りないな……

Side 朝倉 純一

出来損ないの賢者の石の件をカインに伝えてから、次の試合まで出来るだけ気や霊力を戻すため眠っていた。

しかし、やはりあれだけでは碌に回復しなかった。

そして次の試合。相手は咲夜だ。

「よう、咲夜。お手柔らかに頼むよ。」

「負けませんよ？純君」

俺は初めから桜姫を持ち、かまえている。

咲夜も杖に魔力を通し、いつでも発動できるようにしている。

「それでは、天城 咲夜選手 対 朝倉 純一選手・・・始め！」

俺は開始の合図と同時に接近戦に持ち込んだ。魔法を使う隙を与えないためである。

正直、長期戦は不利うえ、距離を取られたら今の俺じゃ一方的にやられてしまう。また、咲夜は純粋な魔法使いタイプなので接近戦なら短期で終わらせられると思っていた。

瞬動で接近しての居合抜きは、咲夜が絶妙なタイミングで踏み込んで来たため抜き切る事は出来ず、そのまま刀の柄頭で強打を狙ったが、飛んで避けられた。

距離をあけられるのは不味いため、抜刀しながら接近し右下から左上に向かって切り上げたが、杖で受け止められ、更に杖を回転させ、刀を反らせると同時に、打ち込んできたため、体を回転させ、避けながら切りつけようとしたが、打ち込む動作は囷で、実際は瞬動で距離を取られてしまった。

「ちっ」

『根の鞭』
「フ・ア・ウ・イ・ウ・フ」

すかさず距離を詰めようとしたが、咲夜の魔法の発動の方が早く、咲夜へといくらか詰めていた距離を今度は広げるよう飛び退った。すると、目の前を風を切る音と共に、一般男性の胴体と同じ位の太さの根が過ぎていった。

「驚いたよ。これまでの試合から接近戦は不得手だと思っていたんだが・・・やるもんだ。」

「ありがとうございます。これでも結構苦勞してきましたからね。その結果です。」

咲夜は咲夜で家の関係で苦勞して来たのだろう。

数回打ち合ったただけだが、接近戦は焰より上、瑞穂さんよりは下ってところか・・・

「それでは、今度はこちらから行かせていただきます。」

そう言うと同時に、樹の根が次々と襲いかかってきた。

「咲夜選手が放つ樹の根が次々と朝倉選手に襲いかかる！朝倉選手！必死に避ける！避け続ける！」

くそ！数自体はそれほど多くないが、一本一本が早く、自在に動くため軌道が読み辛い。

瑞穂さんの水の鞭は二本だからまだ読めたが、流石にこの数は読み辛い。
ウォーター・ウィップ

分解しようにも、水の鞭と別でこの根は召喚の類だ。

その元を分解すればいいのだが、そこまで近づけない。

「樹々よ、広葉の樹よ。その生い茂る葉を刃と化し彼の者を切り刻め。」

リーフ・ザンパー
『葉斬』

続いて放たれたのは、生い茂る葉を持つ樹の枝。その枝が振り下

るされて来たため、刀で受け流そうとしたが、樹の葉ではありえない耳触りな金属が擦れる音とその葉からしたため、強引に飛び退った。

そこに樹の根が襲いかかって来た。避けられないと判断し、桜姫で受けたが、そのまま地面に叩きつけられてしまった。

「がはっ！」

肺から空気が抜けるが動きを止める訳にも行かず、その場からすぐに移動した。

次の瞬間・・・樹の根の先端が次々と俺がいた場所へ突き刺さっていった。

続いて襲い来る魔法を警戒し、咲夜へ視線を戻そうとすると、枝が振り下ろされた場所が深く削り取られていた。

『これは凄い！咲夜選手が放った樹の枝が舞台を削りとった！これははいつたい！』

『あれは、枝に茂っている葉に仕掛けがあるね。』

『と、言いますと？』

『あの葉一枚一枚が刃のようになっていて、触れたものを切り刻むんだらうね。しかも、枝の本体が回転すればまるで掘削機の様になる・・・といったところかな？』

『えぐいですね・・・』

『そうだね。あの根も鞭かと思いきや刺突にも使える・・・とても厄介だね。』

「咲夜、俺を殺す気か？」

そうとしか思えない攻撃だぞ？

「まさか、こうまでしないと純君に勝てないと思いましたから。それに、ここじゃ死なないですよ？」

「いや、でも痛みはあるから！あんなんで切り刻まれたら俺、ミンチだから！」

「大丈夫です！」

「何で！？」

「純君だからです！」

「理由になつとらんわ！」

芙蓉さんみたいな事言うな！

「そんな事よりいいんですか？立ち止まっています？」

「何？」

そう問い返した時、足元から根が突きだしてきた。

「しまっ……！」

どうやら、突き刺さったままと思っていたが、地面を突き進んで

きたようだ。

「捕まえましたよ？純君。」

突きだしてきた根を二本切ったところまでが限界だった。

三本目へ切りつけたが途中で止められてしまい、桜姫は根の半ばで捉えられ、俺も根に捕まってしまった。

「さて、どうします？私の樹は炎への耐性も強いですからそう簡単に燃やせんせん。」

桜姫も手から離れてしまっている状態でまだ続けますか？

そう言いながら杖を俺へ突きつけてきた。それに呼応するように根も俺を締め付ける。

「ぐっ……そう……簡単に、ぐあ……はあ、俺が……、はあ、降参……がっ！……するとでも？」

「そうですか……なら、仕方ありませんね……」

そう言うと、俺を締め付ける力が上がった。絞め落とす気が……

「ぐあ、くそ！」

俺は強引に右腕を樹の根から抜き出し、右眼に持っていた。

すると右眼に魔方阵が浮かび、右眼から紅い石が取り出され、右手で掴んだ。

「いったい、なにを……？」

俺はその石に溜めていた魔力を使い、一暴虐の炎熱《tyranny extreme heat》を放った。

俺を捕まえていた根は炭化し、その縛りを解いた。他の根や枝も燃やそうとしたが、表面だけ炭化し、焼き切れなかった。

流石に耐性が高いな。世界樹の加護もあるんだろうが、咲夜自身の錬度も高いからか。根や枝に対炎の魔法がかかっているからな。

「なっ！なんですか！？その魔力は！？それにどうやって上級魔法で私の根を焼いたのですか？」

「そうだな・・・手の内を晒すのは俺としてはあまりしたくないが・・・いいだろう。まず、この魔力についてだが、それはこれのおかげだ。」

言いながら右手にある紅の石を見せる。

「それは？」

「これは紅の魔石、紅魔石（こうませせき）または魔を降ろす石と書いて降魔石（こうまはせき）とも呼ばれているものだ。魔力を溜めることができる。」

「・・・確かに宝石の中には魔力を溜めることができる物もありますが、そこまでの量は溜めこめないはずですよ。」

「良くてAクラスのはず・・・純君から感じる魔力はSを越えています！」

「宝石とは人を魅了する輝きをもつ。それは宝石自体に魔力があるからとも言われている。」

実際、そんなのだろう。宝石に魅了され人生が狂った者もいれば、ある宝石を手にした途端、成功を収めた者もいる。また、かなり昔から呪術にも用いられたりしていた。

もちろん全ての宝石がそうと言う訳ではない。・・・が、宝石には魔力を持つものがあるという事実から、宝石に魔力を溜めることができるのでは？という考えにいたるのは当たり前だろう。これは大昔から行われてきたことだ。

しかし、それでも石に溜めて置く魔力には限界があった。始めはFランク位しか溜められなかったらしい。そして今日に至っても良くてAランクまでとなっている。

まあ、宝石は魔力より人の思念や欲の方が吸収しやすいんだが、それは置いておく。

「確かに、普通の宝石だったらな。言っただろ？これは紅魔石こうませき宝具の類なんだよ。

こいつにはSクラスまでの魔力を溜めて置くことができる。」

「その様な石聞いたことが・・・」

「無くて当たり前だ。一般的には別の名称で呼ばれているからな。」

「別の名称？」

「ああ、一般的には吸血石きくけつせき、いや、吸血鬼の瞳きくけつしやうのひとみと言った方がいいか？」

「なっ！？そんなもの、どこで・・・」

「まあ、昔色々あってな……こいつは知り合いの吸血鬼から譲り受けたものだ。」

「といつても、俺は吸血鬼じゃないからな。普通に魔力を溜めることはできない。」

「こいつを人間が所持する場合、所持者の血を吸ってその中に魔力を蓄えるんだよ。」

「……これまで使用しなかったのは？」

「俺の魔力はCランクだ。一度使っちゃったら、溜めるのにまた時間がかかる。」

「できれば使用せずに行きたかったが……そうも言っていられないようだからな。」

「それと、咲夜の樹を完全に焼き払えたのは、咲夜が樹にかけていた対炎の魔法を俺が分解したからだ。」

「さて、どうせだ。一ついいもの見せてやるかね。」

「さて、咲夜。お前に一つ魔法を見せよう。この魔法はあくまで法則だ。」

「だが、自分の法則を持つてくることが出来る魔法でもある。」

「……え？」

「それは、永久に舞い散りし桜の花。咲き誇りし桜の樹々。」

その中央に聳えしは桜の王。

夢を集め、思いを集め、願いを叶える。

きつとその王は桜と夢幻でできていた。』

『むげんとうかく夢幻楼閣』

その詠唱が終わると同時に、舞台上、俺と咲夜だけが『俺の世界』に包まれた。

「ここは……」

咲夜は辺りを見回している。まあ、驚くだろうな。いきなり周りが桜の樹だらけになったのだから。

「ようこそ咲夜。俺の世界へ。」

そう言って咲夜の前に姿を現した。

「純君！……その姿は？」

「この姿か？魔法使いの血が活性化して出てきているんだよ。」

俺の姿は金髪、碧眼になっている。稟達に説明した魔術師モードってやつだ。

まあ、今の俺はまだ、魔法使いだな。

「……ここはなんですか？」

「ここは俺の世界。『夢幻楼閣』、固有結界ってやつだ。」

「固有結界！？純君……いったいどこまで……」

「まあ、気にしなさんな。あ、後、この結界の特性は夢、幻を見せることなんだが、今回はそれはしないぞ。目的としては、世界樹の干渉を避けるためだからな。」

この結界で覆われている限り、外の世界からの干渉は受け付けなくなる。それは世界樹も同様だ。

と、いつても強引に干渉しようとするれば出来ないこともないがな。

「さて、咲夜に見せたかった魔法はこれなんだが、サービスだ。

もう一つ見せてやる。全力で防御しろよ？」

『せんしんばんか
千陣万花』

この魔法は桜の魔法の第五陣で最後の魔法だ。この結界の中でしか使えない魔法でもある。

「千陣万花？千変桜花とは違うのですか？」

障壁と結界を張りながら聞いて来る。

「基本は一緒だ。千変桜花は桜の花で魔方陣を書いたり動物や武器に姿を変えさせることができる。」

この千陣万花も桜の花で魔方陣を描くんだが、違うのは、魔方陣で魔方陣を描く事だ。

魔方陣がほぼ無限に増え続ける。」

「反則じゃないですか！」

いや、一応法則には従っているんだけどな。

「だが、この結界の中以外じゃ使えないんだよ。」

「どうしてですか？」

「消費魔力と規模が大きすぎる。外で使えば、発動する前に俺が気絶する。」

魔術師状態なら可能だが、結局法則内の力である以上、魔術師状態になった時点で威力は格段に低くなる。魔術を使ったり、魔力操作で強化した普通の魔法を一発一発打った方が効率が良い。もちろん魔力操作で強化可能だが、規模が大きいため一発の威力はたかが知れてしまう。

「でも、固有結界だけでも反則なのに、千陣万花って、酷過ぎないですか？」

「まあ、弱点はあるんだが・・・それは秘密だ。」

さて、そろそろいいか？」

「はあ、いつでもどうぞ。」

手も足もでない女の子に一方的に攻撃するなんてどれだけ鬼畜なんでしょうか。」

「それはすまない。でも咲夜も人の事言えないと思うんだが。」

俺を締め付けていた時、嬉しそうだったぞ？」

「そんなことないです！私は純君程Sじゃないです！」

「でも、Sなんだな。」

「~~~~~!」

声にならない叫びを咲夜は上げているが気にしない。

「さて、それじゃ、行くぜ!」

「もう、好きにしてください!」

俺が腕を振り下ろすと同時に展開された魔方陣が輝きだし、一斉に魔法を放った。

そして……

Side 天城 皇月

「いったいどうなっているの?」

純一君が魔法を使うと舞台が桜色の結界で包まれた。中の様子は分からない。

「まさか、固有結界とはね。どれだけ隠し持っているのよ。朝倉君。」

瑞穂は関心したような、呆れた様な声でそう言った。

固有結界で包まれている以上中の様子は分からない。

どうなっているのか分からず心配していると、結界がだんだん解けて行った。

まるで桜の花が舞っているような幻想的な光景に少し見とれてしまった。

そこには・・・

「これは！どういうことでしょうか？倒れているのは・・・天城選手？そして立っている金髪の男性は・・・？」

そして結界が完全に解けると、金髪の男性の髪が黒に戻っていた。

「こ、これはどういうことでしょうか？金髪の男性は・・・なんと、朝倉選手でした！金髪から黒髪へ色が変わっていく様を皆さんも見ていたでしょうか？どういう訳か分かりませんが、とにかく、立っているのは朝倉選手！朝倉選手の勝利です！」

金髪・・・固有結界の中では本来の姿になるような話をきいたことがあるけど・・・じゃあ、あの姿が純一君の本来の姿なのかしら。まあ、とにかく・・・

「本当、どこまで楽しませてくれるのかしら。」

「臯月、楽しそうなところ申し訳ないが、次に彼と当たるのは俺だよ。」

あの消耗具合じゃ俺には勝てないかな。」

まあ、確かに、あれじゃあ、次は無理かな。

「まあ、そうね。リーアや咲夜のこともあるから純一君には勝手欲しいのだけど……」

「俺がそれを理由にわざと負けるとでも？」

「……そうよね？まあ、私が春頭を完膚無きまでに叩きつぶせば問題はないだろうけどね。」

「おいおい、もう勝った気でいるのか？」

「ふふ、負けないわよ？私は。ねえ、ソラ？」

そう言うとソラは笑って返事をしてくれた。

「……そうですね。あなたが神風に負けるとは思っていないですよ。でも……」

「でも、何？」

彼を……朝倉純一を軽視するのは危険です。彼は……おそろく……」

「ソラ？」

なんでもありません。次で負ければあなたと戦う事は無いでしょうし……」

「????？」

ソラが何を言いたいのかわからない。まあ、とにかく……」

「蒼也の次の試合の相手は杉並君だっけ？」

私にそんな事言っただけあなたも杉並君に勝った気ではない。

「純一君の昔からの友人らしいから何かしら隠し持っているかもよ？」

「関係ないよ。それら全て俺の炎で焼き尽くすだけさ。」

さて、蒼也が負けるとは思わないし、純一君もここまでの様だし、このランキング戦、もう楽しみはないかな。

Side 天城 咲夜

「ん……ここは……？」

「お、起きたか咲夜。」

「……純君？」

「ああ、俺だ。ここは医務室。気絶した咲夜を運んだんだよ。」

そうでした。純君の魔法を受け気絶してしまったんです。

「そうですか、ありがとうございます。」

「いや、俺も悪かった。少しやりすぎた。」

純君は落ち込んでいる様でした。

「気にしないでください。試合だったんですから。」

「でも、すまない。」

「それは、もういいです。ところで、何故私にあの魔法を見せたのですか？」

話題を変えるため、試合の時から気になっていたことを質問してみました。

「ん？咲夜の樹の属性が俺の桜の属性と同種だと思ったから参考に。それと、咲夜は世界樹の巫女だ。これから色々な面倒事に巻き込まれるだろう。」

固有結界は必要になってくるかなと・・・ね。」

「そうでしたか・・・ありがとうございます。でも、次の試合は大丈夫ですか？純君もう、ほとんど力残っていませんよね？」

今日は最初から瑞穂さん、次に私、いくらなんでも一度に当たりすぎです。そして、今日最後の相手はおそらく蒼也さんになるでしょう。」

「まあ、そうだが・・・やれるところまでやってみるぞ。」

咲夜はもう少し休んでな。何か飲み物でも買ってくるよ。」

そう言って席を立っていきました。

純君・・・どうするのでしょうか・・・

窓の外を見るとまだ日は頂点を過ぎ少し傾いたところでした。今

日はまだ続きます。

第二十六話 VS 天城 咲夜（後書き）

さて、全体的に強くし過ぎてしまった……。反省。そして、純一
が更にチートに……。弱点はあるんですけどね。

第二十七話 リーア・アルティン VS 水無月 瑞希

Side リーア・アルティン

「こんにちは。アルティン先輩。」

「ええ、こんにちは。瑞希さん。」

私の本日最後の試合。相手は水無月 瑞穂の妹の水無月 瑞希。

「先輩とこうして戦うのは初めてですね。」

「そうですね。そういえばこれまで一度もあなたとは戦った事が無かったですね。」

そう、私達が試合をするのは初めてです。

中等部から一緒なのですが、その機会は一度もありませんでした。

「先輩にはすみませんが、勝たせていただきます。」

そう言いながら右手の手のひらをこちらへ向け、左手を腰のあたりで構えました。

彼女の格好は水無月瑞希に似ていますが色は銀で、青いローブを羽織っています。

姉が格闘タイプなら妹は魔法使いタイプといったところでしょうか。ちなみに無手です。

この様子だと「杖」は武器の形をしていないようですね。

私は黒いショートパンツに同じく黒いタートルネック、白いコート。

「杖」は大鎌です。銘はクレセント・ムーン。愛刀？です。

「いくら祖の五家だからといっても、後輩に負ける気はありませんよ?。」

「それでは、二人ともよろしいですね？

・・・始め!。」

開始後、瑞希さんは水の弾丸ウォーター・バレットを展開、接近しようとするのを牽制で放ち、呪文を詠唱し始めました。

これは近づきづらいですね。私には純や瑞穂さんほど速度はないですから・・・

『・・・絶対零度の氷の刃。風を纏い、死を呼ぶ嵐と化せ・・・』

氷刃の死嵐ひょうじん しらん』

最初から氷と風の合成ですか・・・

私は「杖」に登録している魔法を使用し、自分の周囲の空間を固定しました。

スペース・フィックス

『空間固定』、空間魔法の一つで空間そのものを固定する魔法です。

この魔法は空間を固定化するため、外部からの物理的な影響を一切受け付けなくする魔法です。代わりにその場から動けません。また、その間、他の魔法も使えなくなります。

どれくらい経ったでしょうか・・・氷の嵐が止み、魔法を解除し
急いでその場から飛び退きました。
飛び退いた所に氷の槌アイス・ハンマーが振り下ろされました。

「容赦ないですね・・・」

アイス・ハンマー
氷の槌を避け、辺りを見ると一面、氷の刃が刺さっていました。

「その中で平然としておいて良くいいいます。」

「それでもないですよ？目の前で凶器が降り注いでいるのですよ？
怖くて、怖くて・・・閉じこもっていましたから。」

「そのような見えませんがね。」

さて、瑞希さんは最初からあの場を動いていないようですね・・・

これなら・・・

「今度は、こちらから行きます。」
スペース・フィックス
『空間固定』

「え？」

「どうです？動けないでしょうか？」

瑞希さんは動こうとしているのでしょうか。ですが、指一本動かせ
ないはずですよ。

「何をしたんですか？」

「あなたの周りの空間を固定しました。」

「なっ！どうやってですか？」

空間魔法は対象とする空間を把握しなければならぬはずで

あれだけの氷の嵐の中どうやって把握したんですか？

それにこれだけの空間を把握するには早すぎます！」

「まず、勘違いしているようですから訂正を一つ。

把握する空間はそれをしたところだけを把握できればいいので
す。

ですから、これだけ広い空間を全て把握する必要はありません。」

「でも、普通なら、少なくとも私とあなたの間は把握しなければならぬのでは？」

「そうですね。種明かしを……。瑞穂さんや咲夜さんから聞いて
いませんか？

私の瞳の話？」

「瞳ですか？」

「その様子では知りませんでしたか……。まあ、仕方ありませんか。
あまり知られたくない事ですから。」

私の瞳は『千里の天眼』と呼ばれるものです。」

「『千里の天眼』？まさか……」

「ええ、その通りです。あの状態で他の魔法は使えませんが、
この眼を使用することはできますからね。」

失礼ですが、視させていただいていました。」

「そう……ですか……。
でも、この魔法を使っている状態では他の魔法は使えないんじゃないんですか？
どうするつもりです？」

空間魔法は極地属性ということもありその制御は他の属性より群を抜いて難しい。

そもそも同時に複数の魔法を使用したり合成すること自体、難易度の高い事なのだ。（祖の五家の連中や純一はバカス力撃っているが……）

そのため、極地属性ではほぼ不可能と言われている。もちろん「杖」に登録している魔法も同様だ。発動するのは結局使用者なので発動しようとするとなかなか思考がそっちへ持っていかれてしまっうからだ。

「そうですね。他の魔法はそうです。ですが……」

そう言つと私は彼女の口と鼻の空間も固定しました。

「あくまで、空間固定以外の魔法は……ということだ、

この魔法を他の部分へ広げることが可能なのですよ？」（ニコリ）

そのまま、彼女の意識が無くなるまで、継続し、無くなったところで解除しました。

「その場を最初から動かなかつたことがあなたの敗因です。」

（（（ひびく……）））

「勝者！リア・アルティン！」

Side 朝倉 純一

これはまた・・・水無月さんもリアさん相手に使用する魔法を間違えたな。

あれだけの大規模な範囲魔法を使えば使用者も簡単に動けなくなる。あれじゃ自分の周囲の空間を把握してくれと言っているようなものだ。

まあ、リアさんの天眼を知らなかったのなら無理はないか・・・

「それにしても、リアさんもえぐいな。最初から顔まで固定すればいいものを、

わざわざ後からするなんて・・・」

「いえいえ、最初に把握できていたのは彼女の腕と足の部分だけでしたので・・・」

「・・・・・・・・」

独り言に急に割り込まないでください。

「いつもの純なら気付いていたと思うのですが？」

「心の声に平然と返さないでください。」

「それはすみません。それより、見に来てくれていたのですね？咲夜さんは？」

「咲夜は医務室で休ませています。」

「そうですか、あなたは休まなくていいのですか？」

私の気配に気づかない程、消耗しているのでしょうか？」

「いや、休もうとは思ったのですが……」

咲夜と一緒に寝ようとさえしてこなければ……

ポカ！

「イテ！」

ポカ！ポカ！

「あの、痛いんですが、リアさん？」

どうしたんですか？

「何か、不愉快な気分になりました。」

むっとした顔をしながらこちらを見てくる。

いや、どうして心の声に反応できるんですか？

「乙女の感です。」

そうですか……

「それより、あなたの次の試合の相手……火鏡蒼也の試合を見るに

行かなくていいのですか？

それに、今、戦っているのはあなたの友人ですよね？」

「ええ、そうですね。行きますよ。俺のブロックは進行が遅いので、多分これから始まります。」

「そうですね。なら行きましょう。私は今日の試合は全て終了しましたから。」

・・・俺、今日一番最初の試合だったのに・・・

進行速度違い過ぎだろ。俺の最後の試合はまだ残っているのに・・・

「早いですね。それじゃ、行きましょうか・・・」

リアさんと一緒にCブロックの試合が行われている会場へ向かった。

・・・

そして、会場に着くと・・・何やら様子がおかしい・・・何があった？

また、『出来損ないの賢者の石』でもでたのか？

リアさんと顔を見合わせると、舞台が見えるところまで移動した。その舞台の上には・・・

一気絶している火鏡 蒼也さんと、無傷で立っている杉並がいた。

「これは、どういうことですか？火鏡蒼也が負けた？いったい何が？」

杉並が勝った？確かに杉並は強いが普通に戦えば蒼也さんが勝つ。

・・・まさか、使ったのか魔術を・・・こんな表舞台で・・・

「純。とりあえず、知り合いを探して聞き出しましょう。」

「・・・そうですね。」

リアさんの提案で知り合いを探すと、焰と瑞穂さん稟達が見えたのでそちらへ近づいていった。

「よう、稟。この状況、説明出来る奴いるか？」

「・・・純・・・俺もよく分からない。」

最初は火鏡先輩が押していたんだが、何故か途中から杉並が押し始めて、

しかも先輩の炎を喰らったのに何故か無傷で現れるしで・・・」

稟の話を聞いた限り、詳細は分からないが何が起こったかは理解した。

使ったのか・・・魔術・・・

「私の方から説明するわ。」

瑞穂さんが説明してくれるようだ。

「といつても、大方はさつき土見君が行った通りなんだけどね。」

そう言つて話し始めた瑞穂さんの話をまとめると、

最初は、杉並は闇、蒼也さんは炎の属性魔法で接近戦も含め互角に撃ち合っていたらしい。

その中で杉並が影を使い攻撃をして、蒼也さんに手傷を負わせたが、炎を全体に展開され、影自体を無くされたらしい。

その後、雷と炎の合成魔法なども使い蒼也さんが一方的に杉並を押しに行った。

最後に神炎を喰らい、杉並の負けかと思われたが、次の瞬間、蒼也さんの後ろに無傷の杉並が現れたらしい。

その後は逆に杉並が一方的だったとのことだ。

蒼也さんは蒼炎を出したが、それを喰らっても次の瞬間には無傷の杉並がいたそうだ。

そして、消耗した中で杉並の一撃を喰らい、気絶・・・と。

「あなたならこの仕掛けが解るんじゃない？」

瑞穂さんは視線で説明しなさいと言つてきている。

焰も何かを期待したような眼をしている。

「・・・俺から言えるのは時の属性によるものとか言えません。」

「そんなバカな！奴は闇しか持ってないだろう！？」

「焰・・・いや、時も持っている。」

「だが、測定の時は・・・」

「測定器も完璧ってわけじゃ無いからな。」

「それでも、時の魔法でどうやってあのようなのができる！？それに、兄貴の蒼炎は時さえ燃やすことができるのだぞ？」

「へへそれは凄い。だが、燃やす時を違えば効果は無いだろ？」

「どっという意味だ？」

さらに問い詰めてくる焰にどう説明しようか悩んでいると・・・

「純・・・まさか杉並も？」

キキヨウが聞いてきたが・・・

(稟、キキヨウ、約束・・・守れよ?)

念話で注意を促すと二人とも頷いた。

「キキヨウちゃん？あなた何か心当たりあるの？」

「い、いえ、ただ、杉並も純一と同じで魔法を分解できるのかなと・・・」

「朝倉君？そうなの？」

「いえ、出来ないこともないとは思いますが、蒼炎は無理でしょうね。」

「そう……なら……」

納得するまで続きそうだな。

「まあ、とりあえず、次の俺の試合相手は杉並ってことだな。さて、頑張りますかね。」

そう言って、その場を逃げるように後にした。

俺を呼ぶ声が聞こえたが、気にしない。それにしても……こんな表舞台で魔術使うなんて、

杉並の奴、何を考えている？

第二十八話 魔術師 VS 魔術師 (改) (前書き)

戦闘シーンより、会話が多い・・・
すいません。光の嵐から雷の嵐に変更させていただきました。

第二十八話 魔術師 VS 魔術師 (改)

Side ????

魔術は俺にとって復讐を成すための力。復讐を成すために求めた力だ。

俺がこの力を使う時は、殺してもいいと思った時。

他者の命などどうでもいいと思った時。

他者の思いを、願いを、未来を踏みにじる力・・・

それは、俺が目指した魔法使いとは正反対のあり方・・・

だからこそ俺は、人前で魔術を使う事を止めた。

出来損ないの魔法使いと名乗り、誤魔化した。

そんな事をしても意味が無い事は分かっているのに・・・

魔術を捨てることもできず、結局、魔術に頼っているくせに・・・

それでも俺は・・・

Side 神城 誠

「・・・雷の嵐よ、彼の者を刻め！」
サンダー・ストーム
「雷の嵐」

「ふふっ、効かないわよ？」

「なんですか、その魔法は・・・天城先輩。」

今、僕は今日最後の試合に臨んでいる。相手は、天城 皐月先輩だ。

「雷は自然の脅威の一つ・・・あらゆるものを貫く槍なり。

光は聖なる象徴・・・悪を裁きし正義なり。

・・・雷よ、最強の槍よ、光を纏い彼の者へ聖なる裁きを与へよ・

ホーリー・ライトニング・ランス
『聖光の雷槍』」

これなら！

空気を突き破る轟音と共に雷光の槍が一本、皐月へ落ちてきた、
が・・・

「・・・これも駄目ですか・・・」

皐月へ当たる手前で何かと衝突し、数秒後、その余波を残し消え去ってしまった。

皐月の周囲は深く抉れ、その威力を物語っているが、皐月には傷一つ付いていない。

「凄いわね。光と雷の合成魔法・・・その年でこれだけ使えるなんて、

天才と呼ばれるだけあるわ。」

皐月は誠の魔法を褒め称えるが・・・それは皮肉にしか聞こえない。

「素直に「ありがとう」とは言えませんね。それをそんなに余裕で防がれては。」

それに、あなたとは一歳しか変わらないでしょう。」

一つしか違わないのに、自分のあらゆる魔法が防がれているのに、褒められたのだ。

素直に喜べないのが当たり前だ。

「それもそうね。ごめんなさい。でも、凄いと思ったのは本当よ？」

「そうですね・・・まあ、それはいいです。問題はあなたが今展開している魔法です。」

なんですか、それは？去年まではそんなもの持っていないませんでしたよね？」

中等部からお互い同じ学校に通っており、ランキング戦でも何度か顔を合わせた事があるが、こんな魔法一度も見ただ事ない。

「そうね。最近やつと使えるようになったのよ。」

『天空の鎧』、この魔法を破るのはなかなか難しいわよ？」

某有名RPGの4番目に出てくるような名前の魔法だ。

この鎧は、天空より下位の属性魔法を全て完全に防ぐ事ができる。

では何故、光と雷の合成を防ぐ事ができたのか、それは誠に教え

ていないが、
鎧と同時に展開している『天空の盾』による。

『天空の盾』は防御できる範囲は狭いが、
天空の属性と同等かそれ以上の属性を防ぐ事ができる。
が、下位属性は防げない。

『天空の鎧』は広範囲を下位属性から完全に守り、
『天空の盾』は狭い範囲を上位属性から守る。

この二つを合わせると鉄壁の防御の完成だ。

弱点としては、分解、魔力無効果、上位属性以上による360度
攻撃。

後は、魔力量によるゴリ押しだ。

「そのようですね。正直、攻略法が思い付きません。」

「なら、降参する?」

「まさか、攻略法が思いつかないのなら、正面から当たるだけです。
行きます!」

僕は剣に魔力を集中させ、向かっていった。せめて一太刀だけで
も……

……

そして……

「勝者、天城 皐月！」

「……………」

「……本当凄いわね、『まさか天空の鎧』が破られそうになるなんてね。」

「……………」

「ふふっ、もう聞こえてないか……あなたは確かに強かったわよ。それじゃあね。」

皐月はそう言い残し舞台を後にした。

後に残ったのは破壊されつくした舞台と、全力を出し切ったためか、

満足気な顔をして気絶している神城 誠だけだった。

「さて、そろそろ純一君の試合か……結果は見えているけど見に行こうかしらね。」

Side 朝倉 純一

『それでは、本日最終試合、朝倉 純一選手 対 杉並選手 の試合を始めたいと思います！』

麻弓のその言葉に会場が湧き上がった。どうやら他のブロックの試合は全て終了したようで、ほとんどの生徒が集まってきている様だ。

『この二人、どちらも、あの祖の五家を、しかも次期頭首を破つてこの場におります！』

この二人の試合、楽しみにしている方々も多いのではないのでしょうか？』

『そうだね。純ちゃんとはかく杉並君が火鏡の次期頭首を倒すとは、』

だれも思っていなかっただけに、更に注目を集めていると思うよ？』

フォーベシーの言う通りだろう。未だに会場からは戸惑いの空気が感じられる。

『そうだな。皆この試合は純殿と火鏡 蒼也だと思っただろうからな。』

正直どうなるか予想は全くつかねえ。二人とも実力を隠し過ぎだ。』

いや、魔法使いの戦いは普通、隠すものだと思うのだが・・・

『お二人はどちらが勝つと思われませんか？』

『うーん・・・純ちゃんと言いたいところだけど、』

消耗的には純ちゃんの方が大きいからね。杉並君が優勢かな？』

『俺もマー坊と同意見だ。純殿がまだ隠している力があれば別だがな。』

言ってくれるな。だが、こんなところで魔術は使いたくない。

あれは俺にとって・・・

『さあ、そろそろ始めましょう。境先生、お願いします!』

麻弓の言葉に頷いてみせると、俺と杉並の間に立った。

「それでは、両者準備はいいですね?.....試合、始め!」

開始の合図と同時に接近戦に持ち込もうと走り出した。

正直、もう力はほとんど残っていない。短期で決めるしかない。

が・・・

『闇針』

黒く細い針が襲ってきた。

「ちっ!」

接近するのは諦め、距離を取り、逃げ回る事にした。

この針は闇で構成され、どちらかというところ奇襲や暗殺に用いられる。

「どうした朝倉よ、逃げてばかりでは俺には勝てないぞ?」

しかし、一本一本が細く、数も多いため、分解もしづらい。

一発一発の強度はあまりないため、魔法が使えば、下級魔法でも十分対処できるし、

身体強化ができれば体術でも何とかなっただが、今の俺には逃げ

回るしかない。

これじゃあ体力が削られる一方だ。

どうする？

「どうした？ 気力も霊力も、そして魔力も底を尽きかけている・・・切り札の紅魔石も使用した。

あれは、Sクラスの魔力を溜めることができる代わりにその分の血を失う。

その上に一度使用すれば、それで溜めこんでいた魔力を全て使うかな。

他に手はないだろ？」

「・・・何が言いたい・・・」

言いたいことは予想はつくが・・・

「わからないか？ 俺に勝つには手段は一つしかあるまい。何故、魔術を使わない。」

やはり、そう来るか・・・だが・・・

「・・・あれはこんな所で使うものではないだろ？」

「そうか？ 祖の五家の魔力を考えてみる？ あれは普通に考えれば脅威であるう？」

俺が戦った火鏡 蒼也の『蒼炎』、

同志が戦った水無月 瑞穂の『海神の三叉矛』ホセイドン・トリアイナ

どれも世界の制限、限界ギリギリだ。

あれだつて本来こんな所で使うようなものではないだろう?」

「だが、あくまで法則・・・魔法だ。俺達とは、魔術とは違つ。」

魔法と魔術じゃ危険性が違つ・・・

「・・・ふむ、よくわからないな。何故それが使わない理由になる?」

「・・・魔術は反則、存在を知られていい力じゃない。」

使用者への反作用が何より危険だから・・・

「ふむ。確かにその危険性からあまり存在を知られていい力ではない。い。

が、知られたところで使えるようになるわけではない。

それに、魔法使いじゃ魔術を理解するのは無理なことは知っているだろう?」

「・・・だが!」

「なあ、朝倉よ・・・お前が魔術を人前で使わない理由は本当にそれなのか?」

「・・・どういう意味だ?」

「お前が言う事はもつともな部分もある。

魔術はその危険性からあまり公にその存在を知られるべきではない。

・
・
が、俺の言った通り、知られた所で使えるわけではない。

特に俺や、お前の魔術は、な。

なのに、お前は使わない。他の魔術師だってそこまで拘っていない。」

「・・・何が言いたい？」

「違つのだろ？お前が公に魔術を使わないのは、そんな理由ではないはずだ。」

「・・・」

「化け物と言われるのが怖いのか？」

「・・・違つ・・・」

「他者から拒絶されるのが怖いのか？」

「違つ！」

「ふむ、なら何故だ？そこまで使おうとしない理由は？」

「それは・・・」

「何れにしる、俺に勝てなければ神風 春明まで届くまい。

朝倉・・・お前はとうするつもりだ？

このままだと奴がアルティン嬢と結婚する事になるのだぞ？
天城嬢も馬鹿にされたまま・・・それでいいのか？」

「いい訳ないだろ！」

「なら、なりふり構っていられないだろ？何故ためらう必要がある？」

「・・・だからだ・・・」

「何？」

「魔術は俺にとってただ、殺すための力だからだ！」

「・・・・・・」

「あの力は誰かを助けたり、救ったりするためのものじゃない！ただ殺すため、そのただけに拵んだ力だ！それをこんなところで使えるか！」

「それは、嫌われるのが怖いのではないのか？」

「違う！誰かに嫌われるのが怖いとか、魔術を忌避しているとかじゃない。」

「そうじゃなくて・・・」

「そうじゃないんだ。本当に怖いのは・・・」

「怒りや憎しみに囚われた頃の自分を思い出すのが怖いか？」

「つつ！..！」

「こいつ！気付いて・・・」

「その力で傷つけてきた者達の事を思い出したくないのか？」

「……………!!」

くっ……

「今さらだろ……お前がその力でしてきた事は今さら変わらない。変えようがない。」

「だから……俺は……」

そんな事分かっている!だから……

「だからこそ!だからこそ、お前は魔術を使うべきだ。」

お前は殺す事しかできないと思っっているようだがな、

その力に助けられた者達だっているのだぞ?

その者達を否定するのか?

「……それは……」

だが、それは単に結果として、だ。

「土見やりシアンサス嬢とキキヨウ嬢の姉妹の件もそうだ。」

お前が魔術を使ったから助けられたのだろう?」

「あの時はあれしかなかったから……」

あの時は確かに助けるためだが、他に方法もなかったし、口止めも効いた。

「それは今も同じだろ?別に、後悔するなとも、自分自身を許せと

も言わない。

だが！お前の魔術でも人を助けることができる。

これまで殺すことしかできなかったのなら、

これからはそうしなればいいだけの話ではないか！

お前にはそれだけの力があるだろ！」

っつー！！

・・・こいつ・・・それを言うために？

「・・・・・・・・・・」

・・・はあ、かつたるい・・・

「本当、かつたるい。お前にそこまで言われるとは・・・俺もやきが回ったもんだ。」

まったく、俺が悩んでいた事を簡単に言ってくれる。

言うほど簡単に行くもんじゃないだろうに。

「ふっ、何、同志が後悔しないようにと思っただけ・・・」

だが、そうだな。それは魔術を使わない理由にならないんだよな。

「ふっ、サンキュー、杉並。おかげで完全にではないが吹っ切れた

よ。」

所詮、力は力使い方次第だよな。過去と今じゃ違う・・・

「そうか、では・・・」

「ああ、ここからが本番だ。行くぞ！」

今、ここから新たに始めよう。殺す以外のために魔術を使おう・

「ああ、始めよう。魔術師はんそくどうしの戦いを！」

「封印解放！！」

誰かを助けるために、リアさんと咲夜のために・・・

Side 天城 皐月

会場に着くと純一君と杉並君が戦っていた。どうやら、蒼也は負けたらしい。

どうやって蒼也に勝ったのかしら？

しかし、そんな疑問も直ぐにどこかへ飛んでいった。

「なに・・・この試合・・・」

何か会話をしていたと思ったら、今度は二人の魔力がいきなり上昇した。

純一君も杉並君も軽くSランクを越えている。純一君にいたってはまだ上がっている。

それだけでも信じられないのに・・・

「何？この魔法？」

炎と氷の合成？黒い雷？赤い水？見たことがない魔法が飛び交い、その魔法が起こす結果も何故そうなるのか、解らない。

「純一君は一体何をしたの？」

炎と氷の合成は本来、魔力の塊になるか不発のはずなのに、
なんで、舞台の一部を消滅させている？しかも余波で炎と氷が舞台を吹き荒れている。

黒い雷は地を這い、留まり周囲に広がって消えない。

赤い水をかぶった大地は干からびている。

「杉並君も・・・」

魔法が当たったと思った刹那の瞬間、純一君の背後に現れるし、魔法の時を止めるし・・・

それに対応できる純一君も、いったい何者？

・・・やはり、彼・・・いえ、彼等は、魔術師・・・

「ソラ？何か知っているの？」

・・・彼等は魔術師と呼ばれる存在。

「魔術師？それは？」

反則・・・法則に縛られないもの・・・

世界からの祝福や運命を否定し拒絶する代わりに、世界の法則を越える力を得た者達。世界の敵。

「世界の敵？じゃあ、純一君達は私達の敵なの？」

いえ、そう言う訳ではないのです。正確には世界の嫌われ者と言ったらいいのか・・・

「・・・良くは分からないけど、彼等と敵対する必要はないのよね？」

ええ、世界樹も気にしていないようですし。むしろ面白がって歓迎しているくらいです。

「そうなの？・・・あなたは？」

私は、どちらとも・・・

「入学式的时候は気に入って無かった？」

あの時は彼が魔術師とは気付かなかったですから。

私達精霊は世界に帰順する存在。彼等は世界を否定する存在。

なんとも言えないのです。私個人としては嫌いじゃないのですけど・・・

「そう、でも世界樹は歓迎しているのよね？世界樹の方が世界に近いんじゃないの？」

世界樹・・・というより、ユグドラシルですが、

彼女は世界よりあなたの妹にご執心ですから。
あなたの妹を解放することができるからじゃないかと・・・

「・・・え？・・・できるの？」

朝倉 純一、芳乃カレンの孫であれだけの力を持った魔術師なら
恐らく・・・

「そっか、そうなんだ。」

そっか、そうなんだ。あの子を解放できるんだ。
祖の五家の、そして世界樹の呪縛から・・・

「頑張つてね。朝倉君。」

私は試合に意識を戻した。

Side 朝倉 純一

「相変わらずかつたるいな、お前の魔術・・・『時の後退』と『時の進行』は・・・」

「よく言う、俺の時を捕らえつつあるというのに・・・」

.....

杉並が使う時の魔術の一つ、『時の後退』の特徴は、

1つ、過去の状態へ戻る事ができる。

2つ、過去とは確定されたものなので、決まった過去以外へは戻る事ができない。

3つ、戻る時を間違えるとより危険になる。また、魔力の消費量が大きい。

4つ、対象（魔法や物質）の時を戻すことができる。

『時の進行』の特徴は

1つ、対象（魔法や物質）の時を進めることができる。

2つ、未来へ飛ぶことができる

3つ、未来とは不確定なもので、明確にその道筋をイメージできれば、

未来へ飛ぶこともできる。しかし、魔力の消費量は『時の後退』や

対象の時を進めることと比べても遥かに大きい

4つ、未来とは不確定なため、限界があり、後退より危険である。

そして、どちらにも言えるのが、原則自分以外の生き物への直接の干渉は出来ない。

反則だが、弱点も多い魔術である。

例えば、今、B地点で攻撃を受け、その範囲外のA地点にいた自分へ戻る。

つまり、どの時へ戻るか読まれると常に受け身になってしまう。

『時の進行』も同様だ。未来は不確定であるが、

「今」から選べる未来は限られてくる以上、読まれたらお終いである。

純一がしていることは、舞台一面に継続する魔法を使い、後退する時を限定すること。

また、後退したとしても「今」へ出現する以上、舞台一面に展開されている氷や炎、

黒い雷は出現した時点で喰らってしまうことも含めて計算している。

なお、『進行』は純一が舞台一面に魔法を放った時点で封じられている。

理由は上記と同様だ。『進行』してもダメージが蓄積するだけである。

なら、『後退』しダメージを少しでも減らした方がましである。

杉並もそれに対抗し、その魔法自体の時を止めたり消滅させたりして、

戻る時の幅を広げようとしたり、魔法に対し『時の進行』を使い、消費魔力を大きくさせたりなど手段を講じてはいるが、相手は純一である。

その知識と技術そして魔力操作により、ことごとく防がれてしま

う。
杉並自身、純一相手に受け身に回った時点で勝ち目が無いのはわかっていた。

朝倉純一という魔術師に勝つ方法は、

・正面から押し切る。

・純一が知らない魔法や術により理解される前に倒す。

・封印を解放される前に倒す。

・純一と同等以上のスピードで攻撃を繰り返す。

つまり、純一に最も有効な手段は力押しである。

純一相手に、知識や技術で対抗できる相手は限られている。

なら、力押しの方がまだ有効である。

また、魔力操作はいくら純一の操作技術が優れているとはいえ、大きな魔法や魔術を行使するには一度魔力を集めなければならず、それに時間がかかる。

と、言っても使うクラスにもよるが、上級魔法程度なら一秒も掛からない。

しかし、上に行けば行くほどその時間が致命的になる。

それが魔力操作の弱点でもある。

なお、純一のこの状態は幸運値がマイナスを突っ切っているため、それに対する術も同時に処理しており、スピードによるゴリ押しが一番効果があったりする。

まあ、対抗策はいくつも用意している上に、

それだけの処理を、戦闘をしながら行っている純一の規格外さがうかがえるが・・・

後、蛇足であるが、純一がいつもかったるそうにしているのは、元々の性格もあるが、

これだけの処理を行っている弊害でもある。

・・・

「さて、どうする？そろそろ逃げる『時』も無くなってきたんじゃないか？」

「そうだな。そろそろ王手がかかるな。それに、結界も、もう保たんだろ？」

あー、さっきから互いに魔術使いすぎたせいで、一応気は使ってたんだが、

結界が持ちそうにない。後、二・三発、魔術が当たったら壊れるな。

なら・・・

「そろそろ終わりにしようか？」

「そうだな。これ以上は逃げれないからな。」

そして、互いに詠唱を開始した。

詠唱中に攻撃をしたらと、思うかもしれないが、互いにそれは警戒しているため、効果は薄い。戦闘が長引くだけである。

『総ての時よ・・・汝らを統べる我が命じる・・・』

「我が統べし空間は・・・我以外の者を拒絶する。」

『世界の闇よ・・・我が手に集え・・・』

「火を風を水を土を・・・」

『我が統べし時は、世界の闇をその身に包み……』

「あらゆる元素を、命さえ、そこある事を認めない……」

『今、時の闇が世界へ侵食せん。』

「総てを拒絶する空間は、時の針さえ認めない。」

エロウド・タイム・ダークネス
『侵食する時の闇!』

ネガティブ・ワールド
「拒絶の世界!」

エロウド・タイム・ダークネス
杉並の魔術、侵食する時の闇は

闇が触れたものを時が内包する『世界の闇』が侵食し壊す魔術。

闇により精神を、時の魔術により再生された『世界の闇』が肉体を破壊する。

純一の魔術は極単純、ただ、拒絶する魔術だ。

再生される『世界の闇』と総てを拒絶する空間が拮抗する。

……そして……

『世界の闇』は『拒絶』された……

……

「生きてるか、杉並?」

「何とか……な……よく『世界の闇』を『拒絶』できたものだ。」

あれは誰もがもつ心の闇に働きかけるのだが……」

「まあ、俺の場合、他人の夢を見せられていたからな。耐性があったんだよ。」

人の見る夢はなにもいいものばかりじゃないからな。」

もし、少しでも隙を見せていたら、拒絶できず、飲まれていただらうけどな。

本当、だから嫌なんだ。魔術師同士の戦いは。

生きた心地がしない。

「朝倉よ、ここまで派手に魔術を使ったんだ。今さらためらうなよ？」

「ふつ、当たり前だ。とりあえず今回は迷わないよ。」

「……そうか、まあ、いいだろう。」

「……ああ。」

『え〜と、この試合は……朝倉選手の勝ちでいいのでしょうか？』

『あ、ああ……そうだね……いいんじゃないかい？』

『それでは、本日の最終試合、朝倉 純一選手の勝利です。』

明日はいよいよ最終日、残すところ、準決勝と決勝のみです！』

いよいよ、ランキング戦も終盤です。

第二十八話 魔術師 VS 魔術師 (改) (後書き)

そろそろランキング戦も終了です。終わったら、また稟に頑張ってもらおうかな。

第二十九話 天城 皐月 VS 朝倉 純一(改) (前書き)

戦闘シーンが最近パターン化している気がします。

第二十九話 天城 皐月 VS 朝倉 純一（改）

Side 天城 咲夜

「ねえ、お爺ちゃん。魔術師って知ってる？」

今日はお爺ちゃんも一緒に晩御飯を食べている。

「魔術師？」

何の事でしょう？

「ぬ？・・・どこでそれを？」

「今日、純一君と杉並君がランキング戦で試合をしたんだけど、その時、二人とも魔法じゃあり得ない術を使ったのよ。その時、ソラが教えてくれたの。」

「・・・そうか。あやつ魔術を使いおったか・・・」

「父さんは純一君が魔術師だと知っていたのですか？」

お父さんは知らなかったようですな。

「うむ。魔術師については四朗も知っておろう。小僧についてはカレンさんに聞いた事があるだけじゃ。」

「あの、魔術師ってなんですか？」

「そうか、咲夜は知らなかったの。魔術師とは世界の法則を越える術を扱う者達のことを言う。」

「世界の法則を越える？」

イメージが湧かないですね。

「うむ。そうじゃな・・・例えば、凍る炎や這いまわる雷、枯れる水などじゃな。」

本来、炎は燃えるし雷は地を這ったりしない。水は潤すものじゃろ？
そういつた世界の法則ではありえないことを起こす術を魔術という。

「

「それは、どこまでできるのですか？」

「どこまででもできるし、できない。」

魔術師は魔術を行使し続けている間は常に世界からの修正力を受ける。

もちろんその対策を講じはするが、限界はあるのじゃ。

魔術師にも限界はあるということじゃな。」

「それが魔術・・・それで、純君がその魔術師と言う事ですか？」

「ええ、そうなの。咲夜も見たでしょ？あの試合。」

あんな魔術をほいほい使われるといくらなんでも勝てる見込みが立たないのよ。」

お姉ちゃんが！？確かに、私もあの試合を見た限りでは対策が思い付きませんが・・・

「それで、お爺ちゃん。魔法使いじゃ魔術師に勝てないの？」

「・・・いや、そういう訳ではない。そもそも魔術師には大きく分けて二通りいる。」

一つが、七徳の騎士の様にただ一つの技や現象を魔術としたもの。このもの達はその技一つで世界の法則を覆す。

もう一つが、小僧の様に、世界の法則を理解したうえで、覆す。しかし、それぞれに弱点はあるのじゃ。

前者は、その一つを封じればよいし、後者は、理解させなければよい。」

「でも、世界の法則さえ理解しているんでしょ？」

「そうじゃが、魔法とはなんじゃ？」

「・・・そうか！」

・・・そうか！魔法は世界の法則に干渉し操る・・・

授業などでは習わないが、正確には世界の法則を自分の法則に置き換えることを言う。

つまり・・・

「魔法でも、独自の法則なら理解されない・・・」

「そうじゃ。じゃが、小僧は後者の魔術師じゃ。」

時間をかければ見破られてしまうだろうて・・・

「そつか・・・ありがとう、お爺ちゃん。」

魔法が効くことが分かっただけでも助かったよ。」

「そうか、それは良かった。」

（まあ、小僧でも法則を問答無用で無意味にする魔術はリスクが大きいじゃろうから、

こんな所では使わんじゃろ・・・

相手が同じ魔術師でなければ・・・）

「・・・？」

お爺ちゃんが何か言っていたけれど、声が小さかったので聞こえなかった。

Side 土見 稟

「稟君とシアちゃん。キキョウちゃんは朝倉君のあの姿を知っていたのですか？」

「うん。ゴールデンウィークに機会があっただね。」

楓の質問にシアが答えた。

楓にはゴールデンウィークに襲われたことは秘密にしている。

シアやキキョウにもそれはお願いしてある。

楓に余計な心配はかけたくないからな。

「・・・」

「どうしたの？緑葉君？珍しく黙り込んで？」

樹は珍しく何か考え込んでおり、不気味に思ったのか麻弓が声をかけた。

「いや、純一や杉並が使った魔法の事を考えていたんだ。あれは本当に魔法なのかと・・・ね？」

「ふん。良く気付いたわね。純一が言うには魔術って言うらしいわ。」

樹の質問にキキヨウが答えた。

キキヨウは樹が魔法とは違うものだと思いついた事に感心しているようだ。

「魔術・・・魔法とは違うのかい？」

「私も良くは分からないわ。純一が言うには、世界からの加護や祝福、

運命を拒絶することで世界の法則や制限を越える力を振るうことを言うらしいわ。」

「それが、本当なら・・・」

「ネリネ？どうした？」

「いえ・・・なんでもありません。稟様。」

「そうか？ならいいが・・・」

ネリネは何かを考えているようだった。

「くそっ！なんだ！奴のあの力は！？」

あんな力、俺は知らない！このままでは……

それに、土御門のあの姿……あれは、あの石の……？

「おやおや、何をそんなに荒れているのです？」

唐突にそんな言葉が聞こえてきた。

「貴様は！あの石は何だ！あんな効果があるなんて聞いていないぞ！？」

声の方を向くと、いつの間にか、仮面とフードを被った男か女が分からない存在がそこにいた。

「あんな効果とは何のことです？」

「とぼけるな！お前が寄りこした石だ！土御門の奴はあの石の力で異形になっただぞ！」

「ああ、そのことですか。それは、その方が石に選ばれなかっただけですよ。

その点あなたは大丈夫でしょう。『神風 美冬』から次期頭首の座を奪い、

現頭首から精霊と天剣を奪った時はそんな事なかったでしょう？」

「む……そうだな。」

「そうだ、俺があゝの石の力を使い美冬を圧倒し美冬は未だ目を覚まさない。」

そして、俺は親父さえ倒し精霊と天剣を手に入れたのだ。今の俺に手に入れられないものはない。

「ええ、あなたは選ばれた存在なのです。その石の力を存分にお使いください。」

「そうだ・・・その通りだ！俺は選ばれた存在だ！そんな俺にこそリアはふさわしいのだ！フハハハ！！」

褒められ調子に乗った春明はだから気付かなかった。後に続く仮面の存在の言葉に・・・

「ええ、あなたは選ばれた実験台ですからね・・・フフフ・・・」

Side 朝倉 純一

「かつたるい。今日も最初の試合か・・・」

今日は準決勝と決勝だけなため、試合会場は一つで行う。

「臯月さん・・・今日はよろしく、かつたるい。」

「どんな挨拶よ・・・まあ、よろしくね。出し惜しみは無しにしましようね？」

「ククツ・・・はい。わかってます。すいませんが、勝たせてもらいます。」

「私だって負けるつもりはないわ。」

『さあ、準決勝第一試合。天城家次期頭首、天城 皐月選手 対 魔法とは異なる術、魔術という術を使う魔術師 朝倉純一の試合が、今、始まります!』

あれ？麻弓の奴・・・稟かキキヨウにでも聞いたのか？まあ、仕方ないか。

『今日の解説は理事長、神王様、魔王様に御越し頂いております。』

「それでは二人とも、準備はいいですね？」

今日も、境先生が審判を行うみたいだ。

「あ、今日も先生なんですね？よく無事でしたね。」

「まったくです。あなたの試合の時、どれだけ大変なことか・・・」

『ちなみに、境先生は朝倉選手など、特定の選手の試合の時は、いつも開始の後は結界の外におり、決着の時だけ、中に戻っております。』

「タイムさん！余計なことと言わないでいいです!」

「・・・先生・・・」

「な、なんですか？」

「今回も、逃げた方がいいですよ？」

「……ええ。そうします。」

皐月さんは笑いを堪えている。

笑っちゃだめですよ。むしろ、いたら気を使っちゃいますから。

「ん、うん。それでは、試合……始め！」

開始の合図と同時に、瞬動術で懐に潜り込み、予め召喚しておいた桜姫で切りかかった。

皐月さんの武器も刀らしく、蒼い刀身の結構な業物だと一目でわかる物だった。

最初の一刀は読まれていたのか瞬動術で避けられ、その後は互いに、刀での切り合いだった。

「驚きました。剣術も得意なんですね？咲夜の時も驚きましたが、体術もここまで鍛え上げるのは魔法使いとしては珍しくないですか？」

上からの切り降ろしに見せかけ、足技で足元を崩そうとするが、半歩下がり避けられる。

「まあ、祖の五家だからねっ！」

下がった力を膝にため、鋭い一閃が襲ってきたが、下から上へ斬撃を合わせ、

打ち上げ、開いた所に更に飛びこもつとしたが、ファイア・ボール火の球で牽制された。

「この学園の生徒も・・・まあ、外部生は除きますが、全体的に体術もいけますよね？」

ファイア・ボール火の玉を避けながら、繰り出される斬撃を捌き、竜旋剄を放つが、上に飛んで避けられた。

「まあ、それが、理事長でもあるお爺ちゃんの教えだからね。今の時期だと、外部生はまだ、授業でやってないだらうけどね。」

そのまま、後方に着地しようとしたので、鞘で振り向きざま攻撃したが、

刀を縦に構え受けられ、そのまま刀を滑べらせ近づいてきたので、鞘に対し、直角に刀を構え受け止めた。

『これは凄い！朝倉選手と天城選手、双方一步も引かない！』

『臯月ちゃんも結構やるね。』

『そうだな。臯月嬢ちゃんの剣技もなかなかのものだ、だが・・・』

『うむ。剣技、体術では小僧の方が上じゃ。臯月がどうでるか・・・』

』

「そろそろ、本気で来た方がいいですよ？剣術じゃ俺の方に分があまりますからね。」

剣技、体術じゃ俺の方が数段上だ。このまま続ける訳ないよな。

「そのようね。なら、あなたもいい加減に魔術を使ってくれない？出し惜しみはしないんでしょ？」

「ええ、もちろん。そんなに見たいのなら見せてあげますよ！」

そういいながら、皐月さんを気で弾き・・・

『千変桜花』

桜の魔法で牽制をかけた。

「こんなもの！」

皐月さんは炎の魔法で桜の花を焼き払っている。
弱点はお見通しか・・・だが・・・

『封印解放』

封印を解放するには十分だった。

「ふふっ、いよいよ本気って訳ね。」

「ええ、出し惜しみはしない約束ですからね。」

「なら、最初からくるべきじゃない？」

「あれは、準備運動です。」

準備つてものがあるんですよ。

「そう、なら今度は私も本気で行かせて貰うわ！」

そっいいながら、魔力の密度をあげ・・・

「その前に、一ついいですか？」

「・・・何よ・・・」

出鼻を挫かれたのが不満なのか不機嫌な顔になった。

「いえ、なんといいですか・・・その・・・」

うーん・・・かなり言いづらいんだけどなあ

「早くいいなさい！」

「はい！えーと、ですね・・・短すぎませんか？」

「何が？」

「・・・スカートが・・・」

「・・・へ？」

そう、短すぎるのだ！皐月さんの格好は、白いタートルネックに蒼い上着、
そして、蒼のミニスカートだ。さっきから飛んだり跳ねたりしているが、
気になって、気になって・・・

「・・・純一君のエッチ／＼／＼／」

「いやエッチって・・・」

「大丈夫よ、中にスパッツ履いているから。」

そう言う問題か？

「それにしても、純一君も男の子ね〜気になるんだ？」

「・・・さあ！続きを始めましょう！」

「誤魔化したわね？まあ、いいわ、それじゃ、私も本気で行かせて貰うわ！」

再び皐月さんの魔力の密度が上がり、蒼い魔力が彼女の体に纏わりついた。

その魔力が収まると、彼女の服装がより戦闘向きになり、背後には精霊が浮かんでいた。

「精霊を使いますか・・・」

「そうでもしないと、あなたに勝てないからね？」

「そうですか・・・それでは行きます！」

『黒炎』

俺はまず闇と炎の合成魔術を放った。

この炎は触れたものの魔力を異常に増加させ、魔力を暴走させる魔術だ。

「ふふ、効かないわよ？」

そう言いながら、ライトニング・ソード雷の剣を十本、遠隔操作しながら振るってきた。

俺は、全てを分解しながら、次に水と雷の合成魔術、『帯電水波』を一带に撒いた。

この魔術は本来魔法でも可能だが、この状態なら魔術で再現した方が効率が良い。

だが、皇月さんは関係なく向かって来た。

この水は、触れると電気が流れるんだが・・・100万ボルト程・・・

皇月さんは、中級魔法から上級魔法を次々と放ってきた。

精霊の力を借りて、詠唱速度、威力共に申し分なく、隙もない。

「かつたるい・・・」

それらを分解しながら、魔術も使用し撃ち落とすとした。

ん、今は魔力の流れ視えないからな・・・だが、何となくわかった。

体全体を覆っている鱗光が中位と下位属性を、それと見えない盾みたいなものが闇を打ち消していたから、上位属性を打ち消すのか・・・なら・・・

『雷よ闇を纏い地を這え・・・闇雷』こくらい

「これは杉並君の時に使っていた魔術ね？」

性質敵には雷で、闇はあくまで雷に地を這わせるために混ぜているよね。」

「良くおわかりで。」

『光線の嵐』レイ・ストーム

光の嵐が皐月さんを襲うが、

「効いちゃいねー」

レイ・ストームだが、やはりあの盾は狭い範囲しか守れないな。光線の嵐は別の魔法も展開して防いでいた。

まあ、三つの魔法を同時展開するだけで凄いなと思うが・・・

「あら、今のは魔法ね。それじゃ効かないわよ？あなたの魔術はその程度？」

「残念……その鎧と盾は攻略しましたよ？」

「何を言ってる……」

次の瞬間、闇が皐月さんを捕らえ、雷を流した。

「きゃあああ！！！」

「闇雷いんくわいは正確には影が雷を纏まとっているですよ。ですから、それは闇がメインです。」

光線レイ・ストームの嵐は盾の範囲の確認と囷だ。

「さて、まだやります？」

「つく！こんなもの！ソラ！」

精霊が魔法を使うと、闇雷いんくわいが払われた。

やっぱり単純な力は法則の方が上なんだよな

「ハアハアハア……」

「……後輩に欲情しないでください。」

「誰のせいだと思って……」

「俺がイケメンなのがいけないんですかね？」

「……痛いわよ？」

「……ええ、俺も言ってるで恥ずかしくなりました。」

さて、息は整ったかな？

「まあ、今ので分かったと思います。俺にはその鎧と盾は効かないですよ？」

「一度隙をついたからといっていい気にならないで！」

魔法を放ってくるが、避け、接近し、

「そういう意味じゃないですよ！」

鎧と盾を分解した。

「なっ！」

「零距离なら意味ないですよね。『穿て豪雷』」

皐月さんの体を雷が貫いた。

『朝倉選手の攻撃が天城選手へクリーンヒット！これできましたか！？』

さて、どうかな？

油断せず、周囲への警戒と皐月さんを観察していると、背後から魔力を感じた。

「ちっ！」

魔法を避けながらそちらを見ると、精霊がいた。

確かソラだったか？

ソラは次々と魔法を放ってきた。流石、高位の精霊。単独で魔法を使うか・・・

ソラからの攻撃を避けていると、皐月さんから声が聞こえてきた。

『祖は天を司りし我らにのみ許された法則。

その法則を持って彼の者を打ち抜く槍となれ。

その槍は天から降り注ぎ、彼のものを打ち抜く必殺の一撃とならんことを切に願う。

祖は天を冠する虚無の一撃！』

この魔法はあの時の・・・

「ちっ！魔力よ集え！」

間に合え！

『虚空の天槍』

「これでどう？」

天の槍が放たれた・・・

Side 天城 皐月

「これでどう?」

私はソラに時間稼ぎを頼み、雷で撃たれた痛みを堪え、天空魔法を唱えた。

この魔法でお爺ちゃんは純一君を倒した。

しかし・・・

『魔塊』

その言葉と共に放たれた純粋な魔力の塊が

『虚空の天槍』を相殺した。

「何をしたの!?!」

私の疑問に答えたのはソラだった。

あれは、純粋な魔力の塊です。属性魔法ではないので虚空の天槍では吸収できなかったのでしょうか。

「そんなことが・・・」

出来るのが魔術師なのでしょうね。彼には一度見せた魔法は単体で使わないのが得策かと・・・

「そうになると、手札は更に少なくなるわね・・・」

ええ、ですが、今の彼は魔流視は使えないみたいですね。

使えるなら、天槍も分解されていたでしょう。

「でも盾と鎧は分解されたわよ？」

あれは、常に展開していたからでしょう。

分解の速度は前日までと比べて遅くなっているのは間違いないです。

「なら・・・」

ええ、全力の一撃が一番効果があるでしょう。時間は私が稼ぎましょう。

「ええ、お願い。ソラ。」

時間稼ぎをソラに任せ、私は詠唱に集中した。

「天は常にそこにあり、全てを見降ろす・・・」

Side 朝倉 純一

『天は常にそこにあり、全てを見降ろす・・・』

天槍を相殺し終わると皐月さんの詠唱が再び聞こえてきた・・・

「させるか！」

俺は、詠唱を妨害するため、下級魔法を放つが、

させません！

ソラに防がれてしまった。

『その表情は時と共に移ろい、繰り返えされる……』

面倒だな……天空の精霊が相手か……

「どいてくれると、ありがたいんだけど、な！」

燃える風、枯れる水、這い寄る闇、割れる大地を放つが……

効きません！

圧倒的な魔力を込めた魔法で、吹き飛ばされ防がれた。

『我が今望むは、何処までも高く澄み渡る青空……蒼天……』

防がれるのを確認する前に接近し、斬撃を放つが、盾で防がれた。

今度は押し切ろうとせず、大きく距離をとった。

詠唱は潰せないか……なら……

「魔力よ集え！『千変桜花』！」

耐火の術式を施し、幻想獣や剣、槍 e t c の姿に変え放った。

『蒼天よ、その力を我へ示せ……』

ソラの障壁を打ち破れはしないが、こちらに攻撃も出来ないだろう。

間に合うか・・・

「火、風、土、水、世界を構成する元素は、今、原初へ回帰する。

祖は始まりの元素。

我が意志を受け、形をなせ・・・

祖は我により縁どられた偽りの元素・・・」

ブルースカイ・エクスキューション
『断罪の蒼天』

フェイク・オリジン
「偽りの元素」

蒼い断罪の大鎌と、偽りの元素の塊が衝突した。

皐月の放った大鎌は、「天の下、全ての罪は見透かされ裁かれる」という法則の下、

これまで犯した罪に比例して、強力になる。

純一の放った元素は世界の法則によるものではなく、純一により構成された偽物の元素である。

よって、属性もなく、世界の法則にも縛られない。

天空魔法は属性を取り込む性質があるため、極位属性が無属性以外取り込まれる恐れがある。

かといって、『魔塊』ではあの魔法に対抗するだけの魔力を注ぎ込むのに時間がかかる。

極位を使う時間もない。

よって、詠唱時間が短く威力も十分な、この魔術を使用した。

しかし、この場合、相性が悪かった。

拮抗したのは数秒、断罪の大鎌により、偽りの元素は両断され、

『偽り』は『断罪』された・・・

Side 天城 皐月

「はあ、はあ、やったの？」

私が唯一使える天空魔法の秘奥だ。これならいくら魔術でも・・・

まだです！皐月！

「え？」

煙から黒い影が出てきたと思った時には遅かった。

『天楼月牙』

桜色の斬撃が至近距離で放たれた・・・

・・・

「はあ、はあ、はあ・・・」

もう、立てないわね・・・

「俺の勝ちですね・・・」

「勝ったと思ったんだけどね・・・」

「そうですね。あなたの使った魔法に対し、俺の魔術は相性が悪かったです。

俺もあれは失敗しました。

ですが、元々一瞬でも時間を稼ぐのが目的でしたから。

詠唱の時間が無かったので初めから、避けることしか考えていませんでしたからね。

そこが勝負の分かれ目だったのでしょう。」

はあ、あの状態で、まだ次に繋げる余裕があったとはね・・・

純一君の方が一枚も二枚も上手だったってことか・・・

「・・・はあ、私の完敗よ・・・」

『決まりました！勝者、朝倉 純一！』

すみません皐月・・・私がついていながら・・・

「あなたが謝る事はないわ。私が未熟だっただけよ。」

「・・・そうでもないですよ。皐月さんは強かったですよ？」

「余裕があるくせに何をいつているんだか・・・」

「ははは、でも確かに俺の魔術を打ち破ったんですから、それだけ

で凄いですよ。」

「……そう……褒め言葉として受け取っておくわ。」

魔法でも魔術を打ち破れる事が分かっただけでも良しとしますか。

「決勝、絶対勝ちなさい。いいわね？」

「ええ、分かっていますよ。」

ふふ、純一君には期待しているわ……

その前に、リアと春明か……リア、無茶はしないでね……

第二十九話 天城 皐月 VS 朝倉 純一（改）（後書き）

一応補足。純一が極位属性で魔術を使わなかったのは、リスクが大きいためです。

杉並戦は、その日の最終試合だったので使用したのです。

第三十話 リーア・アルティン VS 神風 春明

Side リーア・アルティン

純と皐月の試合が終わり、いよいよ私の番だ。

純が春明に負けるとは思いませんが、ここで私が勝てばそれで終わりです。

「あなたにはここで負けて貰います。春明！」

「フハハ、リーア、君では僕には勝てないよ？僕は美冬や父さんを倒して、天剣と精霊を手に入れたのだよ？つまり、祖の五家、頭首と同等以上でなければ僕は倒せない・・・君に勝ち目はない。」

「そうですね・・・本当にあなたに頭首と同等の力があればですが？」

「・・・どういう意味だ・・・？」

「皐月に聞きました。誰も、美冬や神風家頭首にあなたが勝った所を見た事がないそうですね？」

「・・・君は僕が何か卑怯な手を使ったとでも？」

「違うんですか？少なくとも、以前のあなたでは美冬に勝てなかったはずです。」

それが一年前から急激に力が上がった、去年最後のランキング戦では皐月に負けたと云うのに、それほど間を開けず、神風の頭首が

あなたに負けた・・・何かあると思うのが当たり前です。

少なくとも、臯月や瑞穂さん、創也さんは疑っています。もちろん私も・・・」

「フハハハハ！言ってくれるね？リア・・・ならその身に教えてあげるよ・・・僕の力を！」

「・・・それでは、二人とも良いですね？試合・・・始め！」

「『スペース・フィックス
空間固定』」

私はまず、空間固定の魔法を春明から距離を取りながら使い始めた。

「おやおや、何をするつもりだい？今の君では一種類の魔法しか一度に使えないのに何故、空間固定をベタラメに使っているんだい？」

「さて、何故でしょうね？」

「・・・そうかい・・・なら、『エア・ハンマー
空気の鉄槌』」

春明は空気の塊をぶつけてこようとはしましたが、

「どこを狙っているのですか？」

私は簡単に避けました。

「相変わらず、空間把握能力は群を抜いているね」

空気の鉄槌は空気の塊で対象を殴りつける魔法だ。これの特徴は

見えないと言う事だ。空気そのものですからね。

では何故、私が避けられたかということ、春明の言ったとおり、空間把握能力のおかげです。

私は空間の属性を持っているため、その能力が群を抜いて優れているそうです。

それにより、ある程度の範囲なら、僅かな空間の変化にも敏感に察知できるということです。

因みに、空間を把握することで空間魔法は使えると言われるが、それは正確ではない。

より、正確に言うなら掌握する必要があるのだが、それは置いておく。

「その様な魔法では、私に当てることすらできませんよ?」

「なら、これはどうだい?」サイクロン 竜巻

範囲魔法ですか、これなら・・・

「スペース・フィックス 空間固定」

私は空間固定を自分の周りにも使用し、竜巻が止むのを待つことにしたのだが、春明の魔力が膨れ上がっていくのが分かった。嫌な予感がし、ここから脱出することにした。

私は、自分の周囲にかけていた空間固定の上部だけ、解き、そこから上に向かって、駆けた。

中心は無風ですから。

『これは！アルティン選手、どの様にしてくか、上に向かって駆けています！』

『ふむ、考えおったの・・・』

『どういふことですか？理事長？』

『最初、アルティンの娘は空間固定を移動しながら使っておった。それは、自分の周囲だけでなく、上空にもかけておったのじゃ。そして、固定した空間を足場にし、駆けているのじゃろ。』

『そうなのですか？でもだったら空を飛んだ方が楽なのでは？』

『飛行魔法は確かにあるが、誰でも使える訳ではない。使えたとしても制御が難しく、戦闘で使うには、相当の訓練か才能が必要じゃ。』

アルティンの娘は空間の属性しか持つておらんからの、飛行魔法を使うよりあの方が魔力の消費が少ないのじゃろ。』

『そうなのですか・・・でも、何故アルティン選手は空間固定の魔法をあちらこちらに張り巡らせたのでしょうか？魔力の消費が大きくなりますよね？矛盾しているのでは？』

『それは、見ていればわかるが、そも、極位属性はどれも使い勝手が悪いからの。』

それが理由とだけ言っておこう。』

私は竜巻を無事飛び越えることができた。次の瞬間、竜巻の威力が増した。

これでは・・・

「おや？どうしたんだい？空間固定の前では、僕の魔法なんて、効かないだろうに？」

「五月蠅いですよ・・・」

『え〜と、どういう事でしょうか？空間固定が破られるため、アルティン選手は態々出てきたのではなかったのでしょうか？』

『それはちよつと違うかな。』

『どういふことですか？魔王様？』

『空間固定は空間そのものを固定する魔法なんだ。これは、確かに強固だよ？でもね、弱点があるんだ。』

『それは？』

『全てを遮ってしまうんだ。それこそ、熱や光、酸素さえもね？』

『それでは、アルティン選手はどうやって外の様子が分かったのですか？』

『それは、千里の天眼のおかげだね。』

『あ！そうでした。アルティン選手は千里の天眼を持っているのです。』

『・・・あれ？でもそれと、今回出てきたのには何の関係が？』

『うん。つまり、神風君の魔法は竜巻、その密度を上げれば、中心を真空状態にすることが可能だ。』

まあ、これには時間がかかるけどね。もし、あのまま、お嬢さんが空間に閉じこもっていたらどうなったと思う？』

『え〜っと・・・酸素不足？』

『そう、だから彼女は竜巻の威力が上がり、脱出できなくなる前にあそこから出る必要があったんだ。』

『そうなのですか・・・ありがとうございます。』

そう、先ほど魔王様が説明したのがあの魔法の弱点だ。それにしても、春明は何を考えているのですか？あの時の私は隙だらけのはずでした。

なのに・・・わざと？

「さて、まだまだいくよ？」ウインド・スラッシャー 『風の斬撃』エア・バースト 『空気爆発』！

春明は次々と魔法を使用してきます。その割に魔力はあまり減っていないようです。

．．．
これだけ魔法を使ってこの程度の減少はおかしい・・・いったい．

「ウインド・ウィップ 『風の鞭』ウインド・パレット 『風の弾丸』！」

「くっ！」

今はそんなことを考えている場合ではありません。

私、魔法を避けながら、空間固定の魔法を広げていきました。

Side 朝倉 純一

へへ、リアさん良く考えてるな。

「おい！純一！アルティン先輩大丈夫なのか？圧されてるぞ？」

「リアさんにも考えがあるんだろ？それに俺達が慌てたところでどうにもならないんだから、お前が焦っても仕方ないぞ？稟。」

「なんでお前は・・・！」

「いいから、黙って見ていろ・・・」

「・・・・・・・・・・」

極位属性のあの魔法・・・まともに喰らえば、アウトだろうな。まともに喰らわなかったとしても、ただじゃすまない。

このままいけば、リアさんの勝ちだが・・・

奴の魔力が不自然だ・・・油断しない方がいいですよ？リアさん・・・

Side リーア・アルティン

「ほら、どうしたんだいリーア？もう終わりかい？」

まったく、本当にしつこいですね・・・

先ほどから、風の下級〜上級魔法を次々放ってくる。

それにしてもおかしい・・・いくら下級や中級魔法がほとんどはいえ、あれだけ使っても魔力は底を尽く様子が見受けられない。精霊の力を使っているなら分かるが、そのような様子は見受けられない。

・・・まあ、そんな事は今は構わない。後少しで・・・

「まったく、先ほどから逃げてばかり・・・もう飽きてきたよ・・・悪いけど、次で終わりにするよ？」

そう言って春明は極大の風の塊を頭上に形成し始めた。

後少し・・・

「さあ、我が配下の風達よ！集え、集え集え集え！そして彼女を吹き飛ばせ！」

よし！できた！

「春明・・・残念ですけど、私の勝ちです！」

「何を・・・」

「『空間爆発・連鎖爆龍撃』！」

その瞬間、舞台全てを爆発が包んだ。

それはまるで、龍が暴れたような圧倒的な爆発が連鎖を繰り返し、周囲を呑み込んだ。

『こ、これはいつたい!』

『これは・・・空間その物を爆発させる魔法じゃな・・・』

『空間その物を?ですが、これだけの物を何時の間に?』

『ふむ・・・それは・・・空間固定の魔法じゃな。』

『え?ですが、空間固定で爆発は・・・』

『単なる空間固定であつたらな。多分じゃが、空間をいくつも固定し、それで、魔方陣を描いていたのではないかな?』

『そして、全てを配置し終わると、固定の魔法が爆発へ変るようになっている・・・まあ、実際はどうかは分らんがな。』

『そうですか・・・会場は未だ、煙に包まれておりどうなっているか検討が付きません。』

春明選手はこの爆発の中、無事なのでしょう?』

春明の姿は見えませんが、空間その物を爆発、しかも連鎖させたのです。

まともに喰らっていなくても、ダメージは相当のはずです。

私は、そう確信し、煙が晴れるのを待った・・・が・・・

突如、圧倒的な魔力と風が吹き荒れ、煙を吹き飛ばしていた。

そして、そこに立っていたのは、ボロボロの風の精霊と無傷の春明だった・・・

「危ない、危ない。もう少しで僕が深手を負うところだった。

まったく、お前がさっさとでてこないからこんな事になるんだ？
美冬がどうなってもいいのかい？

なあ、シルフィ？」

「春明！ いったいなにを！？ それに、その精霊の姿は！？」

春明はまるで精霊を盾にするかのようにぞんざいに扱っていた。

精霊も恨めしい眼を春明に向けているが、逆らえないようだ。

さつき、美冬がどうとか言っていたところから察するに、彼女を人質にとっているようですね・・・ここまでやりますか！

「あなたと言う人は・・・正直ここまでゲスとは思っていませんでした。自分の変りに精霊を身代わりにするなんて・・・」

「おや？ なにを言うかと思えば・・・精霊は僕達に従属すべき存在だ。」

「こんな事で目くじらを立てているようでは精霊は従えられないよ？」

「何を勝手な！」

「フハハハハ！ 僕は選ばれた存在だよ？ 何が悪いって言うんだい？ この僕が使ってやっているんだ。光栄に思うべきだよ。」

そして、リーア、君も君だ・・・この僕が伴侶にしてやろうと言

うのに、君ときたら・・・僕もいい加減、我慢の限界だよ？少し、痛い目を見て貰おうか？」

「つつ！」

私は怖気が走り、思わず距離をとった。

「そうしたら、君から懇願するはずさ・・・僕の伴侶にしてくださいと・・・でもね、君はやりすぎた・・・伴侶にするにはじゃじゃ馬すぎる。

そうだね、僕の奴隷にして、しっかりと調教してあげるよ。フハハハハハハハハ！！！」

「ふざけないでください！誰がそんなもの望みますか！」

「もう、五月蠅いな、シルフィ！さっさとやれ！」

風の精霊・・・シルフィはとても悔しそうなの・・・悲しそうな顔をしながら、風属性最大の魔法、『破壊の風痕』はかいふうこんを放ってきた。

あれは、ただ、全てを風で吹き飛ばすだけの魔法だ。だが・・・単純だからこそ圧倒的であり、その後には荒野以外何も残らない。

いくら、極位の「空間」でも、精霊が使うこの魔法を防ぐことは・・・

「・・・無理かもしれませんが・・・面白いです。私の魔法が精霊に・・・世界相手にどこまで通じるか・・・勝負です！シルフィ！」

私の言葉にシルフィは眼を見開き、そして

ありがとう・・・

私には確かにシルフィの言葉が聞こえた・・・

目の前には自然災害そのものの風の塊・・・

「空間よ！拒絶せよ！」

私は「杖」に唯一登録してある魔法をしようした。

私は今回、他の魔法を排除し、一つだけを「杖」に登録している。それが、この魔法・・・『拒絶する空間』。この魔法一回分だけで「杖」の容量が一杯なる。

『拒絶する空間』をクレセント・ムーンの刃の周囲に展開し、風の塊を切りつけた。

本来、全てを拒絶し絶つことができるはずだが、圧倒的な魔力と風の塊に弾き飛ばされそうになる。

「くう・・・！」

歯を食いしばり、大鎌で断ち切ろうとするが・・・

「しまっ・・・！」

大鎌の根の部分が折れ、風の塊に呑み込まれてしまった。

「なっ……！」

これまで見たこともない規模の魔法が舞台を呑み込もうとしていた。

アルティン先輩はその風を切るうとするも、切ることができず、そして……

風の塊に呑み込まれてしまった。

あんなものに呑み込まれたらひとたまりもない！

審判の境先生も試合の終了の合図を出しているが、舞台上の二人には届いていないのか、風は未だ吹き荒れている。

なのに、理事長やおじさん達は動く気配がない。どうして……！

「純一！……あれ？純一は？」

「え？今の今までそこに……？」

純一は忽然と姿を消していた。

いったいどこに……

そして、舞台に目を戻すと……いつの間にか、風の塊は消えており、そこには……

「……そうか、だから、おじさん達は……」

純一が、アルティン先輩を抱え、舞台に立っていた。

Side 朝倉 純一

「大丈夫ですか？リアさん？」

「ん……じゅ……ん……？」

「ええ、俺です。」

「私……は……？」

「喋らないでください……結構酷い怪我なんですから。」

リアさんの体はあちこちが切り裂かれ、服もボロボロだ。今は俺の制服の上着を掛けてる。

「で……も……。」

「大丈夫です。後は俺が終わらせますから、ゆっくり眠ってください。」

そう言って、簡単な治癒魔法と眠りの魔法をかけた。

「おい、おい、僕とリアの試合に横からでてこないでくれないか？お前、試合が終わっていないのに邪魔したね？失格だよ？」

「何を聞いていたんだ？貴様は……試合はリアさんがあの魔法に呑み込まれた時点で終わってたんだよ……。」

「ああ、そうだったのかい？いや、気付かなかったな。まあ、いい。それより、君、リアをこちらへ渡したまえ。」

「何故？」

「何故？決まっている。僕は勝者、彼女は敗者、勝者である僕は敗者である彼女に何をしてもいいだろう？」

「馬鹿か？そんな訳ないだろう。そんな理不尽がまかり通っていないはずがないだろ！それに、まだ俺が残っている。」

「フハハハハハ！なんだい？まだ僕に勝てる気でののかい？あの魔法を見て？フハハハハハ！！滑稽だね！」

「それは貴様だ。」

「何だと！」

「気付かないのか？今の魔法を消したのは俺だぞ？」

「は？何を言っている？頭がおかしくなったのか？シルフィが消したに決まっているだろう？」

「なら、その精霊に聞いてみればいい・・・俺は、リアさんを医務室へ連れていく。」

俺はその場を後にした・・・

Side 麻弓「タイム

「理事長！どうしましょう！？試合終了の合図を出しているのに、あの風、止まりません！」

私は焦って、理事長へ助けを求めた。しかし、理事長も、神王様も魔王様も動こうとしません。

「ちょっと！御三方！なんで何もしないのですか！？」

私は三人が偉い人だということを忘れ怒鳴ってしまったが、三人は相変わらずだ。

「ふむ、落ち着け、お嬢ちゃん。わし等が動かないのは、動く必要がないからじゃ。」

「いったいどういう・・・」

「ほら、見てみい。」

理事長の言葉に従って舞台に目を戻すと、いつの間にか風は無くなり、アルティン先輩を抱えた、朝倉君がいた。

「え・・・？」

「まあ、そういうことじゃ。試合終了の合図がでた瞬間小僧が、向かう姿が見えたからの、わし等が動く必要はなくなったのじゃ。」

「え、でも、風は？」

「それはね、純ちゃんが消したよ。」

「どっやって?」

「そりゃあれだ。魔術だよ。」

平然と語る三人にあっけにとられてしまい、次の言葉がでてこない。

「次がいよいよ決勝だね。」

「ああ、だが、いいのか?いくらなんでも神風の坊主の言動は目に余る。」

「なーに、大丈夫じゃて、小僧が、そのところはどうかするじやろ。」

多分、一番頭にきているのは小僧じゃからの・・・むしろ、神風の小僧を小僧が殺さないかが心配じゃぞ?」

「ふむ、それは俺が保障しよう。」

「ちよ!杉並君!?!いつのまに?」

「まあ、気にするな。タイム嬢。それよりもだ、同志は神風春明を殺すことはない。」

「何故わかるんだい?純ちゃん怒り様は半端なかつたよ?」

「一つは、怒りに身を任せることは同志に過去を思い出させるから。もう一つに理由はだ・・・」

「何だ？もったいぶらず言ったらどうだ？」

「死んだら、そこで終わりだ。それじゃ、奴に痛い目を見せることができない。それじゃ、つまらんだろう？・・・ククッ」

そう言いきった杉並君の顔はかなり、悪人のそれであった

第三十一話 決勝そして終局

Side 朝倉 純一

「おやおや、何を怖い顔をしているんだい？」

「……………」

今は、決勝の舞台

「僕がリアを傷つけた事を怒っているのかい？」

「……………」

リアさんを医務室へ運んだ後、休憩時間を挟み、今に至る。

「あれは試合だよ？傷つかない方がおかしいと思うが？」

「…………ああ、それはわかっている。俺が怒っているのはその事じゃない。」

試合である以上、怪我をするのは当たり前だ。それは、仕方がない。だが…………

「なら、何かな？」

「試合終了の合図がでたにも関わらず、魔法を止めようとしなかったこと、そして、精霊を脅して、無理矢理従えていること…………何より、リアさんを奴隷と言ったことだ！」

試合終了の合図が出た時点で魔法を止めていれば、怪我はもっと
少なかったはずだ。それに、精霊を道具の様に扱い、リアさんを果
てには奴隷と言いやがった……

「フハハハ！何を言うかと思えば！僕は……」

「黙れ……もう貴様の言葉など聞いても意味がない……」

もう、こいつの話を聞く必要はない。

「何!？」

「貴様はここで終わるのだから……」

ただ、恐怖を味わってもらう。二度とこんなことができないよう
に……

「調子に乗るなよ！出来損ない！貴様では僕には勝てない！」

「ふっ……」

「き、貴様……!?!」

純一が鼻で笑うと春明は苛立ち始めた。

「あ、あの、試合始めてもよろしいですか？」

「何だ！貴様！外野は黙っている！」

「ひっ！」

「黙るのはお前だ、屑。境先生、始めてください。」

八つ当たりはみつともない。

「は、はい。わかりました。それでは、決勝戦・・・始め！」

「死ね！死ね、死ね、死ね、死ね！！！」

春明は次々と魔法を放ってくるが、狙いが分かりやすい。

こんなの、身体強化せずとも避けられる。

「どうした？当たらないぞ？」

「クソが！」

はあく弱い・・・冷静さを欠きすぎだ。どれだけ魔力を込めようと、上位の魔法を使おうと、これじゃ意味がない。精霊の助けがないとこんなものか・・・

純一はあまりにも春明が弱いため、拍子抜けしてしまった。

しかし、いくらなんでも、冷静さを欠き過ぎじゃないか？リアさんの時はまだ理性があったぞ？それに、魔力が全然減らない・・・
どういうことだ？

「シルフィ！やれ！」

・
そう精霊に命令し精霊の力も加わり、より魔法が激しくなるが・

ん？シルフィ・・・わざと逸らしているのか？

シルフィの魔法は見間違いとは言わないものの、俺から微妙に逸れるように放たれている。

「何をやっている！この馬鹿が！美冬がどうなってもいいというのか！？」

つつつ！！

シルフィはその言葉に慌て、少しの逡巡の後、ためらいながらも、高位の魔法を放ってきた。

流石にこれは避け切れない・・・

「破！」

純一は、桜姫で切ったり、分解したり避けたりを繰り返す。

そして、観察を続ける・・・その気になればすぐに終わらせることはできるが、そう簡単には終わらせない。

相手の手の内を全て曝け出させ、全てをねじ伏せ、絶望させ、二度と立ち上がれないよう、根本からズタズタにするため。

春明の自信の源は何なのか、それを知るために・・・

「いい加減、くたばれ！」

その言葉と同時に春明は詠唱に入った。

精霊の魔力も使い、最大の魔法を放とうとしているのだろう……

しかし、その決定的な隙にも純一は観察を止めない……

そして、『破壊の風痕^{はかいふうこん}』が放たれ、純一は呑み込まれた。

「フハハハハ！！生意気な事を言っておきながら、あっけなかったではないか！これで私の勝ちだ！」

春明は勝利を確信し。高笑いを繰り返すが……

「本当、かつたるい……」

そんな声と共に、風の塊は消え失せた……

「なっ……！」

「まったく、何の工夫もない、ただ、魔力を上げただけのアんな魔法をよくもまあ、俺に放ったものだ……アんなもの、分解してくれと言っているようなものだ。」

「き、き、き、貴様……何を……」

春明はみつともなく動揺している。

「だから、分解しただけだよ。教科書通りの術式にただ、魔力を上げただけ、威力はあっても、簡単に分解できた。精霊に魔法を使っ

て貰った方が、良かったんじゃないか？」

「何だそれは！ふざけるな！こんなこと・・・あるはずがない！こんなこと！」

そう言つと、ブツブツとつわ言の様に繰り返している。

「もう、打つ手は無いだろ？今のがお前が使える最大の魔法だ。もう、手はないんだろ？なら、終わらせてもらつぞ。」

「・・・こんなことが・・・ある訳がない。これは悪い夢だ・・・そうだ、夢だ、そうに、違いない・・・そうだ、そのはずだ・・・スベテヲコワシテ、ユメカラサメヨウ・・・グウワアアアア！！！」

そして、とうとう、変質を開始した。

「フン、やはり、『出来損ないの賢者の石』の力が・・・しかし、この感じ・・・これまでの物とは違うのか？ちつ、左眼の力が使えれば、詳しい事が解るのだが、仕方がないか。」

やっと、始まったか。左眼が使えないから、気付くのが遅れたが、先ほどの大規模魔法で、『出来損ないの賢者の石』を使っている事は分かった。

魔力の総量が増えたのでは無く、減った分が外部から供給されると共に瘴気も供給されていたからだ。

純一は、予想はしていたが、確信が持てなかったため、強引にこの状態になるよう、わざと、魔法を使わせ、そして、精神的にも追い詰めていった。

本来なら、ここまでする必要はないはずだが、ここまでしたのは今回の『出来損ないの賢者の石』がこれまでの物と、多少異なるからだ。

本来は、魔力の総量が上がリ、瘴気に汚染され、理性を失うのだが、今回は、魔力の総量上がるのは一緒だが、減った分の魔力を供給すると共に瘴気も一緒に供給している。

そして、なにより・・・

「キサマハボクガクロス！」

言葉話せることだ。これまでは土御門の様に、ただ破壊するだけなのだが、今回はその破壊衝動に指向性がある様だ。

そして、理性を失ってはいるが、言葉話せる知能は残っている。

純一がここまで放置した理由の一はこれを確認するためだ。もう一つが、中途半端に倒して、石を隠されるのが面倒だと言う事、そして・・・

「よっ！解放されたようだな。大分消耗しているみたいだから、下がってな。」

魔術師の少年よ、感謝します。

シルフィを解放するためだ。下手に理性があると、『美冬』という人を人質にとったり、精霊の力を消滅するまで使いそうだったからだ。

いくら精霊が世界に帰順する存在とはいえ、力を無限に使える訳ではない。力を使い過ぎれば、消耗し、下手をすれば消滅してしまう。

何より、あのままだと、精霊も瘴気に汚染され、暴走してしまう恐れがあったからだ。なら、先に春明を暴走させたほうが、まだましということだ。

復讐者であった頃より丸くなったとはいえ、春明の様な者を許すほど純一は甘くはない。

「俺の力で誰かを助けるか・・・」

杉並との試合の時、ふっ切ったと思ったが、純一は思う。

こんな奴まで助ける必要があるのかと・・・

すぐに迷う自分に内心苦笑し、そして、今度こそ結論づける。

それも、いいか、と・・・

「殺すか、殺さないか、助けるか、助けないか・・・そんなことはどうでもいい。俺は、俺の思うままに力を振るおう。しかし、復讐に身を落とすことはしない。」

かつての自分を思い返し反省し、されど、自分の心を偽らず・・・

「覚悟は決めた。後はそれを実行するだけ。」

きつとそれが、俺だから・・・

「許せないものは許せない。助けたいものは助けたい。俺は、その我儘を実現できる力を持っている……だから……」

そして、告げた。

「俺はお前を助けない！だが、殺しもしない！それが俺の結論だ。お前には生きてままだ地獄を見て貰う。」

その宣告は傲慢であり残酷だった。

「封印解放……」

「クロス……クロス、クロス、クロス！」

異形と化した春明は黒い風を身に纏い、突進を繰り返す

しかし、純一は軽々と避けながら、桜姫で切りつける。

二度、三度、四度、繰り返す度に、春明の体は切られるが、直ぐに再生する。

その攻防を何度か繰り返し、先に痺れを切らしたのは、春明だった。

黒い風による『破壊の風痕』を放つが……

「我が前に全ての風は風へと変る……『風の終わり』」

風を無効果する魔術により消え去った。

その光景を目の当たりにし、始めて、春明に怯えの色が見えた。

異形となったのに・・・いや、異形となったからこそ、本能で感じたのだろう・・・

目の前の存在には決して叶わないということ。

そして、次に取った行動は・・・逃走・・・

その場から逃げようと、観客の方へ向うが・・・

「『空間固定』」

空間を固定され、身動きが取れなくなった。

「浄化の光よ、彼の者をその清浄なる光で焼きたまえ・・・『浄光』」

「グギヤアアア！」

春明は痛みでのたうち回ろうとするが、空間を固定されているため、身動きがとれず、ただ、わめき続けるだけだ。

「イ・・・タイ・・・イタイ・・・いたい・・・いたい・・・痛い・・・」

光に当てられた春明は段々その姿を元の状態へと戻していき、やがて、完全に人の姿に戻った。が・・・全身焼けただけ、見るも無残な姿となっている。

「お・・・ね・・・がい・・・だ・・・助け・・・て・・・」

「・・・助かりたいなら、さっさと、石を出せ・・・」

春明の懇願に、純一は冷たく言い放った。

「わ、わかった、ちょっとまって・・・こ、これだ・・・」

そういい、春明は懐から、赤黒い石を取りだした。

「さあ、は、早く、僕を助けて・・・」

「ああ、今、楽にしてやる。」

『出来損ないの賢者の石』を回収すると、純一は、思いっきり、ぶん殴り、春明を気絶させた。

「気絶すれば、痛みも忘れるだろ。」

純一はとことん、こういう手合いには冷たかった。

もっとも、以前なら容赦なく命を奪っていただろうが・・・

「さて、これで終わりじゃ・・・いや・・・止めておくか・・・」

純一は更に地獄を見せようとするが、手を止めた。なぜなら・・・

「もう、魔法は使えない見たいだからな。」

石の副作用により、もう二度と魔法を使えない体となってしまう
ていたからだ。

こうして、ランキング戦決勝は幕を閉じた。

第三十二話 リーアのお礼と純一の気持ち最後は仮面

Side 朝倉 純一

「ん……ここは……？」

「リーアさん気付きましたか？」

「純……？ここは？確か、私は春明との試合で……！！そうです！決勝は？あの後どうなったんですか？」

リーアさんは最初どうしてここにいるのか分からなかったようだが、直ぐに思い出した様だ。

「落ち着いてください。今、話します。」

そして、あれから起こった事を話した。

「そうですね……春明はもう……」

「ええ、魔法はもう使えません。それに、天城家頭首の前での言動……もう祖の五家を名のる事も出来ないでしょう。これで春明との婚約も破棄できますね。」

出来損ないの賢者の石の事など、新たな問題は出てきたが、当初の目的は無事果たせた……あ、咲夜へ土下座して謝らせるのが残っていたな。後で、させよう。

「……ありがとうございます。純。なんとお礼を言ったらいいか・

「・・・」

「いいですよ、お礼なんて。俺も好き勝手暴れましたから。」

ストレス解消にもなったし良かった、良かった。

「でも・・・純、少し耳を貸してください。」

「?いいですけど・・・」

何かを考える素振りを見せた後、そう言ってきたので、リアさんに言われたように、耳を近づけた。すると・・・

「ん・・・」

「へ!?ん・・・」

・・・キスされた。

「な、な、な、な・・・// // //」

へ?何故?え?

「お、お礼です・・・// // //」

「お、お礼・・・ですか// // //」

「「・・・// // //」」

でも、お礼でこんな事、しないよな・・・なら、やっぱり・・・

でも、俺は・・・

「え〜と、リアさん？あの・・・俺は、リアさんのこと、嫌いじゃないです。いえ、むしろ、好きなんだと思います。」

「・・・え？」

「ですが・・・軽蔑するかも知れませんが、似たような気持ちを他の子にも抱いています。」

「・・・」

「ですから・・・」

そこまで言うと、リアさんに指で、唇に触れられ、次の言葉を紡ぐことが出来なかった。

「今、はその言葉だけで十分です。私にもまだまだチャンスはあるという事ですからね。諦めませんよ？」

「クスッ・・・」

その言葉に思わず笑ってしまった。

「なんで、そこで笑うんですか？」

そして、むくれられてしまった。

「いえ、リアさんはやっぱりかわいいなあと・・・」

「え？・・・あ、う・・・／／／／」

恥ずかしかったのか、赤くなってしまった。

「それじゃ、俺はこれで帰ります。」

ここにおいても妙な雰囲気になるので、帰ろうとしたが、

「・・・・・・・・」

リアさんに無言で服の裾を掴まれてしまっていた。

「リアさん？」

「・・・もう一回／／／／」

「へ？」

「もう一回・・・キス・・・して？／／／／」

「え？・・・／／／／」

どうするか迷ったが、リアさんが目を閉じ待っているのを見て、顔を近づけていった・・・が、

「リア！傷の具合・・・は・・・」

「」「」あ・・・」

臯月さんがノックもなしに入ってきたため、途中で固まってしまった。

そこで、急いで離ればよかったのだが、思考が固まり出来なかった。

それが不味かった。何故なら、その後ろには・・・

「純君？ いったい何をしようとしていたのですか？」

咲夜^鬼がいた。

「え〜と、これは・・・」

「じゅ・ん・く・ん？」

「ははは・・・リアさん！ 御大事に！」

「待ちなさい！ 純君！ 話を聞かせてもらいますよ！？」

リアル鬼ごっこが開催された。

この後、直ぐに捕まり正座で説明を求められているランキングトップの男がいた。

Side ????

「ええ、はい。予定通り、あの石は『朝倉 純一』と『天城 玄三』の手に渡りました。」

そこは、学園から大分離れたビルの屋上、そこで仮面の存在がどこかに向かつて話している。携帯はその手に無く、念話の類だろう。

「ええ、これで今後、彼等の目はあの石にいくでしょう。・・・確かにあの石は私達の研究成果であり、完成が目標ですが、彼の目的を達するためには必要な事です。

そのために、未完成の品でありながら危険を犯してまで祖の五家に渡したのです。」

そういいながら、学園のある方角へ目を向ける。

「それに、いい実験の成果が得られましたからね。それに、朝倉純一の力も・・・」

仮面のせいで表情は見えないが、楽しげに笑っていることがその雰囲気から分かる。

「ええ、私の主も喜ばれます。それでは、私はこれで・・・」

その言葉を最後に念話は切れたようだ。

「ふふ、ここは良い！実験材料がゴロゴロいる。石の完成には都合がいいな。我らの研究は進められ、彼の目的を果たすのにも役立つ・・・さあ、ここからが、始まりだ！」

仮面は一人、演説の様に語るが、聞くものは誰もいない。

「いや、残念だけど、ここで終わりだよ？」

そう、仮面にとってはそのはずだった。

「な!？」

仮面の存在はいきなり声を掛けられた事に驚き、振り向いた。

そこにいたのは……

「やあ、僕の娘とその友達が世話になつたね？」

「天城家現頭首……天城 四朗……！」

警戒していたはずが、何時の間に現れたのか、気付かぬ内にそこにいた。

「すみませんが、逃がす訳にはいきませんので……」

そして、更に背後から、女性の声が聞こえてきた。

「……天城 月夜……『夜姫』……か……」

「あら、そんな昔の名前を出されるなんて、物知りですね？」

「悪いけど、君には色々聞かせてもらうよ？」

そついいながら、四朗と月夜は仮面を捕らえようとしたが、

「私はここまでのようですね。ですが、覚えておいてください。『私』はまた現れます。そして、今度こそ……『賢者の石』の完成を！」

天城家頭首と、『夜姫』に挟まれ、逃げることは叶わないと悟った仮面は、そう言つと、壊れたように痙攣しはじめ、内部で魔力が暴走を始めた。

「しまった！」

四朗は慌てて、仮面を上空に蹴りあげ、結界を張った。次の瞬間・

巨大な爆発が空を焼いた。

それは、夜だと言つのに、周囲が昼の様な明るさになるほどの威力であった。

「・・・捕まえられなかったか・・・」

「しかたありません。四朗さん。御爺様に報告に行きましょう。」

「ああ、そうだね。月夜・・・」

これから起こることを幾つも予測しながら、二人は夜の闇に消えていった。

後に気付く事になる。これが、一つの始まりだということに・・・

第三十二話 リーアのお礼と純一の気持ち最後は仮面（後書き）

次回から少し番外編が入ります。

番外編 始祖の吸血鬼と魔術師その1

Side 純一

「純一！純一はいるか!？」

俺を呼ぶ声が聞こえるが、無視だ無視・・・今、いいところなんだよ・・・

「ここにいたか、純一。私が呼んでいると言つのに何をやっている?」

「んあ?魔導書を読んでたんだよ。で?何の用だ?師匠?」

この人は、俺の師匠で、名を綺堂きどう 仙花せんかという。見た目は20歳前半だが、実際は・・・

「純一?何を考えている?」

気功術で強化した拳で脅されたので何も思うまい。

「い、いや、何も?」

「・・・なら、いいが・・・」

何で、こつ人の心を読むかな・・・サトリの能力なんて使えないのに、このバ・・・

その瞬間、拳が振り下ろされた。

「イッテく……」

思いつきり殴られた。

「フン！」

だから、何でわかるんだよ！

「乙女の感だ！」

「乙女って歳か！」

「何……？」

「すみませんでした！」

俺はプライドを捨て土下座した。今の俺じゃこの人に勝てない。
これも生きるために必要なことだ！

「分かればいい。ところで、私のプリン知らないか？冷蔵庫に入れておいたのだが……」

ギク！

「さ、さあ？」

「本当に知らないか？」

ビク！

「も、もちろん！俺が嘘をついているとでも？」

「ほ……、口元にプリン付いているぞ？」

「ヤベ！残ってたか！」

俺は急いで口元を拭うが……ついて無い！

「……………」

「……………」

「さて、純……………今回はどこに飛ばされたい？」

そう言いながら、空間に渦を巻く穴が現れた。

「……………私としましては、ここは穩便に話合いの場を設けたいと思うのですが……………どうでしょう？」

すると、師匠は極上の笑みを浮かべ、

「却下」

「ですよね？」

「ハハハハハ……………」

「三十六計逃げるにしかず！」

「逃がさん！」

次の瞬間、捕縛の術が完成し、俺を捕らえた。

「くっ！この程度！」

直ぐに破るが、時すでに遅し・・・両手、両足を直接ホールドされてしまった。

「さて、とつとと行って来い！」

そう言うと師匠は、俺を先ほど開けた穴に放り投げやった！

「プリン一つで大人げないぞ〜！」

そうして、俺は異世界へと飛ばされた・・・

「・・・あ！異世界のつもりが、過去に送ってしまった！」

・・・
異世界への穴ではなく、誤って時間に穴を開いてしまった仙花は・・・

「・・・ま、純一の事だから大丈夫か・・・」

放置することにした。

一応、弟子を信用してのこと・・・

「さあ、そんな事より、プリンを買いに行こう！」

のはずだ。間違っても、プリンを食いたいからじゃない……と
思いたい。

番外編 始祖の吸血鬼と魔術師その2

ここは、遠い昔・・・場所は分らないが、森の中・・・そこに不自然な穴があいている。

その穴は渦を巻き、先が見えない。

しかし、今、そこから声が聞こえてくる・・・

「このプリン中毒者が〜！」

そんな叫びと共に、10歳位の少年がこの地へ降り立った・・・

「フベ！」

顔面から・・・

「痛つ〜・・・つたく、あのババア、ガキかつつ〜の！」

自分のした事は棚にあげ、師匠を罵る少年・・・純一は、戻ると同時に、今の台詞のせいで半殺しにされるが、それはまた、別の話

「・・・しかし、ここはどこだ？命の気配はあるから、食い物には困らないと思うが・・・」

周囲の気を探りながら、そんな事を考える・・・その台詞から今の様な状況に慣れていることが窺える。

「・・・ん？これは・・・人の気配・・・それと、殺気？それも複

数・・・ここから近いな・・・」

周囲の状況を探っていると、人の気配と殺気を感じた、どうやら、近くで何かやっているらしい・・・獣を狩っているのか、もしくは・・・

正直、かつたるいことに関わりたくはない純一だが、情報が欲しいため、とりあえず気配を消し様子を見に行く事にした。

「はあ、はあ、はあ・・・」

「待て！化け物め！」「逃がすな！殺せ！」

一人の少女が、追いかけられていた・・・

そもそもの失敗は、魔法使いの町でケガをした子供を不用意に助けた事だ。その際、力を使ってしまい、迂闊にも大人に見られてしまった。

助けた事に後悔はないが、このままではまずい。

何が不味いのか、それは自分が傷つけられることではない。少女が、彼等を傷つけてしまうことが不味いのだ。

少女は逃げるが、相手は魔法使い・・・

常人の足では到底追いつけないはずの自分に追いつがっている。

このままでは・・・

どうするか、迷っているときいきなり目の前が爆発した。避けて更に逃げようとするが、読まれていたのか、更に爆発が続いた。

どうやら、先周りをされていたらしい。うまく誘導されてしまい、完全に囲まれた。

「観念するんだな、吸血鬼！」

「はあ、はあ、・・・私があなた達に何かしましたか？」

「とぼけるな！子供に呪いを掛けようとして置きながら、よくもめけぬけと・・・」

「違います！あれは・・・！」

「問答無用だ！やれ！」

その言葉と同時に、周囲にいた人達が一声に魔法を展開しました。

「くっ！」

ここで死ぬわけにはいきません。私には償わなければならない罪が！しかし、だからといって、この人達を傷つける事など・・・

少女は覚悟を決め、痛みを堪えるために目を瞑り、歯を食いしばった・・・

そこへ、

「かつたるい・・・」

そんな、少年の声が聞こえてきた・・・

目を向けると、目の前に10歳くらいの少年が立っていた。

「何だ？君は！？」「何ものだ！？」「そこをどきたまえ！」

そんな大人達を尻目に、目の前の少年はあくびをかみ殺しながら

「本当、かつたるい・・・こんな女の子に向かって、大の大人、しかも魔法使いが数人がかりとは・・・大人げなくないか？」

「なにをいつている！その娘は、形こそ人間だが、その実、不死の化け物！吸血鬼なんだぞ！」

そう、私は吸血鬼、その存在そのものを意味嫌われる者だ。彼等のような反応が当たり前だ・・・

しかし、少年は予想外の言葉を口にする。

「だからって、殺していい理由にはならんだろ？」

「その娘は吸血鬼だ！それだけで十分な理由だ！」

「ふざけるな！吸血鬼だから殺す？お前らがこれまでどんな吸血鬼と出会ってきたか知らんがな、この子は少なくともお前らに危害を加えるような子じゃないだろ？吸血鬼って一括りで全て同じだと決めつけるな！」

その少年の叫びに一瞬怯みはしたが、大人達の態度は相変わらずであった。

「そうか、貴様も吸血鬼か！だからその娘の肩入れをするのであるう？」

「小僧もろとも、殺ってしまえ！」

そういうと、大人達は今度こそ魔法を放とうとしてきました。

「ダメエ！」

私は少年をかばおうとしましたが、少年に遮られ、

「大丈夫だよ」

そう言つと、とんでもないスピードで、動き、魔法が放たれる前に全員を気絶させていました。

小柄な体格のせいもあり、大人達は反応ができませんでした。

「大丈夫か？」

「は、はい！」

「そうか、それはよかった。ところで、お姉さんに聞きたいことがあるんだけど……」

「え？あ、はい……私に答えられるのであれば……」

「ありがとう。その前に自己紹介をしようか？俺はあさ・・・ジュンイチ アサクラだ。」

「ジュンイチ？私はフィリアルナインフィニタスです。」

これが、「桜の魔術師」と「始祖の吸血鬼」の出会いであった。

番外編 始祖の吸血鬼と魔術師その3 (前書き)

Lunariss Filia をやってない方は気をつけてください。
ネタバレがあります。

番外編 始祖の吸血鬼と魔術師その3

「次はどこに向かうんだ？フィリア？」

「そうですね、情報だと、この近くの湖の側にある城に吸血鬼が住んでいるそうなので、そこへ」

「はあ、相変わらず熱心だね」

「……それに付き合っジュンイチは物好きですよね？」

「……かつたるい」

あれから、7年の月日が流れた・・・

あの後、俺の事情を話すとすんなりと信じ、この世界・・・いや、この時代のことを教えてくれた。

てつきり異世界に飛ばされたと思っていたが、どうやら、俺の世界の500年程過去に飛ばされてしまっていた。

つたく、師匠も適当に次元に穴なんて開けるから・・・

愚痴つてもしょうがない。

気を取り直して、まずこのフィリアって子だが、この子は異世界からこの世界へ来たらしい。だから俺の話も信じたんだな。

しかし、この子の事情は俺より複雑だった。この子の元いた世界

は、戦争で滅んだのだそうだ。その際兵器として使われたのが吸血鬼。

人より優れた力、年を取らず、吸血することで仲間を増やす・・・都合のいい兵器として生み出された存在。

だが、それも長くは続かなかった。争いが続き、戦争も激化し、吸血鬼の力も改良されていった。より、仲間を増やすため、吸血衝動なる、血を吸いたくなる欲望を無理に上げられたのだ。

結果、吸血鬼達は暴走し、人間は一人残らず吸血鬼となるか、死人となるかし、そして・・・その果てには吸血鬼さえ死に絶え、後には、誰も残らなかった。

そう、たった一人を除いては・・・

フィリアはどうやら、アマガせて人にこの世界に送られたらしい。

吸血鬼のいないこの世界に・・・

そして、過ちを犯してしまった。

寂しい・・・仲間が欲しい・・・その欲に耐えられず、吸血鬼を作ってしまった。

その結果・・・吸血鬼が増えてしまい、多くの人間が犠牲になっていった。

その過ちに気付いたフィリアは人間に吸血鬼を倒す方法を教え、

同胞を殺していった。しかし、『魔法使い』（この時代は裏の世界でしか知れていない）にはフィリアも他の吸血鬼と同様、いや、元凶である以上他の吸血鬼以上だろう、危険な存在とされ、命を狙われていた。

されど、フィリアは吸血鬼と人間の共存を望み、その可能性の一つとして、「血の契約」、人間を吸血鬼の眷族とし、共に生きる伴侶とする方法を教え広めていった。

それも手伝ってか、全てではないが、『魔法使い』達もフィリアの命を狙うことは少なくなった。

しかし、成果は芳しくない。それでもフィリアは諦めること無く、世界を回り、時には吸血鬼から人を守り、逆に吸血鬼を人から守ったりもした。

その果てに、吸血鬼には裏切り者として、一部の『魔法使い』や事情を知らない一般人には化け物として命を狙われながらも人と吸血鬼の共存のため、頑張っている。

ちなみに、過去の話聞いたのは出会って1年後だ。

俺はというと、元の時代に帰るために準備があり、その準備をするため、フィリアと行動をとりにしている。そして、なんだかんだで7年も経ってしまった。

「あれから、もう7年になりますね・・・ジュンイチは大丈夫なのですか？」

「何が？」

晩御飯の準備をしながら聞き返した

俺達は人にまぎれることもできるが、できるだけ用事が無い時は人里に近づかない様にしている。

そのため、必然的に野宿になるわけだが、このフィリア、生活能力は低い！まあ、吸血鬼だから、

炊事のスキルは必要ないかもしれないが・・・

結果、俺が炊事の係りと化している。

「ジュンイチは元の時代に帰る方法があるのでしょうか？何故それをしていないのですか？」

たき火に当たり、膝を抱えながらフィリアが聞いて来た。

「前にもいったが、制限があるんだよ。それをなんとかしないと世界の扉がひらいてくれないの。」

正確には時の扉だが、制限がある事には間違いはない。時の扉を開くのは魔術の領域であり、世界からの制限が強くなることとかなりの負荷となる。よって、世界の制限を緩和するために、準備が必要となる。

「しかし、もう7年ですよ？元の時代に帰ったら・・・17歳ですよ？」

「ああ、それなら大丈夫。元の時代に戻る時、『時の魔術』を使っ

て、体も元の10歳に戻せるから。」

元の時代に戻れば制限はこの時代より緩和出来るし、自分自身の『時』のため、世界からの制限も少なくてすむ。

「……なんといいですか……ベタラメですよね本当……」

「御褒め頂、恐悦至極にございます。」

純一はその言葉におどけながら返す。

「褒めてないです。」

それにすかさずツッコミを入れるフィリア。

「……プツ……はははは!」「」

少しの沈黙の後互いに吹き出し、笑いあう。緩い雰囲気か辺りに漂っている。

「ははは……ほら、晩御飯できたぞ?」

「ふふ……いつもすみません。」

本来、フィリアは吸血すれば食事を取る必要はないらしいのだが、己に吸血する事を固く禁じている。以前、俺の血を飲むよう勧めたが激しく拒絶された。

気にしなくてもいいのだが……

そんなこんなで、食事も終わり、話すことも無くなったので、自然と寝ることになる。

過去の話聞いてから、フィリアは少しずつだが、心を許してくれるようになった。

今では

「おやすみなさい。ジュンイチ。」

「ああ、おやすみ、フィリア。」

互いに寄り添う用にして眠っている。正確にはフィリアに抱きつかれているのだが・・・

最初はまあ、睡眠不足に陥ったが、今では慣れたもの・・・フィリアのいい匂いを鼻孔に感じながら、結界を張るのを忘れずに、眠った。

俺、元の世界に帰ってから、フィリアなしで眠れるか？

ちょっと心配になってきた。

番外編 始祖の吸血鬼と魔術師その4

純一とフィリアの、旅の終わりは唐突に訪れた。

湖の古城に住む吸血鬼を訪れた場所で、その吸血鬼と、仮とはいえ「血の契約」を交わした少年を見つけた。

これまでの吸血鬼は全て失敗に終わっていた契約が成功しそうなのだ。

フィリアは大変喜んだ。久々のテンションの高さに純一が若干引いたくらいだ。

しかし、その喜びも長くは続かなかった。

その少年の父親は対吸血鬼の狩人で狙いがその吸血鬼、シルヴィアだったからだ。

少年・・・ソウスケはシルヴィアを連れ古城を抜け出したが、追つてを振り切れず、シルヴィアを庇って父親に切られてしまった。

純一とフィリアがたどりついた時には既に遅く、血で濡れたソウスケをシルヴィアが抱きしめているところだった。

「これは、約束・・・」

シルヴィアはソウスケに何か、魔術を掛けていた。フィリアが言うには記憶を保ったまま転生するための魔術らしい。その魔術を俺は初めてみるが・・・

「あの魔術じゃ、必ず会えるわけではなさそうだな・・・」

「わかるんですか？」

「まあ、これでも魔術師なので・・・」

そう、あれでは、記憶保存と転生だけで、因果律が組み込まれていない。あれでは、いつ会えることか・・・

「では、死なせなければいいのです。」

「もう、死んでいるぞ？あの状態から蘇生できるのか？」

「ええ、方法はありません。」

そう言い、この場から、全員がいなくなるのを見計らい、ソウスケの元へかけていった。

「今から私の血をソウスケへ分け与えます。」

「・・・それで、ソウスケは吸血鬼にはならないのか？」

「ええ、吸血行為でなければ感染しませんから。」

「しかし、魂が離れている状態だぞ？大丈夫なのか？」

「なっ！！ジュンイチは魂が見えるのですか？」

そう言えば言っていなかったな。

「ああ、俺の眼はそう言う眼だからな。」

「魂を器に戻すことは？」

「・・・O・K・やってやるよ。」

「お願いします！」

俺は封印を強引に解放し、ソウスケの魂を器へと戻した。

「戻った！」

「わかりました。」

純一の合図とともに、フィリアはソウスケへ自分の血を分け与えた。

「・・・げほ、げほ。」

「息を吹き返したな。」

「ですが、傷が・・・」

息を吹き返したのはいいが、傷は完全に治っておらず、このままでは死ぬのは時間の問題だ。

「くっ、魔力が足りない！せめて、魔力の流れを見る事ができれば・・・」

俺の魔力ではソウスケのこの傷を治すには全然足りない。魔力操作を完全に使いこなせれば、可能だが、今の俺の腕じゃ、無理だ。

魔力を感じることはできるが、それで把握し操れる量は少ない。魔力が濃ければ視認することはできるが、薄い魔力までは見る事はできないのが普通だ。そもそも、通常のそこらにある魔力は見る事ができない。

よっぽど高密度の魔力でない限りは・・・

「ジュンイチ、魔力の流れを見る事ができれば、どうにかできるんですね？」

「ああ、俺の少ない魔力じゃどうにもならないが、魔力操作で魔力を集めれば・・・」

フィリアは治癒魔法が得意ではない。教えはしたが、精々かすり傷を直せる程度だ。魔力は馬鹿でかいんだけどな。

吸血鬼は元々再生能力が高いため、必要ないスキルだからな。むいて無いんだろう。

「なら、私の眼を使ってください。私の眼なら魔力を見ることができます。」

「・・・いいのか？そんな事をして・・・」

「はい・・・ジュンイチなら・・・」

「・・・わかった。フィリアの左眼と俺の左眼を交換しよう。」

「……よいのですか？」

「ああ、もらってばかりじゃ悪いだろ？」

「……そんなこと！」

「口論は後だ！時間がない！」

「わかりました。」

「我が左の瞳の至宝を彼の者へ！」

その後、ソウスケは一命を取り留めた。だが、始祖の血を体内に入れた副作用か、仮死睡眠に陥ってしまった。

フィリアはソウスケを連れ、現在で言う日本へわたるそうだ。そこにはフィリアに賛同してくれる吸血鬼がいるらしい。

「ここでお別れだなフィリア」

「ジュンイチ……」

どうやら、ソウスケを助けたこととフィリアの左眼を受け取ったことで制限が緩んだ様だ。ソウスケは『世界』にとっても重要なフアクターらしい。また、フィリアの眼のおかげで魔力操作できる量が圧倒的に増えたため、制限を緩和する式を十分に組むことができた。フィリアの事は心残りではあるが、俺は元の世界に戻る事に決めた。

「そんな顔するな。500年後位にまた会えるさ……」

「……グスツ、500年……長いですよ……」

フィリアは俺に抱きついて泣いている。困ったものだ。

「まったく、寂しがり屋だな、フィリアは……ほら、これ、やるよ。」

「……これは？」

フィリアに渡したのは桜色の宝石が填った指輪にチェーンを通してネックレスにしたものだ。

「フィリアを守ってくれるお守り、そして、再会の約束の品だ。」

「……ジュンイチ……グスツ……わかりました。グスツ、また会いましょう。」

そしてやっと話してくれた。

「ああ……」

「絶対ですよ？」

「分かってるって。」

そうして頭をクシャクシャと撫でてやった。

「それじゃ、またな、フィリア。」

「はい。また会いましょう。ジュンイチ。」

こうして、魔術師と始祖の吸血鬼の邂逅は一度、その幕を閉じる。

そして、500年後、ある騒動と共に、再びその幕はあがる。

番外編 始祖の吸血鬼と魔術師その4（後書き）

ある騒動は当分先です。

第三十三話 亜沙の不調

ランキング戦が終了し、数日が過ぎた。

春明はどうやって『出来損ないの賢者の石』を手に入れたのかその聴取が行われたり、リアさんとの婚約破棄が正式に決まったりした。

聞いた話では、リアさんの父親は勝手に婚約を進めたからこうなったと、リアさんの母親に怒られ、大分反省しているとのこと。

そして、今、俺は病院にきている。別に俺が病気にかかったとかではなく、また、リアさんの傷もほとんど癒え、今では傷跡も残らず問題無く過ごしている。

なら、何故こんな所にいるのかというと・・・

「待たせたわね、朝倉君。こっちよ、ついて来て。」

瑞穂さんに言われ、俺はその後についていった。

「・・・ここよ。」

そうやって瑞穂さんがドアを開けると、そこにはベットで眠る、今はやつれているが、回復すれば美人だろうと分かる、緑色の髪をした女性がいた。

「この方が美冬さんですか？」

「・・・ええ、お願いできる？」

「まあ、とりあえず診てみます。」

そう、俺がここに来た理由は、眠り続けている美冬さんを診るためだ。春明と決闘した後、意識が戻らず、原因は不明とされてきた。そこで、俺に診て欲しいと瑞穂さんから依頼があったのだ。瑞穂さんと美冬さんは親友らしく、凄いい勢いで頼みこまれた。

「とりあえず、封印解放つと」

簡易的に『魔術師』の状態になった俺は美冬さんを見始めた。

とりあえず、肉体的には問題ないみたいだ。魔力の流れも正常・・・ん？これは・・・

「・・・そういうことか・・・魔法的なアプローチじゃ、原因は分からない訳だ。」

始め、俺は瘴気を疑った。『出来損ないの賢者の石』の力が作用しているなら、一番原因として考えられるからだ。

そして、診た結果、確かに瘴気が原因だったのだが、精神への干渉ではなく、魂への干渉だった。

精神の干渉なら魔法でなんとかあったであろうが、魂への干渉だと魔法ではお手上げだっただろう。

瘴気により魂が汚染されるのを防ぐため、強制的に眠りについていたようだ。なら・・・

「霊視により、瘴気の確認・・・瘴気の浄化開始・・・魂への干渉」

・・・」

瘴気を浄化の魔術で、除去。魂へ干渉し、目覚めを促す・・・

「干渉、終了。肉体と魔力の活性・・・」

また、回復を早めるために、肉体と魔力の活性を助ける魔術を使用・・・

「・・・ふう、とりあえず終了です。後は、彼女次第です。回復が早まれば、今日、明日にでも、目が覚めるでしょう。」

「本当！？信じていいのよね？」

瑞穂さんは必至だ。それだけ大切なのだろう。

「ええ、魔術師として、保証します。必ず目を覚ましますから。」

「・・・ありがとう。」

「いえ、では俺はこれで・・・」

瑞穂さんは残る様で、俺は病室を後にした。それにしても、魔術を使用してお礼を言われるとは、なんだか新鮮な気分だ。

これまではこんなことほとんどしてこなかったし・・・うん。悪くはないかな。

こうして、純一は病院を後にした。

「まっ、こんなもんかな。」

俺は今、食糧などを買いにスーパーに来ている。いつもなら楓がくるのだが、たまには無理矢理にでも仕事を取らないと、何でもかんでもやっってしまう。

ということ、今日は俺が買い物を引き受けたのであった。

「さて、少し遅くなったな。急がないと楓が心配す……る?」

急いで帰ろうとした時、知っている顔が見えたので声を掛けることにした。

「亜沙先輩!」

その声に反応し亜沙先輩はこちらを振り向いた。

「あら? 稟ちゃん一人? こんなところで珍しいわね?」

「そうですね。普段なら、一人では来ませんからね。」

何故ここに一人でいるのか、ここまでの経緯を話した。

「そう、楓は相変わらずね。」

「助かってはいるんですけどね。」

互いに帰る方向が同じため、分かれ道まで一緒に向かうことにした。

「それじゃあ、ここでお別れね？」

しばらく世間話をしながら歩いていると、もう別れ道に差し掛かった。

「本当に荷物、持たなくていいんですか？」

俺は亜沙先輩の自宅まで荷物を持つと言っているのだが、先輩には断られた。

「ええ、楓が心配すると思うから早く帰ってあげなさい。」

そう言つと手を振りながら立ち去って行く。仕方が無いので亜沙先輩の言う通り早く帰ろうと踵を返し、帰ろうとしたが、何か落ちる音が耳に届いたので、振り向くと

「亜沙先輩!？」

亜沙先輩が胸を押さえて蹲っていた。俺は急いで駆け寄ると支え、状態を観察した。

動悸が少し激しい・・・息切れもしているし、熱も少しある・・・病気にあまり詳しくないが、このままここに居るのは得策じゃないだろう・・・

「亜沙先輩!歩けますか？」

「大丈夫よ・・・たまにあるから・・・ただの貧血よ・・・」

亜沙先輩はそういうが、良くは分からないが貧血じゃ熱はでないじゃ？そう思うが、素人の俺では分からない。とにかく運ぼう・たしか、亜沙先輩の家はここから近かったはず・・・そこに運ぼう。

「亜沙先輩、俺の背に乗ってください。」

「え？・・・でも・・・」

「乗ってくれないなら、お姫様抱っこになりますか？」

「・・・はあ、稟ちゃん強引ね。わかったわ。」

そう言つと、背中に乗ってくれたようだ。二つの柔らかい膨らみが・・・ゴホン！

「それじゃ、いきますよ。」

「うん。ごめんね・・・」

俺は亜沙先輩を背負い、更に買い物袋を合計4つ持ち、亜沙先輩の家へ向かうことになった。はあ、こんなことならもつと鍛えておけば良かった。

そして、次の日、亜沙先輩はただの風邪らしく、今日は大事を取って休むそうだ。

「どうした稟、元気ないな。」

「純一か・・・なんでもない。気にするな。」

「ふっ、同志よ、野暮な事を聞くな。土見は愛しの時雨嬢が休みなのを気に病んでいるのだ。」

杉並がいきなり出てきて余計なことを言ってきた。完全に間違いないため、言い返せないでいると、何かが落ちる音が聞こえた。また、このパターンか！音の方を見ると

「稟君・・・まさか亜沙先輩とそんな関係に・・・」

「もしかしたらと思っただけでしたが、まさか亜沙先輩でしたとは・・・」

「稟君・・・」

「りん・・・」

すると、シア、ネリネ、楓、キキヨウがこちらを見て悲しそうに呟いていた。訂正、キキヨウは目が笑っている。

「いや、ちが・・・」

「違うのですか？白状ですね。亜沙に言っておきましょう。」

「って、アルティン先輩！いつからそこに!？」

「ついさっきです。純に用事がありましたので。」

そう、言い残し、純一と会話をするアルティン先輩。そこに天城さんが入り、ちょっとした修羅場になるか！と、期待したが、そうはならなかった。なれば、この状況を誤魔化せたのに！

あのランキング戦から純一とアルティン先輩の中は大分進展した見たいのだが、かといって付き合っている訳ではないみたいだ。天城さんとの仲も相変わらず良い。二股かという噂が流れているが、どこ吹く風、この三人の関係は良くわからない。

そんな事よりこの状況をどうするか・・・それが一番の問題だ。

・・・うん。無理だな。俺は現実逃避をするため、窓から空を見上げた。

「もうすぐ夏か・・・」

後ろから誰かが何か言っているが気にしない。気にしてたまるか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4544v/>

桜の魔術師

2011年11月16日10時24分発行